博士論文

論文題目　　*Prasannapadā* 第 25 章の研究

氏名　　王 俊淇（WANG JUNQI）

目次

略号表 7

序論 9
0.1 研究の目的 9
0.2 先行研究概観 14

第 I 部 研究編 19

第 1 章 『中論』の構成に関する考察 21
1.1 『青目注』および『無畏論』による『中論』の構成理解 24
1.2 吉蔵の『中論』科段 27
1.3 チャンドラキールティの理解 —— 大乗と小乗の観点から 31
1.4 ツォンカパの『中論』科段 37
1.5 小結 40

第 2 章 チャンドラキールティの涅槃観 43
2.1 有余依涅槃と無余依涅槃 43
2.2 生死即涅槃 48
2.3 戯論寂静 51
2.4 無住処涅槃 55
2.5 小結 59

第 3 章 涅槃に関する四句分別論証 61
3.1 二種類の四句分別 61
3.2 四句分別の問題点 63
3.3 チャンドラキールティによる『中論』25.4-16 理解 65
3.4 分析 78
3.5 小結 83

第 4 章 一字不説：チャンドラキールティの『中論』25.24 理解 85

4.1 『異部宗輪論』における大衆部の一字不説論 87
4.2 『如来秘密経』における一字不説論 88
4.3 『楞伽経』における一字不説論 96
4.4 チャンドラキールティの一字不説理解 105
4.5 小結 117

第 5 章 結論 121

第 II 部 テキスト編 125

第 6 章 Sanskrit Critical Edition 127
6.1 Introduction 127
6.2 Stemma 132
6.3 Analysis of *Daṇḍa*s 138
6.4 Editorial Policy 141
6.5 Sigla and Abbreviations 141
6.6 Editorial Signs 142
6.7 Critical Edition 143

第 7 章 Tibetan Critical Edition 165
7.1 Introduction 165
7.2 Editorial Policy 165
7.3 Sigla and Abbreviations 165
7.4 The Critical Edition of the Tibetan Translation of *Prasannapadā* Chap.25 166

第 8 章 Sanskrit Diplomatic Edition 183
8.1 Editorial Policy 183
8.2 Editorial Signs 183
8.3 The Diplomatic Edition of Ms.P of *Prasannapadā* Chap.25 185

第 9 章 Table of Scripts 193
9.1 Introduction 193
9.2 Oxford Manuscript 194
9.3 Potala Manuscript 203
9.4 Rome Manuscript 212

第 10 章 『プラサナパダー』第二十五章「涅槃の考察」和訳 221
10.1 凡例 221
10.2 和訳 222

参考文献 240

略号表

ABh	*Akutobhayā* edited by 安井 (2015)
ACS	*Avaivartanīyacakrasūtra* T no.266/267/268; D no.240; P no.906
AKBh	*Abhidharmakośabhāṣya* edited by Pradhan (1967)
AŚ	*Avadānaśataka* edited by Vaidya (1958)
BHSD	*Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dicionary* edited by Edgerton (1953)
BVCP	*Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā* T no.585/586/587; D no.160; P no.827
BP	*Buddhapālitamūlamadhyamakavṛtti* edited by Saito (1984)
DA	*Divyāvadāna* edited by Cowell and Neil (1886)
DBh	*Daśabhūmīśvara* edited by Kondo (1936)
JĀA	*Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra* edited by 木村他 (2004a)
K	高麗大蔵経
LA	*Laṅkāvatārasūtra* edited by 南條 (1923)
*LṬ	**Lakṣaṇaṭīkā* edited by Yonezawa (2010)
LVP	*Prasannapadā* edited by de La Vallée Poussin (1903-13)
MA	*Madhyamakāvatāra* edited by de La Vallée Poussin (1912)
MABh	*Madhyamakāvatārabhāṣya* edited by de La Vallée Poussin (1912)
MSA	*Mahāyānasūtrālaṃkāra* edited by Lévi (1907)
MMK	*Mūlamadhyamakakārikā* edited by 叶少勇 (2011b)
MP	*Mahāparinirvāṇasūtra* edited by Waldschmidt (1950, 1951a,b)
MV	*Mahāvastu* edited by Senart (1882, 1890, 1897)
NBh	*Nyāyabhāṣya* edited by Tailanga (1896)
PsP	*Prasannapadā*
PsP_T	Tibetan translation of *Prasannapadā*
PTS	Pali Text Society 版 Pāli 文献
PP	*Prajñāpradīpa* D no.3853; P no.5253
PPṬ	*Prajñāpradīpaṭīkā* D no.3859; P no.5259
RĀ	*Ratnāvalī* edited by Hahn (1982)
RGS	*Ratnaguṇasaṃcayagāthā* edited by Yuyama (1976)

RGV	Ratnagotravibhāga edited by Johnston and Litt (1950)
SN	*Saṃyuttanikāya* edited by Feer (1991)
SR	*Samādhirājasūtra* edited by Dutt and Sharma (1941); Cüppers (1990)
ŚBh	*Śrāvakabhūmi* edited by Shukla (1973)
ŚV	*Ślokavārttika* edited by Kataoka (2011)
T	大正新脩大蔵経
TG	*Tathāgataguhyasūtra* T no.310/312; D no.47; P no.760-3
ThG	PTS 版 *Theragāthā* edited by Oldenberg and Pischel (1966)
UP	PTS 版 *Udāna* edited by Steinthal (1885)
UAK	PTS 版 *Paramattha-Dīpanī Udānaṭṭhakathā* edited by Woodward (1926)
VKN	*Vimalakīrtinirdeśa* edited by 高橋他 (2006)
YBh	*Yogācārabhūmi Sopadhikā and Nirupadhikā Bhūmiḥ* edited by Schmithausen (1991)
YṢ	*Yuktiṣaṣṭikā* edited by 李学竹・叶少勇 (2014)
YṢV	*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* D no.3864; P no.5265

序論

0.1　研究の目的

六ー七世紀頃の中観思想家チャンドラキールティ (Candrakīrti)[*1]の主著『プラサンナパダー』(*Prasannapadā*, PsP) は『中論』(*Mūlamadhyamakakārikā*, MMK) 注釈書の中でサンスクリット完本が現存する唯一の文献である。『中論』のサンスクリット断片が発見された現在でも『中論』全体を回収する上で最も重要な資料である[*2]。

また、『プラサンナパダー』は別な一つの点でも『中論』注釈書の中でその重要性を誇っている。それは同本がチベット仏教、特に現在最も影響力を持つゲルク派の中で、中観思想を学ぶ上で最も信頼度の高い文献と見なされていることである。『中論』注釈書において、『プラサンナパダー』のサンスクリット語完本だけが数多く現存するのは、それが最高度の中観思想を表明する文献として尊敬されてきた事実と密接に関係している。

『プラサンナパダー』の中で、チャンドラキールティは同じ中観論師としてのバーヴィヴェーカ (Bhāviveka, c.490-570)[*3]に採られた自立推理 (svatantrānumāna) を批判し、ブッダパーリタ (Buddhapālita, c.470-540) によって用いられた帰謬論法 (prasaṅga) が中観派に相応しい論証方法であると擁護した。これをきっかけとして、中観派は帰謬派 (*prāsaṅgika) と自立論証派 (*svātantrika) の二派に分裂したと後世のチベット文献は伝える[*4]。

---

*1 チャンドラキールティの年代について、岸根 (2001b: 26-34) は宇井 (1929: 149) の 650 年説、瓜生津 (1965: 77) の 560-640 年説、Lindtner (1979: 90-91) の 530-560 説、山口 (1941: 140) とSeyfort Ruegg (1981: 71) の 600-650 年説の四説を検討した上で、チャンドラキールティの生没年が西暦 530-600 年と推定した。岸根氏の主な根拠は a. チャンドラキールティは『入中論』と『プラサンナパダー』においてバーヴィヴェーカの実名を挙げ、辛辣に批判していたこと；b. チャンドラキールティは『四百論註』の冒頭に護法 (Dharmapāla) を「現在の偉大な知者」と呼んだことである。

バーヴィヴェーカと護法の年代について、宇井 (1929)「玄奘以前の印度諸論師の年代」は前者の在世年代が 500-570、後者が 530-561 と推定した。

*2 叶少勇 (2011a) は『中論』サンスクリット語写本の断片を発見し、『中論』全体のおよそ 1/9 の偈頌を回収した。したがって、今の時点でも『プラサンナパダー』は『中論』全体を復元する根本的な資料である。

*3 バーヴィヴェーカは Bhāviveka（婆毘吠迦）、Bhāvaviveka、Bhavya、Bhavyaviveka、Bhagavadviveka 等の異名がある。江島 (1990: 846-838) の研究によれば、『般若灯論』と『中観心論』の作者を Bhāviveka と呼ぶのが適切である。また、Bhāvaviveka、Bhavya 等が「8/9 世紀以降、尊称的な意味合いで付加され、しかもそれは独立してひとり歩きする傾向をももっていた。」とする。

*4 例えば、ゲルク派の開祖ツォンカパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa. A.D.1357-1419) は『中論』の注釈書『般若とよばれる根本中頌の解説：正理の海』(dDu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho 略『正理海』) の中で、『中論』の帰敬頌を解釈する際、自立論証派と帰謬論証派の論理学と形而上学の違いを論じる。奥山 (2014: 37-43) を参照。

ところが、帰謬派 (*prāsaṅgika) と自立論証派 (*svātantrika) の名称はサンスクリット文献における用例が未だ確認されず[*5]、それぞれチベット語の thal ’gyur ba と rang rgyud pa から還梵されたものにすぎない[*6]。長島 (2007: 377-402) の研究によると、11 世紀頃のアティシャ (Atiśa, 982-1054) は『菩提道灯論細疏』(*Bodhimārgapradīpapañjikā*) の中でチャンドラキールティとバヴィヤ (Bhavya) 二人を自分の法源として言及し、「Atiśa は勝義説に関していえば反自立派の立場を取るにもかかわらず、必ずしも Bhāviveka に批判的ではないばかりでなく、Candrakīrti との対立についても言及しないのである。」とする。アティシャがチャンドラキールティとバヴィヤの著作をともにチベット語に翻訳したこと[*7]も、アティシャがチャンドラキールティとバヴィヤ二人を尊敬し自分の法統として認めたことを示していようか。

ただ、宮崎泉等の学者に指摘された通り、アティシャにとってチャンドラキールティもバヴィヤも単なる中観論師であるだけではなく、密教に関する述を残した密教学者でもある。このことはアティシャの法統理解を考察する際に決して看過できない (宮崎, 2005: 15-37)。しかし、いずれにしても、アティシャの著作の中で帰謬派 (*prāsaṅgika) と自立論証派 (*svātantrika) 両派の対立は全く見られない[*8]。チャンドラキールティに代表された帰謬派 (*prāsaṅgika) とバーヴィヴェーカに代表された自立論証派 (*svātantrika) 両派の分裂意識はアティシャの時代に未だ成立していなかったのだろう。

『デンカル目録』(lDan dkar gyi dkar chag)(Lalou, 1953: 333) と『パンタン目録』(dKar chag ’Phang thang ma)(川越, 2005: 27) によれば、前伝期 (sng dar) に、チャンドラキールティの『六十頌如理論注』(*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*, *Rigs pa drug cu pa’i ’grel pa*, LL592,KP530) のような短い著作のみは翻訳されたが、バーヴィヴェーカの主著の一つである『般若灯論』(LL574;KP525) と観誓注 (LL575;KP526) はすでに翻訳官ルイ・ギャルツェン (Klu’i rgyal mtshan, 9 世紀) によって訳されていた。これは前伝期にチャンドラキールティよりバーヴィヴェーカのほうがもっと重視されたことを示している。

チャンドラキールティの大部の著作の翻訳は大翻訳官パツァプ・ニマタク (Pa tshab Nyi

---

*5 **Lakṣaṇaṭīkā*(Yonezawa, 2004: 131) は“Bhāvivekaḥ kila svatantrasādhanavādī”と記す。この中で、バーヴィヴェーカは「自立的論証式を説く者」と呼ばれる。Yonezawa (1999: 1024) の研究によれば、**Lakṣaṇaṭīkā* の写本は 12 世紀インド人 Dharmakīrti に書写されたものである。

*6 11 世紀のカシミールの論師ジャヤーナンダ (Jayānanda) は『入中論註』(*dBu ma la ’jug pa’i ’grel bshad*, D no.3870; P no.5271) の中で“dbu ma rang rgyud pa”(D no.3870, 281a6;281b6) と“rang rgyud pa”(ibid, 282a2-3) と“rang rgyud du smra ba”(ibid, 282b3) に言及するが、*prāsaṅgika に当てはまる語は未だ確認できない。詳しい議論について、Seyfort Ruegg (2000: 20) とSeyfort Ruegg (2006: 319-346) を参照。

*7 アティシャに訳されたチャンドラキールティの著作：*Pañcaskandhaprakaraṇa*(D no.3866 ; P no.5267); *Triśaraṇa[gamana]saptati*(D no.3971 ; P no.5366); *Triśaraṇa[gamana]saptati*(D no.4564 ; P no.5478)。アティシャに訳されたのバヴィヤの著作：*Madhyamakahṛdayakārikā*(D no.3855 ; P no.5255); *Madhyamakahṛdayavṛtti-tarkajvālā*(D no.3856 ; P no.5256); *Madhyamakārthasaṃgraha*(D no.3857 ; P no.5258); *Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna*(D no.4139 ; P no.5640)。アティシャの翻訳の業績について、稲葉 (1966: 15-33) とFehér (1984: 211-240) を参照。

*8 長島 (2007: 398) は「Atiśa が *Madhyamakaratnapradīpa* にもとづいて理解していたために Bhāviveka を自身へ連なる帰謬派の法統に含めていたからである。［中略］後期中観において、Atiśa のように Candrakīrti を根本中観と考え、Bhāviveka を帰謬派の代表と考えるのが一般的であったとしたならば、これまで自立派と帰謬派の分派について言及した著作が発見されなかったのも当然である。」とする。

ma grags, 1055-1115?) の出現を待たねばならなかった。彼は前伝期の翻訳官ルイ・ギャルツェンに訳された『中論頌』とアティシャの弟子ナクツォ・ツルティムゲルワ (Nag tsho Tshul khrims rgyal ba) に訳された『入中論頌』を校訂したり、『プラサンナパダー』、聖天 (Āryadeva) の『四百論』とチャンドラキールティの注、『入中論』の自註等を翻訳したりすることによって、チャンドラキールティは自立論証式と三乗の区別等の側面からバーヴィヴェーカを批判したことが僧団の中でよく知られることになった。

これはバーヴィヴェーカとシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) 等のいわゆる「自立論証派」の中観理解を仏教思想の最高点と為す前伝期の事情[*9]を一変し、チャンドラキールティとバーヴィヴェーカとの区別を強く意識するきっかけになった。歴史書『青冊』(*Deb ther sngon po*) によると、ニマタクはカシミール地方からチベットに戻った後に、チャンドラキールティの中観理解を宣揚し、自立中観の立場を擁護するチャパ・チューキチューキセンゲ (Phya pa Chos kyi seng ge, 1109-1169)[*10]から弟子を引き付けることになった。そのうち、チャバの前弟子マチャパ・チャンチュプツォンドゥー (rMa bya pa Byang chub brtson ’grus = brTson ’grus seng ge = rTsod pa’ seng ge) は『中論』注釈書 *dBu ma rtsa ba shes rab kyi ’grel pa ’thad pa’i rgyan* の中で、チャバの自立中観の立場を批判するまでになる。したがって、「自立論証派」と「帰謬派」との対立および「帰謬派」の優位の確立はニマタクの翻訳によるところが大きい[*11]。

この両派の分裂について、両派における形而上学の相違を強調したゲルク派 (dGe lugs pa) の創始者ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa. A.D.1357-1419) は『菩提道次第広論』(*Byang chub lam rim chen mo*) の「毗婆舎那 (Vipaśyanā, Lhag mthong)」章において次のように語る。

> gangs ri’i khrod kyi phyi dar gyi mkhas pa rnams dbu ma pa la thal ’gyur ba dang rang rgyud pa gnyis kyi tha snyad byed pa ni tshig gsal dang mthun pas rang bzor mi bsam mo || *Lam rim chen mo*(sKu ’bum byams pa gling 版, 370b6-371a1)
>
> 【訳】西蔵の後伝期の智者たちが中観派に「帰謬派」と「自立論証派」という二つの

---

*9 九世紀前伝期の翻訳官イェシェーデ (Ye shes sde) は『見解の区別』(*lTa ba’i khyad par*) の中でシャーンタラクシタの「瑜伽行中観」とバーヴィヴェーカの「経中観」が仏教思想の最高点の位置を占めるとするが、チャンドラキールティに言及していない。敦煌で発見された前伝期のこれ以外の仏教綱要書も中観派を経量部中観と瑜伽行中観の二つのみに分類する。前伝期の仏教宗義書について、松本 (1997: 35-116) を参照。

また、御牧 (1982: 187) は「経量中観派、瑜伽行中観派という総合学派の呼称は、チベット人による創作という前言に反して、一インド論書 —— 即ち、ラクシュミー Lakṣmī の『五次第注』*Pañcakramaṭīkā Kramārthaprakāśīkā*—— にも見られることがこれまでの研究により明らかになっている。しかしながらこのラクシュミーというカシミールの尼僧は一一世紀初めに活躍した人物であり、イェシェーデたちに遅れること二世紀、従って、総合学派の名称の創作について、イェシェーデたちの優先性を凌ぐものではない。」とする。

これらの研究からみれば、「経量中観派」と「瑜伽行中観派」の呼称はインドの文献に見られるものの、九世紀前伝期の翻訳官イェシェーデの『見解の区別』がこの二つの呼称に言及する最古の文献である。

*10 チャパ・チューキセンゲ (Phya pa Chos kyi seng ge) の作品 *dBu ma shar gsum gyi stong thun* が Leonard van der Kuijp によって発見され、Tauscher (1995) がこれを校訂した。

*11 ニマタクと「自立論証派」「帰謬派」の分立との関係については、Lang (1990: 127-141) を参照。

表現をなすのは、『プラサンナパダー』に一致しているので、虚構とは思わない。*12

ツォンカパによると、「自立論証派」と「帰謬派」との分立は後伝期にチベット教団の中ではじめて成立したが、この分立はそもそも『プラサンナパダー』に随順するので、決して虚構ではない。「『プラサンナパダー』に一致している」というのはチャンドラキールティが『プラサンナパダー』の中でバーヴィヴェーカの自立的論証式を批判することを指す。だから、「帰謬派」と「自立論証派」という名前の成立は後伝期以降のことであったが、チャンドラキールティのバーヴィヴェーカ批判に遡及できるとツォンカパは理解していた。

しかし、このような区別・対立に対して不満を抱くチベット学僧もいった。プトゥン・リンチェン・ドゥプ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) はこの区別がチベットの虚構 (bod kyi rtog bzo) であり、龍樹の『根本中頌』に対する二種類の注釈タイプは存在するが、哲学上の区別を含意しないと主張する*13。しかし、「帰謬派」と「自立論証派」の分立がチベット教団ではじめて成立した点で、ツォンカパとプトゥンは異なっていない。

これらの事実から推知されるのは、帰謬派 (*prāsaṅgika) と自立論証派 (*svātantrika) の対立はおそらくアティシャ以降、特にチャンドラキールティの大部の著作の翻訳をきっかけとして、チベット仏教の中でチャンドラキールティの昇格運動につれて追認されたのではないかと考えられる。ところが、帰謬派 (*prāsaṅgika) と自立論証派 (*svātantrika) という名称は中観派の論証方法をめぐって論争を行ったチャンドラキールティとバーヴィヴェーカそれぞれに代表された両グループの特色を鮮明に示すので、この二つの名称は「その限界さえ正しく認知して用いるならば諸論師の思想的傾向を速かに的確に把握することが出来る点で大変有益な分類である」(御牧, 1982: 179-180) ので、便宜上学界で広く使われてきた。

フランスの学者 Louis de La Vallée Poussin は 1903-1913 年に精良な『プラサンナパダー』校訂本を出版してから、学界での標準版になってきた。しかし、プサン本には幾つかの問題点も決して無視できない。例えば、“*”の記号で表示する欠落部分が多くあるほか、写本とチベット語訳の根拠がないにもかかわらず、de La Vallée Poussin が独自に訂正した例も稀ではない。したがって、de La Vallée Poussin の校訂本にもとづいて、多くの学者は『中論』と『プラサンナパダー』のテキストの改良を目指してきた。その中で、de Jong (1978) の“*Textcritical Notes*”は特に注目すべきである。彼は Giuseppe Tucci 教授に授けられたネパール系の写本 (Rome 写本と呼ばれる) を利用して、『プラサンナパダー』の訂正表を発表し、そこから回収した『中論』全体の校訂本 (de Jong, 1977) を出版した。近年、写本のデ

*12 漢訳と英訳について、法尊 (2012: 397) とCutler and Newland (2002: 116) を参照。

*13 “Bu ston rin chen grub (1290-1364), for example, goes as far as to claim that this distinction is an artificial Tibetan conceptual creation(bod kyi rtog bzo) without much merit. For him, no substantive issue divides the two sides; instead, the difference can be reduced to two particular styles of exegesis in relation to Nāgārjuna's *Mūlamadhyamakakārikā*(MMK), with no implications for philosophical differences whatsoever.”Dreyfus and McClintock (2003: 4) を参照。プトゥンのこの主張はニンマ派の'Ju Mi pham rNam rgyal rgya mtsho(1846-1912) の著作 *Nor bu ke ta ka* に記録される。

ジタル化と情報の交換のおかげで、従来学界の標準版とされた de La Vallée Poussin の校訂本を再校訂し、欠落部分を補足することが可能になっている。

2015 年、オーストリア科学アカデミー (Austrian Academy of Sciences) の研究員 Anne MacDonald 氏は『プラサンナパダー』第 1 章の校訂本と英訳を出版した。MacDonald (2015a) によって、現存十数点の『プラサンナパダー』写本の中で、善本である六つの “better”写本が確定される。本論文はこの六写本を基礎に、『プラサンナパダー』第 25 章「観涅槃品」の校訂本を作成し、「第 II 部　テキスト編」の中に付加する。そのほかに、第 II 部の中で、『プラサンナパダー』第 25 章の Potala 写本の翻刻 (Diplomatic Edition)、同章のチベット語訳の校訂テキスト、Potala、Oxford、Roma 三写本の字母表を作成することによって、『プラサンナパダー』全般の研究に必要な基礎資料を提供する。

その上で、本論文第 I 部「研究編」の中で、『プラサンナパダー』第 25 章「観涅槃品」の内容について、考察をしてみる。まず、ここで、『中論』第 25 章の構成を提示する。

『中論』第 25 章の構成

『中論』第 25 章「観涅槃品」は 24 偈からなる。チャンドラキールティの理解によると、全 24 偈は次にように位置づけられる。

第 1 偈	「空性論には涅槃は成立しない」という実在論者の批判
第 2 偈	「自性論には涅槃は成立しない」という空性論者の応答
第 3 偈	総説：不生不滅の涅槃
第 4-6 偈	「四句分別」一：涅槃は存在物ではない
第 7-8 偈	「四句分別」二：涅槃は非存在ではない
第 9-10 偈	結論：涅槃は存在物でもなく、非存在でもない
第 11-14 偈	「四句分別」三：涅槃は存在物且つ非存在の両者であるわけではない
第 15-16 偈	「四句分別」四：涅槃は非存在でもなく存在物でもないものではない
第 17-18 偈	涅槃の証得者である如来の存在に関する四無記
第 19-20 偈	涅槃と輪廻の無区別
第 21 偈	如来に対する見等が涅槃等に依存する
第 22-23 偈	一切法が空である時、十四種類の見解はありえない
第 24 偈	戯論寂静、仏の一字不説

『プラサンナパダー』第 25 章は上述の『中論』偈頌を敷衍し展開するので、この構成から見れば、『プラサンナパダー』第 25 章は主に三つの部分に分けられる。

1. 導入部 (vv.1-3)：空性論による涅槃の総説
2. 生死即涅槃 (vv.4-23)：四句分別論法による論証
3. 戯論寂静 (v.24)：仏の沈黙、一字不説

そのうち、「導入部」の中で、有余依涅槃と無余依涅槃は実在論において成立しえず、

空性論においてのみ成立すると説かれる。空性論の立場から見ると、涅槃は一切法と同様に不生不滅である。すなわち、この導入部の主旨は「生死即涅槃」にあると考えられる。vv.4-20 は、「生死即涅槃」を論証している。そのために、チャンドラキールティは龍樹に多用された四句分別論法と帰謬法を用いるだけでなく、自立的な論証式さえも立てることによって、「涅槃は存在物ではない」等の四つの主張をすべて排斥し、最終的に涅槃と輪廻にはいかなる区別も存在しないという「生死即涅槃」に至る。最後に、仏の涅槃は戯論寂静であり、この境地に立った仏は完全な沈黙を保ち、一字不説の説法観を提示する。

本論文第 1 部「研究編」は上述の内容を考察するために、以下の構成を取る。

第 1 章　『中論』の構成に関する考察

第 2 章　チャンドラキールティの涅槃観
- 2.1 有余依涅槃と無余依涅槃
- 2.2 生死即涅槃 → 第 3 章「生死即涅槃」の論証
- 2.3 戯論寂静 → 第 4 章「一字不説」
- 2.4 無住処涅槃

第 5 章　結論

0.2　先行研究概観

四句分別・戯論寂静の先行研究については、本論文第 I 部の各章では論じるが、ここでは省略する。以下から、『プラサンナパダー』校訂本と第 25 章翻訳の先行研究を概観する。

0.2.1　『プラサンナパダー』校訂本の先行研究

1. Chandra Dās and Chandra Śāstri. (Ed.) (1897). *Mādhyamikā vṛitti, Buddhist texts of the northern and southern schools*. Calcutta: Baptist Mission Press.

この校訂本の扉に示された通り、世界で最初の『プラサンナパダー』校訂本である。この版本には、用いられた写本の情報、異読の注記、偈頌の番号は一切ない。May (1959: 6) と Vaidya (1960: vii) 等によって、この版本は Calcutta 写本の写しにすぎず、写本と同等であると評せられる[*14]。

2 Louis de La Vallée Poussin. (Ed.) (1903-1913). *Mūlamadhyamakakārikās(Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*. St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie impériale des Sciences.[*15]

[*14] "This Calcutta edition is full of mistakes, and its value is no more than a manuscript in print."Vaidya (1960: vii) "Le texte sanscrit de la *Prasannapadā* a eu deux éditions. L'une, préparée sous les auspices de la Buddhist Text Society, n'a pas fait date; il convient cependant de la mentionner pour mémoire."May (1959: 6)

[*15] その前、de La Vallée Poussin は『中論』第 24 章の校訂本を発表した。Louis de La Vallée Poussin. (Ed.) (1897). Caturāryasatyaparikṣā: Extraits du XXIV chapitre de la Madhyamakavṛtti, *Mélanges Charles de Harlez*, Leyde: E. J. Brill, pp.313-320.

この校訂本の冒頭に付された「序言」(Avant Propos.) によれば、de La Vallée Poussin はこの校訂本を作った際、Paris、Cambridge、Calcutta の三写本を用いたが、Calcutta 写本があまりに役に立たない (L'édition de Calcutta n'a rendu que de rares services) と報告している。また、彼はチベット語訳にもとづいて写本を補訂し、非常に豊富な注記を施した。この校訂本は出版されてから、百年以上を経ても、信頼度の高い校訂本として今まで使われてきた。

この校訂本が de La Vallée Poussin の偉大な功績であることは誰にも否定できないが、現代の視点からみれば、幾つかの欠点も無視できないと考えられる。まず、de La Vallée Poussin に用いられた三写本のいずれも非難の余地がない (irréprochable) わけではないことが de La Vallée Poussin 自身によりすでに指摘された (Avant Propos.)。MacDonald (2015a: 88) に描かれた『プラサンナパダー』写本系統樹によると、Paris、Cambridge、Calcutta の三写本のうち、Paris と Calcutta 写本は枝の末に位置するから、決して校訂の善本ではない。また一方、de La Vallée Poussin の校訂本には「*」の記号で表示されている数多くの欠落が存在する。これらの欠落の対応部分はいずれかの写本に存在するが、ただ写本の異読が簡単に調和できないため、校訂者 de La Vallée Poussin はどの写本の読みが正しいかという判断を下さずに、「*」の記号で自分の意見を保留した。

3 Vaidya, P. L. (Ed.) (1960). *Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna with the commentary: Prasannapadā by Candrakīrti*. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

Vaidya (1960) の序言によると、この版本は主に de La Vallée Poussin 本を踏まえて、後者の注記を省略し、幾つかの訂正を与えたものである。すなわち、この版本は写本にもとづいた新しい校訂本ではなく、むしろ訂正本といってよいだろう。また、この訂正本は直前に言及した de La Vallée Poussin 本の欠落部分をある程度補足したが、補足の根拠が不明なので、学界で広く使われていない。

4 Heramba Chatterjee Sastry. (Ed.) (1957, 1962). *Mūla madhyamaka kārikā, with commentary of Candrakīrti and with Mañjuvyākhyā by Bidhu Bhusan. Edited with English & Bengali translations Part I and Part II*, Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay

Part I は『プラサンナパダー』の前五章で、Part II は第 6-7 の二章である。サンスクリット語テキストの底本は不明である。

5 de Jong, J. W. (Ed.) (1978). "Textcritical Notes on the Prasannapadā." *Indo-Iranian Journal* 20:25-59.

de Jong (1978) は de Jong 氏が Giuseppe Tucci 教授から授けられた『プラサンナパダー』ローマ (R) 写本の複写とチベット語訳にもとづいて、作った訂正表である。de La Vallée Poussin 本の欠落を補足し、より適切な読みを提示していて、たいへん使いやすい表である。『プラサンナパダー』の新しい校訂本全本が世に出るまでは、この訂正表は de La

Vallée Poussin 本とともに『プラサンナパダー』研究に欠かせない資料である。

6 Swami Dwarika Das Shastri. (Ed.) (1989). *Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna with the Commentary Prasannapadā by Chandrakīrti & with Hindi Summary by Acharya Narendradeva*, Varanasi

塚本他 (1990: 241) は、この版本が Vaidya 本の「読みに依存している」と報告している。筆者未見。

7 岸根敏幸 (2001)「『プラサンナパダー』第 24 章：「聖なる真理の考究」校訂テキスト (1)(2)(3)」、『福岡大學人文論叢』33 (2):1003-1024; 33 (3):1761-1782; 34 (1):197-232。

11 種類の紙写本にもとづき、豊富な注記がついた信憑性の高い『プラサンナパダー』第二十四章の校訂本である。ただし、この時点で Potala 貝葉写本の存在は未だ学界で知られていなかった。また、Oxford 貝葉写本の存在は岸根氏に確認されたが、使われなかった。

8 Kragh, Ulrich Timme. (Ed.) (2006). *Early Buddhist Theories of Action and Result: A study of Karmaphalasambandha Candrakīrti's Prasannapadā, verses 17.1-20*. Edited by Ernst Steinkellner, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

『プラサンナパダー』第 17 章「業と結果の考察」(karmaphalaparīkṣā) に対する校訂、翻訳、研究である。これは Macdonald 氏の博士論文における写本系統樹の研究を踏まえ、善本たる五写本、すなわち Oxford(1440)、Tokyo(251)、Cambridge(1483)、NGMPP reel-no.E1294/3、Roma(=NGMPP reel-no.C19/8) にもとづいて作った新しいサンスクリット校訂本である。その中で、校訂本の下に“Substantives”、“Accidentals”、“Parallels”、“Notes”という四種類の注記がついている。また、Kragh 氏はさらにチベット語大蔵経「論疏部」(bstan 'gyur) の sDe dge(D)、Peking(Q)、sNar thang(N)、Golden(G) という四つの版本を使い、『プラサンナパダー』第十七章のチベット語訳の校訂本をも作った。『プラサンナパダー』第十七章の解読の上で、たいへん使いやすいテキストである。

9 MacDonald, Anne. (Ed.) (2015). *In Clear Words: The Prasannapadā, Chapter One Vol.I: Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Text*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

これは『プラサンナパダー』第 1 章に対する画期的な研究であり、MacDonald 氏が大正大学の米澤嘉康氏による新出の Potala 写本の翻刻を利用し、自身の博士論文を増補したものである。この校訂本の前半部分では、MacDonald 氏は『プラサンナパダー』大谷写本を除いて、当時入手できた 16 写本を全部用い、系統樹の図で写本の関係を明らかにする。後半部分では、二つの貝葉写本と四つの紙写本は文献学上の善本であると確認した後、この六写本にもとづいて後半部分を完成する。

この校訂本は従来学界での通行本たる de La Vallée Poussin 本を超え、今後の『プラサン

ナパダー』写本研究の模範になるといっても過言ではない。特に、16 写本関係を表す系統樹は —— 第一章以外の別の章に関して検証する必要がさらにあるとはいえ —— 今後の『プラサンナパダー』研究の基礎知識になるに間違いない。

10 新作慶明 (2015)、「『プラサンナパダー』第 18 章「我（アートマン）の考察」の研究」、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科　博士論文

MacDonald (2015a) に定められた六つの“better”写本にもとづいた『プラサンナパダー』第 18 章の校訂本とチベット語訳校訂本と和訳である。サンスクリット語校訂本には、重要な異読とそれ以外の異読という二種類の注記がついている。

0.2.2　『プラサンナパダー』第 25 章翻訳の先行研究

1 Stcherbatsky, T. (1965). *The Conception of Buddhist Nirvāṇa*. London The Hague Paris: Mouton & Co.

de La Vallée Poussin 本にもとづいた『プラサンナパダー』第 1 章と第 25 章の翻訳と研究である。Stcherbatsky はこの第 1 章と第 25 章を『プラサンナパダー』の最も重要な部分と見なす。Stcherbatsky 氏が優れた業績を誇る一方、カント哲学の視点から中観思想を解釈することについては、屡々研究者の批判を招いた。

2 Sprung, M., Murti, T. R. V., & Vyas, U. S. (1979). *Lucid exposition of the middle way : the essential chapters from the Prasannapadā of Candrakīrti*. Boulder: Prajñā Press.

Sprung et al. (1979) は『プラサンナパダー』の「抜粋訳」であるが、第 25 章の部分は全訳である。底本は de La Vallée Poussin 本である。

3 本多恵 (1988)『チャンドラキールティ中論註和訳』、東京：国書刊行会

本多 (1988) は『プラサンナパダー』の日本語全訳である。多くの仏教専門用語を現代風に訳すことは本多 (1988) の特色である。底本は de La Vallée Poussin 本である。

4 丹治昭義 (2006)『中論釈明らかなことば II』、吹田：関西大学出版部

『プラサナパダー』第 22 章 —27 章の六章の和訳である。底本は de La Vallée Poussin 本である。

5 奥住毅 (2014)『増補改訂中論註釈書の研究: チャンドラキールティ「プラサンナパダー」和訳』、東京：山喜房佛書林

奥住 (2014) は奥住 (1988) の増補改訂である。『プラサンナパダー』の日本語全訳である。底本は de La Vallée Poussin 本である。

以上の五つの現代語訳はすべて de La Vallée Poussin 本を底本とする。本論文では、新校

訂本にもとづいて、『プラサナパダー』第 25 章の和訳を第 II 部「テキスト編」の最後に付加する。

第 I 部

研究編

第 1 章

『中論』の構成に関する考察

『プラサンナパダー』第 25 章「観涅槃品」の主題、すなわちチャンドラキールティの涅槃観を考察する前に、『中論』の構成および第 25 章の位置づけを検討する必要がある。『中論』は 27 章からなる。『中論』の構成理解は注釈者ごとに大きく異なり、注釈者各自の中観思想を表している。そのため、『中論』の構成に関する考察は『中論』の理解を深めるだけではなく、中観思想史の研究にとっても一助になりうる。

> sarvopalambhopaśamaḥ prapañcopaśamaḥ śivaḥ |
> na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ || MMK 25.24*[1]
> 【訳】［涅槃は］あらゆる認識の寂静であり、戯論の寂静であり、吉祥である。どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって説かれなかった。

この『中論』第 25 章の最後の一偈は涅槃を「戯論寂静」と規定し、仏の完全な沈黙、つまり「一字不説」の説法観を唱え、それまでの『中論』の内容を如来の沈黙で揚棄する。そのため、この偈頌はそれまでの『中論』内容を一旦総括するものである。それに対して、『中論』冒頭の帰敬偈後半は、次のように述べている。

> yaḥ pratītyasamutpādaṃ prapañcopaśamaṃ śivam |
> deśayāmāsa saṃbuddhas taṃ vande vadatāṃ varam ||*[2]
> 【訳】戯論の寂静であり、吉祥である縁起を教えた覚者、説法者の中で最も優れた彼に私は敬礼する。

この帰敬偈によれば、仏は戯論寂静・吉祥である縁起を教えており、説法者の中で最も優れた師である。

上述の『中論』25.24 頌とこの帰敬偈は似ている表現を持つものの、全く正反対の如来の不説と説法を説くので、相互に呼応しながら、劇的な違いがある。これは『中論』25.24 頌が『中論』の一旦の結論であることを含意する。一方、『中論』第 26-27 章はそれぞれ

---

*[1] 本論文160ページを参照。
*[2] 叶少勇 (2011b: 12)。

「十二支縁起」(dvādāśāṅga) と「邪見」(dṛṣṭi) を主題としており、典型的な中観派の思想内容や術語があまりに見られず、単純な「小乗」説とも見なされうる[*3]。従来、この両章は龍樹の真作であっても、付属的な内容ではないかと推測した学者が存在する[*4]。そのため、『中論』自身の構成からみれば、同論を前 25 章と次の 2 章の二つの部分に大別できる。それでは、『中論』の構成と第 25 章「観涅槃品」の位置づけについて、古代の注釈者たちはそれぞれどのような立場を取ったのかという問題意識の下に、科段[*5]および大小乗

[*3] 龍樹と十二支縁起の関係について、龍樹作とされた『因縁心論』(*Pratītyasamutpādahṛdayakārikā* と同-*vyākhyāna*) は無視できない。Gokhale (1955, 1978) は『因縁心論』のサンスクリット語原文 (Lhasa 版と Gilgit 版) を校訂し発表した。この『因縁心論』の第四偈は十二因縁と空思想を明確に結びづける。

hetuphalañ ca [hi] sarvaṃ jagad anyo nāsti kaścid iha satvaḥ |
śūnyebhya eva śūnyā dharmāḥ prabhavanti dharmebhyaḥ || v.4

【訳】また、実に、［十二法の］すべては因果である。この中で、別のいかなる生き物である衆生も存在しない。諸々の空な法からのみ、諸々の空な法は生じる。

この中で、sarva は十二支縁起の十二法を指す。十二の法は各自の直後の法の原因であると同時に、直前の法の結果でもある。このような縁起した十二法は空なものである。

まず、『因縁心論』が十二因縁を煩悩・業・苦の三段に分けることは『中論』第 26 章および『大智度論』等の文献に共通している。これはすでに八力 (1971: 843-847) や梶山 (1980b: 89-146) や五島 (2011a: 53-72) 等の先行研究により報告される。次に、Gokhale (1955: 101-106) に指摘された通り、チャンドラキールティの『プラサンナパダー』において『因縁心論』の第 5 偈を二度龍樹作として引用している (LVP, p.428;551)。また、『因縁心論』の漢訳 (T no.1654, 底本＝敦煌写本 S no.1358,2462) とチベット語訳 (D no.3838=D no.4553; P no.5236=P no.5467) はともに「龍猛」(Klu sgrub) の著作とする。この三点は『因縁心論』を龍樹の真作と推定する上で最も確実な根拠とされる。学界では『因縁心論』は一般的に龍樹作と見なされる。しかし、同本異訳の『十二因縁論』(菩提流支訳 T no.1651) は明確に「浄意菩薩造」とすること、また作者不明の論書を権威に帰するというインドの伝統から見れば、「浄意」(*Śuddhamati) という人物が『因縁心論』の真の作者であった可能性も否定できない。彼は『十地経』、『六十頌如理論』(*Yuktiṣaṣṭikā*)、『中論』第 26 章等の先行文献に依拠してこの『因縁心論』(*Pratītyasamutpādahṛdaya*) を作成したが、彼の名前がすぐに忘れられるにつれて、彼の著作も権威である龍樹に帰せられてしまったと推定できる。後に説明するような『中論』第 26 章を小乗説と見なす『青目注』・『無畏論』と比べると、『因縁心論』(*Pratītyasamutpādahṛdaya*) は積極的に十二因縁と空思想を結びづける。これは当時教団の中で、十二因縁と龍樹思想の関係を多様に解釈した史実を反映している。チャンドラキールティが『因縁心論』(*Pratītyasamutpādahṛdaya*) を龍樹作と見なすことは、『青目注』と『無畏論』の解釈と違って、彼が十二因縁と空思想を積極的に関係づけることに努めたことを表すだろう。

また、五島 (2008, 2009); Goshima (2010); 五島 (2011a,b, 2016) の一連の研究は龍樹と十二因縁の関係を詳しく論じた結果、『中論』第二十六章における「十二支縁起」が「空性の十二支縁起」であると判断する。解釈の一つの可能性として、本論文は五島氏の研究を認めている。しかし、この解釈が初期注釈書である『青目注』と『無畏論』の解釈と違うので、これを龍樹の真義と確定することを避けるべきであろう。

[*4] 例えば、Lindtner (1982: 27-28) は“…the final chapters XXVI-XXVII dealing with traditional Buddhist ideas in a relative sense may seem to form a curious anticlimax. In my opinion the author appended them with a very specific purpose, namely in order to show the orthodoxy of his śūnyavāda: One can only understand the dvādaśāṅga and the warnings against dṛṣṭis by means of śūnyatā.”と説く。Vetter (1992: 496) は“…the fact remains that chapter XXVI is thematically not coherent with the preceding chapters. It must therefore have been written some time before or after them. Lindtner who speaks of an anticlimax seems to suggest that it has been written after them. I am more inclined to consider it an early work of Nāgārjuna, a ‘student’s essay’echoing some kind of pudgalavāda milieu in which Nāgārjuna probably grew up. It could have been appended to the other chapters of the Kārikās by other people, but also by himself, still considering it a good explanation of the pratītyasamutpāda on the lower level of truth.”と説く。

[*5] 科段 (sa bcad)、あるいは分科、科文、科分というのは、経論を解釈する際、経論全体を体系的に把握するために、経論全体の構成をいくつかの段落に区切ることである。経典を「序分」「正宗分」「流通分」という三分にわけることは科段の好例としてよく知られている。この三分科段の伝統は一般的に東晋時代の道安に由来すると伝えられてきた。例えば、吉蔵は『仁王般若経疏』巻一「序品」の中で、「然諸佛説経本無章段、始自道安法師分経以為三段：第一序説、第二正説、第三流通説。」(T1707.33, 315c12-14) というよ

理解という二つの視点から、考察を進めたい。

周知のように『中論』には複数の注釈書が存在するが、その構成を詳細に論じたものは多くない。現存する文献の中で、『青目注』、『無畏論』が『中論』の構成について比較的まとまった見解を提示している。また、三論宗の開祖とされる吉蔵の『中観論疏』*6およびゲルク派 (dge lugs) の開祖であるツォンカパの『正理海』*7は『中論』に科段を設けている。

『青目注』と『無畏論』は「大乗の縁起＝不生不滅、声聞乗の縁起＝十二因縁」ということを基準に、『中論』に対してそれぞれ三段科段と二段科段の体系を設けている。さらに、『青目注』は対機説法と仏法衰退の思想背景に『中論』を大乗的部分と小乗的部分に分ける科段の意義を宣揚する。本章の第一節では、『青目注』と『無畏論』の科段体系を考察する。

中国の南北朝時代には、教相判釈が盛んに論じられたため、『青目注』は中観思想を説く文献として重視されただけではなく、三乗の位置づけの教証としても屡々引用された。三論宗の大成者吉蔵は『青目注』に見られる大乗と小乗の区別を踏まえながら、同時に『法華経』にもとづいた三転法輪説を活用することによって、『中論』の三部分をそれぞれ三転法輪に配当する。本章の第二節では、吉蔵の『中論』科段を考察する。

六世紀頃のインド中観論師チャンドラキールティは『中論』の科段を示さない。最初期の『中論』注釈書で小乗の教説と認められた十二因縁はチャンドラキールティの理解の中で一変して二無我をともに説明する理論になる。さらに、彼は『十地経』等の大乗経典

うに明確にこれを道安と関係づけたが、唐代の良賁の指摘によれば、玄奘訳『仏地経論』にも「教起因縁分」「聖教所説分」「依教奉行分」というほぼ同様の三分科段が見られる。両者の一致について、良賁は「昔有晋朝道安法師、科判諸経以爲三分：序分、正宗、流通分。故至今巨唐慈恩三蔵譯『佛地論』、親光菩薩釋『佛地経』、科判彼経以爲三分。然則東夏西天、處雖懸曠、聖心潛契、妙旨冥符。」(『仁王護國般若波羅蜜多経疏』T1709.33, 435b13-17) という点に求める。ただし、実際にはこの三分科段は地域を問わず、仏教が伝播した中国各地に広がった教学・解釈伝統の一つであったが、のちに道安がこの三分科段を最初に成文化したとする伝統が定着したと見てよいだろう。中国仏教史の中で、経典注釈書が発展するにつれて、細かな科段が施されるようになり、曇鸞が「細科煙颺、雜礪塵飛」(『妙法蓮華経文句』巻一「序品」T1718.34.1c16-17）というような煩瑣な経典解釈法も生まれることになった。その一方でまた、異なった注釈者が各自の理解に応じて同じ経典に対しても多様な科段を施すことになり、科段は注釈者自身の思想を表明するという側面ももった。このように科段は時代とともに、注釈者個人の思想を — 間接的にとはいえ — 反映するものとなった。その意味で、科段は単に注釈対象の構成を理解する一助であるにとどまらず、注釈者自身の思想を知る上でも貴重な資料であるといえよう。

*6 吉蔵の『中観論疏』は『中論』の『青目注』の複註である。鳩摩羅什によって『青目注』を伴った『中論』が翻訳されてから、漢伝仏教にいくつかの注釈書が存在したことは『出三蔵記集』巻十一に収められた『中論序』、吉蔵の『中観論疏』、安澄の複註『中論疏記』(T no.2255) などの資料から明らかである。その中で、現存する注釈は吉蔵の『中観論疏』のみである。

*7 14-15 世紀のゲルク派 (dGe lugs) の開祖であるツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa. A.D.1357-1419) による『中論』の注釈書『般若とよばれる根本中頌の解説：正理の海』(dDu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho zhes bya ba 略『正理海』) はツォンカパ全集 18 巻の ba 巻に収録されている。近年、『正理海』の全訳が、Garfield (2006) と奥山 (2014) により出版された。ツォンカパによる『中論』科段の特色について長尾 (1978: 321-340) は、「この中論二十七品を縁起、特に二無我を以て解決せんとし、その略説に於いても広説に於いても常に法無我、人無我の順序を以て考え、殊に最初の二品をこの法と人との二無我に配当する如きは、少なくとも直接月称『中論釈』に求められるものではないようである。［中略］宗喀巴の功績とせねばならない。」という。科段の詳細については、長尾 (1978: 321-340)、Garfield (2006: 3-5)、奥山 (2014: xxxii-xxxiv) を参照。

に影響され、声聞・独覚が菩薩と同様に二無我を証得できることを提唱する。このような十二因縁と大小乗の理解にもとづいて、チャンドラキールティは『中論』第 26 章以降の内容を小乗教説と見なす最初期の『中論』注釈書と異なり、『中論』全体の整合性を二無我に求める。本章の第三節では、チャンドラキールティの『中論』の構成理解を論じる。このような『中論』の構成理解上の分岐はインド中観派と漢伝仏教の中観思想の異なった性格を示す重要な視点である。

ゲルク派の開祖であるツォンカパはチャンドラキールティの『中論』の構成理解を踏まえ、『中論』の各章を法無我や人無我のいずれに配当し、『中論』に科段を設ける。この科段は元来体系性の欠く『中論』全体を整理し、啓発に富む体系である。本章の最後に、チャンドラキールティに深く影響されたツォンカパの『中論』科段を考察する。

1.1 『青目注』および『無畏論』による『中論』の構成理解

『青目注』と『無畏論』は現存文献の中で最も古い『中論』の注釈である。両者の関係について、学界では今なお議論が続いている[*8]。両注釈の現本のいずれにも後世の付加的な要素が窺え[*9]、このことが両文献の年代および関係の解明を困難にしている。『中論』の科段について、『青目注』と『無畏論』[*10]は次のように説いている。

---

*8 例えば、宇井 (1921: 13-18)、寺本 (1974a: 1-5) は『無畏論』を龍樹の真作とし、『青目注』より古い、と主張する。丹治 (1982: 83-88) は『青目注』に羅什の注釈があるものの、『青目注』と『無畏論』が「別の注釈書である意味も価値も必然性も全く認められない」、と説く。Lindtner (1982: 15-16) とHuntington (1986: 7-8) は現本の『青目注』と『無畏論』が同じ祖本に由来する、と説く。白館 (1991: 38-53) は『無畏論』が『仏護註』より新しく、『無畏論』の作者の年代を c.260-360 とする仮説を提案する。三谷 (2001: 17-30) は「9 世紀初頭に、他の諸注釈と同時期にチベット訳されて、『無畏』という名称を冠され、龍樹自注とされたということになる。[中略] チベット訳『無畏』の原テキストとしての『無畏』という名前の注釈書はインドにおいては存在しなかった。」と推測する。斎藤 (2003: 869-863) は『無畏論』の名称が「4c 後半のインド —— あるいは北西インド —— においてすでに成立していた」、と語る。

*9 「所出者是天竺梵志、名賓羅伽、秦言青目之所釋也。其人雖信解深法、而辭不雅中、其中乖闕煩重者、法師皆裁而裨之、於經通之理盡矣。」 『出三藏記集』巻十一僧叡「中論序第二」(T2145.55.77a5-8)
僧叡の「中論序」からみれば、鳩摩羅什は嘗て『青目注』を添削した。
『無畏論』の増広について、Huntington (1986: 23) は次にように説く。
“Short summary illustrations like these are extremely common in ABh, and conspicuously absent from BP and CL. The fact that both BP and CL consistently omit just these examples from passages (or entire chapters) that are otherwise lifted verbatim suggests that the text of ABh was not absolutely fixed during the first several hundred years of its circulation; rather, we may quite reasonably assume that both BP and CL utilized an earlier (or simply different) recension of the Indic source of ABh – one that did not include these illustrations.”

*10 チベット語大蔵経に納められている『仏護註』は第 23 品以後の内容は僅かの譬喩上の相違を除いて『無畏論』とほぼ一致している。また、平野 (1954: 236-238) は『仏護註』第 23 品以後の内容はそれ以前の内容より極めて簡略で形態上の連続性を欠き、「佛護註第二十三品以下は佛護が製作しなかつたか、或は傳承の途中に失はれたのを無畏註より借りてこれを完本と爲したと云ひ得るであらう。」と指摘する。そのため、本稿では『無畏論』第 26 と 27 品に見られる科段を考察する際、『仏護註』の考察を省略する。

1.	『青目注』第 26 章の冒頭	「問曰、汝以摩訶衍説第一義道、我今欲聞説声聞法入第一義道。」[*11](36b18-19)
	『無畏論』第 26 章の冒頭	「ここで［対論者は］言った。君は大乗の理 (gzhung lugs, *nīti) をもって勝義に悟入することを説き終えたのなら、今君は声聞の理をもって勝義に悟入することを説いてください。」[*12]
2.	『青目注』第 27 章の冒頭	「問曰、已聞大乗法破邪見、今欲聞声聞法破邪見。」[*13](36c25-26)
	『無畏論』第 27 章の冒頭	「ここで［対論者は］言った。今君は声聞乗に相応しい経 (mdo sde'i mtha', *sūtrānta) に依拠して諸種の見はありえないことを説いてください。」[*14]
3.	『青目注』29.28 頌の後ろ	「上以声聞法破諸見、今此大乗法中説。」[*15](39b15)
	『無畏論』	なし

まず、『無畏論』は『中論』全二十七品のうち、前二十五品を「大乗の理」、最後二品を「声聞の理」として大別する。これに対して、『青目注』は『中論』第二十七章の最後の二偈を独立した部分として捉える。したがって、『青目注』と『無畏論』による『中論』の科段は以下のような形にまとめられる。

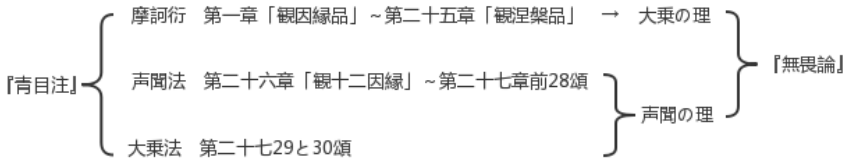


図1.1　『青目注』と『無畏論』の『中論』科段

一見して分かるように、この対照図は『青目注』と『無畏論』の類似性を示している。大乗と小乗の区別にもとづいて、『中論』を幾つかの部分に分けることは、バーヴィヴェーカの『般若灯論』(*Prajñāpradīpa*) とチャンドラキールティの『プラサンナパダー』等の注釈書に見られない[*16]。それでは、大乗と小乗の区別を唱え、『中論』に科段を設けるこ

[*11] 【訳】［反論者］は「君は大乗をもって第一義の道を説いた。今、私は声聞法を説き、第一義の道に入ることを聞きたい。」と問う。

[*12] 'dir smras pa | khyod kyis theg pa chen po'i gzhung lugs kyis don dam pa la 'jug pa ni bstan zin na | da khyod kyis nyan thos kyi gzhung lugs kyis don dam pa la 'jug pa ston cig | ABh(D no.3829, 94b)

[*13] 【訳】［反論者］は「大乗法をもって邪見を破することをすでに聞いた。今、声聞法で邪見を破することを聞きたい。」と問う。

[*14] 'dir smras pa | da khyod kyis nyan thos kyi theg pa dang mthun pa'i mdo sde'i mtha' la brten nas lta ba'i rnam pa rnams mi srid par ston cig | ABh(D no.3829, 95b)

[*15] 【訳】上には声聞法をもって邪見を破した。今、この大乗法において［次のことを］説く。

[*16] バーヴィヴェーカは『般若灯論』第 26 章の冒頭で『中論』第 26 章「観十二因縁品」を「言語習慣上の縁起」(tha snyad pa'i rten cing 'brel par 'byung ba, D no.3853, 249a3) とする。安慧の『大乗中観釈論』も第 26 章

とは一体何の意義であるのか。これについて、『無畏論』は詳しく説明しない。一方、『青目注』は以下のように述べている。

> ［大自在天等から生じる］という諸々の誤りがあるので無因、邪因、断・常等の邪見に陥り、種々に我と我所を説き、正しい法を知らない。仏は、このような諸々の邪見を断じ、仏法を知らせようと欲するので、まず声聞法において「十二因縁」を説き、さらに、すでに習行して偉大な心を持ち、深い法を受けるにたえる者のために、大乗法をもって因縁の特徴を説いた。いわゆる一切法は不生・不滅、不一・不異等で、畢竟空であり、無所有であると。［中略］仏が滅度したのち、五百年後の像法時代の中で、人の機根は鈍くなり、諸法に深く執着して十二因縁・五蘊・十二入・十八界等の決定相を求め、仏の真意を知らず、ただ文字のみに執着する。大乗法の中で畢竟空が説かれるのを聞いて、何ゆえ空であるのかを知らず、ただちに疑見を生じる。「もしもすべてが畢竟空であるならば、いかにして罪と福［の行為］と［それらの］応報を区別するのか」、と。このようであるなら、すなわち世俗諦と第一義諦はなくなる。この［ような誤った］空の特徴を執着して貪著を起こし、畢竟空に対して種々な過失を生じる。龍樹菩薩はこれらのために、この『中論』を著した。[*17]

上述の内容の要点は次の表にまとめられる。

	仏在世の教説	仏滅後、衆生の過失	『中論』の対治
声聞法	十二因縁	求決定相	十二因縁
大乗法	不生不滅等	畢竟空	不生不滅等

すなわち、まず、仏は断、常等の邪見をもち、我と我所を主張する人々に対して、声聞法の「十二因縁」を説き、一方「堪受深法者」に対して、大乗の教法として不生・不滅、畢竟空等を説いたという。これは対機説法の方法を表している。さらにまた、仏の滅度か

の冒頭で「諸行の生起」を「世俗の縁起」と見なす。

「諸行所起、皆是縁生。此等廣説、皆謂證成世俗縁生、對治之法、有所宣説。」『大乗中観釈論』巻17(K1482.41.168c7-9)

*17 「有如是等謬故、墮於無因、邪因、断常等邪見、種種説我我所、不知正法。仏欲斷如是等諸邪見、令知仏法故、先於声聞法中説十二因縁、又為已習行、有大心、堪受深法者、以大乗法説因縁相。所謂一切法不生、不滅、不一、不異等、畢竟空無所有。如『般若波羅蜜』中説：「仏告須菩提、菩薩坐道場時、観十二因縁、如虚空不可尽。」仏滅度後、後五百歳像法中、人根転鈍、深著諸法、求十二因縁・五陰・十二入・十八界等決定相、不知仏意、但著文字、聞大乗法中説畢竟空、不知何因縁故空、即生疑見：「若都畢竟空、云何分別有罪福報応等。」如是則無世諦第一義諦、取是空相而起貪著、於畢竟空中生種種過。龍樹菩薩為是等故、造此中論。」 『中論』「観因縁品」(1b18-c7)

補足：「仏滅度後、後五百歳」というのは「法滅句」である。渡辺 (2009: 211-232) の第 2 編第 7 章は大乗仏教の成立と法滅思想を考察する。この「法滅句」について、渡辺 (2009: 211) は次のように説く。

「ここでいう法滅句とは大乗経典にしばしば説かれる「如来滅後後五百歳、正法欲滅時」とか、「仏滅後、後五百歳」(angāate ’dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañca-śatyāṃ saddharma-vipralopa-kāle vartamāne) とか言われるもので、大乗経典の成立に深く関わる成句である。すなわち、この表現は、仏陀の入滅した後、500 年たってその教え（正しい教え）が消滅してしまうという、仏教の存続を危ぶむ表現であり、同時にそれこそが大乗仏教の成立の時期を示唆しているというものである。［中略］この法滅句成立の経緯から推察すると、この「後五百歳」という語句は［仏滅の］「後」の「五百歳」と言っているにすぎない。」

ら五百年以後の龍樹の像法時代には衆生の機根が悪くなり、仏の真意を知らず、十二因縁・五蘊等の声聞法に対しては決定相を求め、大乗法である畢竟空に対しては誤解により様々な過失を生じたという。これは仏法衰退の危機感を示している。このように、『青目注』によると、龍樹は仏の対機説法の教化方法を念頭に置き、像法時代における大小乗の機根に応じて、諸法の決定相を斥けるとともに、畢竟空に対する誤解を対治するために、『中論』を著作した。

上述の説明によると、『中論』における大乗向けの教説 (前二十五章と 27.29-30 二頌) と声聞向けの教説（第二十六章と二十七章の前 28 頌）はそれぞれ像法時代の衆生の二種の誤解を対治するためである。このように、青目注は『中論』に対する二乗科段の意味を明らかにしている。

前に触れたように、『中論』25.24 頌が帰敬偈と呼応することと、同論書の第 26-27 章に典型的な中観派の術語が見られないことは、『中論』25.24 頌が少なくとも前 25 章の結論に相当することを暗示する。『青目注』と『無異論』の『中論』科段からみれば、『中論』第 25 章「観涅槃品」は大乗向けの教説に相当する前 25 章の終わりである。このように、『中論』自身と最初期の『中論』注釈書はともに似ている構成理解を示すから、この構成理解は古いものであろう。

1.2　吉蔵の『中論』科段

三論宗の開祖とされる吉蔵[*18]は、『中観論疏』という名の注釈を残している。その中で、吉蔵は「北土三論師」[*19]の科段を批判した後、『青目注』の大小乗科段の伝統に沿うと同

[*18] 吉蔵の『中論』科段について、王 (2017b) も参照。

[*19] 「北立三論師、明此論文有四巻、大明三章。初有四偈、標論大宗。第二從破四縁以下、竟邪見品、破執顕宗。第三最後一偈、推功歸佛。」　『中観論疏』巻一 (T1824.42.7c4-8)

最初の一句は大正蔵と卍続蔵においてともに「北立三論師」とされるが、安澄の『中論疏記』(T no.2255) は「北土三論師」(T2255.65.20a18) とする。安澄の読み方が通じると思う。『中観論疏』巻二に出た「北主三論師」(T1824.42.32c9) も「北土三論師」の誤りと見なすべきである。『中観論疏』を著作した時、吉蔵はすでに北方の長安に招かれたが、吉蔵の法脈が南方摂嶺（今南京）に遡れるので、少なくともここでいわれた「北土三論師」は「摂嶺相承」に相対する意味を表している。また、「三論師」というのは、『中論』、『十二門論』、『百論』という三論の教義にもとづいた学派の学問僧である。

安澄はこの「北土三論師」が琛法師と荘法師であると指摘する。安澄はこの琛法師を伝記が大正蔵本『高僧伝』巻四に収められた東晋時代の竺潛（字法深）と同定したが、平井 (1976: 225-226) に指摘された通り、竺潛が晋の寧康二年 (374) に歿したが、鳩摩羅什が『中論』を翻訳したのは弘始十一年 (409 年) であるから、晋の竺潛は『中論』の注釈者になるはずはない。平井 (1976: 226-228) はさらに『中観論疏』巻八に説かれた「北土瑤師」と元康疏の依用した深師の説を手掛かりとして、「瑤 → 琛 (深)」という過誤の可能性を推測したし、この「瑤師」とは『高僧伝』巻七に記載された法瑤（宋元明宮本：法瑤；大正：法珍）であると指摘した。『高僧伝』巻七に記載する法瑤の伝記から見れば、元嘉過江の後、法瑤は前後 19 年間呉興武康の小山寺に住しており、その間、『涅槃』『法華』『大品』『勝鬘』などの義疏を作った。その後、彼は京師建康の新安寺に移して、「漸悟」の義を提唱した (T2059.50.374b25-c7)。後代の文献では法瑤は常に『涅槃』『法華』『勝鬘』の注釈者あるいは「漸悟」の提唱者のイメージで現れていた。例えば、智顗の『妙法蓮華経文句』「序品」において「昔河西憑、江東瑤、取此意、節目経文、末代尤煩」(T1718.34.1c14-15) といわれる。灌頂の『大般涅槃経疏』の冒頭は「上代直唱消文釋意、分章段起、小山瑤、關内憑等、因茲成則。」(T1767.38.42a28-29) という。「小山瑤」とは小山寺に住した法瑤を指す。彼は経典の本来の構造を崩して、「章段」をもって経文を分けて解釈を施すという伝統の開創者として知られていた。しかし、『高

時に、内容的に『法華経』にもとづいた三転法輪の教判思想をもって『青目注』の三分科段を意味づける。というよりは、むしろ吉蔵は『法華経』にもとづいた三転法輪説を重視するゆえにこそ、当時流行していた各科段体系に満足せず、大小乗を強調する『青目注』の伝統を甦らせたと言えるであろう。彼の科段の大筋は次のようなものである。

> 摂嶺相承[*20]によると、二十七品を三段に分けるのである。最初の二十五品は大乗の迷失を破し、大乗の観行を明らかにする。次の二品は小乗の迷執を破し、小乗の観行を弁ずるのである。第三に、重ねて大乗の観行を明らかにし功績を仏に帰するのである。この三段があるのは、正道にはそもそも大小［の区別］はないが、大小［それぞれの］根機に従って大小の二つの教えを説くためである。しかし、仏が在世した時の衆生は福徳と利根をもち、その［大小の］両教を稟けて並びにみな［道を得た。仏滅度の後は、薄福鈍根にしてその両教を稟けて並びにみな］迷失した。論主はそれらの二つの迷を破し、二つの教えをともに宣揚した。それゆえ、三段の文がある。[*21]

これにもとづいて、吉蔵の『中論』構成理解は次のように整理できる。

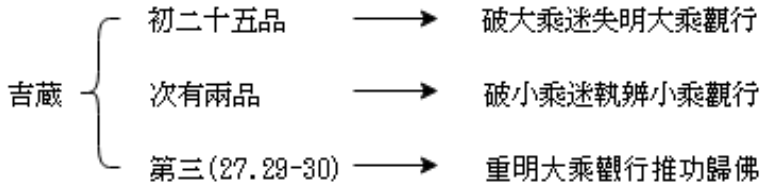


図1.2 吉蔵による『中論』科段

僧伝』の伝記にせよ、後代の文献の言及にせよ、法瑤と『中論』の繋がりはほとんど見られないし、また、法瑤が嘗て住錫した小山寺と新安寺はいずれも典型的な中国の南地方であるので、「北土」と呼ばれるのは非常に不自然であるといわざるをえない。したがって、平井俊栄氏の提唱した法瑤説は堅固な証拠を欠き、今後の議論が待たれる。

また、「荘法師」について、安澄は「此荘法師義故。『高僧傳』第五云荊州上明有釋僧荘者、亦善『涅槃』及數論等宗是也。但此師述僧道義耳。」(『中論疏記』巻一 T2255.65.20a22-24) と語った。つまり、荘法師は『高僧伝』巻五（大正蔵本巻七）に記載した「僧荘」と同定された。これに対して、平井 (1976, 224) は荘法師が『続高僧伝』巻九の「道荘」であると推測した。「道荘」の伝記から、彼は嘗て彭城系の成実論家であり、後で興皇法朗の門下で四論（三論＋『智度論』）を勉強したし、同じ師匠の下での吉蔵より二十年上の先輩であったことは窺える。この道荘は『中観文句』の作者「荘法師」である可能性が高いと思う。

*20 「摂嶺相承」とは、摂山止観寺の僧朗 → 僧詮 → 法朗の三論教学の系譜を指すのである。この系譜について、湯用彤 (1991: 734) と平井 (1976: 59-72) を参照。吉蔵の著作から見れば、彼の思想には「摂嶺相承」と「関河旧義」の二大源流がある。「関河旧義」は教判を重視せず、「一音教」を主張するので、吉蔵の教判思想乃至『中論』科段は「摂嶺相承」の下で形成され、教判を重んじる時代の風潮を反映していると考えられる。

*21 「自攝嶺相承、分二十七品、以爲三段。初二十五品、破大乘迷失、明大乘觀行。次有両品、破小乘迷執、辨小乘觀行。第三重明大乘觀行、推功歸佛。所以有此三段者、正道未曾小大、赴大小根縁、故説大小両教。而佛在世時、衆生福德利根、稟斯両教、並皆迷失。論主破彼二迷、俱申両教。是故有三段之文。」 『中観論疏』巻一 (T1824.42.7c24-8a1)

下線部は大正蔵本と卍続蔵本に欠落。「国訳一切経・論疏部六の『中観論疏』上」は「【五十五】東大寺聖然本により補う」と注記する (p.28)。本稿はこの国訳一切経の和訳により欠落を補足する。

この三分科段の枠組みの下で、吉蔵はこれをさらに敷衍して非常に煩雑な構造を導入するようになってしまう。科段の大筋は大体次のようである。

1. 初二十五品、破大乗迷失、明大乗観行
    1.1 初二十一品 (Chap.1-21)、破世間人法、明大乗観行
        1.1.1 初至観業有十七品 (Chap.1-17)、破稟教邪迷、顕中道実相
            1.1.1.1 初有七品 (Chap.1-7)、略破人法、明大乗観行、為利根人説
                1.1.1.1.1< 因縁品 >
                1.1.1.1.2< 去來品 >
                1.1.1.1.3< 六情品 >
                1.1.1.1.4< 五陰品 >
                1.1.1.1.5< 六種品 >
                1.1.1.1.6< 染染者品 >
                1.1.1.1.7< 三相品 >
            1.1.1.2 次十品 (Chap.8-17)、広破人法、弁大乗観行、為鈍根人説
                1.1.1.2.1 初四品 (Chap.8-11) 正破人、傍破法
                1.1.1.2.1.1< 作作者品 >
                1.1.1.2.1.2< 本住品 >
                1.1.1.2.1.3< 燃可燃品 >
                1.1.1.2.1.4< 本際品 >
                1.1.1.2.2 次六品 (Chap.12-17) 正破法、傍破人
                1.1.1.2.2.1< 苦品 >
                1.1.1.2.2.2< 行品 >
                1.1.1.2.2.3< 合品 >
                1.1.1.2.2.4< 有無品 >
                1.1.1.2.2.5< 縛解品 >
                1.1.1.2.2.6< 業品 >
        1.1.2 第二 < 観法 > 一品 (Chap.18)、次明得益
        1.1.3 第三 < 時 >< 因果 >< 成壊 > 有三品 (Chap.19-21)、重破邪迷、重明中道実相
            1.1.3.1< 時品 >
            1.1.3.2< 因果品 >
            1.1.3.3< 成壊品 >
    1.2 後四品 (Chap.22-25)、破出世人法、明大乗観行
        1.2.1< 如來品 >
        1.2.2< 顛倒品 >
        1.2.3< 四諦品 >
        1.2.4< 涅槃品 >
2. 次有両品 (Chap.26-27.28)、破小乗迷執、弁小乗観行
    2.1< 十二因縁品 >

2.2< 邪見品 >

3. 第三 (Chap.27.29-30)、重明大乗観行、推功帰佛

3.1 初偈重広明大乗観行、明美法

3.2 次偈推功帰佛、弁讃人

このように、吉蔵は大小乗の区別にもとづいて『中論』を三部分に大別する。この点は『青目注』と一致している。

一方また吉蔵は、『青目注』に見られた対機説法の視点を踏まえ、その観点をより詳細に展開し、『法華経』による「三転法輪」の教判をもって意味づけている。吉蔵は『中観論疏』において、『中論』の三段科段について、次のように言う。

> 例えば、『法華経』は、総じて十方の諸仏および釈迦一人の教化を述べ、凡そ三輪がある。第一は根本法輪で、一乗教とよばれる。第二は枝末法輪の教えで、衆生が一［仏乗］を聞くにたえないゆえ、一仏乗において三［乗］を分別して説く。三［乗］は一［乗］から起こるゆえに、枝末と称するのである。第三は攝末帰本で、その三乗を総合して同じく一極に帰する。この三門は教として収めざることなく、理として摂ざることはない。虚空が萬像を含める如く。海が百川を納める如く。今［中］論の三段は還って仏の三［種類の］経を述べる。［『中論』の］初めの二十五品は一乗の根本の教えを述べる。次の［第二十六と第二十七の］両品は仏の枝末の教えを述べる。後には大乗を重ねて明らかにし、［枝］末を摂し［根］本に帰することを述べる。このゆえに三段の文がある。この三迷を破し、この三教を述べることはみな一様に仏の功績である。ゆえに、最後に功績を譲って仏に帰する。三輪の経はすでに教えとして摂ざることなく、三輪を述べる論もまた、教えとして収めざることはない。このゆえに、この［中］論は深さを窮め、広さを極めているのである。[*22]

ここで吉蔵は『青目注』の三段科段を『法華経』にもとづいた三転法輪と結びつけ、『中論』と『法華経』とを同じ思想的な枠組みで捉えていることは明らかである。要するに、彼はまず『法華経』に依拠して、同経は釈迦仏と十方の諸仏の教えを「根本法輪」、「枝末法輪」、「摂末帰本（法輪）」という三法輪に分けると宣言する。三転法輪の詳しい説明は吉蔵の『法華遊意』、『法華玄論』、『法華義疏』等の法華経注釈書に窺えるが、簡単にまとめる、吉蔵のいわゆる「根本法輪」は『華厳経』を指し、「摂末帰本法輪」は『法華経』を指し、「枝末法輪」はそれら以外の経典を指す。このような教判体系は、吉蔵以前の、『華厳経』を円満な教と為し、『法華経』を未了義とする「南方五時」と「北方四宗」の教判を一変して、法華を華厳に比肩するものと見なす[*23]。したがって、ここで吉蔵は三転法

[*22] 「如『法華経』總序十方諸佛、及釋迦一化。凡有三輪。一根本法輪、謂一乘教也。二枝末法輪之教、衆生不堪聞一、故於一佛乘、分別説三、三從一起、故稱枝末也。三攝末歸本、會彼三乘、同歸一極。此之三門、無教不收、無理不攝。如空之含萬像、若海之納百川。今論三段、還申佛三経。初二十五品申一乘根本之教。次兩品申佛枝末之教。後重明大乘、申攝末歸本。是故有三段之文。破此三迷、申茲三教、並是佛功、故最後推功歸佛。三輪之経既無教不攝、申三輪之論亦無教不收、是故斯論窮深極廣也。」 『中観論疏』巻一 (T1824.42.8b23-c6)。

[*23] 平井 (1976: 506-511)。

輪それぞれを『中論』の三段に配当することによって、論書としての『中論』を経典にも匹敵する仏説にほかならないと意味づけている。

しかし、『中論』には一乗を説く箇所は存在せず、吉蔵の三転法輪説を厳格に適用すると、空・縁起を主題とする『中論』は第二の枝末法輪に属することになり、『中論』が三転法輪の内容すべてを包摂することはありえない。それゆえ、吉蔵が『中論』の三段をそれぞれに三転法輪を配当することは機械的な付会説ともいえよう。これも側面的ながら、吉蔵が『青目注』の大小乗科段を重んじる理由は彼自身の教判思想を宣揚するところにあるということを示すであろう。

上述のように、吉蔵の科段によれば、『中論』第 25 章は「破大乗迷失、明大乗観行」を目的とする前 25 章の終わりである。形式上、このような構成理解は『中論』自身の構成および『青目注』の科段に由来するが、教判上の位置づけに関しては、『法華経』との関連性は看過できない。

1.3　チャンドラキールティの理解 —— 大乗と小乗の観点から

前にふれたように、『中論』構成理解は注釈者の大小乗理解と密接に関係している。そのため、チャンドラキールティの『中論』の構成理解を検討するために、彼はどのように「十二因縁」と大小乗の区別を理解するのかを考察すべきである。

十二因縁を小乗説と見なす『青目注』と『無畏論』、およびこれを世俗的縁起と見なすバーヴィヴェーカ・安慧と異なり、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』第 26 章「十二支の考察」の中で、十二因縁が不生不滅の縁起にほかならないと説く。

> atrāha | yad uktaṃ,
> **yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatāṃ tāṃ pracakṣmahe |**
> **sā prajñaptir upādāya pratipatsaiva madhyamā** || 24.18
> iti | kaḥ punar asau pratītyasamutpādo yaḥ śūnyatety ucyate || atha vā yad etad uktaṃ,
> **yaḥ pratītyasamutpādaṃ paśyatīdaṃ sa paśyati |**
> **duḥkhaṃ samudayaṃ caiva nirodhaṃ mārgam eva ca** || 24.40
> iti, tat katamo ʼsau pratītyasamutpāda iti || atas tadaṅgaprabhedavivakṣayedam ucyate,
> **punarbhavāya saṃskārān avidyānivṛtas tridhā |**
> **abhisaṃskurute yāṃs tair gatiṃ gacchati karmabhiḥ** || 26.1[*24]
> 【訳】ここで［質問者は］言った。
> 「我々は縁起を空性と説く。それは依存して施設することであり、まさに中道である。」（『中論』24.18）とすでに説かれたが、いったいまた、「空性」と言われるこの縁起とは何か。あるいはまた、「縁起を見る者、彼は苦・集・滅・道を見る。」（『中

[*24] *Prasannapadā* Chap.26(de La Vallée Poussin, 1903-13: 542)

論』24.40）ということがすでに説かれたが、そのとき、この「縁起」とは何か。
したがって、その［十二縁起］支の区別を述べる意図をもって、次の［偈頌が］言われる。
無明に覆われた者は再生のために、三種類の行を造作するが、それら［の行］によって趣に赴く。(『中論』26.1)

『プラサンナパダー』第 26 章の冒頭に、チャンドラキールティは『中論』24.18 と 24.40 という二頌を引用した後に、「空性である縁起とは何か」という質問をきっかけにして十二因縁の説明を始める。したがって、チャンドラキールティにとって、十二因縁は小乗向けの教説や世俗的縁起説ではなく、『中論』の第二十四章に説かれた空性である縁起にほかならない。

また、同 26 章において、チャンドラキールティは『因縁心論』の第 5 偈[*25]と『稲竿経』(*Śālistambasūtra*) を教証として引用する。『因縁心論』は空思想と十二因縁との融合を語る論書であり、『プラサンナパダー』において龍樹作として認められる。また、『稲竿経』は種子と芽の喩えをもって、十二因縁を不生の縁起と同一視する[*26]大乗経典である。そのため、チャンドラキールティが十二因縁を空性である縁起と視することは、『因縁心論』と『稲竿経』からの影響は看過できない。

一方、『プラサンナパダー』第 1 章でチャンドラキールティは生滅の縁起が未了義であると説く[*27]。金沢 (2007: 941-938) はこれにもとづいて、十二因縁を未了義であると判断

[*25] ata evoktam ācāryaNāgārjunapādaiḥ |
svādhyāyadīpamudrādarpaṇaghoṣārkakāntabījāmlaiḥ |
skandhapratisandhir asaṃkramaś ca vidvadbhir apadhāryau || de La Vallée Poussin (1903-13: 551)

[*26] de La Vallée Poussin (1903-13: 566-567) の『稲竿経』の引用文を参照。

[*27] atrāha– yady evam anutpādādiviśiṣṭaḥ pratītyasamutpādo vyavasthito bhavadbhir yat tarhi bhagavatoktam—
avidyāpratyayāḥ saṃskārā avidyānirodhāt saṃskāranirodhaḥ ||
tathā,
anityā bata saṃskārā utpādavyayadharmiṇaḥ |
utpadya hi nirudhyante teṣāṃ vyupaśamaḥ sukham ||
tathā,
eko dharmaḥ sattvasthitaye yad uta catvāra āhārāḥ |
dvau dharmau lokaṃ pālayato hrīś cāpatrāpyaṃ ca ||
ityādi |
tathā,
paralokād ihāgamanam ihalokāc ca paralokagamanam ||
ity evaṃ nirodhādiviśiṣṭaḥ pratītyasamutpādo deśito bhagavatā sa kathaṃ na nirudhyata iti ||
yata eva hi nirodhādayaḥ pratītyasamutpādasyopalabhyante, ata evedaṃ Madhyamakaśāstraṃ praṇītam ācāryeṇa neyanītārthasūtrāntavibhāgopadarśanārtham | tatra ya ete pratītyasamutpādasyotpādādaya uktāḥ, na te vigatāvidyā-timirānāsravajñānaviṣayasvabhāvāpekṣayā | kiṃ tarhy avidyātimiropahatamatinayanajñānaviṣayāpekṣayā || PsP Chap.1(MacDonald, 2015a: 198-202)
【訳】これについて、［反論者は］言った。「もし、以上のように君たちによって不生等に限定された縁起が設定されるならば、その場合、世尊によって述べられた。
［教証 1］諸々の行は無明を縁とする。無明の滅にもとづいて、行の滅がある。
同様に、
［教証 2］諸々の行は無常であり、生起と消滅という性質を持つものである。なぜなら、［諸々の行は］生じて滅する。それらの寂静が楽である。
同様に、

する。しかし、『プラサンナパダー』第 26 章は明確に十二因縁を空性である縁起と同定するので、金沢氏のこういう判断は妥当とは言えないだろう。さらに、『入中論』6.88 頌の注釈の中で、チャンドラキールティは『十地経』第六地の十二因縁説を援用し、唯識派を批判するに際して、菩薩たちは十二因縁の十二支分が有為法として本質上不生不滅であると観察すると説く[*28]。したがって、十二因縁は了義と未了義のいずれにも限らず、どのように十二因縁を観察するかが了義と未了義を決めるものである。実在論者は自性上の生滅を認める場合、十二因縁は未了義であるが、空性から十二因縁を観察するならば、十二因縁は了義になる。『プラサンナパダー』第 26 章の中で、チャンドラキールティにより空性である縁起と同定された十二因縁は了義な縁起説になるはずである。そのため、チャンドラキールティのこのような縁起理解は、十二因縁を明確に小乗説と見なす『青目注』や『無畏論』とは異なる。

一方、大乗と小乗理解の点で、チャンドラキールティは大乗と小乗がともに二無我を証得できることを唱えている。彼の大乗と小乗理解は『プラサンナパダー』第 18 章のバーヴィヴェーカ批判に見られる。『プラサンナパダー』第 18 章は「観我品」(ātmaparīkṣā) であり、我執・我所執・二無我を論じる章である。チャンドラキールティは「観我品」の中で、次にようにバーヴィヴェーカの『般若灯論』を引用する。

［教証 3］一つの法が衆生の存続のためである。即ち、四種類の食べ物である。二つの法は世間を守っている。すなわち、慚と愧である。

云々。

同様に、

［教証 4］別の世界から、ここに来る。また、この世界から、別の世界に行く。

以上のように、滅等に制限された縁起は世尊によって教えられた。その［縁起］は如何にして滅しないのか？」と。

［チャンドラキールティが答える。］なぜなら、実に縁起に属する滅等が知覚される。だからこそ、師匠［龍樹］は未了義と了義の経典の区別を示すために、この『中論』を著した。そのうち、何であれ、縁起の生起等が言われるならば、それらは、無明の眼病を離れた無漏智の対象という自性に依存することによるのではない。そうではなくて、慧眼が無明の眼病に障害されたところの智の対象に依存することによるのである。

[*28] de ltas bdag gis ’dus byas nyes pa mang po’i skyon chags pa de lta bu ’di shes par byas la ’du ba ’di dang tshogs pa ’di’i rgyun bcad par yang bya zhing sems can yongs su smin par bya ba’i phyir ’du byed rnams shin tu zhi ba thob par ni mi bya’o snyam mo || kye rgyal ba’i sras dag de de ltar ’du byed du gyur pa nyes pa mang po’i skyon chags shing ngo bo nyid med pa dang | ma skyes pa ma ’gags par so sor rtog pa na zhes rgyas par gsungs te | …MABh(de La Vallée Poussin, 1912: 189-190)

『十地経』の原文は次のようである。

hanta vayam evaṃ bahudoṣaduṣṭaṃ saṃskṛtaṃ viditvāsya saṃyogasyāsyāś ca sāmāgryā vyavacchedaṃ kārayiṣyāmo na cātyantopaśamaṃ saṃskārāṇām adhigamiṣyāmaḥ sattvaparipācanāyai | evam asya bhavaṃto jinaputrāḥ saṃskāragataṃ bahudoṣaduṣṭaṃ svabhāvarahitam anutpannāniruddhaṃ …DBh(Kondo, 1936: 102)

【訳】オー、我々はこのように多くの過失に汚された［十二支分である］有為を知ってから、［各支分の］結合と連合の中断を為させているが、衆生を成熟させるために、諸々の行の完全の寂静を証得していない。同様に、勝者の息子、君たちよ、多くの過失に汚され、行になった［十二支分］が自性を離れたものであり、不生不滅である。

和訳について、荒牧 (1974: 189) を参照。『十地経』の文脈からみれば、saṃskṛta と saṃskāra はこの引用文の直前に説かれた十二因縁の各支分を指すのである。特に、ここで、行 (saṃskāra) は十二因縁の二番目の行ではなく、有為の同義語である。また、『十地経』で、結合 (saṃyoga) と連合 (sāmāgrī) は十二因縁の中で支分から支分への不可離関係 (avinirbhāga) を指す。

ācāryabhāvivekas tu śrāvakapratyekabuddhānāṃ yathoditaṃ śūnyatādhigatam apratipadyamāna evaṃ varṇayati,
aparotpannapratikṣaṇaviśarārusaṃskārakalāpamātram anātmānātmīyam avalokayata āryaśrāvakasyāpy ātmātmīyavastvabhāvād dharmamātram idaṃ jāyate mriyate ceti darśanam utpadyate | ahaṃkāraviṣayo hy ātmā tadabhāvāt tadapravṛttiḥ, tadabhāvād eva ca na kasyacid ādhyātmikaṃ bāhyaṃ vā vastv astīti mamakārānupapatter nirmamo nirahaṃkāro ’ham iti na svarūpaviniścitir upajāyate ’nyatra vyavahārasaṃketāt, prāg evājātasaṃskāradarśināṃ nirvikalpaprajñācāravihāriṇāṃ mahābodhisattvānām iti | ata āha, nirmamo nirahaṃkāro yaś ca so ’pi na vidyate | PsP Chap.18*29

【訳】しかし、師匠バーヴィヴェカは、「声聞・独覚に上に説かれた空性の証得がある」と理解せず、次のように説明する。
あれこれのものより生じ瞬間ごとに滅する行の束にすぎないものが我でもなく、我所でもないことを観察して、聖なる声聞には「我と我所という事物が存在しないから、この法のみが生じたり滅したりする」という見解が生じる。なぜなら、我は自我意識の対象である。その［我］が存在しないから、その［自我意識］も存在しない。その［自我意識］が存在しないからこそ、どこにおいても、内的にも外的にも事物は存在しない。したがって、所有意識がありえないから、「私は我所を離れ、自我意識を離れたものである」という自己本体への確信は、言語習慣の協約のほかに生起しない。すべての不生なる行を見て、無分別の慧の行に住している大菩薩たちにとって言うまでもない。したがって、［龍樹は］「我所を離れ自我意識を離れた者、そのような者も存在しない」(『中論』18.3ab）と言った。

これはチャンドラキールティに引用された『般若灯論』(*Prajñāpradīpa*) の『中論』18.3ab 注釈*30である。バーヴィヴェーカによると、声聞たちは生じたり滅したりする行の集合が我と我所ではないことを観察して、我と我所が存在せず単に法が生滅するという人無我を証得するとされる。大菩薩たちは人無我の証得は言うまでもなく (prāg)、行も不生なるものと見て、つまり法無我も証得する。この理解は次の図式にまとめられる。

	声聞	菩薩
人無我	√	√
法無我		√

表1.1 バーヴィヴェーカの二乗理解

チャンドラキールティはこのような声聞と菩薩の峻別を認めず、両者は共に二無我を証得できるが、ただ質上の区別があると主張する。この点について、彼は『入中論』(*Madhayamakāvatāra*) において詳しく説明する。

*29 新作 (2015: 120)。
*30 =*Prajñāpradīpa* D no.3853 184b4-7。

rdzogs pa'i byang chub sems lta dang po la gnas kyang ||
thub dbang gsung skyes dang bcas rang sangs rgyas rnams ni ||
bsod nams dag gi dbang gis pham byas rnam par 'phel ||
de ni ring du song bar blo yang lhag par 'gyur || MA 1.8*[31]

【訳】［菩薩は］完全な菩提心という最初の見解に依存しても、福徳の力によって牟尼王の語から生じた［声聞］と独覚たちを圧倒し増長する。彼は［第七］遠行［地］において智も優れる。*[32]

まず、チャンドラキールティは福徳 (bsod nams, *puṇya) と智 (blo, dhī) という二つの側面から声聞独覚と菩薩の区別を考察する。福徳からいえば、発菩提心の菩薩さえも声聞と独覚を完全に圧倒する。これを説明するために、チャンドラキールティは『聖弥勒解脱経』('Phags pa byams pa'i rnam par thar pa) と『十地経』を教証として引用する。そのうち、『十地経』の教証は次のようである。

tad yathāpi nāma bho jinaputrā rājakulaprasūto rājaputro rājalakṣaṇasamanvāgataḥ sa jātamātra eva sarvāmātyagaṇam abhibhavati rājādhipatyena na punaḥ svabuddhibalavicāreṇa yadā punaḥ sa saṃvṛddho bhavati tadā svabuddhibalādhānataḥ sarvāmātyakriyām atikrānto bhavati | evam eva bho jinaputrā bodhisatvaḥ saha cittotpādamātreṇa*[33] sarvaśrāvakapratyekabuddhān abhibhavati adhyāśayamāhātmyena na punaḥ svabuddhibalavicāreṇa | asyān tu saptamyāṃ bodhisattvabhūmau sthito bodhisatvaḥ svaviṣayajñānamāhātmyāvasthitatvāt sarvaśrāvakapratyekabuddhakriyām atikrānto bhavati | MA(ms.5b4-6a1)*[34]

【訳】例えば、勝者の息子たちよ、王族に生まれた王子は王の特徴を備える。彼は［王族に］生まれることによってのみ (jātamātrena?)、王の権力で、すべての一群の大臣を圧倒するが、自らの智慧と力と判断*[35]によって［大臣を圧倒する］わけではない。さらに、彼は成人になる時、自らの智慧と力を得るので、すべての大臣の所作を超えることになる。まさに同様に、勝者の息子たちよ、菩薩は発心のみを伴って、誓願の偉大さによって、すべての声聞と独覚を圧倒するが、自らの智慧と力と

*31 『入中論』のチベット語訳校訂本はde La Vallée Poussin (1912: 17) を参照。

*32 この偈頌の d-pāda は"dūraṃgamāyān tu dhiyāpi so 'dhikaḥ. "である。李学竹 (2009: 185) を参照。『プラサンナパダー』に引用された原文は"dūraṃgamāyāṃ tu dhiyādhika"である。『入中論』の和訳について、瓜生津・中沢 (2012: 91) も参照されたい。

*33 李学竹 (2009: 185) は"sahacittotpādamātreṇa"と読むが、本論はKondo (1936) 本の『十地経』にもとづいて、"saha cittotpādamātreṇa"と読む。

*34 李学竹 (2009: 185) を参照。『十地経』原文は以下の通りである。
"tad yathāpi nāma bho jinaputra rājakulaprasūto rājaputro rājalakṣaṇasamanvāgataḥ | jātamātra eva sarvam amātyagaṇam abhibhavati | rājādhipatyena na punaḥ svabuddhivicāreṇa | yadā punaḥ sa saṃvṛddho bhavati tadā svabuddhibalādhānataḥ sarvāmātyakriyāsamatikrāṃto bhavati | evam eva bho jinaputra bodhisattvaḥ saha cittotpādena sarvaśrāvakapratyekabuddhān abhibhavaty adhyāśayamahātmyena na punaḥ svabuddhivicāreṇa | asyāṃ tu saptamyāṃ bodhisattvabhūmau sthito bodhisattvaḥ svaviṣayajñānaviśeṣamahātmyāvasthitatvāt sarvaśrāvakapratyekabuddhakriyām atikrāṃto bhavati |"Kondo (1936: 122)

*35 "svabuddhibalavicāreṇa"について、『入中論』のチベット語訳は"rang gi blo'i stobs kyis rnam par dpyad bas"と訳するが、本論はこの複合語が dvandva であると理解する。

判断によって［声聞と独覚を圧倒する］わけではない。しかし、この第七菩薩地に住している菩薩は、自らの対象と智の偉大さに住するので、すべての声聞と独覚の所作を超えることになる。

『十地経』は菩薩が如来の息子で、如来の家系に生まれるので声聞と独覚より尊貴であり、智の点で、菩薩が第七遠行地の段階からはじめて声聞と独覚より優れることを説く。したがって、「第七遠行地から、菩薩は初めて智の点で声聞と独覚より優れる」という説はチャンドラキールティが提示した独自の理論ではなく、大乗経典にすでに存在した説である。この説によれば、声聞と独覚は菩薩と同様に二無我を証得できて、第七地以前の菩薩より優れている。したがって、「菩薩のみは法無我を証得できるが、声聞と独覚は単に人無我を証得する」というバーヴィヴェーカの三乗理解と違って、声聞と独覚に「法無我を完全に修習することは無く、三界で享受する煩悩を断じる方便だけがある」*36としても、声聞独覚は法無我を完全に証得しないのではない*37。そのため、チャンドラキールティの大乗と小乗理解は次のようにまとめられる。

	声聞と独覚	第七地以前の菩薩	第七地とその以上の菩薩
人無我	√	√	√√
法無我	√	√	√√

表1.2 チャンドラキールティによる大小乗理解

有部を代表とする上座系の声聞たちは原始仏教以来の無我説を継承し、原子論や元素論等の実在論哲学に立脚し、五蘊以外に常住・単一・認識主体であるアートマンや pudgala を否定する。有部はさらに原始仏教以来の「十二因縁」説を胎生学的に解釈し、人無我を論証するための理論として十二因縁を唱える。また、有部は「三世実有、法体恒有」の理論を提示し、上座系宗派の実在論を一極に押し付けるので、大乗仏教に重視された法無我を完全に認めない*38。したがって、有部等の部派には、十二因縁は人無我だけを論証するための理論であるが、法無我を論証するものではない。しかし、上述のようなチャン

*36 『入中論』6.179ab 自註：chos kyi bdag med pa yongs su rdzogs par sgom pa med de | khams gsum na spyod pa'i nyon mongs pa spong ba'i thabs tsam zhig ni yod do || chos kyi bdag med pa yongs su rdzogs par sgom pa med de | khams gsum na spyod pa'i nyon mongs pa spong ba'i thabs tsam zhig ni yod do || de La Vallée Poussin (1912: 302)=D no.3862, 313a7。

*37 声聞と独覚が二無我を証得できるとするチャンドラキールティの三理証と五教証について、さらに李学竹 (2009: 183-193) を参照。また、池田 (2000: 395-392) と池田 (2003: 27-35) は「チャンドラキールティにおいて声聞独覚の法無我理解が可能になったのは、彼が「所知障 (jñeyāvaraṇa)」の語義解釈を従来の tatpuruṣa から karmadhāraya に変更したためである」という仮説を提出し、ツォンカパの *gSer phreng* と *Lam rim* を根拠としてこの仮説を補強する。

*38 有部の『阿毘達磨大毘婆沙論』は苦・空・無我を論じる際、次のことを説く。
「謂空行相義不決定、以一切法有義故、空約他性故。有義故、不空約自性故、非我行相無不決定。以約自他俱無我故。由此尊者世友説言、我不定説諸法皆空、定説一切法皆無我。」 『大毘婆沙論』巻九 (T1545.27.45a28-b3)
【訳】曰く、空行相 (*śūnyatākāra) という義は決定しない。一切法は存在するという義のゆえに、空は他性に関するゆえに。［一切法は］存在するという義のゆえに、不空は自性に関するゆえに、非我という行相は決定しないことがない。自［性］と他［性］に関してともに無我であるから。したがって、尊者世友

ドラキールティの声聞理解からみれば、声聞の十二因縁説は人無我だけではなく、法無我をも論証できるという理論上の要請があるだろう。一方、『因縁心論』と『稲竿経』にもとづいて、チャンドラキールティは十二因縁が空性である縁起にほかならないことを主張するので、声聞の十二因縁説を法無我を証得するための理論のように整える。

『中論』構成の話に戻ると、『青目注』と『無畏論』は「大乗の縁起＝不生不滅、小乗の縁起＝十二因縁」ということを基準として、『中論』を大乗部分と小乗部分に大別する。これらと異なって、チャンドラキールティは『中論』を大乗と小乗の部分に大別しない。彼は『十地経』を踏まえて、声聞が菩薩と同様に二無我を証得するという説を継承する上で、『因縁心論』と『稲竿経』にもとづいて、従来人無我のみを証明するために用いられた十二因縁を拡大解釈し、十二因縁が空性である縁起にほかならないと主張する。このように、チャンドラキールティは『中論』を二無我の視点に置くことによって、『中論』全体の整合性を図る。

1.4　ツォンカパの『中論』科段

ツォンカパによる『中論』の注釈書 *dDu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho zhes bya ba bzhug so*(略『正理海』) はツォンカパ全集 18 巻の ba 巻に収録されている。『正理海』の英訳 (Garfield, 2006) と和訳 (奥山, 2014) の全訳は近年次第に出版されてきた。両全訳および長尾 (1978: 321-340) のいずれもツォンカパによる『中論』科段を詳しく示している。この科段の大網は次のようである。

正文の意味 (gzhung gyi don, 全二十七品)

1. 極端を離れた縁起を教える点から教主を賛美すること (ston pa la rten 'byung mtha' bral du gsung ba'i sgo nas bstod pa, 帰敬二偈)
2. 八つの極端を離れた縁起の解釈内容 (rten 'byung mtha' brgyad dang bral bar 'grel ba'i tshul, 『中論』1.1-27.29)
   - 2.1 章の正文を実践する次第を整理すること (rab byed kyi gzhung nyams len gyi rim par bsgrig pa)
   - 2.2 各章の正文の意味の解釈 (rab byed kyi gzhung so so'i don bshad pa, 『中論』1.1-27.29)
     - 2.2.1 縁起が自性を欠くとの説明 (rten 'byung rang bzhin gyis stong par bstan pa, 『中論』Chap.1-25)
       - a. 中心の意味 (dngos kyi don, 『中論』Chap.1-23)
         - i. 二無我による略説 (bdag med gnyis mdor bstan pa, 『中論』Chap.1-2)
           - A. 法無我 (『中論』Chap.1)
           - B. 人無我 (『中論』Chap.2)

(Vasumitra) は「私は諸法は皆空であると定説せず、一切法は皆無我であると定説する」と述べた。

四諦十六行相における「無常・苦・空・無我」の「空」は中観派に提唱された「無自性」たる「空」ではない。上述の説明によると、他性の点で空であるが、自性は存在する。「一切法皆無我」とは、自性と他性において常住な霊魂たる ātman は存在しないという意味である。中観派乃至大乗仏教の法無我と異なる。

ii. 二無我による広説 (bdag med gnyis rgyas par bshad pa, 『中論』Chap.3-23)

A. 法と人を区別して説くこと (『中論』Chap.3-12)

B. 事物の自性が空であると説くこと (『中論』Chap.13-17)

C. 無我の真実義に悟入する仕方 (『中論』Chap.18)

D. 時間が自性空であると説くこと (『中論』Chap.19-21)

E. 生存の相続が自性空であると説くこと (『中論』Chap.22-23)

b. それに対する論難を断ずること (de la rtsod pa spang ba, 『中論』Chap.24-25)

2.2.2 縁起を証得するか否かによって輪廻の生起と還滅の仕方 (rten ’byung rtogs ma rtogs las ’khor ba’i ’jug ldog skyed lugs, 『中論』26)

2.2.3 縁起を証得するならば、悪見を除く方法 (rten ’byung rtogs na lta ba ngan pa ldog tshul, 『中論』27.1-27.29)

3. 教主の恩情を憶念する敬礼 (ston pa’i bka’ drin rjes su dran pa’i phyag, 『中論』27.30)

ツォンカパ自身によって付加された「序論」と「結論」を除いて、『中論』は主に三つの部分、つまり「帰敬二偈」・「縁起の解釈内容」・「敬礼」からなる。ツォンカパは対機説法と仏法衰退の思想を踏まえた青目・吉蔵の科段と全然違うアプローチを示している。長尾 (1978: 329) はツォンカパの科段の特色について、次のように説く。

> この中論二十七品を縁起、特に二無我を以て解決せんとし、その略説に於いても広説に於いても常に法無我、人無我の順序を以て考え、殊に最初の二品をこの法と人との二無我に配当する如きは、少なくとも直接月称『中論釈』に求められるものではないようである。［中略］宗喀巴の功績とせねばならない。

また、ツォンカパの科段によると、『中論』各章の意図は次のように整理できる。
㊫の記号：法無我；㊥の記号：人無我

㊫ 1. Pratyayaparīkṣā	内外の法の生起を否定する
㊥ 2. Gatāgatagamyamānaparīkṣā	前世から今世に、今世から来世に行くものの否定
㊫ 3. Āyatanaparīkṣā	処が自性として存在することの否定
㊫ 4. Skandhaparīkṣā	蘊が自性として存在することの否定
㊫ 5. Dhātuparīkṣā	界が自性として存在することの否定
㊫ 6. Rāgaraktaparīkṣā	処蘊界の拠り所である貪欲に自性が存在することの否定
㊫ 7. Utpādasthitibhaṅgaparīkṣā	有為相である生住滅に自性が存在することの否定
㊫㊥ 8. Karmakārakaparīkṣā	有為の原因である業と作者に自性が存在することの否定 (法無我と人無我の結びつけ)

㊝ 9. Upādātrupādānaparīkṣā	「自性がないなら、取者もありえない」と思うことの否定
㊝ 10. Agnīndhanaparīkṣā	取者を論証するための喩例の否定
㊝ 11. Saṃsāraparīkṣā	輪廻が存在するから輪廻する人が存在するという証因の否定
㊝ 12. Duḥkhaparīkṣā	苦が存在するから苦しんでいる我が存在するという証因の否定
�法㊝ 13. Tattvapaīkṣā	人と法を区別せずに、単なる事物が自性空である
�法㊝ 14. Saṃsargaparīkṣā	事物が自性によって存在することの論証手段 saṃsarga の否定
�法㊝ 15. Bhāvābhāvaparīkṣā	因と縁を受け取ることが自性によって存在することの否定
�法㊝ 16. Bandhanamokṣaparīkṣā	繫縛と解脱が自性によって存在することの否定
�法㊝ 17. Karmaphalaparīkṣā	繫縛と解脱が自性によって成立することの論証手段の否定
�法㊝ 18. Ātmadharmaparīkṣā	二無我の真実義
�法㊝ 19. Kālaparīkṣā	自性があることの論証手段としての時間の否定
�法㊝ 20. Hetuparīkṣā	時間は果が生じる俱有縁であることの否定
�法㊝ 21. Saṃbhavavibhavaparīkṣā	時間は果が生じ滅する因であることの否定
�法㊝ 22. Tathāgataparīkṣā	如来が自性有であることの否定
�法㊝ 23. Viparyāsaparīkṣā	転倒が自性有であることの否定
�法㊝ 24. Āryasatyaparīkṣā	「諸法が自性空であるならば、四諦は認められない」という論難の応答
�法㊝ 25. Nirvāṇaparīkṣā	「諸法が自性空であるならば、涅槃は認められない」という論難の応答
�法㊝ 26. Dvādaśāṅgaparīkṣā	24 章に説かれた縁起の説明
�法㊝ 27. Dṛṣṭiparīkṣā	縁起の真実義を見れば、邪見を排除すること

以上のように、ツォンカパは二無我説を眼目として、そもそも組織性が欠くような『中論』全体の構造を理解する上で、重要な手がかりを示唆している。現代の学者もツォンカパのこの二無我説で『中論』に科段を設ける仕方を高く評価する[*39]。だが、ツ

[*39] 長尾 (1978: 329)、桂 (2013: 902-894) を参照。

ォンカパの科段には無理、強引な点も決して看過できない。例えば、『中論』第二章「Gatāgatagamyamānaparīkṣā」に関して、ツォンカパはこれが人無我のみに当てはまり、前世・現世・来世に行き渡る輪廻主体を否定するものであると理解する。しかし、同章全体から見れば、輪廻主体のみならず、自性を持つすべての法は移動できないことを論証する章とみてよい。すなわち、『中論』第 2 章は「八不」偈[*40]のうちの「不来、不去」(anāgamam anirgamam) の説明に当てはまるものである[*41]。ツォンカパがこの第二章を人無我のみに当てはめたのはおそらく第一章と第二章をそれぞれ法無我と人無我に対応させるためであろう。

1.5 小結

『青目注』と『無畏論』は「大乗の縁起＝不生不滅、小乗の縁起＝十二因縁」ということを基準として、『中論』を大乗教説と小乗教説に大別し、それぞれ三段科段と二段科段の科段体系を設ける。『青目注』と『無異論』の『中論』科段からみれば、『中論』第 25 章「観涅槃品」は大乗向けの教説に相当する前 25 章の終わりである。また、『中論』25.24 頌が帰敬偈と呼応することと、同論書の第 26-27 章に典型的な中観派の術語が見られないことは、『中論』25.24 頌が少なくとも前 25 章の結論に相当することを暗示する。そのため、『中論』自身と最初期の『中論』注釈書はともに似ている『中論』の構成理解を示すから、この構成理解は古いものであろう。

三論宗の祖とされる吉蔵は『青目注』の科段を継承する一方、『法華経』等の経典影響の下で、三段科段をそれぞれ『法華経』にもとづいた三転法輪に配当する。つまり、最初の二十五品は根本法輪、第二十六品と第二十七品の前 28 偈は枝末法輪、最後の 2 偈は摂末帰本法輪に相当すると位置づけられる。このように、吉蔵の科段によれば、『中論』第 25 章は「破大乗迷失、明大乗観行」を目的とする前 25 章の終わりである。形式上、このような構成理解は『中論』自身の構成および『青目注』の科段に由来するが、思想上、『法華経』との関連性は看過できない。

チャンドラキールティは『中論』の構成について、科段を設けない。最初期の『中論』注釈書で小乗の教説と認められた十二因縁はチャンドラキールティの理解の中で一変して二無我をともに説明する理論になる。さらに、彼は『十地経』等の大乗経典に影響され、声聞・独覚が菩薩と同様に二無我を証得できることを主張する。このような十二因縁と大小乗の理解にもとづいて、チャンドラキールティは『中論』第 26 章以降の内容を小乗

---

*40 anirodham anutpādam anucchedam aśāśvatam |
anekārtham anānārtham anāgamam anirgamam || (叶少勇, 2011b: 12)

*41 チャンドラキールティは『プラサンナパダ —』において、明確に『中論』第二章を八不偈における「不来、不去」の説明と見なしている。例えば、
“atrāha | yady apy utpādapratiṣedhāt pratītyasamutpādasyānirodhādiviśeṣaṇasiddhiḥ, tathāpy anāgamānirgamapratītyasamutpādasiddhaye lokaprasiddhagamanāgamanakriyāpratiṣedhārthaṃ kiṃcid upapattyantaram ucyatām iti || ucyate | yadi gamanaṃ nāma syān niyataṃ tad gate vā ’dhvajāte parikalpyetāgate gamyamāne vā | sarvathā ca na yujyata ity āha |”PsP Chap.2(de La Vallée Poussin, 1903-13: 92)

教説と見なす最初期の『中論』注釈書と異なり、『中論』全体の整合性を二無我に求める。

チャンドラキールティの影響を受けるゲルク派の開祖であったツォンカパはさらに二無我説を眼目として、『中論』の各章を法無我や人無我のいずれに配当し、科段を施す。

そのため、『中論』第 25 章「観涅槃品」の位置づけについて、各注釈者の理解は次のようにまとめられる。

1. 『青目注』・『無畏論』・吉蔵は「観涅槃品」を大乗教説の終わりと見なす。この構成理解は最初期の『中論』注釈書に遡れるので、中観派の古説であろう。
2. チャンドラキールテとツォンカパは『中論』の整合性を二無我に求めている。「観涅槃品」は大乗教説の終わりではなく、二無我の証得に導くものである。

第 2 章

チャンドラキールティの涅槃観

涅槃 (nirvāṇa, nibbāna) は仏教徒の究極の目的である。涅槃に対する考察は原始仏教からはじまる。『阿含経』と *Nikāya* はすでに涅槃を有余依涅槃と無余依涅槃の二種類に分けている。部派仏教に入ると、涅槃に対する考え方は学派ごとに大きく異なる。例えば、伝統的には、説一切有部は涅槃というものを三無為の一つとして数え、涅槃が択力 (pratisaṃkhyābala) によって得られた択滅 (pratisaṃkhyānirodha) であると解釈する。それに対して、中観派の祖とされる龍樹 (Nāgārjuna) は『中論』第 25 章「観涅槃品」において四句分別論法を用い、涅槃を実体視する諸見解を論駁する。最終的に、彼は、涅槃は輪廻といかなる区別もないという「生死即涅槃」を宣揚し、仏の涅槃が「戯論寂静」にほかならないと提唱している。『中論』注釈者としてのチャンドラキールティは『プラサンナパダー』の中で、龍樹から「生死即涅槃」と「戯論寂静」の涅槃観を継承する一方、『中論』に見られない彼独自の理解を示す。チャンドラキールティは『中論』25.1 の注釈の中で、原始仏教以来の有余依涅槃と無余依涅槃の分類を受け取る上で、この二種類の涅槃をアートマン批判と関係づける。また、チャンドラキールティは『入中論』(*Madhyamakāvatāra*) と自註 (同 *Bhāṣya*) の中で如来は悲によって涅槃に住しないという「無住処涅槃」説を積極的に提唱する。この「無住処涅槃」説は同様に『中論』に見られないものであり、チャンドラキールティの涅槃観の一側面である。そこで、本章は有余依涅槃と無余依涅槃、「生死即涅槃」、「戯論寂静」、「無住処涅槃」という四節を設け、チャンドラキールティの涅槃観を考察する。

2.1　有余依涅槃と無余依涅槃

チャンドラキールティは『中論』25.1 の注釈の中で、有余依涅槃 (sopadhiśeṣanirvāṇa) と無余依涅槃 (nirupadhiśeṣanirvāṇa) という二種類の涅槃を伝統説として、一旦受け容れている。

> iha hi bhagavatā uṣitabrahmacaryāṇāṃ tathāgataśāsanapratipannānāṃ dharmānudharmapratipattiyuktānāṃ pudgalānāṃ dvividhaṃ nirvāṇam upavarṇitaṃ sopadhiśeṣaṃ nirupadhiśeṣaṃ

ca || PsP Chap.25*1

【訳】実に、この世の中で、梵行に住し、如来の教えを理解し、法にかなったあり方で実践することを備えた人々にとって、二種類の涅槃、［即ち］、有余依（拠り所という残余を持つ涅槃）と無余依（拠り所という残余を離れた涅槃）とがある、と世尊によって説明された。

sopadhiśeṣanirvāṇa と nir/anupadhiśeṣanirvāṇa はいわゆる仏教梵語であり、パーリ語ではそれぞれ sopādisesanibbāna と anupādisesanibbāna に対応する。Hwang (2006: 16) によれば、パーリ語の upādi は upādāna の同義語であり、upa-ā-√dā 動詞語根の派生語である。また、upādāna という語は、“objective”と“subjective”の二つの意味を持っている。そのうち、“objective”の意味は“fuel, supply, provision, that material substratum by means of which an active process is kept alive or going” である。“subjective”の意味は、“drawing upon, grasping, holding on grip, attachment, in the sense that a fire clings to fuel in order to keep burning” である。

Gombrich (2006: 66-68) はパーリ仏典を中心に、火と火の滅 (涅槃) の譬喩表現を考察する。同研究によれば、婆羅門家主は家に三つの火の燃えることを保つ義務があったので、仏教の中でこの三火は世俗生活を象徴する。また、upādāna-kkhandha は三火の比喩の中で、火の燃料・薪に当てはまる。そのため、sa-upādi-sesa はこの三火の比喩と関連し、火は滅するが、薪はまだ残っているという意味で、有余依涅槃の状態を表す。すなわち、この譬喩表現は次のようにまとめられる。

三つの火	火の滅	残った薪
貪瞋痴	涅槃	五取蘊

表2.1　火と涅槃の譬喩表現

もし上述のGombrich (2006: 66-68) の指摘が正しいとすると、パーリ仏教の中で sopādisesanibbāna の元来の意味は「余った薪を持つ［火の］滅」であり、anupādisesanibbāna は「余った薪を持たない［火の］滅」である。

それに対して、仏教梵語に見られた upadhi は別の動詞語根 *upa-√dhā* の派生語である。Norman (1993: 161) によると、upadhi は同時に「集められたもの」と「愛、執着」という二つの意味を持っている*2。つまり、upadhi は upādi と同様に対象と主体の二つの側面を持つ*3。

*1 本論の校訂本の143ページを参照。

*2 “The *upadhi*s are objects which one amasses: they are also the love and affection which one has for such things, which form an attachment and lead one back to rebirth. The word is, therefore, very often translated as “substrate (of renewed existence)”, and also as “affection”.”Norman (1993: 161) を参照。

*3 Norman (1993: 215) は upādi と upadhi の語義を考察する上で、さらに、次の解釈を説く。
“If we are to believe that these two phrases(注：upādi と upadhi) must originally have had the same meaning, then it is not impossible that the original form was **upādhiśeṣa* (or **upātiśeṣa*, with a replacement of *adhi-* by *ati-*, and the subsequent voicing of *-t-* to *-d-*). The Sanskrit form with short *-a-* would indicate a confusion with upadhi, which perhaps had its origin in the written form of the language before long vowels were written. Its meaning is, then, not “with a remainder of clinging”, but “with a remainder (of something unexpressed, perhaps of life or of kamma)”.”

一方、この二種類の涅槃について、説一切有部の根本文献『発智論』*4は次のように語る。

「如契經説、有二涅槃界、謂有餘依涅槃界、及無餘依涅槃界。云何有餘依涅槃界？答、若阿羅漢、諸漏永盡、壽命猶存、大種造色、相續未斷、依五根身、心相續轉、有餘依故、諸結永盡、得獲觸證、名有餘依涅槃界。云何無餘依涅槃界？答、即阿羅漢、諸漏永盡、壽命已滅、大種造色、相續已斷、依五根身、心不復轉、無餘依故、諸結永盡、名無餘依涅槃界。」　『阿毘達磨發智論』巻二 (T1544.26.923b12-19)

【訳】例えば、契經は「二つの涅槃界がある。すなわち、有余依涅槃界および無余依涅槃界である。」と説く。「有余依涅槃界」とは何か？答える。「もし阿羅漢にして、諸漏が永遠に尽き、寿命がまだあり、大種所造の色の相続が未だ断たれず、五根たちに依拠して心相続が転じ、残余の拠り所があるので、諸結が永遠に尽き、証得に触れることを得るならば、有余依涅槃界と名づけられる。」「無余依涅槃界」とは何か？答える。「もし阿羅漢にして、諸漏が永遠に尽き、寿命がすでに滅し、大種所造の色の相続がすでに断ち、五根たちに依拠して心［相続］が再び転じることはなく、残余の拠り所がないので、諸結が永遠に尽きるならば、無余依涅槃界と名づけられる。」

同論の注釈書『阿毘達磨大毘婆沙論』によれば、有余依涅槃の阿羅漢には「生身依」があるが、無余依涅槃の阿羅漢には「生身依」がない*5。この「生身依」は『発智論』に説かれた「大種造色＝色身」・「五根」・「心相続＝心心所」*6 の三つである。この説明によると、「有/無余依涅槃」の「依」(upadhi) は色身・五根・心心所からなる生身である。有余依涅槃の阿羅漢にとっては、この生身は拠り所である。無余依涅槃の阿羅漢にとっては、生身さえもなくなる。『発智論』と『大毘婆沙論』にもとづいて、upadhi の意味について、次のようにまとめられる。

1. upadhi は拠り所を意味する。
2. upadhi は色身・五根・心心所からなる生身である。

---

*4 ここでは、説一切有部の論書を例として挙げるのは、『中論』および『プラサナパダー』に批判された実在論が説一切有部の教義と近いためである。例えば、『中論』1.3 は hetu, ālambaṇa, anantara, adhipateya の四縁に言及する。これは有部の四縁説と一致する。同論第 7 章「観三相品」は生・住・滅の三有為相を否定する。この三有為相は有部の古い宗義である。

*5 「有餘依故者、依有二種、一煩惱依、二生身依、此阿羅漢雖無煩惱依、而有生身依。［中略］無餘依故者、無二種依、一無煩惱依、二無生身依。」　『阿毘達磨大毘婆沙論』巻三十二 (T1545.27.168a1-3; a24-25)

【訳】「残余の拠り所があるので」という。拠り所は二種類である。一に煩悩という拠り所、二に生身という拠り所である。この阿羅漢は煩悩という拠り所を持たないが、生身という拠り所を持つ。［中略］「残余の拠り所がなにので」という。二種類の拠り所はない。一に煩悩という拠り所はない。二に生身という拠り所はない。

*6 「此中偏説大種造色者、總顯色身。依五根身心相續者、顯心心所。」　『阿毘達磨大毘婆沙論』巻三十二 (T1545.27.167c23-24)

【訳】こ［の『発智論』］の中で、偏に「大種造色」を説くのは、総じて色身を顕す。「五根たちに依拠して心相續［が転じる］というのは、心と心所を顕す。」

これに対して、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』の中で、次のように説明する。

> tatropadhīyate ’sminn ātmasneha ity upadhiḥ | upadhiśabdenātmaprajñaptinimittāḥ pañcopādānaskandhā ucyante | śiṣyata iti śeṣaḥ | upadhir eva śeṣa upadhiśeṣaḥ |
> 【訳】その［有余依という語の］中で、アートマンへの愛着がこれに依拠する（upadhīyate）ので、［これが］「拠り所」（upadhi）である。「拠り所」（upadhi）という語によって、アートマンを仮設する根拠である五取蘊が述べられる。［拠り所が］残されているので、残余（śeṣa）である。「拠り所」そのものが「残余」であり、拠り所という残余（upadhiśeṣa）である。

この中で、まず、upadhi はアートマンへの愛着の拠り所である五取蘊と解釈される。また、「拠り所そのものが残余であり、拠り所という残余である」という説明は、upadhiśeṣa が Karmadhāraya 複合語であると示す。五取蘊はアートマンへの愛着 (ātmasneha) の拠り所であるという。同様の趣旨から、『プラサンナパダー』第 18 章ではまた、アートマンへの愛着は「我・我所の存在への愛着」(ātmātmīyabhāvasneha)[*7]、すなわち我執 (ahaṃkāra) と我所執 (mamakāra) の二つであると説明される。有余依涅槃の段階では、アートマンへの愛着（我執・我所執）がすでに取り除かれたとしても、その拠り所である五取蘊はまだ残余として残っている。upadhiśeṣa について、チャンドラキールティの理解は次のようにまとめられる。

1. upadhi は拠り所を意味する。
2. upadhi は五取蘊である。
3. upadhi に依存するのはアートマンへの愛着である。

チャンドラキールティの理解は先に言及した『発智論』の説明と異なる。チャンドラキールティによれば、アートマン（我）は五蘊を質料因 (upādāna) [*8]として仮設された名前のみ (nāmamātraka) [*9]であり、空性修行の中で我執と我所執との両者が捨てられることによ

[*7] ye tu sadbhūtātmadṛṣṭikaṭhinātidīrghatar**ātmātmīyasneha**sūtrakāvabaddhā vihaṃgamā iva sudūram api gatāḥ kuśalakarmakāriṇo ’kuśalakarmapathavyāvṛttyā api na śaknuvanti traidhātukabhavopapattim ativāhya śivam ajaram amaraṇaṃ nirvāṇapuram abhigantum …(新作, 2015: 125)
【訳】一方、堅固で非常に長い糸に縛られた諸々の鳥が非常に遠い処に行っても［城に到達できない］ように、アートマンが実在するという見解、すなわち、我・我所への愛着に［縛られ］、善業をなす人々は、不善業道から離れても、三界の存在における受生（upapatti）を越えて吉祥な不老不死の涅槃城に到達できない。

[*8] “upādāya prajñapyamāna eva tv avidyāviparyāsānugatānām ātmābhiniveśāspadabhūto mumukṣubhir vicāryate, yasyedaṃ skandhapañcakam **upādānatvena** pratibhāsate, kim asau skandhalakṣaṇa utāskandhalakṣaṇa iti | sarvathā ca vicārayanto mumukṣavo nainam upalabhante bhāvasvabhāvataḥ |”PsP Chap.18(新作, 2015: 115)
【訳】一方、［五取蘊に］依拠して施設されているものにほかならず、無明という転倒を備えた人々にとって、アートマンに対する執着の拠り所になった［アートマン］は、解脱しようと望む人々によって［次のように］考察される。「この五蘊が何らかのものの質料因として顕現するならば、それは蘊の特徴を持つものであるか、或いは蘊の特徴を持たないものであるか。」と。しかし、あるゆる点で考察しており、解脱しようと望む人々は、存在物の自性からこ［のアートマン］を認識しない。

[*9] “kiṃ tarhi yathāvadupādāyaprajñaptyarthānavagamena nāmamātrakam evātmānaṃ trāsād apratipadyamānāḥ saṃvṛti-

って、有身見乃至すべての煩悩が滅することになり、最後に解脱する[*10]。このような無我を証得する解脱者は身体が残っている限りに、有余依涅槃の境地にとどまる。したがって、upadhi を五取蘊に、upadhi に依存したものを ātmasneha と解釈する[*11]背景には、『中論』の第 18 章「観我/法品」に提唱された無我説と空性修行の思想が見られる。

また、無余依涅槃について、チャンドラキールティは次のように説く。

> yatra tu nirvāṇe skandhamātrakam api nāsti tan nirupadhiśeṣaṃ nirvāṇam | nirgata upadhiśeṣo ’sminn iti kṛtvā | nihatāśeṣacauragaṇasya grāmamātrasyāpi vināśasādharmyeṇa | [*12]
>
> 【訳】一方、ある涅槃に蘊のみさえも存在していないなら、それが無余依涅槃である。この［無余依涅槃］において、拠り所という残余が既に消えたというわけで、余すことのない一群の強盗が殺されたところの村のみさえも消滅したように、［無余依涅槃である］。

この譬喩表現は次のようにまとめられる。

村	強盗	村と強盗の消滅
五蘊	煩悩	無余依涅槃

表2.2　無余依涅槃の譬喩表現

すなわち、無余依涅槃を証得する阿羅漢には、煩悩だけではなく、五蘊さえも消える。

---

satyād api paribhraṣṭā mithyākalpanayaiva kevalam anumānābhāsamātravipralabdhāḥ santo mohāt parikalpayanty ātmānaṃ tasya ca lakṣaṇam ācakṣate |”PsP Chap.18(新作, 2015: 113)

【訳】しかし、［五取蘊に］依拠して施設することの対象を如実に了解しないことによって、恐怖心の故に、アートマンが名称のみをもつにほかならないと認識せず、世俗諦からも離れる。まさに誤った構想によって、単に疑似推論に過ぎないものによって欺かれており、痴の故に、アートマンを構想し、そ［のアートマン］の特徴を考察する。

[*10] “evaṃ yogino ’pi śūnyatādarśanāvasthā niravaśeṣaṃ skandhadhātvāyatanādisvarūpaṃ nopalabhante | na cānupalabhamānā vastusvarūpaṃ tadviṣayaṃ prapañcam avatārayanti | na cānavatārya tadviṣayaṃ prapañcaṃ vikalpam avatārayanti | na cānavatārya vikalpam ahaṃmametyabhiniveśāt satkāyadṛṣṭimūlakaṃ kleśagaṇam utpādayanti | na cānutpādya satkāyadṛṣṭyādikaṃ kleśagaṇaṃ karmāṇi kurvanti | na cākurvāṇāḥ jātijarāmaraṇākhyaṃ saṃsāram anubhavanti ||”PsP Chap.18(新作, 2015: 120)

【訳】同様に、空性見解に立つ諸々の瑜伽師も、すべての蘊・処・界等の本体を認識しない。そして、事物の本体を認識していない者たちは、そ［の事物の本体］を対象とする戯論に［自身を］入らせない。そして、それを対象とする戯論に［自身を］入らせず、分別に［自身を］入らせない。そして、分別に［自身を］入らせず、「我」・「我所」という執着にもとづいて、有身見を根本とする一群の煩悩を生起させない。そして、有身見を根本とする一群の煩悩を生起させず、諸々の業を作らない。また、［業を］作っていない者たちは、生・老死という輪廻を経験しない。

[*11] 有余涅槃の段階で聖者に残るものが五蘊であると解釈することは『大智度論』にも窺える。

「有涅槃是第一寶、無上法、是有二種。一者有餘涅槃、二無餘涅槃。愛等諸煩惱斷、是名有餘涅槃。聖人今世所受五衆盡、更不復受、是名無餘涅槃。」　『大智度論』巻三十一 (T1509.25.288c4-7)

【訳】涅槃は第一の宝であり、無上な法である。これは二種類がある。一は有余涅槃であり、二は無余涅槃である。愛等の諸煩悩を断ずる［ならば］、有余涅槃と名付けられる。今世で聖者に受けられた五衆［＝五蘊］が尽きて、更に受けられない［ならば］、無余涅槃と名付けられる。

補足：『大智度論』は pañcaskandha(ka) を「五衆」と訳することが通例である。そのため、『大智度論』によると、有余涅槃の聖者に残るものは五蘊であることになる。この点で『大智度論』の説はチャンドラキールティと一致する。

[*12] 本論の校訂本の143ページを参照。

以上のように、チャンドラキールティは原始仏教以来の「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の区別を継承するが、upadhi を五蘊、upadhi に依拠したものを ātmasneha と定義する。『プラサンナパダー』第 18 章はさらにアートマンが五取蘊に依拠して施設されるものであるという原理および空性修行の中で我執と我所執の滅を詳しく論じる。このように、原始仏教以来の二種類の涅槃は『プラサンナパダー』の中で、我執・我所執の煩悩と空性修行と関係づけられるので、理論的整合性が窺える。

2.2　生死即涅槃

「生死即涅槃」と「煩悩即菩提」の二句は中国仏教の各宗派において重視され、生死と涅槃、煩悩と菩提との区別にこだわった小乗仏教を批判するために提示したスローガンである*13。このうち、「生死即涅槃」説は『中論』第 25 章「観涅槃品」第 19-20 偈と深く関連している。

> na saṃsārasya nirvāṇāt kiñcid asti viśeṣaṇam |
> na nirvāṇasya saṃsārāt kiñcid asti viśeṣaṇam || MMK 25.19
> nirvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca |
> na tayor antaraṃ kiñcit susūkṣmam api vidyate || MMK 25.20
> 【訳】輪廻には涅槃とのいかなる区別もない。涅槃には輪廻とのいかなる区別もない。
> 涅槃の究極と輪廻の究極、それらの二者にはいかなる微細な隔たりもない。

この二偈に対して、『青目注』*14 と『無畏論』*15 によれば、輪廻は五蘊の相続に依拠して施設されるものである。前節で言及したように、煩悩と五蘊の滅に依拠して、二種類の涅槃が施設される。五蘊を含める一切法は本来不生不滅であり、平等である。それらに依拠して施設される輪廻と涅槃は無区別になると説明される。この説明からみれば、『青目注』と『無畏論』は施設・仮説 (*prajñapti) の視点から「生死即涅槃」を論じることがわかる。

それらに対して、チャンドラキールティは『プラサンナパダ —』には次のように説明

---

*13 「生死即涅槃」一句の成立について、高崎 (2009b: 531-549) を参照。この研究は、各種の仏教辞典の記事を手掛かりとして、『智度論』、『中論』、『寶積経』、『摂大乗論』、『大乗荘厳経論』等の経論における生死即涅槃の用例を考察する。同研究によると、「生死即涅槃」一句の原典は経論ごとに異なる。

*14 「五陰相續、往來因緣故、説名世間。五陰性畢竟空、無受寂滅、此義先已説。以一切法不生不滅故、世間與涅槃無有分別、涅槃與世間亦無分別。」(T1564.30.36a6-9)
【訳】五蘊が相続し、往来するという因縁のゆえに、世間と名付けられる。五蘊の性質は畢竟空にして、寂滅を受けない。この義は先にすでに説かれた。一切法は不生不滅のゆえに、世間と涅槃は区別を持たず、涅槃と世間はまた区別を持たない。

*15 ’di la phung po’i rgyun la brten nas ’khor ba zhes gdags na | phung po de dag ni ngo bo nyid kyis stong pa’i phyir ji ltar gtan skye ba med pa dang | ’gag pa med pa’i chos can yin pa de ltar kho bos dang po kho nar bstan zin pas | de’i phyir chos thams cad skye ba med pa dang | ’gag pa med pa mnyam pa nyid kyis ’khor ba ni mya ngan las ’das pa las khyad par cung zad kyang yod pa ma yin no || ABh(安井, 2015: vol.2,214)
【訳】このうち、蘊の連続に依拠して、「輪廻」と施設するとき、それらの蘊は自性に関して空であるので、常に不生・不滅の性質を持つものであるように、私は最初に既に示したので、それゆえに不生・不滅の一切法が平等であるので、輪廻は涅槃と少しの区別もない。

している。

> yasmāt tiṣṭhann api bhagavān bhavatīty evamādinā nājyate | parinirvṛto ʼpi nājyate bhavatīty evamādinā | ata eva saṃsāranirvāṇayoḥ parasparato nāsti kaścid viśeṣo vicāryamāṇayos tulyarūpatvāt | PsP Chap.25
> 【訳】なぜなら、現に住していても世尊が存在する云々によって表現されない。既に完全に滅したとしても、［如来が］存在する云々によって表現されない。まさに、それゆえ、輪廻と涅槃との両者には、互いにいかなる区別もない。考察されている両者が等しい形を持つものであるから。

『中論』第 25 章の文脈からみれば、『中論』25.3-16 偈は空性論の立場にもとづいて、四句分別論法を用い、涅槃そのものを如何にしても把捉できないと説明するが、同章の 17-18 二偈は涅槃の証得者さえも把捉できないことを述べている。「生死即涅槃」説を唱えた『中論』25.19-20 二偈は同章直前の内容の結論に当てはまるものである。涅槃と涅槃者はいかなる仕方でも把捉できないので、「輪廻 → 涅槃」の過程も成立できなくなる。また、チャンドラキールティは輪廻と涅槃との無区別を「等しい形」に求めている。『プラサンナパダ —』第 25 章はこの「等しい形」を詳しく説明していないが、同論の第 16 章と『六十頌如理論注』(*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*) は、二諦説の視点から生死即涅槃の理を述べている。

岸根 (2001c: 1761-1782) に指摘されたように、『入中論』において、チャンドラキールティは凡夫と聖者の区別を出発点として、二諦説を説く。その場合、凡夫の認識対象は世俗諦であり、聖者の認識対象は勝義諦であると定義されている[*16]。このような勝義諦においては、涅槃の獲得および輪廻を尽くすことはともにありえない。これについて、『プラサナパダー』第 16 章は次のように説く。

> yatra hi nāma paramārthasatye **naiva** nirvāṇasamāropo na **ca** nirvāṇādhyāropaḥ saṃbhavati, anupalabhyāmānatvāt | nāpi saṃsārāpakarṣaṇaṃ saṃsāraparikṣayo na saṃbhavati | kas tatra saṃsāro [yo] vikalpyate kṣayārthaṃ kiṃ vā tatra nirvāṇaṃ yat prāptyarthaṃ vikalpyate || [*17]
> 【訳】なぜなら、勝義諦において、涅槃の増益、つまり涅槃の不当肯定は決してありえない。認識されていないから。輪廻の損減（不当否定）、つまり輪廻を滅尽することもありえない。そ［の勝義諦］において、［それを］尽くすために分別される輪廻は何か？あるいはまた、そ［の勝義諦］において、［それを］得るために分別される涅槃は何か？

勝義諦において、つまり勝義諦の証得の時、すべての言語表現と認識が寂滅し、すべての

[*16] samyagdṛśāṃ yo viṣayaḥ sa tattvaṃ mṛṣādṛśāṃ saṃvṛtisatyam uktam || MA 6.23cd(Li, 2015: 7)
【訳】正しく見る者の対象が［勝義］真実である。誤って見る者の［対象］が世俗諦と言われる。

[*17] de La Vallée Poussin の校訂本とde Jong (1978: 219) にもとづいた訂正である。de La Vallée Poussin の校訂本の読みは以下の通り。
yatra hi nāma paramārthasatye **naiva na** nirvāṇasamāropo na nirvāṇādhyāropaḥ saṃbhavati, anupalabhyāmānatvāt | nāpi saṃsārāpakarṣaṇaṃ saṃsāraparikṣayo na saṃbhavati | kas tatra saṃsāro [yo] vikalpyate kṣayārthaṃ kiṃ vā tatra nirvāṇaṃ yat prāptyarthaṃ vikalpyate || PsP(de La Vallée Poussin, 1903-13: 299)

戯論を超える[*18]ので、言語表現の対象と所知としての涅槃および輪廻も寂滅し[*19]、涅槃を増益することと輪廻を損減することはともにありえなくなる。したがって、輪廻も涅槃も勝義を対象とする聖者の対象ではない。

『六十頌如理論注』の中で、チャンドラキールティはさらにこの両者がともに世俗諦であると規定する。

> ci mya ngan las ’das pa yang kun rdzob kyi bden pa yin nam | de de bzhin te | ’khor bar yongs su rtog pa yod na mya ngan las ’das par yongs su rtog ste | de gnyi ga yang ’jig rten gyi tha snyad yin pa’i phyir ro || YṢV(D no.3864, 7b3-4)
>
> 【訳】［反論者：］涅槃も世俗諦であるのか？［チャンドラキールティ：］それはその通りである。輪廻に対する構想 (*parikalpanā) があるならば、涅槃に対して構想する。その二者とも世間的な言語表現 (*laukikaṃ vyavahāram[*20]) であるから。

この説明は『六十頌如理論』第 5 頌の注釈に見られる。同論の第 5 頌は次のように輪廻と涅槃を説く。

> nirvāṇaṃ caiva lokaṃ ca manyante ’tattvadarśinaḥ |
> naiva lokaṃ na nirvāṇaṃ manyante tattvadarśinaḥ || YṢ(李学竹・叶少勇, 2014: 12)
>
> 【訳】真実を見ない人々は涅槃と世間を考える。真実を見る人々は世間も涅槃も考えない。

この偈頌は直接的に二諦説を説かないが、チャンドラキールティは注釈の中で、真実を見ない人々と真実を見る人々をそれぞれ凡夫 (byis pa’i skye bo) と聖者 (’phags pa) と解釈する。また、真実を見ない世人は、輪廻は所対治（mi mthun pa’i phyogs, *vipakṣa）であり、涅槃は能対治 (gnyen po, *pratipakṣa) であると構想するが、聖者はこの両者を構想しない[*21]。直前に触れたように、チャンドラキールティの二諦説によると、「真実を見ない世

[*18] “kutas tatra paramārthe vācāṃ pravṛttiḥ kuto vā jñānasya | sa hi paramārtho ’parapratyayaḥ śāntaḥ pratyātmavedya āryāṇāṃ sarvaprapañcātītaḥ |”PsP Chap.24(de La Vallée Poussin, 1903-13: 493)
【訳】この勝義において、何故、語あるいは認識の働きがあるのか。なぜなら、聖者たちにとって、勝義は他のものに依拠せず、寂静であり、自内証であり、すべての戯論を超えるものである。

[*19] 「心の活動 → 相 (= 所知 = 言語表現の対象) の増益 → 言語活動」の連続について、本論文第四章を参照。

[*20] vyavahāra(tha snyad) の用例は『中論』24.10 に窺える。岸根 (1993) の研究によると、「Candrakīrti は MA において、従来の vyavahārasatya という用語の取り扱いを踏まえた上で、それを vicāra という概念と結びつけ、その vicāra の有無を通じて、paramārthasatya に至るための手段として位置づけられる vyavahārasatya と単に虚偽の認識である saṃvṛti によって satya と捉えられているに過ぎないと位置づけられる saṃvṛtisatya とに区別した。」と指摘される。

[*21] de kho na mi mthong ba ni ’khor ba zhes brjod pa | ’jig rten dang de ldog pa zhes brjod pa mya ngan las ’das pa ’di gnyis la mi mthun pa’i phyogs dang gnyen po’i dngos por gnas shing gcig ni blang gcig ni dor bar sems || …’phags pa ngo bo nyid mi dmigs pa’i chos rtogs pas rab tu phye ba rnams ni de gnyi ga mi dmigs shing mi rtog go zhes bya bar dgongs so || YṢV(D no.3864, 6b7-7a1;7a3-4)
【訳】真実を見ない者は「輪廻」という世間とそれを逆転するものと言われた涅槃の両者において、所対治（*vipakṣa）と能対治の事物として存在しており、前者は得られようとするが、後者は取り除かれようと思う。［中略］自性が認識されないという法を証得するので、弁別者である聖者たちは、その両者を認識せず、構想しない、という意味である。

人」の認識対象は世俗諦である。このような「能治 — 所治」関係に構想された輪廻と涅槃は世俗諦である。能治 — 所治関係を有する輪廻と涅槃は世俗諦である点で無区別である。この解釈は『青目注』・『無畏論』と違う傾向を示している。

この「生死即涅槃」説を論証するために、『中論』第 25 章「観涅槃品」第 4-16 偈は四句分別論法を用い、「涅槃は存在物である」などの四つ主張を一つずつ排斥する。仏教の究極の目的としての涅槃はいかようにも捉えることができず、輪廻と同様に実在ではないと規定する。チャンドラキールティは『中論』にもとづいて、自立的論証式と帰謬論法を整え、綿密に実体視された涅槃を論駁する。この涅槃に関する四句分別論法は次章において詳細に考察するので、ここでは省略する。

2.3　戯論寂静

『中論』第 25 章「観涅槃品」最後の一偈は涅槃が戯論の寂静であると説く。

> sarvopalambhopaśamaḥ prapañcopaśamaḥ śivaḥ |
> na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ || MMK 25.24
> 【訳】［涅槃は］あらゆる認識の寂静であり、戯論の寂静であり、吉祥である。どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって説かれなかった。

この一偈は「観涅槃品」全章の内容をまとめ、原始仏教以来の無記説を拡大解釈し、「仏は誰に対してもいかなる教説も教えなかった」という仏の完全な沈黙、すなわち「一字不説」の説法観を提示する。チャンドラキールティはこの一偈を踏まえ、理証と教証を用い、仏の境地は戯論寂静にほかならないことを詳細に論じる。本論文の第 4 章では、チャンドラキールテの理証と教証を分析する。ここでは、「戯論寂静」の意味を考察する。「戯論」(prapañca) という語は『中論』および『プラサンナパダー』の中で多義語として使われる[*22]。そのうち、次の三つの用例は注目すべきである。まず、

1 分別の原因としての戯論

> karmakleśakṣayān mokṣa karmakleśā vikalpataḥ |
> te prapañcāt prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyate || MMK 18.5
> 【訳】業と煩悩の尽きることにもとづいて、解脱がある。諸々の業と煩悩は分別から［生じる］。それら［分別］は戯論から［生じる］。しかし、戯論は空性において滅する。

[*22] 「戯論寂静」の思想史的考察および『中論』における「戯論」のすべての用例について、丹治 (1988) を参照。また、桂・五島 (2016: 186) は『中論』における「戯論」の用例を分析する上で、次のようにまとめている。「龍樹の用例を見る限り、『根本中頌』では、煩悩や見解、妄想や分別、冗談（形而上学的議論）などといった具体的な様態（言葉や言葉と密接に結びついた心の動き）を指すばかりではなく、それらの根底に潜在している言葉の発動点、起動点をも含めた言語的広がり、言語的多元性を示していると考えられます。」

この詩頌は戯論の「流転門」ともいえる「戯論 → 分別 → 業と煩悩 → ［輪廻］」、および戯論の「還滅門」ともいえる「空性の修行 → 戯論の滅 → 分別の滅 → 業と煩悩の滅 → 解脱」という二つの連続を規定する。そのうち、戯論は分別の拠り所、原因と見なされる[*23]。

これに対して、チャンドラキールティはこの詩頌を敷衍し、次のように説明する。

> evaṃ tāvat karmakleśā vikalpataḥ pravartante | te ca vikalpā anādimatsaṃsārābhyastāj jñānajñeyavācyavācakakartṛkarmakaraṇakriyāghaṭapaṭa**kaṭa**mukuṭaratharūpavedanāstrīpuruṣalābhālābhasukhaduḥkhayaśo'yaśonindāpraśaṃsādilakṣaṇād **citrāt** prapañcād upajāyante | sa cāyaṃ laukikaḥ prapañco niravaśeṣaḥ śūnyatāyāṃ sarvabhāvasvabhāvaśūnyatādarśane sati nirudhyate || …tad evam aśeṣaprapañcopaśamaśivalakṣaṇāṃ śūnyatām āgamya yasmād aśeṣakalpanājālaprapañcavigamo bhavati, prapañcavigamāc ca vikalpanivṛttiḥ, vikalpanivṛttyā cāśeṣakarmakleśanivṛttiḥ, karmakleśanivṛttyā ca janmanivṛttiḥ, tasmāc chūnyataiva sarvaprapañcanivṛttilakṣaṇatvān nirvāṇam ity ucyate || [*24] PsP Chap.18(新作, 2015: 119-120)
>
> 【訳】まず、以上のように、「諸々の業と煩悩」は「分別にもとづいて」活動する。さらに、「それら」の分別は、無始時来の輪廻において数習された、認識と認識対象・言語対象と言語表現・行為主体と行為対象と行為手段と行為・壺・布・筵・王冠・車・色と受・女性と男性・利益と損失・楽と苦・名声と悪名・非難と賞賛等の特徴を持つ様々な「戯論から」生じる。しかし、この余すことなく世間的な「戯論」は「空性において」、すなわちすべての存在物は自性空であると見る時、「滅する」。［中略］したがって、以上のように、余すこともない戯論の寂滅と吉祥を特徴とする空性に到達して、余すこともない構想の網と戯論を離れることになる。戯論を離れるので、分別が停止する。さらに、分別の停止によって、余すこともない業と煩悩が停止する。さらに、業と煩悩の停止によって、出生が停止する。したがって、ほかならぬ空性はすべての戯論の停止を特徴とするので、涅槃と呼ばれる。

この中で、戯論は無始時来の輪廻において数習されたものであり、認識と認識対象・言

[*23] Schmithausen (1969: 137) では、prapañca は主に「主体の精神活動」(eine geistige Handlung des Subjektes) の意味で、(a) 言語 (vāk)、(b) 分別 (vikalpa)、(c) 意志的努力という三グループに大別できると説明している。分別と戯論の関係について、高橋 (2005: 171) は Schmithausen 氏の研究を踏まえて、『菩薩地』における分別と戯論の用例を分析した上で、「prapañca は分別の作用あるいは機能と考えれるので、Vikalpaprapañca という複合語は tatpuruṣa と考えられる。［中略］このことから『菩薩地』のこの箇所では prapañca という語の「拡大」という意味が明確に意職されていたと考えられる。したがって、ここでは精神的活動に関わる「拡大」という意味で「展開」という訳語を当てた」と結論する。

それに対して、『中論』と『プラサンナパダー』では、戯論は分別の機能や言語表現だけではなく、分別の原因とも語られる。この場合、分別の原因としての戯論は、顕在的言語表現ではなく、無始時来の輪廻において繰り返された潜在的な概念思惟であろう。

[*24] evaṃ tāvat karmakleśā vikalpataḥ pravartante | te ca vikalpā anādimatsaṃsārābhyastāj jñānajñeyavācyavācakakartṛkarmakaraṇakriyāghaṭapaṭamukuṭaratharūpavedanāstrīpuruṣalābhālābhasukhaduḥkhayaśo'yaśonindāpraśaṃsādilakṣaṇād vicitrāt prapañcād upajāyante |

sa cāyaṃ laukikaḥ prapañco niravaśeṣaḥ śūnyatāyāṃ sarvabhāvasvabhāvaśūnyatādarśane sati nirudhyate || …tad evam aśeṣaprapañcopaśamaśivalakṣaṇāṃ śūnyatām āgamya yasmād aśeṣakalpanājālaprapañcavigamo bhavati, prapañcavigamāc ca vikalpanivṛttiḥ, vikalpanivṛttyā cāśeṣakarmakleśanivṛttiḥ, karmakleśanivṛttyā ca janmanivṛttiḥ, tasmāc chūnyataiva sarvaprapañcanivṛttilakṣaṇatvān nirvāṇam ity ucyate || PsP(de La Vallée Poussin, 1903-13: 350-351)

語対象と言語表現等の特徴を持つものであると説かれる。戯論にもとづいて、分別・業と煩悩・出生は相次いで生じる。また、空性を見る時、原因である戯論が滅するから、分別・業と煩悩・出生の一連は相次いで滅することになる。この解釈は戯論の「流転門」と「還滅門」を詳しく論じるので、『中論』18.5 と一致している。

2 言語表現としての戯論

> aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcair aprapañcitam |
> nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇam || MMK 18.9
> 【訳】他を縁とせず、寂静であり、諸々の戯論によって戯論されず、無分別であり、多様な意味を持たない。これが真実の特徴である。

この詩頌は真実の特徴を説くものとしてよく知られている。この中で、「戯論」と「分別」がともに語られるので、両者は密接な関係を持つことが窺える。この両者について、チャンドラキールティは次のように説明する。

> prapañco hi vāk prapañcayaty arthān iti kṛtvā, prapañcair aprapañcitaṃ vāgbhir avyāhṛtam ity arthaḥ || nirvikalpaṃ ca tat | vikalpaś cittapracāraḥ, tadrahitatvāt tat tattvaṃ nirvikalpam || (de La Vallée Poussin, 1903-13: 373-374)=(新作, 2015: 141)
> 【訳】なぜなら、「戯論」、つまり語は諸々の意味を戯論する。というわけで、「諸々の戯論によって戯論されない」というのは、諸々の語によって言語表現されないという意味である。また、それは無分別である。分別というのは心の働きである。それを離れるので、その真実は分別を離れている。

この説明によると、戯論は語 (vāc) であり、それに対して、分別は心の働き (cittapracāra) である。チャンドラキールティのこの説明は語と心の働きにともに言及するので、『中論』18.7 との関連性は看過できない。

> nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocaraḥ |
> anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā || 18.7
> 【訳】言語表現の対象が停止し、心の活動領域が停止する。なぜなら、涅槃のように、法性は不生不滅である。

この一偈は一字不説論と関係するので、本論文の第 4 章でこれを詳しく論じる。ここでチャンドラキールテの注釈を要略すれば、心の活動 (citta-pravṛtti) によって、心の対象 (cittagocara) である相 (nimitta) が生じられる。相はさらに言語表現の対象 (abhidhātavya) として言葉を引き起こす[*25]。すなわち、「心の活動」→「相」→「言葉」という過程がある。この解釈によると、『中論』18.7 に説かれた abhidhātavya と cittagocara はともに「相」(nimitta) である。「相」は内在的な心の働きと外在的な言語表現を繋ぐ仲介になる。

[*25] 詳しい説明は本論文第107ページを参照。

上述の『中論』18.9 の注釈の中で、チャンドラキールテは「戯論」を語、「分別」を「心の働き」と解釈することは『中論』18.7 一偈と密接な関係にある。両偈の注釈を合わせてみれば、語である戯論は、心の働きである分別に起こされるものである。すると、分別は戯論の原因になる。

3 相・言語・煩悩・所知としての戯論

sarvopalambhopaśamaḥ prapañcopaśamaḥ śivaḥ |
na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ || MMK 25.24
【訳】［涅槃は］あらゆる認識の寂静であり、戯論の寂静であり、吉祥である。どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって説かれなかった。

この詩頌は「観涅槃品」の最後の一偈であり、戯論寂静こそが仏の境地であると述べている。この「戯論寂静」について、チャンドラキールティは次のように説明する。

iha sarveṣāṃ prapañcānāṃ nimittānāṃ yad upaśamo ’pravṛttis tan nirvāṇam | sa eva copaśamaḥ prakṛtyaivopaśāntatvāc cchivaḥ | vācām apravṛtter vā prapañcopaśamaḥ | cittasyāpravṛtteḥ śivaḥ | kleśānām apravṛtter vā prapañcopaśamo janmāpravṛttyā vā śivaḥ | kleśaprahāṇena vā prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena vā śivaḥ | jñeyānupalabdhyā vā prapañcopaśamaḥ | jñānānupalabdhyā śivaḥ ||[*26]
【訳】この中で、あらゆる戯論、つまり相の寂静、停止が涅槃である。また、その同じ寂静は、本質上寂静しているので、吉祥である。あるいは、言語の停止によって、戯論の寂静がある。心の停止によって、吉祥である。あるいは、諸々の煩悩の停止によって、戯論の寂静がある。出生の停止によって、吉祥である。あるいは、煩悩を断つことによって、戯論の寂静がある。余すことのない薫習を断つことによって、吉祥である。あるいは、所知の無認識によって、戯論の寂静がある。能知の無認識によって、吉祥である。

この中で、戯論 (prapañca) は相 (nimitta)・言語 (vāc)・煩悩 (kleśa)・所知 (jñeya) によると解釈されている。前述のように、相 (nimitta) はチャンドラキールティの説明によると、心の活動に増益されたものでありながら、言語対象として言語活動を引き起こすものとされる[*27]。すなわち、「心の活動 → 相 → 言語表現」の一連のものごとには、相としての戯

[*26] 本論文の校訂本160ページを参照されたい。

[*27] “iha yadi kiṃcid abhidhātavyaṃ vastu syāt, tad deśyeta | yadā tv abhidhātavyaṃ nivṛttaṃ vācāṃ viṣayo nāsti, tadā naiva kiṃcid api deśyate buddhaiḥ || kasmāt punar abhidhātavyaṃ nāstīty āha, **nivṛttaś cittagocaraḥ** | iti | cittasya gocaraś cittagocaraḥ, gocaro viṣaya ārambaṇam ity arthaḥ | yadi cittasya kaścid gocaraḥ syāt, tatra kiṃcin nimittam adhyāropya syād vācāṃ pravṛttiḥ | yadā tu cittasya viṣaya evānupapannas, tadā kva nimittādhyāropeṇa vācāṃ pravṛttiḥ syāt | kasmāt punaḥ cittaviṣayo nāstīti pratipādayann āha, **anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā** || yasmād anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā dharmasvabhāvo dharmaprakṛtir vyavasthāpitā, tasmān na tatra cittaṃ pravartate | cittasyāpravṛttau ca kuto nimittādhyāropaḥ, tadabhāvāt kuto vācāṃ pravṛttiḥ | ataś ca na kiṃcid buddhair bhagavadbhir deśitam iti sthitam avikalam ||”PsP Chap.18(新作, 2015: 130-131)
【訳】この中で、もし、何らか言語対象が事物 (vastu) であるならば、そういう［言語対象］は［諸仏によって］説かれるだろう。しかし、言語対象が停止する、つまり言語の対象が存在しない場合、諸仏によっ

論は心の活動と言語をつなぐための仲介である。次に、戯論を語 (vāc) と解釈することは『中論』18.9 と注釈に窺えるので、prapañca の最も顕在的な一つの意味である。

戯論を煩悩 (kleśa) や所知 (jñeya) に関係づけて説明することは煩悩障と所知障を容易に想起させる。まず、チャンドラキールテの説明によると、煩悩は有身見を根本として、我執と我所執から生じるものであり、我執と我所執はさらに分別を原因とするものである[*28]。また、戯論を所知 (jñeya) と解釈することは前述した『中論』18.5 の注釈に見られる。

以上の分析からみれば、チャンドラキールティの理解の中で、prapañca という語は分別の原因、分別と言語に介在した相、言語表現、分別を原因とする煩悩、所知等の多様な意味を持つものである。したがって、「戯論寂静」はそれぞれ煩悩と五蘊を断つことによって得られた有余依涅槃と無余依涅槃を超えて、空性修行の中で、外在的な言語表現、乃至内在的な分別の原因たるものを全部取り除いた仏の境地である。

2.4　無住処涅槃

これまでに分析した「生死即涅槃」と「戯論寂静」は『中論』第 25 章「観涅槃品」の二大主題である。『中論』における涅槃の考察はこの二つの観点のみにもとづいている。そのため、チャンドラキールティも『プラサンナパダー』第 25 章の中では、「観涅槃品」の文脈に即して、この二つの主題を詳細に論じている。しかし、チャンドラキールティは彼の主著『入中論』においては、さらに無住処涅槃を取り上げている[*29]。チャンドラキール

ていかなるものも決して説かれない。それでは、「なぜ言語対象は存在しないのか」と問うならば、「心の活動領域が停止する」と［龍樹は］言った。「心の活動領域」とは心に属する活動領域である。「活動領域」は、対象と所縁を意味する。もし心には何らかの活動領域が存在するならば、その場合、何らかの相を増益して、言語は働くだろう。しかし、もし心の対象がありえないならば、その場合、どこにおいて、相を増益することによって、言語が働くだろうか。それでは、何故心の対象が存在しないのかを説明するために、「なぜなら、法性は涅槃のように不生不滅である。」と［龍樹は］言った。なぜなら、涅槃のように法性、法の自性、法の本質は実に不生不滅であると設定される。したがって、その［法性］において、心は働かない。そして、心が働かない時、何故相の増益があるのか。そ［の相の増益］が存在しないから、何故言語が働くのか。したがって、諸仏世尊によっていかなるものも説かれなかったということは完全に成立する。

この点について、本論文第 4 章で詳しく考察する。

*28 “evaṃ yogino ’pi śūnyatādarśanāvasthā niravaśeṣaṃ skandhadhātvāyatanādisvarūpaṃ nopalabhante | na cānupalabhamānā vastusvarūpaṃ tadviṣayaṃ prapañcam avatārayanti | na cānavatārya tadviṣayaṃ prapañcaṃ vikalpam avatārayanti | na cānavatārya vikalpam ahaṃmametyabhiniveśāt satkāyadṛṣṭimūlakaṃ kleśagaṇam utpādayanti | na cānutpādya satkāyadṛṣṭyādikaṃ kleśagaṇaṃ karmāṇi kurvanti | na cākurvāṇāḥ jātijarāmaraṇākhyaṃ saṃsāram anubhavanti ||”PsP Chap.18(新作, 2015: 120)

【訳】同様に、空性見解に立つ諸々の瑜伽師も、すべての蘊・処・界等の本体を認識しない。そして、事物の本体を認識していない者たちは、そ［の事物の本体］を対象とする戯論に［自身を］入らせない。そして、それを対象とする戯論に［自身を］入らせず、分別に［自身を］入らせない。そして、分別に［自身を］入らせず、「我」・「我所」という執着にもとづいて、有身見を根本とする一群の煩悩を生起させない。そして、有身見を根本とする一群の煩悩を生起させず、諸々の業を作らない。また、［業を］作っていない者たちは、生・老死という輪廻を経験しない。

*29 『プラサンナパダー』25.24 の注釈の中で、チャンドラキールティは次のように説く。

evaṃ buddhā bhagavantaḥ sarvaprapañcopaśāntarūpe nirvāṇe śive ’sthānayogena sthitā nabhasīva haṃsarājāno sthitāḥ svapuṇyajñānasambhārapakṣapātavātea | vātaś ca gagane gaganasyākiñcanatvāt | (本論文161ページ)

ティの涅槃観を究明するためには、この無住処涅槃説を考察する必要がある。

「無住処涅槃」(apratiṣṭhitanirvāṇa) とは衆生を救済するために、如来は生死に止まらず、完全な涅槃にも住しないことを言う[*30]。この意味で、「無住処涅槃」は修行の終点と見なされた涅槃を際限のない利他行に置換するある種の涅槃「否定」論であろう。『入中論』のサンスクリット語原典は現在、校訂作業が進まられているそうだが、まだ、その成果は公開されていない[*31]。そのため、現時点では、『入中論』のチベット語訳にもとづいて研

【訳】空において白鳥の王が自らの福徳と知恵との資糧の翼によって飛ぶための風に乗り、また空がいかなるものでもないので、風が空に［乗る］ように、諸々の仏世尊はあらゆる戯論が静まった形を持ち、吉祥なる涅槃において、住所と結合せずに住するのである。

この文は、仏世尊は戯論寂静の涅槃に住処と結合せずに住すると説く。これは無住処涅槃に相当するものと考えられる。

*30 無住処涅槃について、平川 (2011: 160-161) は次のように紹介する。

「無住処涅槃は『大乗荘厳経論』に現れ、『摂大乗論』等に受けつがれた。菩薩は無分別智を得て、生死と涅槃との差別あるを見ないから、煩悩を滅しても涅槃に住せず、分別をおこしても生死に住しない。これが無住処涅槃であり、転依を相とするのである。菩薩は大智と大悲とをそなえるをもって、大智によって生死に住せずして、迷いをはなれ、大悲によって涅槃に住せずして有情を利益する。生死涅槃いずれにも住せずして、しかも体性つねに寂静であるので、これを無住処涅槃という。」

高崎 (2009a: 140) は次のように説く。

「無分別智とその後得智というのは元来は仏のさとりの智と、説法など覚他の仏業を通じて示される、大悲にもとづく智を表したものです。菩薩はその仏の智慧と慈悲とを学ぶことを要求されるわけです。そして、その結果として、菩薩の実現する世かは「無住処涅槃」とよばれます。「無住処」とは、菩薩はその智慧（無分別智）の完成によって、菩薩を断ち、生死の世界にはとどまらない（不住）、しかし、その慈悲心のゆえに、涅槃の世界に入らない（不住涅槃）というもので、唯識性に悟入した後もなお、世間にあって活躍しつづけることを理想、目的としているというのです。」

瑜伽行派文献における「無住処涅槃」(apratiṣṭhitanirvāṇa) という概念の変遷は、阿理 (1986: 851-858) にまとめられている。それによると、apratiṣṭhitanirvāṇa という術語は Bahuvrīhi と Karmadhāraya の二通りの読み方が文献の中で確定されると言う。さらに、阿理 (1986: 853) は「『阿毘達磨集論』の無住処涅槃の用語 (apratiṣṭhitanirvāṇa) は、恐らく『大乗経荘厳』IX.45; (XI.70); XIX.62 に見られるような Bahuvrīhi として用いられてきた apratiṣṭhitanirvāṇa が、そのまま涅槃概念を表示する Karmadhāraya として転用されるに至ったものであろう。その意味では、無住処涅槃なる涅槃観の成立には、『大乗経荘厳』の「涅槃に住しない」仏菩薩のあり方が背景となっているのである。」と指摘する。

上述の先行研究はすべて瑜伽行派の文献を中心に「無住処涅槃」の成立を考察する。この涅槃観の成立に『般若経』の影響も看過できない。例えば、『八千頌般若経』は次のように言う。

“buddho ’tikramya pṛthagjanabhūmim atikramya śrāvakabhūmim atikramya pratyekabuddhabhūmim aprameyāṇām asaṃkhyeyānāṃ satvānām arthaṃ kṛtvā’prameyāṇy asaṃkhyeyāni satvakoṭīniyutaśatasahasrāṇi parinirvvāpyāprameyān asaṃkhyeyān satvān śrāvakapratyekabuddhasamyaksambuddhatvaniyatān kṛtvā buddhabhūmau sthitvā buddhakṛtyaṃ kṛtvā’nupadhiśeṣe nirvvāṇadhātau buddhaparinirvvāṇena parinirvvāsyatīty evam apy anena na sthātavyaṃ ||”Mitra (1888: 36-37)

【訳】仏は凡夫の段階を超えて、声聞の段階を超えて、独覚の段階を超えて、無量無数の衆生の利益を為して、無量無数の千万・百万・十万の衆生を完全に涅槃させて、声聞・独覚・正等覚であることに確定された無量無数の衆生を［授記］して、仏の段階に住して、仏に為されるべきことを為して、無余依涅槃界において、仏の完全な涅槃によって、完全に涅槃するだろう、というようであっても、これをもって立脚すべきではない。

『八千頌般若経』の文脈から見れば、菩薩は空性をもって一切法を観察する際、蘊・処・界に立脚しないだけではなく、「仏は衆生救済をした後、完全に涅槃する」という立場にも立脚すべきではないと説かれる。『八千頌般若経』は空性修行の中で、菩薩が涅槃さえも執着すべきではないことを強調するが、「仏菩薩は涅槃に住しない」という考え方と少し異なり、『大乗経荘厳』や『入中論』に主張された無住所涅槃の前段階といえようか。ハリバドラ (Haribhadra) の注釈書『現観荘厳論光明』(*Abhisamayālaṃkārāloka*) は以上の内容を注釈する際、これを「無住所涅槃」(apratiṣṭhitanirvāṇa)(Wogihara, 1932: 148) と解釈する。

*31 李学竹、桂紹隆、Anne MacDonald は『入中論』のサンスクリット語原典の校訂作業を進めているそうである。

究せざるを得ない。『入中論』のチベット語訳の中では、apratiṣṭhitanirvāṇa(mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa) という術語は確定できないが、『入中論』12.42 偈の自註には「仏には般涅槃はない」(bcom ldan 'das …la yongs su mya ngan las 'da' ba mi mnga) という表現が見られる。この表現は apratiṣṭhitanirvāṇa の術語と同様に、仏は大悲によって涅槃に住しないという涅槃観を表す。そのため、本論文は『入中論』のこの涅槃観を「無住処涅槃」と称する。

この無住処涅槃という思想の背景には、まず「自利利他」、「自覚覚他」、すなわち衆生を利益し覚悟させるために、菩薩や如来は完全な涅槃に住することはできず、悟りの世界から戻り、出生や老死を特徴とする輪廻の世界を経験しながら、衆生救済を為すという大乗利他行の思想がある。同時にまた、従来実体視・絶対視された涅槃は「一切法空」の観点に立てば、煩悩や輪廻といかなる区別もないという「生死即涅槃」思想も無住処涅槃の背景になっている*32。

チャンドラキールティは『入中論』の中で「十地」（前十章）および「菩薩の功徳」（第 11 章）を論じた後に、第 12 章 37〜42 偈において仏の功徳としての無住処涅槃を提示する。そのうち、37 偈は仏の大願、38 偈は「化城喩」、39 偈は仏の無数の化身、40 偈は智慧（母）と大悲（乳母）の比喩*33、41 偈は大悲の比喩、42 偈は世人に対する大悲と無住処涅槃の関係を語る。本論文は 42・38 偈と自註を中心に、如来の大悲と無住処涅槃の関係・声聞独覚の涅槃の位置づけという二点を考察する。まず、チャンドラキールティは如来の大悲と無住処涅槃の関係について、次のように説く。

> de'i phyir snying rjes btsas pa la yongs su mya ngan las 'da' ba ko ga la mnga' | thugs rjes mya ngan las 'da' ba'i thugs las bzlog pa'i phyir na | bcom ldan 'das 'jig rten sdug bsngal rnam pa sna tshogs nyams su 'bab pa'i gzhir gyur ba'i rjes su gzigs pa la yongs su mya ngan las 'da' ba mi mnga'o zhes bstan pa'i phyir bshad pa |
>
> **gang gi phyir na mi mkhas dngos dang dngos po med par zhen pa'i blo can gyis ||**
> **skye dang 'jig gnas skabs dang sdug dang mi sdug bral phrad kyis bskyed sdug bsngal**

---

*32 『摂大乗論』は次のように説く。
'khor ba dang ni mya ngan 'das || mthungs par shes pa nam skye ba
de tshe de phyir de la ni || 'khor nyid mya ngan 'das par 'gyur || (D no.4048, 37a2-3)
【玄奘訳】「於生死涅槃、若起平等智、爾時由此證、生死即涅槃。」　『攝大乗論本』巻三「果斷分第十」(T1594.31.149a13-15)
【訳】「輪廻と涅槃は等しい」と知ることが生じる時、それゆえに、その人にとって、ほかならぬ輪廻が涅槃になる。
これは『摂大乗論』第 10 章「果断分」の一偈である。「果断分」は菩薩の転依 (gnas 'gyur pa) を説くものである。「果断」というのは、菩薩の転依修行の果としての断惑である。この一偈は転依した菩薩のあり方としての無住処涅槃を説くものとして引用される。そのため、『摂大乗論』は「生死即涅槃」を「無住処涅槃」の前提の一つと見なす。この一偈の研究について、高崎 (2009b: 539-546) を参照。

*33 智慧は母、大悲は乳母であるという譬喩表現は真諦訳『攝大乗論釋』と『宝性論』にも見られる。
「復次、佛子有五義。一願樂無上乗爲種子。二以般若爲母。三以定爲胎。四以大悲爲乳母。五以諸佛爲父。由此等義、故説得生佛家。」　『攝大乗論釋』巻八 (T1595.31.206b17-20)
「大乗信爲子、般若以爲母、禪胎大悲乳、諸佛如實子。」　『宝性論』巻三 (T1611.31.0829b5-6)
= bījaṃ yeṣām agrayānādhimuktir mātā prajñā buddhadharmaprasūtyai |
garbhasthānaṃ dhyānasaukhyaṃ kṛpoktā dhātrī putrāste 'nujātā munīnām || RGV 1.34(Johnston and Litt, 1950: 29-30)

dang ||
sdig can ’gro ba thob pa de phyir ’jig rten thugs brtse’i yul du rab dong bas ||
bcom ldan thugs rjes khyod thugs zhi las bzlog pas khyod la mya ngan ’da’ mi mnga’ ||
MA 12.42
de la gang gi phyir mi mkhas pa dngos po la mngon par zhen pa’i blo can las dang ’bras bu la yid ches pa yod pas lha dang mi dag tu skye ba yod par lta ba pas ni skye ba dang ’chi ba’i sdug bsngal nges par thob cing | yul sdug pa dang bral ba’i sdug bsngal dang yul mi sdug pa dang phrad pa’i sdug bsngal yang myong bar ’gyur ro || dngos po med par mngon par zhen pa’i blo can log par lta ba dang ldan pas ni sdig to can gyi ’gro ba dmyal ba la sogs pa dag dang | gong du bshad pa’i sdug bsngal yang ’thob pa de’i phyir sangs rgyas bcom ldan ’das kyi thugs rje ni skye bo sdug bsngal ba la dmigs nas thugs mya ngan ’das pa las bzlog ste gnas so || MABh(de La Vallée Poussin, 1912: 405), (D no.3862, 346b4-347a2)
【訳】それゆえ、悲心をともなって［世間を］ご覧になる方に、完全な涅槃（般涅槃）は一体どこにありましょうか？悲心によって、涅槃なさる御心を翻されたのであるから、様々な苦が入る場所になる世間をご覧になる世尊には完全な涅槃はない、と示すために［次のように偈頌で］述べる。
「なぜなら、存在と非存在に執着する心を持つ無知者は、生と滅の状態や、愛するものと別れること・憎らしいものと出会うことによって起こされる苦と、罪深い生存状態を得る。それゆえ、世人が悲心の対象になっているので、世尊よ！悲心によって、貴方は寂静した御心を翻されたので、貴方には涅槃はありません。」(『入中論』12.42)
この［偈の］中で、なぜなら、「存在に執着する心を持つ無知者」、すなわち業と果報を信じているので、天と人間に生まれることを見る者は、生と死の苦を必ず得ており、愛した対象と別れるという苦と、憎らしい対象と出会うという苦も経験することになる。「非存在に執着する心を持つ［無知者］」、すなわち、誤った見解を持つ者は、「罪深い (*pāpīyas) 生存状態」、すなわち地獄等と、先に説明した苦も得る。それゆえ、仏世尊の悲心は、苦悩する衆生を認識してから (*upalabhya)、［「寂静した御心」、すなわち］涅槃した御心を翻し、［この世に］とどまられているのである。

世人は業とその果報の存在を信じたとしても、来世では天人に生まれるに過ぎず、「四苦」や「愛別離」や「怨憎会」等の苦を決して免れない。業とその果報との非存在に執着する世人はこれらの苦だけではなく、地獄等のさらなる悪趣の苦をも得る。この二種類の世人は如来の悲心の対象である。このような世人が存在している限り、大悲を持つ如来は完全な涅槃（般涅槃）の境地に入らないと説明される。

このような無住処涅槃思想は原始仏教以来、修行の目的とされた涅槃を一変し、菩薩修行の目的を際限のない衆生救済と利他行に置換する。すると、無住処涅槃の立場に立てば、原始仏典に説かれた声聞と独覚の涅槃を再び位置づける理論的要請がある。これについて、チャンドラキールティは次のように説く。

gang gi phyir ’gro ba rnams theg pa chen po la ’jug pa la gegs byed pa’i rkyen mang po ’di dag yod cing ’jig rten rnams kyang gdon mi za bar mya ngan las ’das pa la ’god par bya dgos pa |

de phyir mkhas pas rin po che yi gling du chas pa’i skye tshogs kyi ||

ngal ba nyer sel grong khyer yid ’ong bar du rnam par bkod pa ltar ||

khyod kyi theg pa ’di ni slob ma nye bar zhi ba’i tshul la yid ||

sbyar bar mdzad cing rnam par dben la blo sbyangs rnams la sogs su gsungs || MA 12.38

dpe ’di ni ’phags pa dam pa’i chos pad ma dkar po las nges par bya’o || bsdus pa’i don ni ’di yin te || ji ltar bsti ba’i phyir ded dpon des rin po che’i gling du ma phyin pa’i bar du grong khyer mngon par sbrul pa de bzhin du | bcom ldan ’das kyis kyang thabs kyi sgo nas theg pa chen po’i tshu rol du de thob pa’i thabs su gyur zhing zhi ba’i bde ba’i rten du gyur pa theg pa gnyis po nyan thos dang rang sangs rgyas kyi theg pa gsungs pa yin no || MABh(de La Vallée Poussin, 1912: 402), (D no.3862, 345b4-7)

【訳】なぜなら、衆生たちが大乗に入ることを邪魔する多くの縁は存在し、世人たちも必ず涅槃［に］立脚しなければならない。

「それゆえ、賢者が宝の島に行く一群の人の疲労を取り除く [ために]、心地よい城を設けるように、貴方のこの乗は、弟子を寂静のあり方に意を結合させ、遠離したところに智を訓練する者たち等に述べる。」　（『入中論』12.38）

この［化城］喩は『聖妙法蓮華経』において決定されるべきである。要義は次のようである。あたかも休憩のために、その組合長が宝の島に到着しない途中で、町を化作するように、世尊も方便を通じて大乗の此岸において、その［大乗］を得る方便になり、寂静した安楽の拠り所になったもの、すなわち声聞［乗］と独覚乗という二乗を述べあのである。

声聞と独覚の涅槃の位置づけについて、チャンドラキールティは『入中論』12.38 と自註の中で、説明している。そこでは、彼は『妙法蓮華経』の「化城喩」を援用し、声聞乗と独覚乗は最終的に大乗を得るという一乗の立場にもとづいて解説する。すなわち、声聞や独覚の入った涅槃は単に宝の島に赴く人々を休憩させるために化作された町のように、声聞と独覚が完全な悟りへ至る途上で一度休憩するために設けられた方便であるとチャンドラキールティは説く。

この「化城喩」を通じて、チャンドラキールティは原始仏教以来、修行の目的とされた涅槃を完全に否定するのではなく、無住処涅槃の方便としてそれを承認する。これは大悲と利他行の方便を重んじる大乗仏教の精神を表している。

2.5　小結

本章は以上のように、有余依涅槃と無余依涅槃、「生死即涅槃」、「戯論寂静」、「無住処涅槃」という四つの側面から、チャンドラキールティの涅槃観の大筋を考察した。

まず、第一節では、原始仏教以来の「有余依涅槃」(sopadhiśeṣanirvāṇa) と「無余依涅槃」(nirupadhiśeṣanirvāṇa) に対するチャンドラキールティの解釈を分析した。チャンドラキールティの解釈は次にようにまとめられる。

1. upadhi は拠り所を意味する。
2. upadhi は五取蘊である。
3. upadhi に依拠するのはアートマンへの愛着である。

チャンドラキールティは原始仏教以来の「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の区別を継承するが、upadhi を五蘊、upadhi に依拠したものを ātmasneha と定義する。『プラサンナパダー』第 18 章はさらにアートマンが五取蘊に依拠して施設されるものであるという原理および空性修行の中で我執と我所執の滅を詳しく論じる。このように、原始仏教以来の二種類の涅槃は『プラサンナパダー』の中で、我執・我所執の煩悩と空性修行と関係づけられるので、理論的整合性が窺える。

第二節では、チャンドラキールティに理解された「生死即涅槃」を考察した。彼は原始仏教以来の有余依涅槃と無余依涅槃の分類を承認するものの、四句分別論法を用い、実体視された涅槃を排斥する。チャンドラキールティは『六十頌如理論注』の中で、輪廻と涅槃両者は聖者の対象ではなく、凡夫に構想された世俗諦であると規定する。

第三節では、「戯論寂静」について、チャンドラキールティの理解を考察した。彼は龍樹の『中論』を踏まえて、戯論 (prapañca) を分別の原因・煩悩・相・言語等と解釈する。その上で、チャンドラキールティは涅槃を一切の戯論の寂静であると再定義し、伝統説としての「有余依涅槃」と「無余依涅槃」を貶め、仏の境地は戯論寂静であると説明する。

第四節では、チャンドラキールティの「無住処涅槃」説を考察した。「無住処涅槃」は龍樹の『中論』に見られない涅槃観である。『中論』注釈書としての『プラサナパダー』は同様に「無住処涅槃」を詳しく論じない。チャンドラキールテは彼の独自の著作である『入中論』において、これを詳細に論じる。同論の中で、チャンドラキールティは『法華経』の「化城喩」を挙げ、声聞独覚に証得された涅槃は単に如来が大悲にもとづいて声聞独覚を休憩させるために設けた方便であるが、仏菩薩は衆生救済のために決して涅槃に住しない「無住処涅槃」説を提唱する。このような無住処涅槃の背景には、「生死即涅槃」および大乗仏教的な利他行という二つの根幹を見ることができる。

第 3 章

涅槃に関する四句分別論証

前章にふれたように、『中論』第 25 章「観涅槃品」の二つの主題は「生死即涅槃」と「戯論寂静」である。そのうち、「生死即涅槃」を論証するために、龍樹は第 4-16 偈の中で「涅槃は存在物である」等の四つの選択肢を一つずつ排斥する。これによって、涅槃は輪廻といかなる区別もないという「生死即涅槃」説に至る。さらに、同章第 22-23 偈は「世間が常住である」、「世界が有限である」等の無記たる「四句分別」を排斥し、涅槃がこれらの戯論の寂静であると強調する。この構成からみれば、第 25 章「観涅槃品」は四句分別論法と深く関連している。そこで、本章はまず先行研究を踏まえて、中観派文献の中で「四句分別」論法の特徴および問題点を説明する。その後、『中論』25.4-16 の「四句分別」の用例およびチャンドラキールティの詳しい解釈を考察する[*1]。

3.1 二種類の四句分別

四句分別 (Skt. catuṣkoṭi, catuṣkoṭikā) は四つの選択肢をもって法を分けて考察するための分類法である。仏教経論の中で、四句分別は記号で示せば、主に二種類に分けられる。

- Type 1: $Ax, \neg Ax, Ax \wedge \neg Ax, \neg Ax \wedge \neg\neg Ax$ の四つの選択肢[*2]
- Type 2: $Ax \wedge \neg Bx, \neg Ax \wedge Bx, Ax \wedge Bx, \neg Ax \wedge \neg Bx$ の四つの選択肢

[*1] 『中論』25.22-23 の四句分別について、チャンドラキールティは龍樹の偈頌を散文に書き換えることにとどまる。そこから、彼の独自の思想は窺えない。これらに対する考察はここで省略する。

[*2] 『中論』には記号化できない四句分別が存在する。以上の Ax と $\neg Ax$ の記号はただ便宜上の表現である。例えば、『中論』2.8 頌は次のようである。

gantā na gacchati tāvad agantā na eva gacchati |
anyo gantur agantuś ca kas tṛtīyo 'tha gacchati || MMK 2.8

【訳】まず、移動者は移動していない。非移動者は決して移動していない。移動者と非移動者以外の何の第三者が移動しているのか。

これは第三句を欠いた四句分別の用例である。チャンドラキールティの注釈はこの四句分別の主語と述語がともに √gam 語根に由来することにもとづいて、前主張のそれぞれの過失を指摘する。このような四句分別理解が語源学的な分析であるので、各前主張およびそれらの否定を記号化することは難しい。もし、前主張の否定を $\neg\exists x(G(x) \to G(x)), \neg\exists x(\neg G(x) \to G(x)), \neg\exists x(\forall y(\neg G(y) \wedge \neg\neg G(y) \leftrightarrow x = y) \to G(x))$(G: 移動している) と記号化すると、龍樹の語源学的な分析の意図を見失う恐れがある。

Type 1 は龍樹作とされた *Ratnāvalī* 2.15 に“catuṣprakāra-avyākṛta”*3、*Subhāṣitasaṃgraha* に“catuṣkoṭi”*4 と命名され、人間の分別思惟の代表として、『中論』をはじめとする中観派文献にも屢々見られた論法である。すべての戯論と分別を超えた寂静を目指す中観派にとって、この四句分別は一般的に人間思惟の極端を代表するものであり、退けられるべきものである。例えば、『プラサンナパダー』第 25 章において、「涅槃は存在物である」、「涅槃は非存在である」、「涅槃は存在物であり且つ非存在である」、「涅槃は存在物でもなく且つ非存在でもない」という四つの主張は全部誤った見解として排斥され、「それらの二者（涅槃と世間）にはいかなる微細な異なりもない」という結論に至る。

このような Type 1 の四句分別は阿含やニカーヤ等の随処に見られるので、仏教の早い時期にすでに成立したものと考えられる。例えば、*Saṃyuttanikāya*(SN) は「四つの立場」(catūsu ṭhānesu, catūhi ṭhānehi)、つまり「如来が死んだ後に、存在するか否か」の問題をめぐって「存在する」、「存在しない」、「存在し且つ存在しない」、「存在するわけでもなく且つ存在しないわけでもない」(SN III 86.4-5, p.116) という四つの選択肢を全部挙げた後に、さらにこれらを捨てるべきであると説く。中観派が Type 1 の四句分別に対する態度は従来の阿含とニカーヤとの延長線上にあるとみてよい。

一方、Type 2 の四句分別も阿含やニカーヤ等の初期文献に由来する。この Type2 の四句分別は『大毘婆沙論』と『倶舎論』等のアビダルマ文献において、諸法や諸カテゴリーの間の所属関係を議論するに際して、論師たちに愛用されていた。例えば、『増一阿含』は四種類の比丘を論ずる時、四種類の鳥の譬喩を挙げる。

> 或有鳥聲好而形醜。或有鳥形好而聲醜。或有鳥聲醜形亦醜。或有鳥形好聲亦好。
> 『増一阿含』25.9(T125.2.634b28-c2)
> 【訳】ある鳥は声がよいが、形が醜い。ある鳥は形がよいが、声が醜い。ある鳥は声がよくないが、形も醜い。ある鳥は形がよいが、声もよい。

これらは明らかに Type 2 の四句分別の論法である。二つの項目や範疇の間の関係を綿密に分析する方法であるので、アビダルマ文献に重視される。『倶舎論』第 1 章「界品」(Dhātunirdeśa) の中で、世親は眼識の拠り所と等無間縁を議論する際、この論法を用い、諸

---

*3 traikālyavyativṛttātmā loka evaṃ nu ko ’rthataḥ | yo ’sti nāsty atha vāpi syād anyatra vyavahārataḥ || RĀ 2.14
catuṣprakāram ity asmāt sānto ’nato dvayo ’dvayaḥ | buddhena hetor nānyasmād ayam avyākṛtaḥ kṛtaḥ || RĀ 2.15(Hahn, 1982: 44)
【訳】このように、言語表現以外に、存在し、あるいは存在しないところの、三世を超えた自性を持つ世間は、［勝］義から［見れば］、一体何か。
別［の理由］によらず、この理由にもとづいて、「［世間が］有限である。無限である。両方である。両方ではない。」という四種の無記は仏によってなされる。

*4 na svato nāpi parato na dvābhyāṃ nāpy ahetutaḥ | utpannā jātu vidyante bhāvā kvacana kecana iti || tasmāc catuṣkoṭivirahād anutpannā eva bhāvāḥ svataḥ parata ubhayato ’nubhayataś cotpādāyogāt |(Bendall, 1903: 389)。
Subhāṣitasaṃgraha は『中論』1.1 の四不生偈を引用し、四句分別を排除することによって、事物が不生にほかならないことを論証する。このような論法は明確に“catuṣkoṭi”と呼ばれる。
また、『楞伽経』も“catuṣkoṭikā”に言及した。“tatra mahāmate **catuṣkoṭikā** yad utaikatvānyatvobhayanobhayāstināstinityānityarahitāṃ catuṣkoṭikām iti vadāmi | etayā catuṣkoṭikayā mahāmate rahitāḥ sarvadharmā ity ucyate | iyaṃ mahāmate catuṣkoṭikā sarvadharmaparīkṣāyāṃ prayoktavyā |”LA(南條, 1923: 122)

法を四種類に分ける。

> ata evocyate yaś cakṣurvijñānasyāśrayabhāvena samanantarapratyayabhāvenāpi sa tasyeti **catuṣkoṭika**ḥ | prathamā koṭiś cakṣuḥ | dvitīyā samanantarātītaś caitasiko dharmadhātuḥ | tṛtīyā samanantarātītaṃ manaḥ | caturthī koṭir uktanirmuktā dharmāḥ | AKBh(Ejima, 1989: 54)
>
> 【桜部訳】まさにそのゆえに、［次のように］説かれている —— ある［法］が眼識の依りどころとしてあるならば、そ［の法］はか［の識］の等無間縁としてもあるか、という四句がある。第一句は眼［根］である。第二［句］は直前に［過去へ］去った心所なる法界である。第三［句］は直前に［過去へ］去った意である。第四句は右に述べたものを除いた諸法である。(桜部, 1969: 230-231)

ある法は眼識の拠り所であるか、等無間縁であるか、という視点から、(1) 眼根は眼識の拠り所であるが、眼識の等無間縁ではない；(2) 直前に過去に去った心所なる法界は、眼識の拠り所ではないが、眼識の等無間縁である；(3) 直前に過去に去った意は眼識の拠り所であり、且つ眼識の等無間縁である；(4) それ以外の諸法は、眼識の拠り所でもなく、眼識の等無間縁でもない。このように、世親は諸法を四種類に分ける。この論法は『倶舎論』の中で明らかに“catuṣkoṭika”と呼ばれる。

以上の分析から見れば、四句分別の二タイプのいずれも初期仏教文献に起源するが、部派仏教の時代に入ると、各学派は自分の思想の必要性に応じてそれぞれのタイプの四句分別を重視するようになった。中観文献や『楞伽経』等の大乗経典は Type 1 を特に重んじ、これを肯定的に見る場合もあるが、一般に批判対象として扱っていた。中観文献の大きな影響の下で、「四句分別」といえば、一般的にこのタイプの四句分別が念頭に浮かぶだろう。例えば、Raju (1954)、Bahm (1957)、清水 (1987) はジャイナ教の「七句分別」(saptabhaṅgi)・syādvāda 説乃至インド教の視点から仏教の四句分別との類似性と相違を考察する。しかし、これらの論文に論じられた「四句分別」は Type 1 だけであるが、Type 2 はほとんど無視されている。これも四句分別の主流が Type 1 であることをよく示している。これに対して、アビダルマ文献は Type 2 を愛用する傾向が著しい。これは諸法と範疇を分析するというアビダルマの使命と深く関連していると考えられる。

『中論』と『プラサンナパダー』に見られる四句分別は全部 Type 1 である。本論文は『中論』と『プラサンナパダー』を考察するので、「四句分別」に言及する時、Type 1 のみを指す。

3.2　四句分別の問題点

四句分別が現代学者の間に議論を起こす理由は主に二つあると考える。

まず、中観派乃至仏教論理学では矛盾律 (the Law of Contradiction: $\neg(p \wedge \neg p)$)、排中律 (the Law of Excluded Middle: $p \vee \neg p$)、二重否定律 (the Law of Double Negation: $\neg\neg p \equiv p$) 等の論理学の規則に関する詳しい議論は稀である。中観派文献の中で、自己的な論理感覚

にもとづいて、矛盾律や二重否定律等を適用することは屢々見られる[*5]。しかし、中観論者たちはこれらの論理規則の定義を下さない。そのため、彼らはどの程度までこれらの規則を厳守するのかは確定できない。

四句分別の論法は論理学に馴染んだ現代学者を、論理学と衝突する境地に至らせる。二重否定を認めると、四句分別の三番目の $Ax \wedge \neg Ax$ と四番目の $\neg Ax \wedge \neg\neg Ax$ は同じのものになり、二つの独立した選択肢として持っている価値もなくなってしまう。また、矛盾律 (Law of contradiction) によると、三番目 $Ax \wedge \neg Ax$ は常に偽 (false) である。そうだったら、一般の常識によっても排斥された偽の命題 $Ax \wedge \neg Ax$ を中観派はわざと批判する哲学的理由は一体何であろうか。また、四つの選択肢を残らずに全部排斥した中観派は排中律 (Law of excluded middle) に違反しているのではないか、という一連の論理学上の問題が生じる。[*6]

次に、『中論』および『プラサンナパダー』の中で、$Ax, \neg Ax, Ax \wedge \neg Ax, \neg Ax \wedge \neg\neg Ax$ という標準規格の四句分別以外に、一つの選択肢を欠いたり[*7]、四つの選択肢の全部を中観派により承認されたり[*8]する四句分別の変種の存在も四句分別の理解の上に一層困難をもたらす。

したがって、現代の学者たちが四句分別をめぐって様々な解釈を提出することに驚くべきではないだろう。例えば、中村 (1954: 223-231) は記号論理学によって四句分別の四つの選択肢を「$a, -a, a(-a), -a-(-a)$」と読み、「四句のうちの第三句、第四句は実質的内容的には意味をもたぬのである。この点で四句分別の論理 —— それはもう原始仏教時代に現れたものであるが —— は実質的には無意味なものを立てている。」という判断をしている。Robinson (1957: 291-308) は中村 (1954: 223-231) を踏まえて、四句分別が「$Ax \vee \sim Ax \vee Ax. \sim Ax \vee \sim (Ax). \sim\sim (Ax)$」の論理構造をもち、またその四つがそれぞれアリストテレスの AEIO という四種類の命題に似ていると結論する。Seyfort Ruegg (1977:

---

*5 中村 (1954: 223-231) とRobinson (1957: 291-308) を参照。

*6 例えば、Staal (1962: 52) は中観派が“thrown these laws（矛盾律と排中律）overboard”と訴える。逆に、中観派が矛盾律等に違反することを高く評価した学者も存在する。例えば、Burtt (1955: 202) は次のように説く。“The Eastern mind is convinced that, taking together all the circumstances in which we need our thingking to give us adequate guidance, it would be fatal to allow ourselves to be enslaved by these principles.”

*7 例えば、gantā na gacchati tāvad agantā na eva gacchati | anyo gantur agantuś ca kas tṛtīyo ’tha gacchati || MMK 2.8
【訳】まず、移動者は移動していない。非移動者は決して移動していない。移動者と非移動者以外の何の第三者が移動しているのか？
この四句分別は主語を選択肢とするものであり、第三句を欠く用例である。

*8 例えば、『中論』18.8 は以下の通り。
sarvaṃ tathyaṃ na vā tathyaṃ tathyaṃ cātathyam eva ca |
nāivātathyaṃ nāiva tathyam etad buddhānuśāsanam || MMK 18.8
【訳】(1) すべてが真実である。あるいは、(2) 真実ではない。(3) 真実であり且つ真実ではない。(4) 決して非真実でもなく、決して真実でもない。これが仏の教えである。
この「四句分別」の四つの選択肢は全部承認される。さらに、『中論』には、次の用例が見られる。
śūnyam iti na vaktavyam aśūnyam iti vā bhavet |
ubhayaṃ nobhayaṃ ceti prajñaptyarthaṃ tu kathyate || MMK 22.11
【訳】空である、あるいは空ではないと言われるべきではないだろう。両方とも、両方ではないとも［言われるべきではない］。しかし、施設のために語られるのである。
この「四句分別」の四つの選択肢は施設 (prajñapti) として承認されるが、究極的には排斥される。

1-71) は定立的否定 (paryudāsapratiṣedha) と非定立的否定 (prasajyapratiṣedha) との区別を意識しながら、『中論』および『四百論』(*Catuḥśataka*) における四句分別を分析する。この二種類の否定から四句分別を理解する仕方はWesterhoff (2006, 2009) に継承される。Tillemans (1989: 265-297) はゲルク派 (dGe lugs pa) が主張 (pakṣa) の前に bden par grub pa、rang bzhin gyis grub pa、don dam par 等の限定要素を付加することによって四句分別に含まれた矛盾を解消しようとすることを説明する。Tillemans (1990: 72-76) はさらに存在記号の導入によって、四句分別の否定を「$\neg(Ex)Fx; \neg(Ex)\neg Fx; \neg(Ex)(Fx\&\neg Fx); \neg(Ex)(\neg Fx\&\neg\neg Fx)$」のように読んでいる。そのほかに、Seyfort Ruegg (1995: 236-238) とWesterhoff (2009: 78-80) は発語内行為 (illocutionary act) 等の言語行為論 (speech-act theory) によって中観派の四句分別批判の意義を説明して試みる。

以上で挙げられた数篇の研究は従来の四句分別の研究成果の中で僅かの一部分にすぎない。膨大な量の研究成果の存在は中観派の論理および四句分別が現代学者により重視されることを示す一方、四句分別自身の難解さと曖昧さをも窺わせている。

3.3　チャンドラキールティによる『中論』25.4-16 理解

『中論』第 25 章「観涅槃品」において、龍樹は四句分別論法をもって「涅槃は存在物である」等の四つの見解を全部排斥している。「存在物」(bhāva) と「非存在」(abhāva) が光と闇のように互いに反対しているもの (parasparaviruddha) とチャンドラキールティに説明されるので、一見して涅槃にかかわるこの四句分別はRobinson (1957: 302) に指摘された通り、記号論理学で次のように表現されうる。

$$\alpha : Ax \vee \neg Ax \vee (Ax \wedge \neg Ax) \vee (\neg Ax \wedge \neg\neg Ax)$$

同様に、四句分別の否定は次のように記号化できる。

$$\beta : \neg A \wedge \neg\neg A \wedge \neg(Ax \wedge \neg Ax) \wedge \neg(\neg Ax \wedge \neg\neg Ax)$$

しかし、龍樹およびチャンドラキールティの注釈を少し吟味すると、論理式 (formula) α はいくつかの問題を抱えていることがわかる。まず、前章でふれたように、チャンドラキールティにとって、「涅槃」というものは際限のない衆生救済の途上で声聞独覚を休憩させるために、世俗諦において方便として設定されたものである[*9]。また、彼にとって、涅槃は輪廻と同様に、実在する自性を持つものではない。したがって、「涅槃は存在物である」等の四つの前主張は皆主語の指示対象が存在しない命題である。インド論理学は自立的な論証式を中心に、このような命題を一般的に「宗過」(pakṣadoṣa) と因過 (hetvābhāsa) を犯すものとして排除し、これらの真偽を議論しないことが通例である。チャンドラキールティにとって、このような命題の真偽を検討するために、帰謬法を伴った四句分別論

[*9] チャンドラキールティの「無住処涅槃」理解について、本論文第二章を参照。

法以外の論法はないだろう。チャンドラキールティに用いられた四句分別論法の思想背景には、主語の指示対象が存在しない命題の問題があることは決して看過できない。しかし、上述の α と β のように記号化された論理式はこの点を全く無視する。

第二、α と β の中で述語がともに A で表現されるから、述語は同一であることを含意する。しかし、チャンドラキールティの否定の中で、述語を再定義する用例も屢々見られる。字面で同一の述語なのに、前主張での内包と外延はそれの否定において異なる[*10]。

この二点のゆえに、字面通りに四句分別を記号化するより、慎重にチャンドラキールティの理解と意図を読むことが大切である。以下でまず涅槃に関する四句分別について、チャンドラキールティの理解を分析する。その上で、イギリス論理学者ラッセルの記述理論を援用し、この四句分別とその否定の記号化を試みる。

3.3.1　第一句：涅槃は存在物である

チャンドラキールティの注釈によれば、「涅槃は存在物である」という命題の詳しい意味は次のようである。

> kleśakarmajanmasantānapravṛttiniyatarodhabhūto jalapravāharodhabhūtasetusthānīyo nirodhātmakaḥ padārthas tan nirvāṇam |[*11]
>
> 【訳】水の流れの堤 (rodha) である土手 (setu) のように、煩悩・業・出生という連続の生起の確実な止まり (rodha) になり、滅を本体とするもの (padārtha)、それが涅槃である。

水の流れと堤えは説一切有部の中で一般的に「択滅」を説明する際に、屢々用いられた喩例である[*12]。ここでは、チャンドラキールティは同様にこれを涅槃の喩えとして用いている。有部の五位七十五法の分類体系において「涅槃」という項目は見られない。しかし、三種類の無為法には、涅槃に相当する「択滅無為」が立てられている。有部的な譬喩表現を用いた上述の文章からみれば、チャンドラキールテにとって、「涅槃は存在物である」という主張は有部説であると見ても大過はない。有部の宗義によると、この前主張は次の二点にまとめられる。

1. 存在物 (bhāva) は有為法と無為法で構成される。
2. 涅槃は無為法として存在物である。

このような前主張に対して、龍樹およびチャンドラキールティは次の三つの反論を設けている。

[*10] 例えば、「涅槃は存在物である」という第一句の中で、「存在物」は有為法と無為法の二つを含める。しかし、チャンドラキールティは第一句を否定する時、「存在物」を有為法のみに限定する。後にこの点を詳しく論じる。

[*11] 本論文148ページを参照。

[*12] 例えば、「諸有即是生死別名、有若不生、名苦永斷。如堤堰水、如壁障風。令苦不生、名為擇滅。」　『入阿毘達磨論』巻二 (T1554.28.988c5-7)

I 存在物は老死を特徴とする

bhāvas tāvan na nirvāṇaṃ jarāmaraṇalakṣaṇam |
prasajyate ’sti bhāvo hi na jarāmaraṇaṃ vinā || MMK 25.4
【訳】まず、涅槃は存在物ではない。老死を特徴とするものであるという過失が付随する。なぜなら、老死を離れた存在物はない。

これについて、チャンドラキールティは次の論証式を立てている[*13]。

主張　涅槃は存在物ではない。
証因　老死を離れたものであるから。
喩例　何らかのものが老死を離れたものであるならば、それは存在物ではない。空中の花の如し。

表3.1　論証式 I

まず、「涅槃は老死を離れたものである」ということはチャンドラキールテと対論者の両方に認められている。そのため、上述の証因は因三相 (trirūpa) の一番目「主題所属性」(pakṣadharmatva) を満たす。また、有部のような実在論者にとって、老死を離れた無為法は有為法と同様に存在物 (paramārthasat, padārtha, vastu, dravya) である。そのため、上述の肯定的遍充関係はチャンドラキールテに承認されているが、実在論者である反論者に決して認められないものである。すなわち、この肯定的遍充関係は共許極成なもの (ubhayaprasiddha) ではない。対論者の立場に立てば、上述の論証式は因過を犯した疑似推理にほかならない。このような論争の片方に承認された論証式には、対論者の主張を排斥する機能の存否について、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』第 1 章において次のように説いている。

kiṃ punar anyataraprasiddhenāpy anumānenāsty anumānabādhā ||
asti | sā ca svaprasiddhenaiva hetunā, na paraprasiddhena, lokata eva dṛṣṭatvāt | kadācid dhi loke ’rthipratyarthibhyāṃ pramāṇīkṛtasya sākṣiṇo vacanena jayo bhavati parājayo vā, kadācit svavacanena, paravacanena tu na jayo nāpi parājayaḥ | yathā ca loke tathā nyāye ’pi,

*13 “evaṃ bhāve nirvāṇe vyavasthāpite ācāryo nirūpayati | bhāvas tāvan na nirvāṇam iti | kiṃ kāraṇam | yasmāj jarāmaraṇalakṣaṇaṃ prasajyate | bhāvasya jarāmaraṇalakṣaṇāvyabhicāritvāt | tataś ca nirvāṇam eva tan na syāt | jarāmaraṇalakṣaṇatvād vijñānādivad ity abhiprāyaḥ | tām eva ca jarāmaraṇalakṣaṇāvyabhicāritāṃ spaṣṭayann āha | asti bhāvo hi na jarāmaraṇaṃ vineti | yo hi jarāmaraṇarahitaḥ sa bhāva eva na bhavati | khapuṣpavaj jarāmaraṇarahitatvāt ||” (本論文149ページを参照。)
【訳】以上のように、涅槃が存在物として設定される時、師匠［龍樹］は説明する。「まず、涅槃は存在物ではない。」と。理由は何か？なぜなら、存在物は老死という特徴から逸脱しないものであるから、［涅槃が］「老死という特徴を持つものであるという過失が付随する」。そして、それゆえ、「［主張］それは涅槃ではないだろう。［証因］老死という特徴を持つものであるから。［喩例］識等と同様である。」と言わんとする。また、［存在物が］老死という特徴から逸脱しないものであることを示すために、［龍樹は］「なぜなら、老死を離れた存在物はない」と述べた。なぜなら、［遍充関係］何らかのものが老死を離れたものであるならば、それは存在物ではない。［証因］老死を離れたものであるから。［喩例］空中の花の如し。

laukikasyaiva vyavahārasya nyāyaśāstre prastutatvāt | MacDonald (2015a: 188-9)

【訳】［反論者：］次に、［論争の］片方に承認された推理によっても、推理による排斥が存在するのか？

［チャンドラキールティ：］存在する。なぜなら (ca)、その［推理による排斥］は［対論者］自身に承認された証因によるのみである。［中観派である］他者に承認された［証因］によるわけではない。［中観派にとっては］世間にもとづいてのみ、［その推理による排斥が］見られるからである。なぜなら、世間において、ある時、原告と被告に権威と見なされた証人の言葉によって、［被告には］勝利あるいは失敗がある。ある時、［被告］自身の言葉によって［被告の勝利あるいは失敗がある］。しかし、［原告である］他者の言葉によって、［被告には］勝利も失敗もない。そして、世間においての［状況］と同様に、論理においても同様である。論理書において、世間的言語表現のみが主題とされる。

世間の法廷においては、原告が被告の罪を訴える時、被告が有罪か無罪かを判断する基準は原告の言葉ではなく、権威を持つ証人の証言、あるいは被告の弁護である。同様に、論理学においては、原告である中観派は被告である実在論の過失を訴えても、実在論者が有罪か無罪かを判断する基準は実在論者の主張にあるにほかならない。したがって、チャンドラキールティによると、中観派に相応しい論法は正面的に自立的な論証式を立てることより、対論者の主張を暫定的に承認し、その後その中の矛盾を指摘することによって対論者の主張を排斥するという帰謬論法である。『プラサンナパダー』においてチャンドラキールティに立てられた自立的論証式も多くの場合、帰謬法を補助するための論法である[*14]。それゆえ、帰謬法はチャンドラキールティの論理学の中心であることは間違いない。

しかし、前述の自立的論証式は帰謬法を補助するものではなく、龍樹の主張を自立的論証式に整理したものである。また、対論者の立場に立てば、これは因過を犯した疑似推理である。論証式 I のような単純な自立的論証式はチャンドラキールティの論理学においてどのような位置を占めるのか。「為自推理」(svārthānumāna) と「為他推理」(parārthānumāna) の視点からみれば、論証式 I は対論者との対論ではなく、同様な哲学立場を持つ自派の学生を理解させるために立てた為自推理[*15]と見なされうるだろう。その場合、自派の承認

[*14] 後述する論証式 II と III と IV を参照。

[*15] 為自推理 (svārthānumāna) について、チャンドラキールティは次のように説明する。

“yas tu manyate – ya eva tūbhayaviniścitavādī, sa sādhanaṃ dūṣaṇaṃ vā, nānyataraprasiddhasandigdhavācīti, tenāpi laukikīṃ vyavasthām anurudhyamānena yathokta eva nyāyo ’bhyupeyaḥ || tathā hi nobhayaprasiddhenaivāgamenāgamabādhā | kiṃ tarhi | svaprasiddhenāpi | svārthānumāne tu sarvatra svaprasiddhir eva garīyasī, nobhayaprasiddhiḥ |”PsP Chap.1MacDonald (2015a: 190)

【訳】しかし、ある者［Dignāga］は「両側に確定された［証因］を語る［証因の言明］は論証させるもの、あるいは論難させるものである。一側に承認された［証因］や疑わしい［証因］を語る［証因の言明］は［論証させるものや論難させるもの］ではない。」(*Nyāyamukha*) と考える。世間的な規則 (vyavathā) に依拠している彼によっても、［私に］言われた通りの論理が承認される。すなわち、あるいは、両側に承認された伝承 (āgama) によって、伝承による排斥はない。さらに、［非難する者］自身に承認された［伝承］によっても［伝承による排斥はない］。しかし、為自推理において、すべての場合に、自身の承認のみが重

のみが重要であり、自派によってのみ承認された証因は主張命題を証明できる。そうであるならば、チャンドラキールティの自立的論証式に対する態度は二つの側面を備えていると考えられる。

1. 対論者と論争する場合、自立的論証式を立てず、対論者によってのみ承認された (paraprasiddha) 証因にもとづいて、対論者の主張の弱点を攻撃するという帰謬論法のみを用いる。
2. 同様な哲学立場に立つ学生を理解させるために用いた為自推理 (svārthānumāna) の場合、自立的論証式の役割を一応承認し、帰謬論法だけでなく、自立的論証式さえも立てることに憚らない。

そのため、チャンドラキールティの論理学[*16]に対する態度の柔軟性に注意しなければならない。

II 存在物＝有為法

bhāvaś ca yadi nirvāṇaṃ nirvāṇaṃ saṃskṛtaṃ bhavet |
nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ kvacana kaścana || MMK 25.5
【訳】また、もし、涅槃が存在物であるなら、涅槃は有為［法］になるだろう。なぜなら、有為でないいかなる存在物は、どこにおいても存在しない。

これについて、チャンドラキールティが立てた論証式[*17]は次のように整理できる。

主張	涅槃は有為である。
証因	存在物であるから。
肯定的遍充関係	あるものが存在物であるならば、それは有為である。識の如し。
否定的遍充関係	あるものが有為ではないならば、それは存在物ではない。ロバの角等の如し。
結論	しかし、涅槃は有為ではない。したがって、涅槃は存在物ではない。

表3.2　論証式 II

要であるが、両側の承認は［重要］ではない。
　これによれば、為自推理において、対論者側の承認の有無を問わず、自派の承認のみが重要である。『プラサンナパダー』第 25 章において、チャンドラキールティに立てられた自立的論証式はまさにこういう為自推理であろう。

*16 チャンドラキールティの論理学について、岸根 (1996); 吉水 (2010) を参照。

*17 “yadi nirvāṇaṃ bhāvaḥ syāt tadā tan nirvāṇaṃ saṃskṛtaṃ bhaved | vijñānādivad bhāvatvāt | yas tv asaṃskṛto nāsau bhāvaḥ | tad yathā kharaviṣāṇavad iti | vyatirekam upadarśayann āha | nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ kvacanety adhikaraṇe deśe kāle siddhānte vā | kaścanety ādheya ādhyātmiko bāhyo vety arthaḥ ||”(本論文150ページを参照。)
【訳】もし、涅槃は存在物であるなら、その場合、そういう涅槃は有為［法］になるだろう。存在物であるから。識等の如し。一方、［龍樹は］「あるものが有為ではないならば、それは存在物ではない。例えば、ロバの角等の如し。」という否定的遍充関係を示すために、「なぜなら、有為でない存在物は、どこにおいても存在しない。」と述べた。［どこにおいても］というのは、拠り所、場所、時間、あるいは教義体系においてのである。「いかなるものも」というのは、内的あるいは外的な依拠するものという意味である。

論証式 I と同様に、論証式 II は「存在物＝有為」という前提に立つものである。説一切有部等の対論者にとって、存在物は有為と無為の両方を含める。すなわち、前主張とチャンドラキールティの否定の中で、「存在物」という概念の内包と外延は実際に異なっている。したがって、中村元や Robinson 等の先学がこの前主張とその否定を Ax と $\neg Ax$ に記号化することはこの内包と外延上の違いを無視してしまう。

また、注目すべきなのは、ここで、帰謬論法を補助するために、自立的論証式が用いられることである。この論証式の遍充関係は涅槃を無為法と考える有部等の対論者には決して認められないので、中観派によってのみ承認されるものである。それゆえ、これは自派の学生向けの為自推理と帰謬論法であると見なされうる。

III 存在物は原因に依拠する。

bhāvaś ca yadi nirvāṇam anupādāya tat katham |
nirvāṇaṃ nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyate || MMK 25.6
【訳】また、もし涅槃が存在物であるなら、その涅槃は如何にして［原因に］依拠せずにありえるのか？なぜなら、いかなる存在物も［原因に］依拠せずに存在するわけではない。

これに対して、チャンドラキールティは次の論証式を立てる[*18]。

主張	涅槃は原因に依拠しないものではない。
証因	存在物であるから。
喩例	識の如し。
否定的遍充関係	あるものが原因に依拠しないならば、それは存在物ではない。
結論	しかし、涅槃は原因に依存しないものと認められる。したがって、涅槃は存在物ではない。

表3.3　論証式 III

「有為」(saṃskṛta) の意味は一般的に「作られたもの」、「為されたもの」と理解される。仏教の因果論でいえば、有為法は諸原因に依拠して生じるものであると同時に、別の有為法の生起の原因でもある。この意味で、「存在物は原因に依拠する」という立場に立つ論証式 III は「存在物＝有為法」にもとづいた論証式 II と同じものである。

前主張における bhāva は有為法と無為法の両方により構成されるが、チャンドラキールティは上述の三論証式の中で、bhāva は有為法だけを指すと主張する。すると、「涅槃は存在物である」という前主張と「涅槃は存在物ではない」という否定において、同じ述語

[*18] naivānupādāya syāt | bhāvatvād vijñānādivat | vyatirekakāraṇam āha | nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyata iti || (本論文150ページを参照。)
【訳】［主張］［涅槃が原因に］依拠せずに決してありえないだろう。［証因］存在物であるから。［喩例］識等の如し。否定的遍充関係の理由を、「なぜなら、いかなる存在物も［原因に］依拠せずに存在するわけではない。」と、［龍樹は］述べたのである。

である「存在物」の内包と外延が実際に異なっている。したがって、本論文は前主張の述語を B(bhāva) で表現するが、チャンドラキールティの述語を B' で表す。

前章で触れたように、チャンドラキールティにとって、涅槃は声聞独覚を休憩させるために仏により設定された世俗諦に過ぎず、輪廻と同様に縁起した空なものである。『中論』と『プラサンナパダー』第 7 章「観有為品」(saṃskṛtaparīkṣā)*19は無為の成立が有為に依拠し、有為の不成立のゆえに、無為も成立しないと論じる。実在論に立脚し、無為批判を提唱した『倶舎論』*20と比べると、空思想にもとづいた『プラサンナパダー』は有為であれ、無為であれ、皆自性の点で成立できないという中観哲学を宣揚する。上述したチャンドラキールティの涅槃批判は終始一貫したものである。

3.3.2　第二句：涅槃は非存在である

四句分別の二番目は対論者に提唱された「涅槃は煩悩と出生の非存在である」という主張である。バーヴィヴェーカの『般若灯論』によると、この主張は紅衣部 (gos dmar sde)*21と経量部 (mdo sde pa)*22に属する*23。観誓 (Avalokitavrata) の注釈『般若灯論注』(*Prajñāpradīpaṭīkā*) は次のように説く。

> 今、「涅槃は非存在である」と主張する者たちの教説は如何にして理屈にあわないか、が示されるべきなので、それゆえ、「涅槃が灯明の滅することと同様である」と論じる紅衣部の人々、および単に生起しないことにおいて、涅槃を言語表現する経量部の人々のために、［龍樹は］述べた。*24

---

*19 utpādasthitibhaṅgānām asiddher nāsti saṃskṛtam |
saṃskṛtasyāprasiddhau ca kathaṃ setsyaty asaṃskṛtam || MMK 7.33
【訳】生・住・滅の不成立のゆえに、有為は存在しない。そして、有為が成立しない場合、無為は如何にして成立するだろうか？
チャンドラキールティの注釈 (de La Vallée Poussin, 1903-13: 176-177) を参照。

*20 『倶舎論』の無為批判について、加藤 (1989: 297-303) を参照。

*21 観誓は『般若灯論注』(*Prajñāpradīpaṭīkā*) の中で、紅衣部の涅槃観の教証を引用する。
“ji ltar mar me shi ba ni || sa la mi ’gro mkha’la min || phyogs su mi ’gro phyogs mtshams min || mar zad nyi tshe shi ’gyur ltar || sangs rgyas mya ngan ’das pa yang || sa la mi ’gro mkha’la min || phyogs su mi ’gro phyogs mtshams min || sred zad nyi tshes ’da’bar ’gyur ||”PPṬ Chap.25(D no.3859, 254b5; P no.5259, 303a4-5)
【訳】灯明の滅は土にも空にも行かず、四方にも各所にも行かず、油が尽きる時、滅することになるように、仏の涅槃も、土にも空にも行かず、四方にも各所にも行かず、渇愛が尽きる時、出離するだろう。

*22 経量部の涅槃観は、『倶舎論』に見られる。
“sarvam evāsaṃskṛtam adravyam iti sautrāntikāḥ | na hi tad rūpavedanādivat bhāvāntaram asti | …utpannānuśayajan-manirodhe pratisaṃkhyābalenānyasyānutpādaḥ pratisaṃkhyānirodhaḥ |”AKBh(Pradhan, 1967: 92)
【訳】まさにすべての無為［法］は実体を持たないものであると経量部が言う。なぜなら、その［涅槃］は色・受等のように、別の存在物ではない。すでに生じた随眠と出生が滅する時、択 (pratisaṃkhyā) の力によって別の［随眠と出生の］生じないことが択滅である。
　経量部によれば、涅槃は色・受等のような実在物ではなく、択 (pratisaṃkhyā) の力によって随眠と出生の不生起として施設された仮有である。

*23 *Prajñāpradīpa*, D no.3853, 236a6-7; P no.5253, 296a7。

*24 “da ni mya ngan las ’das pa dngos po med pa yin par ’dod pa dag gi gzhung ji ltar mi ’thad pa de ltar brtag par bya ste | de’i phyir | gos dmar sde gang dag mya ngan las ’das pa mar me shi ba bzhin no zhes bya ba smra ba dang | mdo sde pa dag skye ba med pa tsam la mya ngan las ’das par tha snyad ’dogs pa de dag gi phyir bshad pa |”PPṬ Chap.25(D

したがって、バーヴィヴェーカと観誓は次のように紅衣部と経量部の前主張を理解する。

紅衣部：　涅槃は灯明と滅のようである。

経量部：　涅槃は煩悩と出生の不生起である。

これに対して、『プラサナパダー』第 25 章の中には、紅衣部批判は見当たらない。チャンドラキールティは単に煩悩と出生の非存在に言及しているが、この前主張は経量部説であると明言していない。

龍樹とチャンドラキールティは「観涅槃品」第 7-8 偈と注釈において「涅槃は非存在である」という前主張を批判する。まず、非存在 (abhāva) の意味について、龍樹は『中論』第 15 章において次のように説く。

> bhāvasya ced aprasiddhir abhāvo naiva sidhyati |
> bhāvasya hy anyathābhāvam abhāvaṃ bruvate janāḥ || MMK 15.5
> 【訳】もし存在物が成立しないならば、非存在は決して成立しない。なぜなら、勝者たちは「非存在が存在物の別様状態である」と説く。

すなわち、「非存在」(abhāva) は「存在しないこと」ではなく、事物が別様になることである。このような abhāva 理解にもとづいて、龍樹は第 25 章で次のように説く。

> bhāvo yadi na nirvāṇam abhāvaḥ kiṃ bhaviṣyati |
> nirvāṇaṃ yatra bhāvo na nābhāvas tatra vidyate || MMK 25.7
> 【訳】もし、涅槃は存在物ではないならば、如何にして［涅槃は］非存在になるであろうか？ある［主張］において涅槃が存在物でないならば、そ［の主張］において非存在は存在しない。

この偈頌について、チャンドラキールティは『中論』15.5 頌の abhāva 理解を踏まえ、abhāva が bhāva の別様状態であるので、bhāva を離れる、独立した abhāva はありえない、と解釈する。さらに、彼は帰謬論法を用い、もし涅槃が煩悩と出生の非存在であると承認するなら、煩悩と出生の非存在は無常性であるので、涅槃も無常性になってしまうし、努力せずに解脱するという過失も付随する[*25]と説く。

次に、龍樹は bhāva と abhāva の依存関係を中心に、涅槃が abhāva であるという主張を批判する。

> yady abhāvaś ca nirvāṇam anupādāya tat katham |

---

no.3859, 254b1-2; P no.5259, 302b7-303a1)

[*25] “kleśajanmanor abhāvo nirvāṇam iti ced evaṃ tarhi kleśajanmanor anityatā nirvāṇam iti syāt | anityataiva hi kleśajanmanor abhāvo nānyad ity ato ’nityataiva nirvāṇaṃ syāt | na caitad iṣṭam | ayatnenaiva mokṣaprasaṅgād ity ayuktam evaitat ||”(本論文150ページを参照。)
【訳】涅槃が煩悩と出生との非存在であるというなら、その場合、涅槃は煩悩と出生との無常性であるといえるだろう。なぜなら、煩悩と出生との非存在は無常性にほかならず、別のものではない。したがって、涅槃は無常性にほかならないであろう。しかし、これは認められない。まさに努力なしに解脱［がある］という過失が付随するので、これは決して不合理である。

nirvāṇaṃ na hy abhāvo ’sti yo ’nupādāya vidyate || MMK 25.8

【訳】また、もし、涅槃は非存在であるならば、その涅槃は如何にして依拠せずに［存在する］か？なぜなら、［存在物に］依拠せずに存在するような非存在は存在しない。

この偈頌について、チャンドラキールティは次の論証式を立てる[*26]。

主張	涅槃は［存在物に］依拠して存在する。
証因	非存在（＝無常性）であるから。
喩例	消滅の如し。
肯定的遍充関係	もし涅槃が存在物に依存した非存在であるならば、涅槃は無為法にならない。

表3.4　論証式 IV

これは自立的論証式によって補助された帰謬論法である。この中で、喩例である消滅 (vināśa) は生・住・滅三有為相の滅 (bhaṅga) を指す。『プラサンナパダー』第 7 章において、チャンドラキールティは『倶舎論』等の仏教論書に提唱された「滅無因説」を批判し、滅はすべての時に起こるわけではないという常識にもとづいて、生起 (utpāda) と同様に、滅も原因に依存する[*27]と主張する。したがって、チャンドラキールティの理解の中で、消滅 (vināśa) と非存在 (abhāva) と無常性 (anityatā) の三者はそれぞれ独立した概念であるが、実質的に同じ現象を指す。上述の論証式はこのような理解を反映しているだろう。無常性は存在物に依拠した性質である。そのため、非存在と見なされた涅槃は存在物に依拠した無常性になってしまう。このような涅槃は決して他のものに依拠しない無為法ではない。

ここで、注目すべきなのは、非存在が煩悩と出生の無常性と定義されることである。このような理解は「涅槃は択によって随眠等が再び生じないこと」という経量部の理解と異なる。もし、$\neg B$ の記号で前主張における「非存在」の述語を表すと、それと区別するために、チャンドラキールティに理解された「非存在」の述語は $\neg B'$ で表現されるべきであろう[*28]。

[*26] “nirvāṇaṃ bhaved upādāyaiva tad bhavet | abhāvatvād vināśavat | etad eva spaṣṭayann āha | na hy abhāvo ’sti yo ’nupādāya vidyata iti ||”(本論文151ページ)

【訳】［主張］まさに［存在物に］依拠して、そ［の涅槃］は存在するだろう。［証因］非存在であるから。［喩例］消滅の如し。ほかならぬこれを示すために、［龍樹］は「なぜなら、［存在物に］依拠しない非存在は存在しない」と述べた。

[*27] de La Vallée Poussin (1903-13: 174-175) を参照。

[*28] 前主張の中で、涅槃が煩悩と出生の無と見なされる。すなわち、涅槃は存在しないという意味ではなく、涅槃は煩悩や出生等の物事のある状態を指す。同様に、第一句「涅槃は存在物である」という前主張は単に「涅槃は存在する」という意味ではなく、涅槃は常住であり、固有本質を持つ実体として存在するという存在論的コミットメント (ontological commitment) を含意する。そのため、bhāva と abhāva を字面通りに存在量化詞だけと見なすより、むしろある属性、範疇と理解してよい。本論文が bhāva と abhāva を B と $\neg B$ に記号化することはこのゆえである。

3.3.3　第三句：涅槃は存在物であり且つ非存在である

第三句は「涅槃は存在物であり且つ非存在である」という主張である[*29]。これの詳しい意味について、チャンドラキールティは次のように語っている。

> …kleśajanmanos tatrābhāvād abhāvarūpaṃ nirvāṇam | svayaṃ ca bhāvarūpatvād bhāvarūpam ity ubhayarūpam |
> 【訳】そ［の涅槃］において煩悩と出生がないので、涅槃が非存在の形を持つものである。且つ［涅槃］自身が存在物の形を持つものであるので、存在物の形を持つものである。したがって、［涅槃は］二者の形を持つものである。

この説明から見れば、存在物 (bhāva) というのは涅槃自身が存在物として存在することを指すが、非存在 (abhāva) は涅槃自身の非存在ではなく、煩悩等の非存在を意味するのである。すなわち、この第三句は第一句と第二句の連合である。

この第三句について、チャンドラキールティは『中論』25.12-14 の三頌を踏まえながら、帰謬論法をもって三つの過失を指摘する。まず、チャンドラキールティは bhāva を行の生起 (ātmalābha) と、abhāva を行の消滅と解釈する。もし、涅槃が bhāva と abhāva の両者であるならば、解脱は行の生起と消滅になってしまう。しかし、これは不合理である。そのため、この第三句は成り立たない。

次に、涅槃が bhāva と abhāva 両方の形を持つとするならば、涅槃は両方に依拠するので、他のものに依存しない無為法ではない、と帰結する。

第三に、龍樹とチャンドラキールティは存在物 (bhāva) と非存在 (abhāva) が光と闇のように互いに矛盾している (parasparaviruddha) ものである、と説く。そうであるなら、両者は同一のところに同時に存在することができないと言う。この批判は素朴といえども、矛盾律の意識を明らかに窺わせる。四句分別の第三句が矛盾に落ちると指摘することは、『中論』の 1.7 偈の注釈にも見られる。

> na san nāsan na sadasan dharmo nirvartate yadā |
> kathaṃ nirvartako hetur evaṃ sati na yujyate || MMK 1.7(MacDonald, 2015a: 288)
> 【訳】存在している、存在していない、存在しており且つ存在していない法が生じない時、如何にして原因は［法を］生じさせるものであるか？そうであるなら、［原因が］不合理である。

四句分別の標準版と異なり、『中論』1.7 は四番目の選択肢を欠いている四句分別の用例である。この中で、述語は同じ nirvartate であるが、主語は是・非・是且つ非という構造を有する三種類の法である。これについて、チャンドラキールティは次にように注釈する。

[*29] 漢訳『般若灯論』はこの第三句が「犢子部」の主張である (T1566.30.129a9) と説くが、チベット語訳の *Prajñāpradīpa* と観誓注に未見である。また、犢子部の論書とされた『三法度論』と『舎利弗阿毘曇論』、および宗義書『異部宗輪論』と *Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna* には、似ている主張が見当たらない。

tatra san na nirvartate vidyamānatvāt | asann apy avidyamānatvāt | sadasann api paraspar-aviruddhasyaikārthasyābhāvād ubhayapakṣābhihitadoṣatvāc ca | (MacDonald, 2015a: 289)
【訳】そのうち、(1) 存在しているものは生起しない。現に存在しているからである。(2) 存在していないものも［生起しない］。現に存在していないからである。(3) 存在しており且つ存在していないものも［生起しない］。相互に矛盾する同一のものはないからであり、また、両方の主張に言及された過失を持つからである。

このうち、第三句は互いに矛盾している二項目によって構成される。チャンドラキールティは「存在している」ことと「存在していない」ことの矛盾関係を意識し、この第三句は排除されるべきであると指摘する。したがって、第三句は矛盾する二つの項目を含めると指摘することは、チャンドラキールティに多用される四句分別解釈のパータンの一つである。

3.3.4　第四句：涅槃は存在物でもなく非存在でもない

第四句は「涅槃は存在物でもなく非存在でもない」という主張である。これについて、『中論』25.15 は次にように批判する。

naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇam iti yāñjanā |
abhave caiva bhāve ca sā siddhe sati sidhyati || MMK 25.15
【訳】涅槃は決して非存在でもなく、決して存在物でもないという表現（añjanā）は、非存在と存在物が成立する時、成立する。

チャンドラキールティの注釈によれば、第四句の二つの要件、すなわち「存在物でもない」ことと「非存在でもない」ことはそれぞれ「存在物」と「非存在」の否定として、存在物と非存在に依拠する。存在物と非存在がありえないので、それらの否定もありえない。したがって、この二つの要件からなる第四句は成立できない。同様な第四句批判は『中論』27.18 等の偈頌[*30]にも見られるので、これは龍樹とチャンドラキールティに多用された四句分別解釈のパータンである。

一方、『中論』25.16 およびチャンドラキールティの注釈によると、この第四句は単純な否定ではなくて、存在物と非存在以外の第三者としての涅槃のあり方を念頭に置いて説明される。チャンドラキールティは龍樹の偈頌を平易な散文で次のように書き換えている。

naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇaṃ yadi vidyate |
naivābhāvo naiva bhāva iti kena tad ajyate || MMK 25.16

[*30] aśāśvataṃ śāśvataṃ ca prasiddham ubhayaṃ yadi | sidhyen na śāśvataṃ kāmaṃ naivāśāśvatam ity api || MMK 27.18(叶少勇, 2011b: 492)
【訳】もし無常であり且つ常住である、という両者が成立するならば、常住でもなく無常でもないということも成立するだろう。

yad etan nirvāṇaṃ yadi naivābhāvaṃ naiva bhāvarūpam astīti parikalpyate | kenedānīṃ tad itthaṃvidhaṃ nobhayarūpaṃ nirvāṇam astīty ajyate gṛhyate prakāśyate vā |[*31]

【訳】「もし、非存在でもなく存在物でもないような涅槃があるなら、「非存在でもなく存在物でもない」というのは、誰によって表現されるのか？」
この涅槃がもし決して非存在ではなく、存在物の形を持つものでもないと想定されるなら、この場合、「このような二者の形を持たない涅槃が存在する」というように、誰によって表現され、認識され、あるいは表されるのか？

ここでは、龍樹とチャンドラキールティは存在物と非存在以外のあり方をした涅槃を否定している。そのため、前主張は「涅槃は存在物と非存在以外のものである」ということである。この前主張に対して、チャンドラキールティは次のように批判する。

saṃsārāvasthitaḥ paricchinattīti cet | yadi saṃsārāvasthitaḥ paricchinatti | sa kiṃ vijñānena paricchinatti | uta jñānena | yadi vijñāneneti parikalpyate | tan na yujyate | kiṃ kāraṇam | yasmān nimittālambanaṃ vijñānam | na ca nirvāṇe kiñcin nimittam asti | tasmān na tat tāvad vijñānenālambyate | jñānenāpi na jñāyate | kiṃ kāraṇam | yasmāj jānena hi śūnyatālambanena bhavitavyam | tac cānutpādarūpam eveti | kathaṃ tenāvidyamānasvarūpeṇa naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇam iti gṛhyate | sarvaprapañcātītarūpatvāj jānasyeti | tasmān na kenacin nirvāṇaṃ naivābhāvo naiva bhāva ity vyajyate |[*32]

【訳】もし、輪廻にとどまる者が弁明すると［反論者は］いうなら、［答える。］もし輪廻にとどまる者が弁明するなら、彼は識によって弁明するのか、智によって［弁明するのか］？もし識によって［弁明する］と想定されるなら、それは不合理である。原因はなにか？なぜなら、識は相を対象とするものであるが、しかし涅槃にいかなる相もない。それゆえ、まず、そ［の涅槃］が識によって認識されない。智によっても認識されない。理由はなにか？なぜなら、実に智は空性を対象とするものになるはずであり、また、そ［の涅槃］が不生という性質を持つものにほかならない。というわけで、存在しない本体を持つ［智］によって、涅槃が非存在でもなく、存在物でもないというように、如何にして認識されるのか？智はあらゆる戯論を越えた性質を持つものであるからである。それゆえに、誰によっても、涅槃は非存在でもなく存在物でもないというように表現されないのである。

識は相 (nimitta) を所縁とする。しかし、涅槃はいかなる相も持たない。それゆえ、涅槃は識の対象にならない。一方、智は空性を所縁とする。しかし、このような涅槃は智によっても認識されない。したがって、「涅槃は存在物と非存在以外のものである」という前主張は成立できない。

注目すべきなのは、この前主張の論議領域 (Universe of Discourse) は (1) 存在物と (2) 非存在と (3) それ以外の涅槃という三つで構成されることである。このように、「存在物でも

[*31] 本論文156ページを参照。
[*32] 本論文156ページを参照。

なく、非存在でもない」という言い方は、構成要素 (1) と (2) を排除し、それ以外のものの存在を含意する。このような論証法は Vaiśeṣika と Nyāya 学派の「残余法」[*33] と似ている。

一方、『中論』25.10 において、龍樹は次のように説く。

> tasmān na bhāvo nābhāvo nirvāṇam iti yujyate ||
> 【訳】それゆえ、涅槃は存在物でもなく、非存在でもないということは合理である。

これは四句分別の第一句の否定と第二句の否定をまとめる文である。この文は字面だけでみれば、第四句とほぼ一致している。しかし、この文は存在物と非存在以外のものを仮定しないから、論議領域がただ存在物と非存在の二つで構成される。そのため、この文は第一句の否定と第二句の否定の論理積の陳述のみである。存在物と非存在以外の第三者を予想した第四句はこれと実質的に異なっている。第三者を予想した四句分別の第四句の用例は『中論』2.8 にも窺える。

> gantā na gacchati tāvad agantā na eva gacchati |
> anyo gantur agantuś ca kas tṛtīyo 'tha gacchati || MMK 2.8
> 【訳】まず、(1) 行く者は行かない。(2) 行く者でない者は決して行かない。(4) 行く者と行く者でない者以外のいかなる第三者が行くのか？

これは第三句を欠いた四句分別の用例である。そのうち、第四句の前主張は明確に行く者と行く者でない者以外の第三者に言及する。龍樹はこのような第三者の存在を認めていない。第三者の存在を予想した後に、否定する点で、『中論』25.16 は 2.8 頌の用例と全く同じである。したがって、これは龍樹とチャンドラキールティに多用された四句分別解釈のパータンである。

このように第三者の存在を含意する第四句は当然 $\neg Ax \wedge \neg\neg Ax$ の論理式に記号化できない。中村 (1954: 223-231)、Robinson (1957: 291-308)、Westerhoff (2009: 75) 等の先学に提示された $\neg Ax \wedge \neg\neg Ax$ の論理式は上述の第四句の意味を見落とす。この記号は龍樹とチ

[*33] 例えば、*Nyāyabhāṣya* において、
tadupalabdhir itaretaradravyaguṇavaidharmyāt || 3.1.73
na śabdena guṇena saguṇam ākāśam indriyaṃ bhavati | na śabdaḥ śabdasya vyañjakaḥ na ca ghrāṇādīnāṃ svaguṇagrahaṇaṃ pratyakṣaṃ nāpy anumīyate | anumīyate tu śrotreṇākāśena śabdasya grahaṇaṃ śabdaguṇatvaṃ ca ākāśasyeti | pariśeṣaś cānumānaṃ veditavyam | ātmā tāvat śrotā na karaṇaṃ manasaḥ śrotratve badhiratvābhāvaḥ pṛthivyādīnāṃ ghrāṇādibhāve sāmarthyaṃ śrotrabhāve cāsāmarthyam | asti cedaṃ śrotram ākāśaṃ ca śiṣyate pariśeṣād ākāśaṃ śrotram iti | NBh(Tailanga, 1896: 158)
【訳】「そ［の音声］の知覚は、互いに実体と属性との相違性にもとづくのである。」
音声という属性によって、属性を有する虚空は感官にならない。音声は音声を現し出すものではない。また、嗅覚手段等が自らの属性を把捉することは、直接知覚でもなく、推理されもない。しかし、聴覚手段である虚空を通じて音声に対する把捉、および虚空が音声を属性とするものであることは推理される。なぜなら (ca)、残余法 (pariśeṣa) が推理であると知られるべきである。まず、アートマンは聴者であり、手段ではない。意が聴覚手段であるならば、聾者であることはない。嗅覚手段等がなければ、地等の能力がある。だが、聴覚手段がなければ、能力はない。しかし、この聴覚手段がある。なぜならば (ca)、虚空が残される。残余法にもとづいて、虚空が聴覚手段である。以上である。

ャンドラキールティの原意からずれると言わざるを得ない。[*34]

3.4　分析

以上のように、チャンドラキールティによる『中論』25.4-16 の四句分別理解を分析した。これから、論理学とラッセルの記述理論にもとづいて、四句分別論法を考察する。まず、

命題 1　涅槃は存在物 (bhāva) である。

命題 2　涅槃は非存在 (abhāva) である。

この二つの命題の関係は論理学上の矛盾関係 (controdiction) あるいは反対関係 (contrariety) と見なされうるのか。アリストテレス論理学の中で、矛盾関係の成立は矛盾律と排中律との両方を満たさなければならないが、反対関係の成立は矛盾律のみを満たす。すなわち、矛盾した命題どうしはどんな場合にも反対の真理値を取るが、反対の命題どうしは同時に真になれないが、同時に偽になれる。

「涅槃は存在物 (bhāva) である」と「涅槃は非存在 (abhāva) である」という二つの命題はともにチャンドラキールティにより否定される。このため、両命題は同時に真ではないが、ともに偽である。この両命題はちょうどアリストテレス論理学に説かれた反対関係であると考えられるかもしれない。しかし、無自性の立場に立っている中観派にとって、涅槃は自性の点で存在しないものである。すると、「涅槃」は指示対象の存在しない主語である。そのため、上述の命題の真偽問題を考察する際、主語 (subject term) の指示対象が存在しない (the logic of nondenoting or vacuous singular term) という点に注意しなければならない。チャンドラキールティの否定にもとづいてのみ、この両命題の関係を「反対」と判断することは厳密ではない。

アリストテレスは『範疇論』(*Categories*) 第 10 章において主語の指示対象の実在しない命題を次のように説明する。

> “Yet not even with these is it necessary always for one to be true and the other false. For if Socrates exists one will be true and one false, but if he does not both will be false; neither ‘Socrates is sick’nor ‘Socrates is well’will be true if Socrates himself does not exist at all.”
> *Categories* Chap.10.13b (Ackrill, 2002: 37)

“Socrates is ill.”と“Socrates is well.”という反対する二つの命題に関して、もしソクラテスが現に存在しているとするならば、両命題の一つは真であるが、もう一つは偽である。しかし、ソクラテスが現に存在していないとするならば、両命題はともに偽である。こういうふうに、アリストテレスが主語の指示対象が実在しない命題の真偽を判断する。

それに対して、仏教論理学は、一般的に基体 (dharmin) の実在しない主張命題を「宗過」

[*34] Seyfort Ruegg (1977: 16-8) は『中論』25.15-6 と 25.10cd との上述の区別を意識して、それぞれ定立的否定 (paryudāsapratiṣedha) と非定立的否定 (prasajyapratiṣedha) であると説明して、最後に“‘neither ... nor’sentences”にはこのような二通りの機能があると結論する。

や「因過」として排除する。例えば、『入正理論』(*Nyāyapraveśa*) は次の例を挙げている。数論派の人は仏教徒に対して「アートマンは精神的ものである」という主張命題を立てる。しかし、仏教徒にとって、dharmin である「アートマン」は成立しないものである。そのため、この主張命題は「所別不極成」(aprasiddhaviśeṣya) の宗過を犯す*35と説く。また、同論はこのような主張命題はさらに「所依不成」(āśrayāsiddha) の因過 (hetvābhāsa) を犯す*36と指摘する。この「所依不成」の因過は「主題所属性」(pakṣadharmatva) と関わる不成因 (asiddha) の一種類である。証因が基体の性質であるはずなので、基体は証因の拠り所になる。しかし、論争の片方にとって、拠り所であるはずの基体が成り立たない場合、因三相の「主題所属性」は成立できなくなる。そのため、証因は「所依不成」(āśrayāsiddha) の過失を犯すことになる。以上のように、仏教論理学は、基体 (dharmin) の実在しない主張命題の真偽を問わず、形式上、このような主張命題を「所別不極成」(aprasiddhaviśeṣya) の宗過と「所依不成」(āśrayāsiddha) の因過を起こすものとして排除する。

このような仏教論理学の伝統を踏まえ、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』第 1 章においてバーヴィヴェーカを批判する際、asiddhādhāra という「宗過」(pakṣadoṣa) と āśrayāsiddha の因過 (hetudoṣa) に言及する。彼の説明は次のようである。

> api ca yadi saṃvṛtyotpattipratiṣedhanirācikīrṣuṇā viśeṣaṇam etad upādīyate, tadā svato ’siddhādhāraḥ pakṣadoṣa āśrayāsiddho vā hetudoṣaḥ syāt, paramārthataḥ svataś cakṣurādyāyatanānām anabhyupagamāt || …sāṃvṛtānāṃ cakṣurādīnāṃ paramārthata utpattipratiṣedhād utpattipratiṣedhaviśeṣaṇaṃ paramārthagrahaṇam iti cet, evaṃ tarhy evam eva vaktavyaṃ syāt – sāṃvṛtānāṃ cakṣurādīnāṃ paramārthato nāsty utpattir iti | na caivam ucyate | ucyamāne ’pi parair dravyasatām eva cakṣurādīnām abhyupagamāt prajñaptisatām cānabhyupagamāt parato ’siddhādhāraḥ pakṣadoṣaḥ syād iti na yuktam etat || PsP Chap.1(MacDonald, 2015a: 171-173)
> 【訳】また、さらに、もし世俗［諦］において生起の否定を排除しようとする［バーヴィヴェーカ］によって、この［勝義上という］限定要素が採用されるならば、その場合、［バーヴィヴェーカ］自身から、基盤が成立しないという主張命題の過

*35 “aprasiddhaviśeṣyo yathā | sāṃkhyasya bauddhaṃ prati cetana ātmeti ||”*Nyāyapraveśa*(Tachikawa, 1971: 141)。
【訳】限定される［基体］が成立しない［という主張命題の過失がある］。例えば、数論派の人が仏教徒に対して「アートマンが精神的なものである。」と［主張する］ように。
主張命題の中で、基体が論証対象に限定されるので、基体は「所別」(viśeṣya)、すなわち限定されるものであるが、論証対象は「能別」(viśeṣaṇa)、すなわち限定要素である。所別としてのアートマンが数論派にとって成立するが、諸法無我を主張する仏教徒から決して認められない。

*36 『入正理論』の例は次のようである。
“dravyam ākāśaṃ guṇāśrayatvād ity ākāśāsattvavādinaṃ praty āśrayāsiddhaḥ ||”*Nyāyapraveśa*(Tachikawa, 1971: 142)。
【訳】「虚空は実物である。属性 (guṇa) の拠り所であるから。」と。虚空非実在論者に対して、［属性の］拠り所［である虚空］が成立しない。
この論証式は「アートマンが精神的なものである」という主張命題と同様に、基体の存在は立論者だけに認められるが、対論者に決して承認されない。したがって、『入正理論』の中で、基体の実在しない論証式は前後に「所別不極成」の宗過と「所依不成」の因過を犯す。
āśrayāsiddha という過失は『正理門論』の中で、「主題所属性」(pakṣadharmatā) と関わる因過の一つとして数えられ、「有法不成」(T1628.32.1b21) とも呼ばれる。桂 (1977: 125) を参照。

失、あるいは拠り所の不成立という証因の過失があるだろう。勝義上、［バーヴィヴェーカ］自身から、眼等の処が承認されないからである。［中略］もし［バーヴィヴェーカは］世俗的な眼等にとって、勝義上の生起が否定されるから、「勝義」という語が生起の否定の限定要素である、というならば、［チャンドラキールティは答える。］このようであるならば、まさに次のように言われるべきであろう。「世俗的な眼等は、勝義上生起しない」と。しかし、［バーヴィヴェーカの主張命題は］このように［バーヴィヴェーカに］言われない。［バーヴィヴェーカによりこのように］言われていても、対論者たちにより、「眼等は実有にほかならない」と承認されるから、また、「［眼が］施設有である」と承認されないから、対論者側から［見れば］、基盤が成立しないという主張命題の過失があるだろう。というわけで、これは不合理である。

バーヴィヴェーカは『般若灯論』において「勝義上、眼等の内処は生じない」という自立的論証式*37の主張命題を立てている。主張命題の基体 (dharmin) は論証対象と証因の基盤 (ādhāra)、あるいは拠り所 (āśraya) である。立論者であれ、対論者であれ、論争の片方にとって、もし主張命題の基体が成立しないならば、このような主張命題は asiddhādhāra という「宗過」と āśrayāsiddha の因過を犯す。

バーヴィヴェーカの自立的論証式の中で、「勝義上」という限定要素が基体である「内処」を限定する時、一切皆空を提唱する中観論者にとって、「内処」は決して成立しない。これゆえ、中観派自派からみれば、この主張命題は asiddhādhāra と āśrayāsiddha の過失に陥るに間違いない。一方、もし「勝義上」という限定要素が述語である「不生」を限定するとする場合、基体である世俗的な内処が対論者により承認されないから、対論者からみれば、この主張命題は同様に asiddhādhāra と āśrayāsiddha の過失に陥る。

ここで、チャンドラキールティは上述のように「勝義上」という限定要素批判をきっかけとして、空性論者と非空性論者は世俗と勝義のいずれの点でも事物に対して共通な立場を持たない*38と語る。すなわち、空性論者にとっては、眼等は世俗的な施設有であるが、勝義の点で空である。しかし、非空性論者にとっては、眼等は実有であり、世俗的なものではない。このように論争の両方は基体である眼等の事物に対して世俗と勝義のいずれの点でも共通な立場を持っていない。そのため、「勝義上」という限定要素を基体 (dharmin) に付けるかどうかにかかわらず、両方とも承認した主張命題はあくまでも不可

---

*37 チャンドラキールティの引用は次のようである。
“na paramārthata ādhyātmikāny āyatanāni svata utpannāni vidyamānatvāc caitanyavat ||”*Prasannapadā* Chap.1(MacDonald, 2015a: 167-168)
【訳】［主張］勝義上、内処は自身から生じない。［理由］存在しているものであるから。［喩例］精神の如し。

*38 na tv evaṃ cakṣuḥsāmānyaṃ śūnyatāśūnyatāvādibhyāṃ saṃvṛtyāṅgīkṛtaṃ nāpi paramārthata iti …*Prasannapadā* Chap.1(MacDonald, 2015a: 177)
【訳】しかし、眼一般が空性論者と非空性論者等によって、同様に世俗上承認されるわけでもなく、［同様に］勝義上［承認される］わけでもない。
この中で、「眼一般」(cakṣuḥsāmānya) とは眼の共通相 (sāmānyalakṣaṇa) ではなく、異なった形而上学の立場を持つ各学派に皆承認されうる世間的な常識である一般的な眼である。

能である。したがって、チャンドラキールティにとって、バーヴィヴェーカの自立的論証式は asiddhādhāra という「宗過」(pakṣadoṣa) と āśrayāsiddha の因過を犯すものである。

上述の内容からみれば、チャンドラキールティは当時仏教論理学の知識を熟知し、自由に駆使していたことがわかる。チャンドラキールティは仏教論理学の伝統を踏まえ、主語の指示対象が実在しない命題の真偽を —— 簡略といえども —— 論じている。涅槃と関わる四つの選択肢をすべて否定することは、まさに涅槃の非実在性を論証するためである。

イギリスの論理学者ラッセル (Bertrand Russell) は、ドイツの論理学者、数理論理学の祖とされたフレーゲに導入された存在量化詞[*39]を踏まえ、1905 に発表した *On Denoting*(Russell, 1905: 479-493) の中で記述理論 (Theory of Description) を提示する。

従来真偽を判断できなかった命題、例えば、「現在のフランス王は禿である」という命題を「あるものが存在し、そのものは一つであり、フランスの王であり、かつ禿である」$\exists x((Kx \wedge \forall y(Ky \rightarrow y = x)) \wedge Bx)$ と記号化することを通じて、この命題の真偽を判断できるように解釈する。ラッセルの記述理論によれば、涅槃に関する命題 1 と命題 2 はともに「偽」になりうる。これはチャンドラキールティの判断と合致している。

また、ラッセルの記述理論の視点から、「涅槃は存在物である」等は主語の指示対象の存在しない命題である。そのため、この四つの選択肢を次のように記号化できる (x: 個物；N: 涅槃；B: 存在物[*40])。

[*39] フレーゲ (Gottlob Frege, 1848-1925) は『概念記法』(*Begriffsschrift*) の中で存在量化詞を導入する。

[*40] 記号論理学からみれば、bhāva という述語が疑わしい。龍樹乃至仏教論理学は、一般的に「存在性」や「非存在性」を基体 (dharmin) の性質 (dharma) として認めている。例えば、次の偈頌がある。

na san nāsan na sadasan dharmo nirvartate yadā |
kathaṃ nirvartako hetur evaṃ sati na yujyate || MMK 1.7

【訳】存在している、存在していない、存在しており且つ存在していない法が生じない時、如何にして原因は［法を］生じさせるものであるか？そうであるなら、［生じさせるものとしての原因は］不合理である。

ここでは、「存在している」(san) と「存在していない」(asan) 等は主語である法を修飾する限定要素である。そのため、存在性と非存在性は主語である法の性質である。

また、ダルマキールティ以降、非知覚 (anupalabdhi) は三種類の為自推理 (svārthānumāna) の一つになる。非知覚というのは、現に存在していない基体（例えば壺）の存在性 (sattā) という性質を想定し、別のもの（例えば地面）の知覚にもとづいて、基体の非存在性を論証する推理方法である。

「存在性」と「非存在性」を事物の性質と見なすことは仏教乃至インド哲学の特有の考え方ではない。中世ヨーロッパの神学者カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis) は神の存在証明において「存在性」を神の性質として理解する。したがって、「存在性」と「非存在性」を事物の性質と見なすことは幅広い地域にわたって各文化の論理学者・哲学者により共有される見解である。

現在の数理論理学の祖とされるフレーゲ (Frege) は、このようなやり方を一掃し、「存在」を存在量化詞と規定する。また、記号論理学の中で、「存在」を表す特称量化子 ∃ は量化子の一つであり、個体を修飾せず、文関数 (statement function) のみを修飾すると規定される。すなわち、個体を修飾する $\exists x$ の記号は無意味であるが、文関数を修飾する $\exists x Ax$ の記号は正しい。

もし「涅槃は bhāva である」という命題を字面通りに「涅槃は存在する」と翻訳すると、$\exists n$(n: 涅槃) のような形式上正しくない論理式になってしまう。同時に、龍樹とチャンドラキールティの意図を完全に見失う恐れがあるだろう。したがって、本論文は bhāva を一つの文関数として扱う。

1. 涅槃は存在物である	$\exists x((Nx \ \wedge \ Bx)$
2. 涅槃は非存在物である	$\exists x(Nx \ \wedge \ \neg Bx)$
3. 涅槃は存在物且つ非存在である	$\exists x(Nx \ \wedge \ (Bx \wedge \neg Bx))$
4. 涅槃は存在物でもなく、非存在でもないものである	$\exists x(Nx \wedge \forall y((\neg By \wedge \neg\neg By) \leftrightarrow x = y))$

表3.5　涅槃四句分別の記号化

また、これらは涅槃に関するそれぞれ独立した四つの選択肢であるので、これらを論理和の記号 $\vee$ で繋ぐべきであろう。すなわち、

$\exists x(Nx \wedge Bx) \vee \exists x(Nx \wedge \neg Bx) \vee \exists x(Nx \wedge (Bx \wedge \neg Bx)) \vee \exists x(Nx \wedge \forall y((\neg By \wedge \neg\neg By) \leftrightarrow x = y))$

これらに対して、チャンドラキールティの否定は四つの命題の否定[*41]であるので、次のように記号化できる。

1. $\neg\exists x(Nx \ \wedge \ B'x)$
2. $\neg\exists x(Nx \ \wedge \ \neg B'x)$
3. $\neg\exists x(Nx \ \wedge (B'x \wedge \neg B'x))$
4. $\neg\exists x(Nx \wedge \forall y((\neg B'y \wedge \neg\neg B'y) \leftrightarrow x = y))$

表3.6　チャンドラキールティの否定

これらはすべてチャンドラキールティの主張である。そのため、この四つの命題を $\wedge$ で繋ぐべきである。

$\neg\exists x(Nx \wedge B'x) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge \neg B'x) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge (B'x \wedge \neg B'x)) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge \forall y((\neg By \wedge \neg\neg By) \leftrightarrow x = y))$

チャンドラキールティにとって、このような個物 x は自性の点で存在しない。そのため、上述の四つの否定命題のいずれも真である。このように、チャンドラキールティは四句分別の四つの主張をすべて否定しても、矛盾律や排中律のいずれにも違反していない。

---

*41 『プラサンナパダー』第 1 章の中で、チャンドラキールティは「四不生」を論じる際、バーヴィヴェーカから非定立的否定 (prasajyapratiṣedha) と定立的否定 (paryudāsapratiṣedha) という二種類の否定の区別を継承しながら、四句分別に対する否定は全部非定立的否定 (prasajya) であると規定する。つまり、諸法が自身から生じないという命題は単純な否定であり、「他のものから生じる」ことを含意しないという。

“nanu ca naiva svata utpannā ity avadhāryamāṇe parata utpannā ity aniṣṭaṃ prāpnoti | na prāpnoti, prasajyapratiṣedhasya vivakṣitatvāt parato ’py utpādasya pratiṣetsyamānatvāt |”PsP Chap.1(MacDonald, 2015a: 139)

【訳】［反論者が言う。］いや。しかし、「決して自ら生じない」と判断されている時、「別のものから生じる」という望ましくないことを得るのではないか。［チャンドラキールティは答える。］得ない。非定立的否定が意図されているのだから、別のものからの生起も否定されるであろうからである。

Westerhoff (2009: 76-77) はチャンドラキールティのこの規定にもとづいて、非定立的否定と定立的否定の二重否定律等の可能性を検討する。非定立的否定は純粋な否定であり、別のものを肯定的に含意しない。そのため、非定立的否定には二重否定律の運算は成立しない。

本論文は四句分別に対する否定が非定立的否定であるというチャンドラキールティの意見を踏まえ、この否定は述語の否定ではなく、前主張全体の否定であると理解している。

3.5　小結

前章において、筆者はチャンドラキールティの「生死即涅槃」理解を分析した。チャンドラキールティにとって、取り除かれるべき生死と得られるべき涅槃はともに世俗諦において設定されたものに過ぎず、涅槃は単に声聞独覚を休憩させるために設定された「化城」である。したがって、大乗仏教徒は涅槃に対しても執着すべきでなく、際限のない衆生救済を放棄せずに続けるべきである。本章では、チャンドラキールテはどのように四句分別論法を用い、実体視された涅槃を否定するのかを考察した。

チャンドラキールティ乃至中観派が「四句分別」論法を多用することは、仏教論理学が主語の指示対象の実在しない命題を積極的に扱わない伝統と関係する。仏教論理学では、このような命題は形式上、「所別不極成」(aprasiddhaviśeṣya) の宗過と「所依不成」(āśrayāsiddha) の因過を犯すものである。チャンドラキールティは仏教論理学を踏まえながら、言語表現のすべての可能性を尽くす四句分別の四つの命題を否定し、実在論者の主張命題に潜在した形而上学の立場を批判する。チャンドラキールティのこの意図を示すために、本論文はラッセルの記述理論にもとづいて、涅槃に関する四句分別およびそれに対するチャンドラキールティの否定の記号化を試みた。これらの論理式からみれば、チャンドラキールティは矛盾律と排中律に違反していない。一方、『中論』には、別様な四句分別の用例も窺えるので、一つの理論でこのすべての四句分別を説明することは不可能である。これは今後の研究に委ねたい。

第 4 章

一字不説：チャンドラキールティの『中論』25.24 理解

本論文第 2 章では、チャンドラキールティの涅槃観を考察する際に、戯論の意味と『中論』25.24 に提唱された「戯論寂静」を簡略に論じてみた。チャンドラキールティの理解の中で、戯論は内在的な分別の原因、乃至外在的言語表現までの一連のものごとを指す。戯論寂静の境地にとどまった仏は内的に概念、心作用を停止し、外的には「一字不説」、つまり完全に沈黙している。この「一字不説」は仏の解脱境地の功徳を誇るための説法観の一種である。本章はこの説法観を中心に、チャンドラキールティの説明を考察してみる。

Lamotte (1976: 12) と丹治 (2002: 19-22) は、仏の説法観を五種類に分ける。

1. 『二夜経』(*Dharmarātridvayasūtra*) 等：四十五年の間に如来の教説は全部真実である。
2. 『十誦律』等：仏が言語の才能をもち、アーリヤ語だけではなく、多数の言語に通じる。
3. 大衆部等：一音説法 (ekasvareṇa, ekakṣaṇavāgudāhāreṇa)。
4. 大衆部等：一字不説。
5. 『維摩経』等：仏は言葉と沈黙以外の方法さえも用いて教化する。

Lamotte (1976: 12) は、この五種類の説法観は必ずしも互いに矛盾しているわけではなく、仏は様々な状況に応じてある説法の仕方を用いる[*1]、と結論する。歴史の視点からみれば、これらの説法観はそれぞれ特定の部派や経典と深く関係している。つまり、これらの説法観には部派的な色彩が潜んでいる。また、同じ説法観であっても、これに対する説明は文献ごとに異なっている。

『中論』25.24 に提示された一字不説の説法観は上述の四番目にあたるものである。しかしながら、『中論』は同時に仏が様々な説法対象の能力に応じて多様な教説を説くことに

[*1] “In conclusion. I do not think that the theses referred to above are mutually exclusive. The Buddhas expound the Law by sermons, by a single sound, by silence or quantities of other means according to the needs or exigencies of beings to be disciplined. It is solely through expediency that they adopt such or such a means.”(Lamotte, 1976: 12)。

も言及する。例えば、『中論』18.8 は次のように述べている。

> sarvaṃ tathyaṃ na vā tathyaṃ tathyaṃ cātathyam eva ca |
> nāivātathyaṃ nāiva tathyam etad buddhānuśāsanam || MMK 18.8
> 【訳】(1) すべては真実である。あるいは、(2) 真実ではない。(3) 真実であり且つ真実ではない。(4) 決して非真実でもなく、決して真実でもない。これが仏の教えである。

ここでは、この四つはすべて仏の教説として承認されている。それでは、『中論』において、仏の説法と一字不説との矛盾はどのように解決できるのか。これについて、龍樹自身に提唱された「二諦説」は一つの安定な提案と一般的に思われる。つまり、勝義上、如来は沈黙を保ち説法をしないが、世俗上如来は説法すると考えられる。例えば、『般若灯論』は『中論』25.24 の注釈の中で、次のように述べている。

> sangs rgyas kyis ni gang du yang || su la'ang chos 'ga'am bstan to || zhes bya ba ni don dam par chos thams cad kun brtags pa'i bdag nyid du yongs su ma grub pa'i phyir dang | brjod du med pa'i phyir ro || PP(D no.3853, 239b4-5)
> 【訳】「仏はどこにおいても、あるいは誰に対しても、いかなる法も教えなかった」というのは、勝義上、すべての法は構想された本質を持つものとして成立しないから、また言葉で表現されないから。

ここでは、バーヴィヴェーカは「勝義上」という限定要素を付加し、如来の一字不説の理由を述べている。しかし、「勝義上」等の限定要素を辛辣に批判したチャンドラキールティにとって、限定要素を付加するという提案は決して容認できない。そのかわりに、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』において、『如来秘密経』等の諸経典に説かれた一字不説と虚空説法を援引し、仏の説法と不説を調和する。そのため、大乗仏教の一派としての中観派は大乗経典および大乗の一般観念をどのように理解するのかという点で、一字不説論は重要な手がかりを示唆している。

そこで、チャンドラキールティの一字不説理解を明らかにするために、本論はまずチャンドラキールティの時代までの一字不説論の経緯を整理する。数多くの文献から、本論文はおもに『異部宗輪論』、『如来秘密経』、『楞伽経』の三つを選んで詳細に論じてみる。

『異部宗輪論』は部派仏教の異論を記録するので、「一字不説」の起源およびこれをめぐる論争を考察する上で、最も重要な一次資料である。本章第一節はそれにもとづいて、大衆部の一字不説論を考察する。

『如来秘密経』はチャンドラキールティに援用され、彼の一字不説理解の最も重要な一次資料である。そこで、第二節では、従来の研究に重視されなかった『如来秘密経』の一字不説論を分析し、この経典は「虚空説法」説を導入することによって如来の不説と説法の矛盾を調和することを分析する。

一方、『楞伽経』は『如来秘密経』から一字不説の説法観を継承し、東アジアの仏教圏、特に禅宗の「不立文字」というスローガンの成立に対して多大な影響を与えた。同経は

『如来秘密経』の「虚空説法」説を捨て、そのかわりに「三仏」説を導入し、「法性仏」は説法せず、「所流仏」・「変化仏」は衆生に説法するという説法観を提示する。チャンドラキールティは『入中論』の中で、この三仏説にもとづいた一字不説論を受け取っている。そこで、本章の第三節ではチャンドラキールティに影響を与えた『楞伽経』の一字不説論を考察する。

最後に、チャンドラキールティは一字不説論をどのように理解するのか、どのように教証と理証を駆使し一字不説論を説明するのかを考察する。結論を先に言えば、次の二点にまとめられる。

1. チャンドラキールティは「相」と「空性」と「無我」の三視点から仏の一字不説を解釈する。仏は空性あるいは法性において無我を証得する際に、心の活動が停止するので、心に増益された言語対象としての相も停止し、言語活動も最後に停止することになる。したがって、如来は説法しない。
2. 『プラサンナパダー』では、チャンドラキールティは虚空説法で如来の説法と不説の矛盾を調和する『如来秘密経』を重んじる。『入中論』では、チャンドラキールティは虚空説法説を提示すると同時に、仏身論にもとづいた「受用身・変化身説法」も説く。これはチャンドラキールティの『如来秘密経』と『楞伽経』の一字不説論を総合する立場を示す。

4.1 『異部宗輪論』における大衆部の一字不説論

部派仏教以来、各学派は仏の説法観について、激しく論じていた。当時の論争の実情は世友 (Vasumitra) 作とされた *Samayabhedoparacanacakra*[*2]に窺える。大衆部 (Mahāsaṅgika)・一説部 (Ekavyavahārika)・説出世部 (Lokottaravāda)・鶏胤部 (Kurkuṭika, Gokulika) が代表する大衆部系の部派は、仏の説法について、次のように述べている。

1. 失訳『十八部論』:「如來一切説、皆是轉法輪。盡説一切事、一切相、一切義。［中略］無所言説。常一其心。」 (T2032.49.18b12-13, 15-16)
2. 真諦訳『部執異論』:「如來所出語皆為轉法輪。如來一音能説一切法。如來語無不如義。［中略］如來所出語、皆令衆生生愛樂心。如來心恒在觀寂靜不動。」(T2033.49.20b28-c4)
3. 玄奘訳『異部宗輪論』:「諸如來語皆轉法輪。佛以一音説一切法。世尊所説無不

[*2] 部派分裂について、失訳『十八部論』(T2032)、真諦訳『部執異論』(T2033)、玄奘訳『異部宗輪論』(T2031)、『文殊師利問経』(T468) の「分部品第十五」、『舎利弗問経』(T1465)、チベット語訳 *Samayabhedoparacanacakra*(D no.4138; P no.5639)(寺本・平松, 1974b)、バーヴィヴェーカの *Tarkajvālā* 第四章の一部 =*Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna*(D no.4139; P no.5640)(Eckel, 2008)、*Dīpavaṃsa* の第五章、*Mahāvaṃsa* の第五章は最も重要な一次資料である。だが、この中で仏の説法観を論じるのは『十八部論』(T2032)、『部執異論』(T2033)、『異部宗輪論』(T2031)、チベット語訳 *Samayabhedoparacanacakra* の四つのみである。この四本は同本異訳ではなく、互いに微細な相違が存在するので、編纂・増補の形が見られる。例えば、犢子部の宗義に関しては、真諦訳『部執異論』には別の三本よりもっと詳しい記録がある。

如義。［中略］佛一切時不説名等、常在定故。」　(T2031.49.15b27-c3)

4. “de bzhin gshegs pa’i gsung thams cad ni chos kyi ’khor lo rjes su bskor ba’o || thams cad rdzas su mngon par gsungs pa’o || thams cad don ci lta ba bzhin nyid du gsungs pa nyid do || …zhus na dgongs par yang mdzad do || med(ming P) ces kyang mi gsung ste | rtag tu mnyam par gzhag pa nyid kyi phyir ro ||*3”(D no.4138, 142b2-3,4)

大衆部系の部派にとって、如来はあたかも超人的な存在であり、仏の身語意がそれぞれ優れた性質 (guṇa) を持っている。上述の玄奘訳には、一音説法*4と「不説名等」つまり一字不説という二種類の仏の説法観が見られる。この両説の間の「中略」と記された部分には、仏身に関する内容が挿入される。そのため、仏の説法観の内容は一度中断される。また、チベット語訳と『十八部論』はともに一字不説の説法観のみに言及している。真諦訳『部執異論』は一音説法のみを説いている。この四つの訳本からみれば、一音説法と一字不説は *Samayabhedoparacanacakra* の祖本に存在せず、伝承中、独立した二つの説法観としてテキストの中に編入されたものである*5。

また、四つの訳本はすべて「禅定に語を発しうる」ことを大衆部の宗義として記している*6。この宗義はその理由を禅定に求める一字不説論と矛盾している。これは、一字不説が新たに増補された内容であることを示唆している。

4.2　『如来秘密経』における一字不説論

バーヴィヴェーカの『般若灯論』とチャンドラキールティの『プラサンナパダー』は『中論』25.24 に提示された一字不説を解釈する際、『如来秘密経』を教証として引用する。

『如来秘密経』(*Tathāgataguhyasūtra*; 略号 TG)*7の梵本写本の存在はShāstri (1917: 17-21) の報告により確認される。この目録で、Shāstri は「如来語密不思議品」の一部分を翻刻したのちに、この経典が金剛乗に属すると位置づける。しかし、漢訳年代*8および『大智度

*3 【訳】如来のすべての語は法輪を転ずる。すべて［の語］は実物を説く。すべて［の語］は如実に対象を説くにほかならない。［中略］名というものも説かない。常に禅定するから。

*4 「一音説法」について、説一切有部の批判は『阿毘達磨大毘婆沙論』巻七十九 (T1545.27.410b21-29) と旧訳『阿毘曇毘婆沙論』巻四十一 (T1546.28.307a20-b1) に見られる。要するに、説一切有部は (1)「讃佛頌」、(2)「一音」は梵音、(3)「一音」は仏が多言語を自由に使うこと、(4)「一音」は同一の利益をもたらす音である、という四つの解釈を提示しながら、「一音」説を否定的に評価した。これに対して、上座部大寺派は五世紀前半の『分別論注』(*Sammohavinodanī*) において、「一音」はマガダ語であると提唱する。大寺派の仏語論について、馬場 (2015: 33-53) と馬場 (2015: 1-8) を参照。

*5 説一切有部の『阿毘達磨大毘婆沙論』と旧訳『阿毘曇毘婆沙論』には、「一音説法」批判は見られるが、「一字不説」批判は筆者の知っている限りに、「佛常在定」批判を除けば、あまりと見られない。これも「一字不説」説は「一音説法」より新たに成立したことを示唆していると考えられる。

*6 「禅定中間亦有言説。」　『十八部論』(T2032.49.18b23-24)
「若心在定、亦得有語」　『部執異論』(T2033.49.20c16-17)
「在等引位有發語言」　『異部宗輪論』(T2031.49.15c15)
“mnyam par gzhag pa’i tshig brjod pa yod do ||”(D no.4138, 143a3)

*7 『如来秘密経』の一字不説論について、王 (2017a) も参照。

*8 「密迹経五巻或云密迹金剛力士経、或七巻、太康九年 (288 年) 十月八日出。」　『出三蔵記集』巻 2(T2145.55.7b18)。

論』*9に屢々引用されたという事実から推せば、この経典は如来の三密および金剛手菩薩の物語を中心として展開しているが、早い時期の大乗経典と見なしてもよい。

一字不説論は『如来秘密経』「如来語密不思議品」の中核をなし、『大智度論』、『大乗荘厳経論』(*Mahāyānasūtrālaṃkāra*, MSA)*10、『プラサンナパダー』*11、『楞伽経』(*Laṅkāvatārasūtra*, LA)*12、*Tattvasaṃgraha*(TSg) と同 *pañjikā**13、クマーリラ (Kumārila) の *Ślokavārttika*(ŚV)*14等の文献に引用され、大乗仏教の通説として仏教の内外に知られていたことがわかる。禅宗の立場を示す「不立文字」という一句の成立に多大な影響を及ぼしたことも看過できない。だが、従来の研究は禅宗の不立文字説と『楞伽経』との関係を中心とするが、『如来秘密経』をほとんど無視してきた*15。本稿では、一字不説論は『如来秘密経』においていかに説かれるのかを考察した上で、一字不説と如来説法の矛盾の解消を目指す本経の意図を明らかにしたい。

『如来秘密経』の漢訳とチベット語訳には総計で三つある。翻訳の年代順に、以下のとおりである。

1. 西晋太康九年十月（288 年）竺法護訳『密跡経』(T no.310)*16。唐代、菩提流志によって「密跡金剛力士会第三」として『大宝積経』に編入された*17。
2. 9 世紀初頭に活躍した翻訳官 Ye shes sde によるチベット語訳 *'Phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* (D no.47 ka 100a1-203a7; P no.760-3 tshi 113b4-233a1)。
3. 11 世紀宋代の法護訳『仏説如来不思議秘密大乗経』(T no.312)。

上述の三訳とサンスクリット写本の対応関係は、苫米地等流氏の研究ノートおよび伊久間 (2013: 888-884) により明らかにされた。要するに、「法護訳とチベット訳はともに 25 章に分けられ、章題もほぼ一致している。竺法護訳は章立てをしていない。それに対し

---

*9 「究摩羅耆婆 (Kumārajīva) 法師、以秦弘始三年 (401 年)、歳在辛丑、十二月二十日至長安。四年夏、於逍遙園中、西門閣上、爲姚天王、出此釋論。七年 (405 年) 十二月二十七日乃訖。」 『大智度論』巻百 (T1509.25.756c9-12)。

*10 Lévi (1907: 79-81)。

*11 de La Vallée Poussin (1903-13: 366-367,539)。

*12 南條 (1923: 142-144;240)。

*13 tasmin dhyāna(S: jñāna)samāpanne cintāratnavad āsthite |
niścaranti yathākāmaṃ kuṭyādibhyo 'pi deśanāḥ || v.3241(Krishnamacharya, 1926: 843)=v.3240(Shastri, 1968: 1019)
【訳】［仏教徒の弁護：］禅定を備えている者が如意宝のように存続する時、意楽通りに、壁等からも教説が出る。

*14 sānnidhyamātratas tasya puṃsaś cintāmaṇer iva |
niḥsaranti yathākāmaṃ kuḍyādibhyo 'pi deśanāḥ || v.138(Kataoka, 2011)
【訳】その人が近在するからのみ、如意珠のように、意欲通りに、壁等からも、教説が流れ出す。
吉水 (2015: 12) を参照。

*15 伊久間 (2016: 1-14) は仏の神変の視点から『如来秘密経』の一字不説論を考察した。

*16 「密迹経五巻或云密迹金剛力士経、或七巻、太康九年十月八日出」 『出三蔵記集』巻二 (T2145.55.7b18)。

*17 「中宗孝和皇帝、循機履運、配永登樞。神龍二年、令住京下於崇福寺、翻譯此經。俄屬靈祐虧微、綿區集禍、喬岳之仙長往、茂陵之駕不還。朕以庸虚、謬贋不構、敬遵前旨、昻就斯編。法師尋繹故文、發揮新句、炎涼不懈、曉夕忘疲。舊翻新翻、凡有四十九會、總其部帙一百二十卷成。以先天二年六月八日、畢功進内。」 『大宝積経』巻一 (T310.11.1b7-14)。

梵本写本は 11 章に分けられており、諸訳と異なっている。［中略］テクストの増広に関して、梵本写本は竺法護訳よりも法護訳とチベット訳に近いということが窺える。」(伊久間, 2013: 887-885) ということである。

『如来秘密経』という題名に示される通り、この経典は主に仏の前身である菩薩および成道した如来の身口意の三密をテーマとして、金剛手 (Vajrapāṇi) と寂慧 (Śāntamati) との対話の形で展開する。特に、菩薩および如来の三密を説示する第一〜第十品は本経の核心部分を構成しており、他の部分は後代に付加された内容であると推測される[*18]。

「如来語密不思議品」はサンスクリット写本において、第四章とされる[*19]。これに対して、法護訳およびチベット訳はともにこれを第八章とする。内容からすれば、「如来語密不思議品」はおもに次のような五つの部分にわけることができる。[*20]

1. 一字不説と「字成就」
2. 目連の物語
3. 偈頌体の一字不説と「字成就」のまとめ
4. 一切の言語によって四諦を安立すること
5. 流通分にあたる部分

「如来語密不思議品」は後代の多くの論書に引用されるため、同品のサンスクリット語断片を以下のように回収できる。

A.『プラサンナパダー』

[A1] yāṃ ca śāntamate rātriṃ tathāgato ’nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbuddho yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati | asminn antare tathāgatenaikākṣaram api nodāhṛtaṃ na pravyāhṛtaṃ nāpi pravyāhariṣyati | kathaṃ tarhi bhagavatā sakalasurāsuranarakinnarasiddhavidyādharoragaprabhṛtivineyajanebhyo vividhaprakāradharmadeśanā deśitā | ekakṣaṇavāgudāhāreṇaiva tattajjanamanastamoharaṇī bahuvidhabuddhinalinīvanavibodhinī jarāmaraṇasaritsāgarocchoṣiṇī kalpakālānalasaptārkaraśmivisarahrepiṇī śaradaruṇamahāprabhā ||

[A2] yathā yantrakṛtaṃ tūryaṃ vādyate pavaneritam |
na cātra vādakaḥ kaścin niścaranty atha ca svarāḥ ||
evaṃ pūrvasuśuddhatvāt sarvasattvāśayeritā |
vāg niścarati buddhasya na cāsyāstīha kalpanā ||
pratiśrutko yathā śabdo nādhyātmaṃ na bahiḥ sthitāḥ |

---

*18 浜野 (1987: 43-44) を参照。山野 (2001: 41-57) は金剛手信仰の視点から、この経典は金剛力士の前生譚や譬喩等の仏教説話を母胎に成立した経典であると見なしている。しかし、『大智度論』をはじめとする諸論典の言及からみれば、この経典が後世に特に重視されたのは如来の三密説に限られている。金剛手菩薩の前生譚等は総じて付属的な内容であると考えられる。

*19 「語密章という名の第四」(vāgguhyaparivartto nāmaś caturthaḥ ||) TG 9a3。

*20 竺法護訳『密跡経』は「一字不説」のかわりに、「一音説法」にあてはまる説法観を提示する。仏は一音をもって説法する。各々の衆生は自分の意楽に相応しい仏の教えを聞くことになる。竺法護訳は三世紀後半のものであるので、この経典の一番古い形を保っていると考えられる。おそらく「一音説法」は同経の元来の趣旨であったが、いつの間にか新出した「一字不説」の説法観に引き換えられた。

vāg apy evaṃ narendrasya nādhyātmaṃ na bahiḥ sthitā || PsP Chap.18(de La Vallée Poussin, 1903-13: 366-367)

[A3] yāṃ ca rātriṃ śāntamate tathāgato ’nuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ | yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati | atrāntare tathāgatenaikam apy akṣaraṃ nodāhṛtaṃ nāpi pravyāharati nāpi vyāhariṣyati | atha ca yathādhimuktāḥ sarvasattvā nānādhātvāśayās tāṃs tāṃ vividhāṃ tathāgatavācaṃ niścarantīṃ saṃjānanti | teṣām evaṃ pṛthak pṛthag bhavati | ayaṃ bhagavān asmabhyam amuṃ dharmaṃ deśayati | vayaṃ ca tathāgatasya dharmadeśanāṃ śṛṇumaḥ | tatra tathāgato na kalpayati na vikalpayati | sarvakalpavikalpajālavāsanāprapañcavigato hi śāntamate tathāgataḥ || PsP Chap.25(de La Vallée Poussin, 1903-13: 539)

B. 『楞伽経』(*Laṅkāvatārasūtra*)

[B1] yāṃ ca rātriṃ tathāgato ’bhisaṃbuddho yāṃ ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntare ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtam na pravyāhariṣyati avacanaṃ buddhavacanam iti …LA Chap.3(南條, 1923: 142-143)

[B2] yāṃ ca rātriṃ tathāgato ’bhisaṃbuddho yāṃ ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntara ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtaṃ nodāhariṣyati || LA Chap.3(南條, 1923: 144)

[B3] yasyāṃ ca rātrau tathāgato ’nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbuddho yasyāṃ ca rātrau parinirvṛttaḥ etasminn antare bhagavatāikam apy akṣaraṃ nodāhṛtaṃ na pravyāhṛtam | sadā samāhitāś ca tathāgatā na vitarkayanti na vyavacārayanti | LA Chap.7(南條, 1923: 240)

C. 『大乗荘厳経論』(*Mahāyānasūtrālaṃkāra*)(引用＝太字部分)

vyañjanasaṃpac caiṣā vijñeyā sarvathāgrasatvānāṃ |
ṣaṣṭyaṅgī sācintyā ghoṣo ’nantas tu sugatānāṃ || 12.9

ṣaṣṭyaṅgī sācintyā yā **guhyakādhipatinirdeśe** buddhasya ṣaṣṭyākārā vāg nirdiṣṭā | **punar aparaṃ śāntamate tathāgatasya ṣaṣṭyākāropetā vāg niścarati snigdhā ca mṛdukā ca manojñā ca manoramā ca śuddhā ce**ti vistaraḥ |

tatra **snigdhā** satvadhātukuśalamūlopastambhikatvāt | **mṛdukā** duṣṭa eva dharme sukhasaṃsparśatvāt | **manojñā** svarthatvāt | **manoramā** suvyañjanatvāt | **śuddhā** niruttaralokottaraprṣṭhalabdhatvāt | **vimalā** sarvakleśānuśayavāsanāvisaṃyuktatvāt | **prabhāsvarā** pratītapadavyañjanatvāt | **valguḥ** sarvatīrthyakumatidṛṣṭivighātabalaguṇayuktatvāt | **śravaṇīyā** pratipattinairyāṇikatvāt | **anantā** sarvaparapravādibhir anāchedyatvāt | **kalā** rañjikatvāt | **vinītā** rāgādipratipakṣatvāt | **akarkaśā** śikṣāprajñaptisukhopāyatvāt | **aparuṣā** tadvyatikramasaṃpanniḥsaraṇopadeśakatvāt | **suvinītā** yānatrayanayopadeśikatvāt | **karṇasukhā** vikṣepapratipakṣatvāt | **kāyaprahlādanakarī** samādhyāvāhakatvāt | **cittāudvilyakarī** vipaśyanāprāmodyāvāhaphalakatvāt | **hṛdayasaṃtuṣṭikarī** saṃśayacchedikatvāt | **prītisukhasaṃjananī** mithyāniścayāpakarṣikatvāt | **niḥparidāhā** pratipattāvavipratisāratvāt | **ājñeyā** saṃpannaśrutamayajñānāśrayatvāt | **vijñeyā** saṃpannacintāmayajñānāśrayatvāt | **viṣpaṣṭā** anācāryamuṣṭidharmavihitatvāt | **premaṇīyā** ’nuprāptasvaka-arthānāṃ premakaratvāt | **abhinandanīyā** ’nanuprāptasvakārthānāṃ spṛhaṇīyatvāt | **ājñāpanīyā** acintyad-

harmasamyagdarśikatvāt | **vijñāpanīyā** ’cintyadharmasamyagdeśikatvāt | **yuktā** pramāṇāviruddhatvāt | **sahitā** yathārhavineyadeśikatvāt | **punaruktadoṣajahā** avandhyatvāt | **siṃhasvaravegā** sarvatīrthyasaṃtrāsakatvāt | **nāgasvaraśabdā** udāratvāt | **meghasvaraghoṣā** gambhīratvāt | **nāgendrarutā** ādeyatvāt | **kinnarasaṃgītighoṣā** madhuratvāt | **kalaviṅkasvararutaravitā** ’bhīkṣṇabhaṅgaratvāt | **brahmasvararutaravitā** dūraṃgamatvāt | **jīvaṃjīvakasvararutaravitā** sarvasiddhipūrvaṃgamanaṅgalatvāt | **devendramadhuranirghoṣā** anatikramaṇīyatvāt | **dundubhisvarā** sarvamārapratyarthikavijayapūrvaṃgamatvāt | **anunnatā** stutyasaṃkliṣṭatvāt | **anavanatā** nindā’saṃkliṣṭatvāt | **sarvaśabdānupraviṣṭā** sarvavyākaraṇasarvākāralakṣaṇānupraviṣṭatvāt | **apaśabdavigatā** smṛtisaṃpramoṣe tadaniścaraṇatvāt | **avikalā** vineyakṛtyasarvakālapratyupasthitatvāt | **alīnā** lābhasatkārāniśritatvāt | **adīnā** sāvadyāpagatatvāt | **pramuditā** akheditvāt | **prasṛtā** sarvavidyāsthānakauśalyānugatatvāt | **akhilā** satvānāṃ tatsakalārthasaṃpādakatvāt | **saritā** prabandhānupacchinnatvāt | **lalitā** vicitrākārapratyupasthānatvāt | **sarvasvarapūraṇī** ekasvaranaikaśabdavijñaptipratyupasthāpanatvāt | **sarvasatvendriya-saṃtoṣaṇī** ekānekārthavijñaptipratyupasthānatvāt | **aninditā** yathāpratijñatvāt | **acañcalā** āgamitakālaprayuktatvāt | **acapalā** atvaramāṇavihitatvāt | **sarvaparṣadanuravitā** dūrāntikaparṣattulyaśravaṇatvāt | **sarvākāravaropetā** sarvalaukikārthadṛṣṭāntadharmapariṇāmikatvāt | deśanāmāhātmye catvāraḥ ślokāḥ | MSA(Lévi, 1907: 79-81)

このうち、断片 C は如来の六十「字成就」・「字円満」(vyañjanasaṃpad) の説明であり、『密跡主所説経』(*Guhyakādhipatinirdeśa*)、つまり『如来秘密経』からの引用であることが明らかである。ここで、注目すべきなのは、『如来秘密経』写本および『大乗荘厳経論』において如来の「字成就」は明確に六十種類あるとされ、竺法護訳および『大智度論』に引用された『密跡経』*21と一致する点である。實叉難陀訳『八十華厳』に「六十種妙音」*22、那連提耶舎訳『月燈三昧経』に「語言清淨六十種」*23が言及される*24。これらに対して、『如来秘密経』チベット語訳および法護訳は、共に六十四種類あるとする。一方また、六十四種類の「字成就」の内容に関しては、チベット語訳と法護訳は相違する。このように、チベット語訳と法護訳は『如来秘密経』写本と『大乗荘厳経論』より、この経典の新しい発展の形をそれぞれ伝えているとみてよいだろう。

『如来秘密経』の一字不説論を明確に引用するのは『プラサンナパダー』および『楞伽経』である。サンスクリット語写本・両漢訳・チベット訳と照らしてみると、『プラサンナパダー』と『楞伽経』の引用はいずれも多少なりともアレンジされた内容を示してい

*21 「復次、諸菩薩得入正位、離生死身、得法性眞形、能見十方無量佛身、及遍炤光明、亦能得聞諸佛六十種極遠無量音聲。」　『大智度論』巻三十 (T1509.25.284a27-29)。

*22 「是時、如來住普自在三昧、出六十種妙音」　『大方廣佛華嚴經』巻五十 (T279.10.266c18-19)。

*23 (1)「語言清淨六十種、吼音深美無所畏、如來梵言願為説、寂靜何緣而現笑。」　『月燈三昧経』巻三 (T639.15.567a27-28)；(2)「菩薩摩訶薩若成就口戒、則得佛六十種無礙清淨美妙音聲不可思議、是名口戒。」　同経巻十 (614b24-26)；(3)「若具足意戒菩薩摩訶薩得六十種美妙音聲相應、是名具足意戒。」　同経巻十 (615b5-6)。

*24 仏の「六十種の妙音」に言及するほかの経典は大衆部の *Mahāvastu* I.170-172、闍那崛多訳『佛説月上女經』巻二、鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜經』巻六、竺法護訳『佛説阿闍貰王女阿術達菩薩經』等がある。「六十四種の妙音」に言及する経典は、鳩摩羅什訳の『大樹緊那羅王所問經』巻三がある。しかし、六十四の項目は『如来秘密経』と異なっている。

る。もちろん、『プラサンナパダー』と『楞伽経』それぞれの引用する『如来秘密経』の底本には異読があると推定されるものの、引用者は各自の目的に応じて、自らの手で引用文にある程度の増補あるいは編纂を加えていることは A1-3・B1-3 の六断片からも明らかではないかと思う。

一字不説論のサンスクリット語写本の校訂は次のようである。

> yāṃ ca śāntamate rātriṃ tathāgato ’nuttarāṃ samyaksaṃbodhim adbhisaṃbuddhaḥ | yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati | asminn antare tathāgatenāntaśa ekākṣaram api nodāhṛtaṃ nāpi pravyāhariṣyati |[*25] TG 5a4-5
>
> 【訳】シャーンタマティよ、ある夜に如来は無上なる正等覚を現等覚した。そしてある夜に執着せずに完全に涅槃するであろう。この間に、如来によって一つの音節さえも語られなかったし、［未来に］発せられることもないだろう。[*26]

一字不説の理由について、同経は次のように述べている。

> satatasamāhito hi śāntamate tathāgataḥ na tathāgata ucchvasati vā prasvasati vā vitarkkayati vā vicārayati vā (TG 5a5)
>
> 【訳】なぜなら、シャーンタマティよ、如来は常に三昧に入っており、如来は出息も入息もせず、考察（尋）も伺察（伺）もしないのである。

一字不説の理由を禅定に求めることは『異部宗輪論』における大衆部説と同様である。

4.2.1 禅定と発語・尋伺・出入息の関係

この理由の中で言及された禅定と発語・尋伺・出入息の関係については、『如来秘密経』は詳しい分析を行っていない。ただし、これらの関係の説明は、阿含経典に遡ることができることから、『如来秘密経』編纂の時代には仏教界の常識であったのだろう。たとえば、『長阿含経』巻九「十上経」は、次のように説く。

> 若入初禅，則声刺滅。入第二禅則覚観（尋伺の旧訳）刺滅。入第三禅則喜刺滅。入第四禅則出入息刺滅。[*27]

[*25] Diplomatic edition: yāṃ ca śāntamate rātriṃ tathāgato nuttarāṃ samyaksaṃbodhim adbhisaṃbuddhaḥ yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati asminn antare tathāgatenāntaśa ekākṣaram api nodāhṛtaṃ nāpi pravyāhariṣyati |。

[*26] T310.11.55c6-10; T312.11.719b21-24; D no.47, 132b6-133a1; P no.760-3, 151b4-5。

この経文は『二夜経』(*Dharmarātridvayasūtra*) のテキストと似ている。

yañ ca Cunda rattiṃ Tathāgato anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambujjhati, yañ ca rattiṃ anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati, yaṃ etasmiṃ antare bhāsati lapati niddisati, sabbaṃ taṃ tath’ eva hoti no aññathā. DN(III, p.159)

補足：両文献の親縁性は著しい。おそらく『如来秘密経』の創作者はこの『二夜経』のテキストにもとづいて、『如来秘密経』の一字不説論の部分を作成した。

[*27] T1.1.56c29-57a2. cf. Paṭhamajjhānaṃ samāpannassa kāma-saññā niruddhā hoti. Dutiyajjhānaṃ samāpannassa vitakka-vicārā niruddhā honti. Tatiyajjhānaṃ samāpannassa pīti niruddhā hoti. Catutthajjhānaṃ samāpannassa assāsa-passāsā niruddhā honti. DN III.290= DN III. 266. 『長阿含』では初禅に入る者が音声という刺を滅するとされるが、DN は kāma-saññā が滅するという。

「十上経」は発語・尋伺・出入息を四禅と関係づける。同様の説明は『雑阿含』17.474 経*28にも見られる。したがって、初期仏教の段階ですでに、発語・尋伺・出入息の三者は禅定の進展に従って、順次に断たれる対象と見なされていたことがわかる。このばあい、発語・尋伺・出入息の三者の関係は次のように言えるであろうか。

1. 出入息は音声を発するための身体的な必要条件である。
2. 尋伺の二心所は発音のための心理的な必要条件である。

まず、ポイント 1 については、人間の場合、口から音声を発するために、出入息という動作は欠かせないものである。出入息のないことが仏の一字不説論の理由になるのは、このためである。

次に、仏教文献の中に、ポイント 2 についての説明は多くある。例えば、『倶舎論』第二章「根品」第 33 偈の自注において、世親は次のように語っている。

> anye punar āhuḥ | vāksaṃskārā vitarkavicārāḥ sūtra uktāḥ | “vitarkya vicārya vācaṃ bhāṣate nāvitarkyāvicārye”ti | AKBh(Pradhan, 1967: 61)
>
> 【玄】復有釈言。尋伺二法是語言行。故契経言。要有尋伺方有語言。非無尋伺此語言行。(T1558.29.0021b21-29)
>
> 【訳】さらに、別の人々は言った —— 考察（尋）と伺察（伺）は言葉に関する行である。経典には「考察（尋）し、伺察（伺）したのち、言葉を発するのである。考察（尋）せず、伺察（伺）せずには、［言葉を発し］ないのである」と説かれた。

藤田 (1984: 4) および本庄 (1984: 16-17) によると、経量部に引用されたこの経典は『雑阿含』21.586 経である。この『雑阿含』21.586 経と経量部は、言葉を発する行為を尋と伺の働きと見なすので、尋伺なしには言葉を発する行為もないと認めている。

上述した考察からすれば、一字不説の三つの理由、「如来は常に三昧に入る」、「如来には出息や入息はない」、「考察（尋）せず、伺察（伺）しない」のそれぞれを根本的理由、身体的な理由、心理的な理由と言うことができよう。

4.2.2　虚空説法

ところで、もしも如来は常に禅定に住するならば、釈迦は成道してから 80 歳で入滅するまでの間に、如何にして説法の事業をなしたのか、という疑問が当然湧いてくる。これに対して、『如来秘密経』は次のように説明している。

> na khalu punaḥ śāntamate tathāgatasya dantauṣṭhatālujihvāmukhadvārāc chabdo niścarati | śrūyate ca niścarati | sa ca tathāgatasya vāgrutaniścāra ākāśān niścarati | sattvānāṃ caivaṃ bhavati tathāgatasyaiva mukhadvārān niścaratīti |*29 …ye khalu punaḥ śāntamate sattvās

*28 「佛告阿難、初禪正受時、言語寂滅。第二禪正受時、覺觀寂滅。第三禪正受時、喜心寂滅。第四禪正受時、出入息寂滅。」　『雑阿含』巻十七 (T99.2.121b2-4)。

*29 Diplomatic edition: na khalu punaḥ śāntamate tathāgatasya dantoṣṭhatālujihvāmukhadvārāc chabdo niścarati | śrūyate

tathāgatavāgguhyajñānānupraviṣṭāḥ na te tathāgatavācaṃ mukhadvārān niścarantī saṃjānate | api tu khalv ākāśān niścarantī saṃjānāti |[*30] TG 5a7-9; 6a5

【訳】さらに、シャーンタマティよ、如来の音声は歯・唇・口蓋・舌・口から生じるわけではない。しかし、［衆生には如来の音声が］聞かれ、生じる。まさに (ca)、如来の語と音声の生起は虚空から生じるのである。しかし、衆生たちは「ほかならぬ如来の口から生じる」というように思うのである。［中略］さらにまた、シャーンタマティよ、如来の語の秘密に関する智に入った衆生たち、彼らは如来の語が口から生じるとは考えず、そうではなくて、虚空から生じると考えるのである。

如来の口などの発音器官から生じたと思われた音声は実に虚空から生起したものである。この虚空説法という如来語の秘密を認識できるのは、普通の衆生ではなく、ただ如来の語密の智に入った者に限られている。『如来秘密経』において、この虚空説法説が一字不説論の直後に出るのは、理論的な要請を示唆するように思われる。すなわち、如来が常に禅定、無言語活動の状態に住することと、如来が大悲心にもとづいて説法を通じて衆生を救済するという事業との矛盾をいかに解消するかという説明が求められたものと考えられる。

そのほかに、如来の語には別の秘密がある。すなわち、

1. 如来の語は十方のすべての世界に充満し、すべての衆生の意楽を満足させるのである[*31]。
2. 如来の語はすべての衆生の行に対して、行に応じて教えるものとして生じるのである[*32]。
3. 如来の語の秘密に対する智に入った衆生たち、彼らは如来の語が口から生じるとは考えず、虚空から生じると考えるのである。
4. 衆生たちは「如来の語はまさに信解と成熟と意楽に応じて生じる」と考えるが、その場合、如来は分別を持たず、平等（upekṣā）である[*33]。
5. 仏世尊たちは音が無量である[*34]。

---

ca niścarati sa ca tathāgatasya vāgrutaniścāra ākāśān niścarati satvānāṃ caivaṃ bhavati tathāgatasyaiva mukhadvārān niścaratīti | =D no.47, 133a4-5=P no.760-3, 152a2-3.

*30 Diplomatic edition: ye khalu punaḥ śāntamate satvās tathāgatavāgguhyajñānānupraviṣṭāḥ na te tathāgatavācaṃ mukhadvārān niścarantī saṃjānate | api tu khalv ākāśān niścarantī saṃjānāti | =D no.47, 134b3-4=P no.760-3, 153b5-6.

*31 Diplomatic edition: punar aparaṃ śāntamate tathāgatavāg daśadiksarvalokadhātusphuraṇī sarvasatvāśayasaṃtoṣaṇī | 5b6.

*32 Diplomatic edition: tatra śāntamate tathāgatavāk sarvasatvacaryāsu yathācaryāvabodhanatayā niścarati | 6a4.

*33 Diplomatic edition: api ca śāntamate ye yathādhimuktāḥ satvāḥ yathāparipakvāśayāḥ te tathaiva tathāgatavācaṃ niścarantī saṃjānate | tatra ca tathāgataḥ avikalpa upekṣakaḥ 6a8-9.

*34 この点を説明するために、『如来秘密経』は目連が神通力によって極西の世界に至っても仏の音声をまだ聞けるという物語を語った。『大智度論』において、『如来秘密経』の「仏音声無量」説と目連の物語が数回にわたって引用された。

1.「如佛身無量、光明音響、亦復無量、戒定慧等諸佛功徳、皆悉無量。如『密迹經』中三密。」巻一 (T1509.25.59a2-3)

2.「如説『密迹金剛經』中、［中略］各各隨心所聞、是名語密。是時目連心念、欲知佛聲近遠、即時以己神足力、至無量千萬億佛世界而息、聞佛音聲如近不異。［中略］彼佛告目連、汝尋佛聲過無量億劫、不能得其

このうち、三番目の秘密は虚空説法説の再出である。後代の全知者 (sarvajña) 論証[*35]と関連しているので、四番目は諸秘密において特に重視されるべきである。この中で、如来の説法を、手で触れず風に動かされた楽器[*36]およびすべての意楽を満たせる如意宝珠に譬える。如来の語は楽器のように衆生の意楽を知ることによって動かされ、あるいは如意宝珠のように衆生の意楽に応じて、虚空から生じるが、如来自体は無分別であり、平等であると説明される。したがって、四番目の秘密も虚空説法説に属すると考えられるであろう。

上述のように『如来秘密経』が言語活動のない理由を禅定・無尋伺・無出入息の三つに求めることは初期仏教以来の伝統であるが、言語活動がないことを拡大解釈し、如来の完全の沈黙すなわち一字不説まで主張する。『如来秘密経』は、仏の大悲による説法の事業との矛盾を調和するために、虚空説法を提唱するようになった。すなわち、禅定に入って完全な沈黙を守ると同時に、仏は神通力を通じて、如意珠のように各々の衆生の意楽に応じて任意の場所から説法の声を発すると規定される。

4.3　『楞伽経』における一字不説論

『楞伽経』における不立文字論は次のような二つの意味を備えているとまとめられる。

1. 修行論の視点：修行者は教説より自内聖智を重視すべし。
2. 仏身論の視点：仏の優れた功徳を誇るためである。

まず、『楞伽経』の一字不説論、あるいは周知された名前 —— 不立文字論 —— について、菅沼 (1970: 568-573) と菅沼 (1972: 33-65) は a. 自内聖智と不立文字、b. 宗通 (siddhāntanaya) と説通 (deśanānaya) という二つの法の道（dharmanaya)、c. 言葉の妄分別性、d. 言葉と義、e. 二諦説等の視点から、非常に綿密な考察を行っている。要するに、自内聖智 (pratyātmajñāna) を証得することは『楞伽経』のあらゆる教説の目指すところであり、「文字・文章それ自体の絶対性を否定する傾向がいちじるしいこと、いいかえれば、ここでもちいられる教説・文字・文章は自内聖智という月をゆびさす指にすぎない」ということが指摘される。菅沼 (1970: 568-573) と菅沼 (1972: 33-65) は一字不説論の修行論の意味を詳しく論じている。そのため、本論ではこの視点からの考察を省略する。

一方、『楞伽経』はどのように『如来秘密経』の一字不説論を受容し、さらにチャンドラキールティに影響を与えたのかという側面、つまり仏身論の発展の視点から、菅沼 (1970: 568-573)・菅沼 (1972: 33-65) および従来の研究はあまりこの点を触れなかったため、ここではこれを簡単に考察する必要はあるだろう。

前節にすでに触れたように、『楞伽経』において、第三章「無常品」(Anityatāparivarta) お

邊際。」巻十 (T1509.25.127c11-128a2)

3.「如『密迹經』中所説、目連試佛音聲、極至西方、猶聞佛音若如對面。」巻三十三 (T1509.25.284a17-19)。

*35 『如来秘密経』・全知者論証・クマーリラ (Kumārila) の全知者批判については、吉水 (2015: 1-72) を参照。

*36 楽器の例の偈頌部分は『プラサンナパダー』18 章に引用されているので、A2 の偈頌を参照。

よび第七章「変化品」(Nairmāṇikaparivarta) は『如来秘密経』の「如来語密品」を前後三回引用する。

> [B1] yāṃ ca rātriṃ tathāgato ’bhisaṃbuddho yāṃ ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntare ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtam na pravyāhariṣyati avacanaṃ buddhavacanam iti …LA Chap.3(南條, 1923: 142-143)
> [B2] yāṃ ca rātriṃ tathāgato ’bhisaṃbuddho yāṃ ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntara ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtaṃ nodāhariṣyati || LA Chap.3(南條, 1923: 144)
> [B3] yasyāṃ ca rātrau tathāgato ’nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbuddho yasyāṃ ca rātrau parinirvṛttaḥ etasminn antare bhagavatāikam apy akṣaraṃ nodāhṛtaṃ na pravyāhṛtam | sadā samāhitāś ca tathāgatā na vitarkayanti na vyavacārayanti | LA Chap.7(南條, 1923: 240)

以上の三条にはいくつかの異読が見られるが、『如来秘密経』の同一の段落に由来することは明らかである。特に、『楞伽経』第七章「変化品」は、B3 の引用の直後に「金剛手は常に、［仏の］恒常な随護である[*37]」と語る。金剛手菩薩は『如来秘密経』において仏の代わりの実際の説法者であり、仏の随護としての密跡金剛力士である。これも『楞伽経』と『如来秘密経』との引用関係を明確に示している根拠であるといえよう。

だが、『如来秘密経』と比べると、一字不説論をめぐって、『楞伽経』は重要な区別を示唆している。すなわち、『楞伽経』には虚空説法は見当たらないことである。そのかわりに、『楞伽経』は三仏説を通じて、一字不説と如来説法との矛盾を解消することに努めている。ここでは、まず『楞伽経』の三仏説を簡単に考察する。

4.3.1 『楞伽経』の三仏説

三仏というのは法性佛（dharmatābuddha）、法性所流仏 (dharmatāniṣyandabuddha)、変化佛（nirmitanirmāṇabuddha）という三種類の仏である。三仏よりもっと周知されたのは法身 (dharmakāya)・受用身 (saṃbhogakāya)・変化身（nirmāṇakāya）の三身説である。この三仏と三身との関係について、Suzuki (1999: 142) は次のように指摘する。

> “When the *Laṅkāvatāra* was compiled, the doctrine of the Triple Body (*trikāya*) was apparently not yet formulated in the shape we have it today. We thus have terms corresponding to the three Bodies and the indications of the underlying idea, but no specified relationship is established between them.”

すなわち、Suzuki (1999: 142) は『楞伽経』の三仏説を三身説の前段階に位置づけている。

これに対して、11 世紀頃、顕教の立場に立つジニャーナヴァジラ (Jñānavajra) の『如来心荘厳』(*Āryalaṅkāvatāra-nāma-mahāyānasūtra-vṛtti-tathāgatahṛdayālaṃkāra-nāma*, D no.4019; P no.5520) という注釈書は三身説をもって『楞伽経』の三仏説を解釈する[*38]。つまり、ジ

[*37] vajrapāṇiś ca satatasamitaṃ nityānubaddhaḥ | LA Chap.7(南條, 1923: 240)。

[*38] “de la rgyu ’dra ba’i sangs rgyas ni longs spyod rdzogs pa’i sku ste| dbyings dang ye shes dbyer med pa’i bdag nyid chos kyi sku’i rgyu las byung ba ste | de nyid kyang rdul phra rab bsags pa’i bdag nyid kyi sku ma yin gyi | ye shes kyi bdag nyid yin pas rgyu ’dra zhes pa’o || …gzhan yang blo gros chen po zhes pa la sogs pas ni chos kyi sku’i rang

ニャーナヴァジラ (Jñānavajra) にとって、『楞伽経』に説かれた三仏は三身にほかならない*39。

実際に、「三仏」という言い方は世親作とされた『十地経論』(*Daśabhūmivyākhyāna*) にも窺える*40。

【漢訳】一切佛者有三種佛。一應身佛、二報身佛、三法身佛。*41

【チベット語訳】de la sangs rgyas ni rnam pa gsum ste | kun rdzob kyi sangs rgyas dang | gzugs kyi sku'i sangs rgyas dang | chos kyi sku'i sangs rgyas so || *42

【訳】その中で、仏は三種類である。(1) 世俗仏と、(2) 色身仏と、(3) 法身仏である。

チベット語訳にもとづいて、この三仏のサンスクリット語原語はそれぞれ saṃvṛti-buddha、rūpakāya-buddha、dharmakāya-buddha に還元できるだろう。つまり、この三仏は「世俗仏」「色身仏」「法身仏」である。漢訳の「応身仏」「報身仏」の訳語はやや適切ではないが、当時に流行していた「応身」と「報身」の訳語をそのまま踏襲し、このように訳することは不思議でもないだろう。いずれにしても、『楞伽経』以外に「三仏」を唱えたインド由来のテキストも存在することは間違いはない。

注意すべきなのは、『十地経論』では身 (kāya) と仏 (buddha) が同時に説かれたことである。三仏と三身にはおそらくSuzuki (1999: 142) に説かれたような大きな区別は存在せず、ただ呼称の違いであろう。したがって、本論文は『楞伽経』と『十地経論』の三仏を法身 (dharmakāya)・受用身 (saṃbhogakāya)・変化身（nirmāṇakāya）の三身と同一視する。つまり、以下の通り。

---

bzhin gyi sangs rgyas dang | de'i rgyu mthun pa'i rgyur gyur pa'i lam gyis bsdus pa so so rang rig pa'i ye shes ni go rims bzhin du gzugs sku gnyis su snang bas sems can gyi don byed par nus pa dang | mtha' gnyis su lta ba thams cad cig car rnam par spangs pa'i sgo nas mdzes shing brgyan par gyur pa'o ||"(D no.4019, 104b4-5, 105a3-4; P no.5520, 119b6-8, 120a6-8)

【訳】その中で、所流仏は受用身であり、界と智が無区別であるという本質を持つ法身から流れて生じる者である。さらに、まさにそれは極微の集合体を本質とする身ではなく、智を本質とする者であるので、［法性の］所流と説かれる。［中略］さらに、「マハーマティよ」云々によって法身という自性仏と、それの所流の因になった道によっておさめられたそれぞれの自内証智は次第通りに、二つの色身［＝所流・変化］を顕現するので、衆生の利益を為すことに相応しく、二つの極端にすべての見を一時に断ずるから、荘厳されることになる。

*39 法性仏 (Dharmatā-buddha) と所流仏 (Niṣyanda-buddha) をめぐって、顕教の立場に立つジニャーナヴァジラ (Jñānavajra) と密教の立場に立つジニャーナシリーバドラ (Jñānaśrībhadra) の解釈の相違については、越智 (1985: 148-137) を参照。簡略すると、両者の相違点は次のようにまとめられる。

Jñānaśrībhadra	法性仏＝三摩地に入った毘盧遮那の身	所流仏＝毘盧遮那の身から等流たる変化身
Jñānavajra	法性身＝法身	所流身＝受用身

*40 『十地経論』は菩薩が初地歓喜地において一切の仏を供養し敬礼するという大願を立てることを説明する時、「三仏」に言及する。

*41 T1522.26.38b12-13。

*42 D no.3993,137b7; P no.5494.

『楞伽経』	『十地経論』	三身
dharmatābuddha	*dharmakāyabuddha	dharmakāya
(dharmatā)niṣyandabuddha	*rūpakāyabuddha	saṃbhogakāya
nirmitanirmāṇabuddha	*saṃvṛtibuddha	nirmāṇakāya

『楞伽経』に立てられた三仏のうち、法性佛（dharmatābuddha）は、同経の中で「真如智仏」(tathatājñānabuddha)*43や法仏（dharmabuddha）*44とも呼ばれる。所流仏 (niṣyandabuddha) は法性所流仏（dharmatāniṣyandabuddha）の略語である。それに対して、三番目の変化佛（nirmitanirmāṇabuddha）は複数形としての nirmāṇikā buddhāḥ*45と nirmitabuddha*46等の呼び方を有する。これから、三仏説の内容について簡単に考察する。

まず、法性佛に対して、『楞伽経』は次のように説明している。

> dharmatābuddhaḥ punar mahāmate cittasvabhāvalakṣaṇavisaṃyuktāṃ pratyātmāryagatigocaravyavasthāṃ karoti | …dharmatābuddhaḥ punar mahāmate nirālamba ālambavigataṃ sarvakriyendriyapramāṇalakṣaṇavinivṛttam aviṣayaṃ bālaśrāvakapratyekabuddhatīrthakarātmaka*47lakṣaṇābhiniveśābhiniviṣṭānām | LA Chap.2(南條, 1923: 57)*48
>
> 【訳】次に、マハーマティよ、法性仏は心によって［構想された］自性の特徴を離れ、自内証の聖なる境界に住することをなす。［中略］次に、マハーマティよ、法性仏は拠り所 (ālamba) を持たない者である。［法性仏は］拠り所を離れ、すべての活動と感官と認識との特徴を離れ、愚者・声聞・独覚・外道のようなアートマンの特徴に執着する者たちにとって、対象にならないのである。*49

*43 kena nirmāṇikā buddhāḥ kena buddhā vipākajāḥ | **tathatājñānabuddhā** vai kathaṃ kena vadāhi me || LA 2.49(南條, 1923: 28)。

*44 **dharmabuddho** bhaved buddhaḥ śeṣā vai tasya nirmitāḥ | sattvāḥ svabījasaṃtānaṃ paśyante buddhadarśanaiḥ || LA 10.382(南條, 1923: 313)。

*45 kena **nirmāṇikā buddhāḥ** kena buddhā vipākajāḥ | tathatājñānabuddhā vai kathaṃ kena vadāhi me || LA 2.49(南條, 1923: 28)。

*46 sarve hi **nirmitabuddhā** na karmaprabhavāḥ | LA Chap.7(南條, 1923: 242)。

*47 南條本は“-tīrthakarātmaka-”と読むが、『楞伽経』の貝葉写本 Tokyo no.333 は“-tīrthakarātma-”と読む。また、三本の漢訳とチベット語訳はともに“-tīrthakarātma-”とするので、ここでは、Tokyo no.333 の読みをとる。

*48 「大慧、法佛者、離心自性相、自覺聖所縁境界、建立施作。［中略］大慧、又法佛者、離攀縁、所縁離、一切所作根量相滅、非諸凡夫、聲聞、縁覺、外道、計著我相所著境界。」 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻一 (T670.16.486a27-28; b1-4)。

「大慧、法佛説法者、離心相應體故、内證聖行境界故。大慧、是名法佛説法之相。［中略］復次、大慧、法佛説法者、離攀縁故、離能觀所觀故、離所作相量相故。大慧、非諸凡夫、聲聞、縁覺、外道境界故、以諸外道執著虚妄我相故。」 菩提留支訳『入楞伽經卷』巻二 (T671.16.525b29-c2; c6-9)。

「大慧、法性佛者、建立自證智所行、離心自性相。［中略］復次、大慧、法性佛非所攀縁、一切所縁、一切所作相根量等相悉皆遠離、非凡夫、二乘、及諸外道執著我相所取境界。」 實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻二 (T672.16.596b24-25; b27-c1)。

“blo gros chen po chos nyid kyi sangs rgyas ni sems kyi rang bzhin gyi mtshan nyid dang bral ba | ’phags pa so so rang gis rig pa’i sbyod yul rnam par gzhog go | …blo gros chen po chos nyid kyi sangs rgyas ni dmigs pa med cing dmigs pa dang bral ba | bya ba dang | dbang po dang | tshad ma’i mtshan nyid thams cad las rnam par log pa | byis pa dang | nyan thos dang | rang sangs rgyas dang | mu stegs can bdag gi mtshan nyid la mngon par chags pas mngon par zhen pa rnams kyi yul ma yin par ston no ||”(D no.107, 77b1-2; 3-5)。

*49 南條・泉 (1927: 34), 安井 (1976: 52), 菅沼 (1977: 168), 常盤 (1994: 59) の和訳を参照。

文脈からみれば、この文の直前に parikalpitasvabhāva が言及されたので、冒頭の cittasvabhāva は「心によって構想された自性」を指すと見てよい。すなわち、法性仏は心によって構想された虚妄な自性の特徴を離れ、自内証智の境界に専念する。

このような法性仏は (1) 拠り所を離れ、(2) すべての活動と認識を離れ、凡夫・声聞たちの認識対象ではない。説 (1) のゆえに、所流仏と変化仏の拠り所である法性仏はもっとも根源的なものである。説 (2) のゆえに、所流仏と変化仏はそれぞれ菩薩と凡夫の指導者の役割を演ずるが、法性仏は説法の活動を持たず、凡夫たちに認識されえない。

次に、所流仏について、次のように説明している。

> evam eva mahāmate niṣyandabuddho yugapat sattvagocaraṃ paripācyākaniṣṭhabhavanavimānālayayogaṃ yoginām arpayati | …punar aparaṃ mahāmate dharmatāniṣyandabuddhaḥ svasāmānyalakṣaṇapatitāt sarvadharmāt svacittadṛśyavāsanāhetulakṣaṇopanibaddhāt parikalpitasvabhāvābhiniveśahetukān*50 atadātmakavividhamāyāraṅga*51puruṣavaicitryābhiniveśānupalabdhito mahāmate deśayati | punar aparaṃ mahāmate parikalpitasvabhāvavṛttilakṣaṇaṃ paratantrasvabhāvābhiniveśataḥ pravartate | …evam eva mahāmate paratantrasvabhāve parikalpitasvabhāve vividhavikalpacittavicitralakṣaṇaṃ*52 khyāyate | vastuparikalpalakṣaṇābhiniveśavāsanāt parikalpayan mahāmate parikalpitasvabhāvalakṣaṇaṃ bhavati | eṣā mahāmate niṣyandabuddhadeśanā | LA Chap.2(南條, 1923: 56-57)*53

---

*50 南條本の注記によると、“-kāt tadā- I ; kān atadā- T”の異読がある。漢訳は、「無実幻」、「無如是体」、「無自性」とそれぞれ訳すから、“atadātmaka”の読みを支持している。チベット語訳は“-kāt atadātmaka”を支持する。ここでは、本論文は“-kāt atadā-”の読みをとる。

*51 -māyāraṅga-について、Tokyo no.333 写本は“-māyāṃga-”とする。“-māyāṅga-”の読みはチベット語訳 (sgyu ma’i yan lag) にも支持されるので、本論文は“-māyāṅga-”の読みをとる。

*52 “parikalpitasvabhāve vividhavikalpacittavicitralakṣaṇaṃ”について、Tokyo no.333 写本は“parikalpitasvabhāvo vividhavikalpacittavicitralakṣaṇaḥ”とする。この写本の読みは『中辺分別論』1.1 に説かれた「空性において虚妄分別がある」という内容を思わせる。また、求那跋陀羅訳・實叉難陀訳・チベット語訳は Tokyo no.333 写本の読みを支持する。菩提留支訳は不明である。したがって、本論文はこの読みを採用する。

*53 「彼諸依佛、亦復如是、頓熟衆生所處境界、以修行者安處於彼色究竟天。［中略］大慧、法依佛、説一切法入自相共相、自心現習氣因相續、妄想自性計著因、種種無實幻、種種計著、不可得。復次、大慧、計著緣起自性生妄想自性相。［中略］如是、大慧、依緣起自性、起妄想自性、種種妄想心、種種想行事妄想相、計著習氣妄想。大慧、是為妄想自性相生。大慧、是名依佛説法。」　求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻一 (T670.16.486a14-16 ; a18-21 ; a24-27)。

「大慧、報佛如來、亦復如是、一時成熟諸眾生界、置究竟天淨妙宮殿修行清淨之處。［中略］復次、大慧、法佛報佛説一切法自相同相故、因自心現見薫習相故、因虚妄分別戯論相縛故、如所説法無如是體故。大慧、譬如幻師幻作一切種種形像，諸愚癡人取以為實、而彼諸像實不可得。復次、大慧、虚妄法體依因緣法，執著有實分別而生。［中略］大慧、因緣法體隨心分別、亦復如是、以見心相種種幻故。何以故。以執著虚妄相因分別心熏習故。大慧、是名分別虚妄體相。大慧、是名報佛説法之相。」　菩提留支訳『入楞伽經卷』巻二 (T671.16.525b11-12 ; b16-21 ; b26-29)。

「報佛亦爾、於色究竟天、頓能成熟一切眾生、令修諸行。［中略］復次、大慧、法性所流佛、説一切法自相共相、自心現習氣因相、妄計性所執因相、更相繫屬、種種幻事皆無自性、而諸眾生種種執著取以為實、悉不可得。復次、大慧、妄計自性、執著緣起自性起。［中略］大慧、此亦如是、由取著境界習氣力故、於緣起性中、有妄計性種種相現、是名妄計性生。大慧、是名法性所流佛説法相。」　實叉難陀訳『大乗入楞伽經』巻二 (T672.16.596b10-12 ; b14-19 ; b21-24)。

“de bzhin du blo gros chen po rgyu ’dra ba’i sangs rgyas kyang cig car sems can gyi spyod yul yongs su smin par byas te | ’og min gyi pho brang dang | gzhal med khang gi gnas kyi rnal ’byor gyi rnal ’byor can du bzhag go | …gzhan yang blo gros chen po chos nyid dang ’dra bar ’byung ba’i sangs rgyas ni sgyu ma’i yan lag rnam pa mang po’i skyes

【訳】全く同様に、マハーマティよ、所流仏は一時に衆生の領域を成熟して、色究竟天宮の宮殿［において］、ヨーガをヨーギンに修行させる。［中略］また、さらに、マハーマティよ、法性所流仏は、すべての法が個別［相］と共通相に陥り、自心所現の習気を原因とする特徴に縛られて、構想された自性への執着を原因とするので、真実ではない (atadātmaka) 様々な幻の手足を持つ人間の多様性に対する執着の非知覚にもとづいて、マハーマティよ、教えている。また、さらに、マハーマティよ、構想された自性の生起という特徴が他に依存する自性に対する執着から生じる。［中略］全く同様に、マハーマティよ、他に依存する自性において、多様な分別と心との様々の特徴を持つ構想された自性が語られる。事物と構想と特徴の執着の習気から、構想しているならば、マハーマティよ、構想された自性の特徴は生じる。マハーマティよ、これが、所流仏の教えである。*54

この文の意図は次の四点にまとめられる。

1. 所流仏は法性から流れ出した仏である。
2. 所流仏は色究竟天宮においてヨーギンにヨーガの修行を促す。
3. 所流仏は説法する。
4. 所流仏の説法の内容は三性説の前二者 parikalpitasvabhāva と paratantrasvabhāva を中心とする。

所流仏は色究竟天宮、つまり色界 (rūpadhātu) の頂点において衆生を一時（頓）に成熟させるために説法するので、説法対象は一般の凡夫であるはずはなく、神々および菩薩である。そして、前述した『十地経論』に説かれた“rūpakāyabuddha”の“rūpa”はもしかすると“rūpadhātu”を指すかもしれない。また、色界において説法するという規定は三身説のうちの受用身 (saṃbhogakāya) の規定とよく一致しているので、所流仏が受用身とイコールであると見ても大過はないだろう。

三番目の変化仏について、『楞伽経』は次のように説明している。

nirmitanirmāṇabuddhaḥ punar mahāmate dānaśīladhyānasamādhicitra*55prajñājñānaskandha-dhātvāyatanavimokṣavijñānagatilakṣaṇaprabhedapracāraṃ vyavasthāpayati | tīrthyadṛṣṭyā ca

bu de’i bdag nyid ma yin pa sna tshogs la mngon par zhen pa | mi dmigs pa’i phyir rang dang spyi’i mtshan nyid du gtogs pa’i chos thams cad rang gi sems snang ba’i bag chags rgyu’i mtshan nyid dang ’brel ba yongs su brtags pa’i rang bzhin la mngon par zhen pa’i rgyu las byung bar ston to || blo gros chen po gzhan yang yongs su brtags pa’i rang bzhin ’byung ba’i mtshan nyid ni | gzhan gyi dbang gi rang bzhin la mngon par zhen pa las ’byung ngo || …de bzhin du blo gros chen po gzhan gyi dbang gi rang bzhin la kun brtags pa’i rang bzhin rnam par rtog pa’i sems sna tshogs rnam pa mang po’i mtshan nyid du snang ngo || blo gros chen po dngos po yongs su rtog pa’i mtshan nyid du mngon par zhen pa’i bag chags la yongs su rtog pas kun brtags pa’i rang bzhin gyi mtshan nyid du ’gyur te | blo gros chen po ’di ni ’dra bar byung ba’i sangs rgyas kyi bshad pa’o ||”(D no.107, 77a1-2 ; 77a3-5 ; 77a7-77b1)。

*54 南條・泉 (1927: 34), 安井 (1976: 51), 菅沼 (1977: 167-168), 常盤 (1994: 58-59) の和訳を参照。

*55 “citra”について、Tokyo no.333 は“citta”とする。“citra”は般若の修飾語として違和感がする。また、求那跋陀羅訳とチベット語訳は「心」(sems) に言及するので、“citta”のほうが自然であろう。ここで“citta”の読みをとる。

rūpyasamatikramaṇalakṣaṇaṃ*56 deśayati | LA Chap.2(南條, 1923: 57)*57

【訳】次に、変化した変化仏は、マハーマティよ、布施・持戒・禅定・三昧・心・般若・智・蘊・界・処・解脱・識の行相の区別と働き（pracāra）を設定する。また、外道の見解と無色［界］を超越することの特徴を教えている。*58

まず、自内証の聖なる対象にとどまり、すべての認識と分別を離れた法性仏に対して、変化仏は所流仏と同様に、説法の事業を担っていると規定される。一方、所流仏と変化仏との区別は主に二つある。

1. 所流仏は色究竟天宮に住するとされるが、変化仏の場合は、説法の場所の規定はない。
2. 所流仏の説法内容は三性説の parikalpitasvabhāva と paratantrasvabhāva を中心とするが、変化仏の説法内容は布施・持戒・禅定・三昧乃至蘊・界・処等であり、つまり部派仏教から大乗仏教までの仏教一般の教理項目である。

また、三仏の関係について、『楞伽経』は次のように論じている。

tad yathā mahāmate dharmatābuddho yugapan niṣyandanirmāṇakiraṇair virājate …LA Chap.2(南條, 1923: 56)*59

【訳】例えば、マハーマティよ、法性仏は、一時に、所流［仏］・変化［仏］の光をもって、輝いている。

---

*56 “tīrthyadṛṣṭyā ca rūpyasamatikramaṇalakṣaṇaṃ”の一文は怪しい。変化仏は何故外道の見解をもって説法するのか。Tokyo no.333 写本は“tīrthyadṛṣṭyārūpyasamatikramaṇalakṣaṇaṃ”とする。これによれば、「変化仏は外道の見解と無色界を超越することの特徴を教える」というように読める。三本の漢訳はすべて「外道の見解」と「無色」を並列しているが、チベット語訳は「外道の見解によって無色の三昧の次第」とする。すなわち、「Tokyo no.333 = 三本の漢訳；南條本 = チベット語訳」である。
Tokyo no.333 と三本の漢訳の読みが自然な読みに思われるので、本論文はこの読みをとる。また、諸訳からみれば、“samati”一語は“samāpatti”の誤写であるという可能性も存在する。しかし、今の時点で“samāpatti”の読みはサンスクリット語写本に確定できないので、“samati”の読みをとる。

*57 「大慧、化佛者説施、戒、忍、精進、禪定、及心、智、慧、離陰界入、解脱、識、相分別、觀察建立、超外道見、無色見。」　求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻一 (T670.16.486a28-b1)。
「大慧、應化佛所作應佛説施、戒、忍、精進、禪定、智、慧故、陰、界、入、解脱故、建立識想差別行故、説諸外道無色三摩跋提次第相。大慧、是名應佛所作應佛説法相。」　菩提留支訳『入楞伽經卷』巻二 (T671.16.525c3-6)。
「大慧、化佛説施、戒、忍、進、禪定、智、慧、蘊、界、處法及諸解脱、諸識行相、建立差別、越外道見、超無色行。」　實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻二 (T672.16.596b25-27)。
“blo gros chen po ’phrul pas sprul pa’i sangs rgyas ni sbyin pa dang | bsam gtan dang | tshul khrims dang | ting nge ’dzin dang | sems dang | shes rab dang | ye shes dang | phung po dang khams dang skye mched dang rnam par thar pa dang | rnam par shes pa ’jug pa’i mtshan nyid rab tu phye ba rgyu ba rnam par gzhag go || mu stegs can gyi lta ba bas gzugs med pa’i ting nge ’dzin gyi rim pa’i mtshan nyid kyang ston to ||”(D no.107, 77b2-3)。

*58 南條・泉 (1927: 34), 安井 (1976: 52), 菅沼 (1977: 168), 常盤 (1994: 59) の和訳を参照。

*59 「譬如法佛所作依佛、光明照曜。」　求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻一 (T670.16.486a16)
「大慧、譬如法佛報佛放諸光明、有應化佛照諸世間。」　菩提留支訳『入楞伽經卷』巻二 (T671.16.525b12-14)
「譬如法佛頓現報佛、及以化佛光明照曜。」　實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻二 (T672.16.596b12-13)
“’di lta ste | chos nyid kyi sangs rgyas ni cig car rgyu ’dra ba dang | sprul pa’i ’od zer gyis rnam par mdzes so ||”(D no.107, 77a2-3)。

このように、三仏は互いに独立した三者ではなく、同時に存在している太陽と光のような関係にあるものである。所流仏という呼称に示された通り、所流仏ないし変化仏はともに法性より流れ出されたものであろう。すなわち、法性仏は根源であり、所流仏と変化仏はそれより光のように生じたものである。

4.3.2 一字不説の理由

以上の仏身論の考察からみれば、所流仏および変化仏はそれぞれ独自の説法事業を担っている。これに対して、法性仏は自内証の対象に住し、認識と分別を離れる。したがって、一字不説ということは、法性仏のみに関わっているといってもよい。

この点について、『楞伽経』第三章において、「二法」（dharmadvaya）説で詳しく説明される。「二法」というのは、「自内証の法性」(pratyātmadharmatā) と「本住の法性」（paurāṇasthitidharmatā）である。このうち、前者は次のようである。

> tais tathāgatair adhigataṃ tan mayāpy adhigatam anūnam anadhikaṃ svapratyātmagatigocaraṃ vāgvikalparahitam akṣaragatidvaya*60vinirmuktam | (南條, 1923: 143)*61
> 【訳】それらの如来たちによって証得されたことは、私によっても証得されたのであり、不減不増であり、言葉および分別を欠いており、音節の二境を離れた自内証の対象である。*62

ここでは、仏によって証得された法性は自内証智の対象であり、言葉も分別も字音も離れ、他の如来に証得されたことと平等であると説明される。

また、「本住の法性」（paurāṇasthitidharmatā）については、『楞伽経』は次のように説いている。

> mahāmate dharmadhātusthititotpādād vā tathāgatānām anutpādād vā tathāgatānāṃ sthitaivaiṣāṃ dharmāṇāṃ dharmatā dharmasthititā dharmaniyāmatā | (南條, 1923: 143)*63

---

*60 “akṣaragatidvaya”について、求那跋陀羅訳と實叉難陀訳は不明であるが、菩提留支訳は「字の二種類」というふうに訳する。チベット語訳は「文字と二つの境」(ye ge dang gnyis kyi yul) と訳する。本論文は gatidvaya が vāc と vikalpa の二つを指すと理解するので、「音節の二境」に訳する。

*61 「若彼如來所得、我亦得之、無增無減、緣自得法究竟境界、離言説妄想、離字二趣。」 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻三 (T670.16.498c24-26)。
「謂彼過去諸佛如來所證得法、我亦如是證得、不增不減、自身内證諸境界行、離言語分別相、離二種字故。」 菩提留支訳『入楞伽經卷』巻五 (T671.16.541c9-11)。
「謂諸佛所證、我亦同證、不增不減、證智所行、離言説相、離分別相、離名字相。」 實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻四 (T672.16.608b21-22)。
“gang de bzhin gshegs pa de dag gis thugs su chud pa so so rang gis rig pa’i spyod yul tshig gi rnam par rtog pa dang bral ba | yi ge dang gnyis kyi yul las rnam par grol ba de ngas kyang lhag chad med par khong du chud do ||”(D no.107, 112a2-3)。

*62 南條・泉 (1927: 82), 安井 (1976: 129-130), 菅沼 (1981: 11), 常盤 (1994: 152) の和訳を参照。

*63 「法界常住、若如來出世、若不出世、法界常住。」 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻三 (T670.16.498c26-27)。
「大慧、諸佛如來出世不出世、法性、法界、法住、法相、法證常住。」 菩提留支訳『入楞伽經卷』巻五 (T671.16.541c13-15)。

【訳】マハーマティよ、法界の住性は、如来たちが生じても、如来たちが生じなくても、住しているにほかならない。［法界の住性は］これらの諸法の法性、法住性、法決定性である。*64

仏が生じるか否かにかかわらず、本来の法性・法住性・法決定性はそのまま存在している。あたかも、ある人によって発見された森林の真ん中の古城は、人の発見をとわず、従来存在しているようである*65。「自内証の法性」(pratyātmadharmatā) と比べると、「本住の法性」は法性の久遠性を強調することがわかる。実際、これは「自内証の法性」と異ならない。また、前にふれた「法性仏が自内証の境界に住する」という視点からすれば、法性仏の住している境界 (gocara) はこの自内証の法性にほかならない。ここでの一字不説論の説明は法性仏のみと関わっているとみてよい。自内証智の境界は言葉と字音と分別を離れるのである。そのため、このような対象を証得する如来、法性仏も言葉の作用を除き、一字さえをも説かないのである。

これについて、『楞伽経』第七章「変化品」の説明も注目すべきである。第七章において、仏は金剛手菩薩の質問をきっかけとして、次のように解説する。

pūrvadharmasthititāṃ saṃdhāyāpūrvacaramasya cābhāvāt pūrvaprahīṇair*66 evākṣarais tathāgato na vitarkya na vicārya dharmaṃ deśayati | saṃprajānakāritvād amuṣitasmṛtitvāc ca na vitarkayati na vicārayati caturvāsanābhūmiprahīṇatvāc cyutidvayavigamāt kleśajñeyāvaraṇadvayaprahāṇāc ca || Chap.7(南條, 1923: 241-242)*67

【訳】本来の法住性を密意として、［本来の法住性は］前後にないものではないので、まさに以前に［諸仏によって］設定された文字をもって、如来は考察せず、伺

「若佛出世、若不出世、法住、法位、法界、法性皆悉常住。」　實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻四 (T672.16.608b23-24)。

“blo gros chen po chos kyi dbyings gnas pa ni de bzhin gshegs pa rnams byung yang rung | ma byung yang rung | de’i chos nyid dang | chos kyi gnas nyid dang | chos mi ’gyur ba ni grong khyer rnying pa’i lam bzhin du ’jug pa’o ||”(D no.107, 112a5-6)。

*64 南條・泉 (1927: 82-83), 安井 (1976: 130), 菅沼 (1981: 11), 常盤 (1994: 152) の和訳を参照。

*65「古城」の譬喩は『城喩経』、あるいは『城邑経』に由来する。同経は『雑阿含経』287 経、支謙訳『貝多樹下思惟十二因縁経』、パーリ語の SN 12.65 *Nagarasutta*、サンスクリット語の Nidānasaṃyukta No.5 *Nagarasūtra*(**?**) 等の版本がある。

*66 高崎 (2009: 384) は「梵本の ‘pūrvaprahīṇair’ をチベット訳、宋訳等から推定される形として-praṇihitair によみかえる」とする。本論文は高崎先生の理解に従う。

*67「因本住法故、前後非性、無盡本願故、如來無慮無察、而演説法、正智所化故、念不忘故、無慮無察。四住地、無明住地習氣斷故、二煩惱斷、離二種死、覺人法無我、及二障斷。」　求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』巻四 (T670.16.513a23-27)。

「我常依本法體而住、更不生法、依本名字章句、不覺不思、而説諸法。大慧、如來常如意知、常不失念、是故如來無覺無觀、諸佛如來離四種地已、遠離二種死、二種障、二種業故。」　菩提留支訳『入楞伽經卷』巻八 (T671.16.560c13-17)。

「我依本住法、作是密語、非異前佛、後更有説、先具如是諸文字故。大慧、如來正知、無有妄念、不待思慮、然後説法、如來久已斷四種習、離二種死、除二種障。」　實叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻六 (T672.16.672b29-c4)。

“sngon gyi chos kyi lugs la dgongs te | sngon dang phyis med pa mi ’byung ba’i phyir sngon bshad pa’i yi ge de dag nyid kyis de bzhin gshegs pa mi rtog mi dpyod par chos ’chad de | mkhyen bzhin du mdzad pa dang | dran pa nyams pa med pa dang | bag chags kyis gzhi spangs pa dang | shi ’pho gnyis dang bral ba dang | nyon mongs ba dang shes bya’i sgrib pa gnyis spangs pa’i phyir mi rtog mi dpyod do ||”(D no.107, 151b5-7)。

察せずに法を説くのである。正知を為す者であるから、また、失念がないから、［如来は］考察せず、伺察しないのである。四習気地（bhava,kāma,rūpa,dṛṣṭi）がすでに断たれたから、二死を離れるから、また、煩悩と所知との二障が断たれるからである。[*68]

如来の一字不説について、この文は主に因果の二つの側面から説明している。まず、冒頭の「本来の法住性（pūrvadharmasthititā）」は先にふれたように、法性、法住性、法決定性であり、法性仏に証得された対象として『楞伽経』第三章に詳しく解説される。本来の法住性は仏が生じるか否かにかかわらず、ずっと存在している。したがって、このような本来の法住性は仏の出世の前後にないものではない。仏の説法の内容も新しいものではなく、以前の仏に確立された文字を用い、尋伺の心作用が働かないままに説法する。この説明は言うまでもなく、仏の果位という側面によるものである。つまり、法性をすでに自内証した仏の視点からの説明であるといえるだろう。もう一方、無尋無伺の理由について、ここでは、五つの理由が挙げられる。すなわち、正知を為し、失念がなく、四習気地を断ち、二死を離れ、二障を断ったことである。これは仏の因位からの説明であるとみてよい。

以上の引用文は三仏説に直接には言及していないが、全体からみれば、三仏説を前提とするといってもよいだろう。なぜかというと、まず「変化品」全章が変化仏をめぐって展開しているので、ここも変化仏と関わった話であるはずである。また、法性を直接に証得する法性仏と違って、冒頭の「本来の法住性を密意として」という言い方も法性仏に依拠した、あるいは法性仏から流れ出した変化仏を示唆している。

『如来秘密経』の一字不説論と比べると、『楞伽経』の特色は次の二点にまとめられる。

1. 『異部宗輪論』と『如来秘密経』は如来の一字不説の理由を「如来は常に禅定する」ことに求める。それに対して、『楞伽経』は法性仏の自内証智を詳しく論じる点で、教理の発達を示している。
2. 『楞伽経』は三仏説にもとづいて、所流仏と変化仏は説法しているが、法性仏は一字不説である、と主張する。『如来秘密経』の虚空説法説と同様に、如来の説法と不説の矛盾を調和する。

4.4　チャンドラキールティの一字不説理解

以上では、部派仏教から『如来秘密経』・『楞伽経』等の大乗経典までの一字不説論の様態と発展の経緯を考察した。本節ではチャンドラキールティはこのような思想史の中で、どのように一字不説を理解するのかを検討する。まず、『中論』は 25.24 頌の中で一字不説の説法観を提示する。

sarvopalambhopaśamaḥ prapañcopaśamaḥ śivaḥ |

[*68] 南條・泉 (1927: 138), 安井 (1976: 219), 菅沼 (1981: 130-131), 常盤 (1994: 255) の和訳を参照。

na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ || MMK 25.24
【訳】［涅槃は］あらゆる認識の静まりであり、戯論の静まりであり、吉祥である。どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって説かれなかった。

この偈頌は『プラサンナパダー』第 18 章の中で、『中論』18.7 の教証としてさらに引用される。叶少勇 (2011b: 304) と新作 (2015: 132) によれば、『中論』18.7 は次のようである。

nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocaraḥ |
anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā ||[*69] MMK 18.7
【訳】言語表現の対象は停止する。心の活動領域は停止する。なぜなら、法性は涅槃のように不生不滅である。

チャンドラキールティの注釈と合わせてみれば、『中論』18.7 頌は涅槃のように不生不滅である法性を証得する時、言語対象および心の活動領域が停止することになると述べている。そのため、この偈頌は戯論寂静と如来の不説を宣揚する『中論』25.24 頌と密接に関係している。したがって、チャンドラキールティの一字不説理解を考察するために、この二頌の注釈はともに欠かせない資料である。また、チャンドラキールティは『入中論』において一字不説の説法観にも言及する。そこで、以下から、『中論』18.7 と 25.24 二頌とチャンドラキールティの注釈を根本資料として、チャンドラキールティに立てられた理証と教証を分析する。その後、『入中論』の一字不説論を考察する。

4.4.1　チャンドラキールティの理証

『中論』25.24 と 18.7 の注釈の中で、チャンドラキールティは四通りの理証 (yukti) を提出した。まず、一番目の理証は次のようである。

iha yadi kiṃcid abhidhātavyaṃ vastu syāt, tad deśyeta | yadā tv abhidhātavyaṃ nivṛttaṃ vācāṃ viṣayo nāsti, tadā naiva kiṃcid api deśyate buddhaiḥ || kasmāt punar abhidhātavyaṃ nāstīty āha, **nivṛttaś cittagocaraḥ** | iti | cittasya gocaraś cittagocaraḥ, gocaro viṣaya ārambaṇam ity arthaḥ | yadi cittasya kaścid gocaraḥ syāt, tatra kiṃcin nimittam adhyāropya syād vācāṃ pravṛttiḥ | yadā tu cittasya viṣaya evānupapannas, tadā kva nimittādhyāropeṇa vācāṃ pravṛttiḥ syāt | kasmāt punaḥ cittaviṣayo nāstīti pratipādayann āha, **anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā** || yasmād anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā dharmasvabhāvo dharmaprakṛtir vyavasthāpitā, tasmān na tatra cittaṃ pravartate | cittasyāpravṛttau ca kuto nimittādhyāropaḥ, tadabhāvāt kuto vācāṃ pravṛttiḥ | ataś ca na kiṃcid buddhair bha-

[*69] de La Vallée Poussin (1903-13: 364) によると、この偈頌は次のようである。
nivṛttam abhidhātavyaṃ **nivṛtte cittagocare** |
anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā ||
ゴシック体の部分の読みは写本およびチベット語訳の根拠がない。本論文は叶少勇 (2011b) と新作 (2015) の読みをとる。

gavadbhir deśitam iti sthitam avikalam ||*70 PsP Chap.18(新作, 2015: 130-131)

【訳】この中で、もし、何らか言語対象が実物 (vastu) であるならば、そういう［言語対象］は［諸仏によって］説かれるだろう。しかし、言語対象が停止する、つまり言語の対象が存在しない場合、諸仏によっていかなるものも決して説かれない。それでは、「なぜ言語対象は存在しないのか」と問うならば、「心の活動領域が停止する」と［龍樹は］言った。「心の活動領域」とは心に属する活動領域である。「活動領域」は、対象と所縁を意味する。もし心に何らかの活動領域が存在するならば、そ［の活動領域］に対して何らかの相を増益して、言語は働くだろう。しかし、もし心の対象がありえないならば、その場合、何に対して相を増益することによって、言語が働くだろうか。それでは、何故心の対象が存在しないのかを説明するために、「なぜなら、法性は涅槃のように不生不滅である。」と［龍樹は］言った。なぜなら、涅槃のように法性、法の自性、法の本質は実に不生不滅であると設定される。したがって、その［法性］において、心は働かない。そして、心が働かない時、何故相の増益があるのか。そ［の相の増益］が存在しないから、何故言語が働くのか。したがって、諸仏世尊によっていかなることも説かれなかったということは完全に成立する。

ここでは、チャンドラキールティは言語活動の生起（「流転門」）と消滅（「還滅門」）の過程を説明している。まず、言語活動の流転門は次の図式に整理できる。

言語が活動する

⇑

増益された相 (nimitta)

⇑

心の対象

⇑

心が活動する

表4.2　言語活動の「流転門」

『中論』18.7 は単に言語表現の対象と心の活動領域を並列するが、両者の関係は不明である。de La Vallée Poussin (1903-13) の中で、“nivṛtte cittagocare”の読みは心の活動領域の停止が言語対象の停止の原因であると含意する。しかし、この読みは写本とチベット語訳

*70 iha yadi kiṃcid abhidhātavyaṃ vastu syāt tad deśyeta | yadā tv abhidhātavyaṃ nivṛttaṃ vācāṃ viṣayo nāsti tadā kiṃcid api naiva deśyate buddhaiḥ | kasmāt punar abhidhātavyaṃ nāstīty āha | **nivṛtte cittagocara** iti | cittasya gocaraḥ cittagocaraḥ, gocaro viṣaya āranbaṇam ity arthaḥ | yadi cittasya kaścid gocaraḥ syāt tatra kiṃcin nimittam adhyāropya syād vācāṃ pravṛttiḥ | yadā tu cittasya viṣaya evānupapannas tadā kva nimittādhyāropo yena vācāṃ pravṛttiḥ syāt || kasmāt punaḥ cittaviṣayo nāstīti pratipādayann āha | **anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā** || yasmād anutpannāniruddhā nirvāṇam iva dharmatā dharmasvabhāvo dharmaprakṛtir vyavasthāpitā tasmān na tatra cittaṃ pravartate | cittasyāpravṛttau ca kuto nimittādhyāropaḥ, tadabhāvāt kuto vācāṃ pravṛttiḥ | ataś ca na kiṃcid buddhair bhagavadbhir deśitam iti sthitam avikalam || PsP Chap.18(de La Vallée Poussin, 1903-13: 364)

の根拠がない。

チャンドラキールティの注釈からみれば、言語対象は相であるが、それは心の活動領域に対して増益、あるいは虚構されたものにすぎず、決して実物 (vastu) ではない。言語対象は別のものではなく、両者はともに「相」(nimitta) である。そのような非実物である「相」はさらに言語表現を引き起こす。したがって、日常の言語表現は衆生の内在的な心作用に由来すると語っている。

上述のような心の活動から言語の活動までの一連の因果関係を逆転するために、根である心の活動を不生不滅の法性において抑制するべきである。そして、これは言語活動の「還滅門」（表 4.3）になる。

法性 (dharmatā) は不生不滅である

⇓

法性において心が働かない

⇓

相 (nimitta) を増益することはない

⇓

言語が働かない

⇓

仏は説法しない

表4.3　言語活動の「還滅門」：一字不説の理証 1

これは大体『中論』18.7 を散文に言い換えたものである。言語活動の「流転門」を逆転し、不生不滅な法性を証得する時、根源的な心の活動は寂静になる。したがって、心に増益された「相」も停止する。その結果、対象を欠く言語活動は停止することになる。この理屈で、法性を証得した仏は説法しない。

またさらに、二番目の理証は次のようである。

> atha vāyam anyaḥ pūrvapakṣaḥ, yad uktam, **prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyate ||** iti, kathaṃ punaḥ prapañcasya śūnyatāyāṃ nirodha iti || ucyate, yasmāt, **nivṛttam abhidhātavyam** | ityādi pūrvavad vyākhyeyam ||[*71] (新作, 2015: 131-132)
>
> 【訳】あるいはまた、別の前主張がある。「戯論が空性において滅すると言われたが、それでは、戯論は如何にして空性において滅するのか？」答える。「言語対象が停止する」云々は、先と同じように解釈されるべきである。

ここでは、チャンドラキールティは「空性」の概念を一字不説の理証に導入する。「空性に戯論が滅する」というのは『中論』18.5cd[*72]の内容である。本論文第 2 章にすでにふ

[*71] atha vāyam anyaḥ pūrvapakṣaḥ, yad uktaṃ prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyata iti kathaṃ punaḥ prapañcasya śūnyatāyāṃ nirodha iti || ucyate | yasmān nivṛttam abhidhātavyam ityādi pūrvavad vyākhyeyaṃ || PsP Chap.18(de La Vallée Poussin, 1903-13: 365)

[*72] karmakleśakṣayān mokṣaḥ karmakleśā vikalpataḥ | te prapañcāt prapañcas tu śūnyatāyāṃ nirudhyate || MMK 18.5

れたように、この偈頌は「戯論」を分別の原因と見なしている。そのため、戯論は理証 1 に説かれた心の活動を代表するものと見てよい。また、理証 1 に言及された「法性」や「法の自性」(dharmasvabhāva)[*73]はここでは空性に言い換えられる。空性を証得する時、分別の原因である戯論は寂静する。それを原因とする分別・相・言葉も寂静することになる。したがって、仏は説法しない。この理屈は次の図式のように整理できる。

空性において戯論が滅する

⇓

言語対象が滅する

表4.4　一字不説の理証 2

第三に、無我説にもとづいた理証は以下の通り。

> atha vā yad etad uktaṃ prāg ādhyātmikabāhyavastvanupalambhenādhyātmaṃ bahiś ca yaḥ sarvathāhaṃkāramamakāraparikṣaya idam atra tattvam iti, kīdṛśaṃ tat kiṃ tad vaktuṃ jñātuṃ vā śakyate | tasmāt, **nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocaraḥ** | tatra tattvata iti vākyaśeṣaḥ | kiṃ punaḥ kāraṇaṃ tatra tattve nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocara ity āha, **anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā** || iti, pūrvakam eva vyākhyānaṃ yojyam ||[*74] (新作, 2015: 132)
>
> 【訳】あるいはまた、前［の 18.5 注釈において］、内外の事物を認識しないことによって、内にも外にも、あらゆる点で我執と我所執が尽きる、と言われた。これは世の中でが真実である。そ［の真実］はどのようなものであり、そ［の真実］は説かれうるのか、あるいは知られうるのか。したがって、「言語対象が停止し、心の活動領域が停止する。」と［龍樹は言った］。その中で、「真実にもとづいて」というのが、補足語である。それでは、何故その真実において、言語対象が停止し、心の活動領域が停止するのかと問うならば、「なぜなら、法性は涅槃のように不生不滅である。」と［龍樹は］言った。同じ先の解釈が適応されるべきである。

ここでは、真実 (tattva) というのは内外の事物を認識しないことによって内にも外にも常に我執と我所執が尽きることと定義される。このような真実にもとづいて (tattvatas)、あるいはこの真実において (tattve)、言語対象および心の活動領域が滅する。したがって、

【訳】業と煩悩との尽きることによって、解脱がある。諸々の業と煩悩は分別から［生じる］。それら［分別］は戯論から［生じる］しかし、戯論は空性において滅する。

[*73] Westerhoff (2009: 20-52) は本体論・認識論・意味論の三つの次元から龍樹とチャンドラキールティの svabhāva 理解を分析した結果、チャンドラキールティの svabhāva 理解が essence-svabhāva、substance-svabhāva、absolute svabhāva の三つにまとめられると提案する。そのうち、absolute svabhāva は空性、真実である。

[*74] atha vā yad etad uktaṃ prāg ādhyātimakabāhyavastvanupalambhenādhyātmaṃ bahiś ca yaḥ sarvadāhaṃkāramamakāraparikṣaya idam atra tattvam iti | kīdṛśaṃ tat kiṃvad vaktuṃ vā śakyate, tasmāt **nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛtte cittagocare** | tatra tattvata iti vākyaśeṣaḥ | kiṃ punaḥ kāraṇaṃ tatra tattve nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocara ity āha, **anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā** | iti pūrvakam evam eva vyākhyānaṃ yojyaṃ || PsP Chap.18(de La Vallée Poussin, 1903-13: 365)

真実に悟入した仏は言語活動をしない。この理証を整理すると、次のようである。

法性 (dharmatā) は不生不滅である

⇓

真実 (tattva)= すべての点で我執と我所執が尽きる

⇓

真実にもとづいて、言語対象と心の所行境が滅する。

表4.5　一字不説の理証 3

以上の三通りの理証はそれぞれ独立したものではなく、理証 2 と 3 が理証 1 の補足内容と見なされうる。この三者は「相」と「空性」と「無我」の三視点から仏の一字不説を解釈する。三者をまとめると、仏は空性あるいは法性において無我を証得する際に、心の活動が停止するので、心に増益された言語対象の相も停止する。その結果、言語活動は最後に停止することになる。したがって、如来は説法しない。「相」や「空性の修行」等の要素を説く理証 (yukti) は『青目注』*75にも窺えるので、中観派の伝統説の一つであろう。また、「勝義上」等の限定要素はここではチャンドラキールティに用いられていない。これは「勝義上」等の限定要素を批判するチャンドラキールティの態度を示している。

第四に、『中論』25.24 の注釈において、チャンドラキールティは prapañcopaśama と śiva の二つの単語を解釈し、一字不説の原理を説明している*76。この説明は次のようにまとめられる。

	prapañcopaśama	śiva
1	相の寂静である涅槃	本性上寂静である涅槃
2	語が停止すること	心が停止すること
3	煩悩が停止すること	出生が停止すること

*75 「佛説諸法實相、實相中無語言道、滅諸心行。心以取**相**縁生、以先世業果報故有、不能實見諸法、是故説心行滅。［中略］一切心行皆是虚妄。虚妄故應滅。諸法實相者、出諸心數法、無生無滅寂滅相、如涅槃。」　巻三 (T1564.30.24c26-25a7)

「如是等六十二邪見、於畢竟空中、皆不可得。諸有所得皆息、戯論皆滅。戯論滅故、通達諸法實相、得安隱道。從「因縁品」來、分別推求諸法、有亦無、無亦無、有無亦無、非有非無亦無、是名諸法實相、亦名如、法性、實際、涅槃。是故如來無時無處為人説涅槃定相、是故説諸有所得皆息、戯論皆滅。」　巻四 (T1564.30.36b10-16)。

*76 tadā kuto 'smākaṃ yathoktadoṣaprasaṅgaḥ | iha sarveṣāṃ prapañcānāṃ nimittānāṃ yad upaśamo 'pravṛttis tan nirvāṇam | sa eva copaśamaḥ prakṛtyaivopaśāntatvāc chivaḥ | vācām apravṛtter vā prapañcopaśamaḥ | cittasyāpravṛtteḥ śivaḥ | kleśānām apravṛtter vā prapañcopaśamo janmāpravṛttyā vā śivaḥ | kleśaprahāṇena vā prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena vā śivaḥ | jñeyānupalabdhyā vā prapañcopaśamaḥ | jñānānupalabdhyā śivaḥ || PsP Chap.25(本論文160ページを参照。)

【訳】その場合、どうして我々にとって上述の過失が付随するのか？この［偈頌の］中で、あらゆる戯論、つまり相が寂静すること、つまり無活動が涅槃である。また、その同じ静まりは、本質上寂静するので、吉祥である。あるいは、語の無活動によって、戯論の寂静である。心の無活動によって、吉祥である。あるいは、諸々の煩悩の無活動によって、戯論の寂静である。出生の無活動によって、吉祥である。あるいは、煩悩を断つことによって、戯論の寂静である。余すことのない習気を断つことによって、吉祥である。あるいは、所知の非知覚によって、戯論の寂静である。能知の非知覚によって、吉祥である。

4	煩悩を断ずること	すべての習気を断ずること
5	所知の無認識	知の無認識

表4.6: 一字不説の理証 4

この中で、1 と 2 は『プラサンナパダー』第 18 章の理証の再説である。3 と 4 は煩悩障を断ずること、5 は所知障を断ずることである。この説明からみれば、チャンドラキールティにとって「戯論」(prapañca) の一語は相、語、煩悩、所知等の多様な意味を有する[*77]。このような戯論の寂静である涅槃に立脚する仏は、外在的な言語表現も、内在的な相・煩悩・所知も全部滅する。それゆえこそ、仏は誰に対しても何も説法しない。

以上の理証は如来の一字不説の理由を空性や無我の証得および戯論の寂静に求める。前にふれたように、部派仏教および『如来秘密経』は、一字不説の理由を禅定・無分別・無尋伺に求める。チャンドラキールティは空性・戯論の寂静・二無我・二障等の新しい概念を導入するとしても、仏に証得された優れた禅定の境地を強調する点で、大衆部と『如来秘密経』の一字不説論と大きな隔たりがない。

4.4.2　チャンドラキールティの教証

また、チャンドラキールティは如来の説法と不説が調和することを次の教証に求める。

回数	経典
四回	『如来秘密経』
一回	『華厳経』(*Buddhāvataṃsaka*)
二回	『三昧王経』(*Samādhirājasūtra*)(8.4-5; 14.87)
一回	『智光明荘厳経』(*Jñānālokālaṃkāra*)(II.10.2)

表4.7　一字不説論の教証

このリストから、チャンドラキールティは一字不説について『如来秘密経』を特に重視することがわかる。四回の引用の中で、チャンドラキールティは『如来秘密経』に説かれた「一字不説」論および「虚空説法」説に言及している。前節では、すでに『如来秘密経』の一字不説と虚空説法を検討した。冗長を避けるために、ここでは『如来秘密経』を再び論じない。その代わりに、『華厳経』と『三昧王経』と『智光明荘厳経』の教証を考察する。

§『華厳経』の教証

devata codani dundubhi divyā karmavipāka nivṛtta(nirvṛtta?) marūṇām |
deva pramattavihāriṇaṃ jñātvā dundubhighoṣa pramuñci nabhāto ||

*77 『プラサンナパダー』における「戯論」と「戯論寂静」の意味について、本論文の第 2 章の分析を参照。また、「戯論」の多義性は同様に中観派論師としてのバーヴィヴェーカの *Prajñāpradīpa* にも見られる。これについて、新作 (2014) を参照。

sarva anitya aśāśvata kāmā itvara adhruva phenasvabhāvāḥ |
māyamarīcisamā dakacandrāḥ sarvi bhavāḥ supināntasvabhāvāḥ ||
dundubhi codita śakramarudbhiḥ sārdhu pasaṃkrami dharmasabhāyām |
dharmakathāṃ prakaroti marūṇāṃ yā katha śāntavirāga 'nukūlā ||*78

【訳】天空 (deva) から奏でられている天鼓はマルトたちの業の異熟より起きる。不放逸に住する神を知った後に、鼓音は虚空から発する。
すべての愛欲は無常、非常住、貧弱、不堅固、泡を本質とするものである。すべての存在物は幻と蜃気楼のようであり、水月であり、夢を本質としている。
鼓はシャクラとマルトたちによって聞かれた (codita)。［彼らは］法堂 (dharmasabhā) に入った。マルトたちに寂静で離欲で随順した教説、法の教説をする。*79

この引用文は崩れた形の俗語 (Prakrit) であるので非常に難解である。校定上の問題も存在する。『プラサンナパダー』写本には、nivṛtta や nirvṛtta や nirvṛta や nivṛta 等の様々な形が混在し、写本筆写者に任意に書かれたようである。この点は本論第 II 部の『プラサンナパダー』サンスクリット語校訂本にも窺える。最初の一偈の nivṛtta（停止する）一語はおそらく「生じる」という意味の nirvṛtta であろう。

漢訳『華厳経』の文脈にもとづいて、筆者はこの引用文に描かれた場面を次のように理解している。

天鼓は神々の業の異熟から生じたものである。放逸した神々を戒めるために、天鼓の音は虚空より自然に次の内容を発する ——「一切の欲と存在物は無常である」云々。この内容を聞いた神々は集まり、法堂に来た。その後、彼らに対して天鼓はさらに法の教説を為す。

もしこの解読が正しいとすると、この引用文は虚空説法の教証であろう。つまり、直前の『如来秘密経』の虚空説法説を引用した後に、チャンドラキールティは虚空説法のもう一つの教証をさらに引用する。

---

*78 新作 (2015: 133-4) の校訂。
＝「教化忉利諸天故、得此果報妙音聲、以諸天等放逸行、空中自然出此音。一切五欲悉無常、虚偽無實如水沫、如幻野馬水中月、有為如夢如浮雲。［中略］三十三天聞此音、一切來集善法堂、帝釋為説微妙法、隨順離欲寂静行。」『大方廣佛華嚴經』巻七「賢首菩薩品」(T278.9.439c25-29;400a4-5)
＝「忉利天中有天鼓、從天業報而生得、知諸天眾放逸時、空中自然出此音。一切五欲悉無常、如水聚沫性虚偽、諸有如夢如陽焰、亦如浮雲水中月。［中略］三十三天聞此音、悉共來昇善法堂、帝釋為説微妙法、咸令順寂除貪愛。」『大方廣佛華嚴經』巻十五「賢首品」(T279.10.79a23-27;b2-4)。
この教証は『プラサンナパダー』のチベット語訳に見られない。

*79 新作 (2015: 201) の訳は次である。
天による教誡である天界の鼓が存在する。マルト神たちの業の果報は消失している。天は、不放逸に住する人を知り、虚空から鼓の音を放つ。
すべての欲は無常、非常住、貧弱、不堅固、泡を本質とする。すべての存在は、幻や蜃気楼に似たもの、水月であり、夢を本質としている。
シャクラ神とマルト神が一緒に奏でた鼓は、法座をこえていった。寂静で離欲に適した説示、その法の説示をマルト神たちに対してなす。

§『三昧王経』の教証

buddho yadā bheṣyati dharmarājaḥ sarvāṇa dharmāṇa prakāśako muniḥ |
tṛṇagulmavṛkṣauṣadhiśailaparvata abhāva dharmāṇa ravo bhaviṣyati ||
yāvanti śabdās tahi lokadhātau sarve hy abhāvā na hi kaści bhāvaḥ |
tāvantu kho tasya tathāgatasya svaru niścalī lokavināyakasya || SR 8.4-5*[80]

【訳】一切法を明らかにする仏が法王になる時、草・灌木・木・草薬・石・山から、「諸法が存在しない」という声は生じるだろう。
それらから、「実に世界において一切が非存在である」、「実にいかなるものも存在物ではない」という音がある限りに、まさにその限りに、世人の指導者であるその如来の声は不動である。

この二偈は『三昧王経』第 8 章「無生［如来］章」(Abhāvasamudgataparivarta) の第 4-5 偈である。この章は、釈迦仏が月灯童子 (Candraprabha) に過去仏「無生如来」の名前の由来を説くというきっかけで、「すべての法は無から生じる」(abhāvasamudgatāḥ sarvadharmāḥ) ことを教えるという説法場面を描く。このうち、上述の二偈は無生如来の成仏の場面を描くものである。同章の散文はこの二偈を次のように敷衍する。

tasya ca bhagavato bodhiprāptasya sarvavṛkṣapatrebhyaḥ sarvatṛṇagulmau[ṣadhivanaspati-bhyaḥ sarvaśailaśikharebhya]ś cābhāvasamudgataśabdo niścarati | yāvati ca tatra lokadhātau śabdaprajñaptiḥ sarvato 'bhāvasamudgata[vijñaptiśabdo niścarati ||]*[81] SR(Dutt and Sharma, 1941: 88-9)=(Vaidya, 1961: 41)

【訳】また、菩提を得たその世尊にとって、非存在より生じた音がすべての木の葉っぱから、すべての草・灌木・草薬の茎から、すべての岩山の頂から、発する。また、その世界において、音の施設があり、非存在より生じた識別のための音がすべてのものから発する。

この散文は偈頌部分と完全に一致していないが、同様に、無生如来が成仏するに際して、木や草から音声が自動的に自然に生じることを説いている。これも虚空説法の教証にほかならない。チャンドラキールテに引用された『三昧王経』のもう一つの教証は次のようである。

ekasvarā tu tava lokahitā nānādhimukti svaru niścaratī |
ekaika manyi mama bhāṣi jino brūhi smitaṃ tu kṛtu kasya kṛte || SR 14.87*[82]

---

*[80] 新作 (2015: 134) の校訂。
漢訳『月燈三昧經』にはこの二偈のパラレルはない。
この教証は『プラサンナパダー』のチベット語訳に見られない。

*[81] 「彼佛成正覺時、所有樹木、叢林、藥草皆出聲言、一切諸法悉無所有。童子、時彼世界所出諸聲皆亦説言、一切諸法悉無所有。」　那連提耶舎訳『月燈三昧經』巻二 (T639.15.639.557a12-14)。

*[82] 新作 (2015: 134) の校訂。
ekasvarā tu tava lokahitā nānādhimukti svaru niścaratī |

【訳】一方、世人に利益する君の一音から、様々な信解に関する音が発する。各々の人は「勝者が私のために説いた」と考えた。為された笑顔は誰のために為されたのか、教えてください。

この偈頌に対応する散文はない。これは一音説法の教証に間違いない。前節で『如来秘密経』等を考察した時、すでにふれたが、一音説法と一字不説の二つの説法観は多くの文献に混在している。一字不説は一音説法より新出した説法観であるが、仏の神通力と功徳を誇るために両説は同様に経典に保存されることになった。『三昧王経』が一字不説と一音説法をともに説くことは両者の密接な関係を示している。ここでは、チャンドラキールティは諸文献から一字不説の教証を引用した後、さらに一音説法に言及する。チャンドラキールティの理解の中で、一音説法は一字不説を補佐するための付属的な説法観であろう。

§『智光明荘厳経』の教証

四番目の教証は『プラサンナパダー』第 25 章に引用された『智光明荘厳経』である。

tathāgato hi pratibimbabhūtaḥ kuśalasya dharmasya anāsravasya |
naivātra tathatā na tathāgato ’sti bimbaṃ ca saṃdṛśyati sarvaloke || JĀA II.10.2(木村他, 2004b: 54)=(木村他, 2004a: 37)*83

【訳】実に、如来は無漏なる善法の映像のようである。これにおいて、真如もなく、如来もいない。しかし、すべての世界において、影が見られる。

『智光明荘厳経』は「一切諸法の不生不滅とともに如来法身の不生不滅を強調する経典」*84であり、『華厳経・性起品』と密接に関係している*85。また、同経は『宝性論』において如来蔵の教証として引用される。この経典の文脈から見れば、偈頌 II.10.2 は「如来は不生不滅である」という法門を示す九例の一番目「インドラ神の映像」、二番目「天の太鼓」、三番目「雨雲」、四番目「梵天」をまとめる偈頌である。特に一番目「インドラ神の映像」の喩例と関連する。この「インドラ神の映像」例は、世間の男女に見られたインドラ神と彼の宮殿と三十三天の宮殿は全部映像に過ぎないように、世人に見られた如来も本当の仏ではなく、映像にすぎないと説明している。如来の映像には真如も如来も存在せず、世人に見られた如来は単に影である。

---

ekaiku manyi mama bhāṣi jino [brūhi smitaṃ tu kr̥]tu kasya kr̥te || SR 14.87(Dutt and Sharma, 1941: 198)
＝「救世導師以一音、隨信種種發異解、一切皆謂佛為己、願大沙門説笑縁。」那連提耶舎訳『月燈三昧經』巻三 (T639.15.567a17-18)。
この教証は『プラサンナパダー』のチベット語訳に見られない。

*83 ＝「無漏善法中、無如及如来、依彼善法力、現世如鏡像。」　元魏曇摩流支訳『如来莊嚴智慧光明入一切佛境界經』巻一 (T357.12.242b18-19)
＝「如来所成如影像、一切善法皆無漏、一切皆遍佛眞如、三種影像世間現。」　宋法護訳『佛説大乘入諸佛境界智光明荘厳経』巻二 (T359.12.257a7)

*84 大正大学綜合佛教研究所梵語佛典研究会 (2004: 60) を参照。

*85 高崎 (1968: 54-78) と伊久間 (2010: 395-391) を参照。

この一偈の詳説とも見られる「インドラ神の映像」例の散文は次のようである。

> evam eva Mañjuśrīs tathāgato ’rhan samyaksambuddho neñjati, na manyate, na prapañcayati, na kalpayati, na vikalpayati | akalpo ’vikalpo ’cintyo ’manasikāraḥ śāntaḥ śītībhūto ’nutpādo ’nirodho ’dṛṣṭo ’śruto ’nāghrāto ’nāsvādito ’spṛṣṭo ’nimitto ’vijñaptiko ’vijñāpanīyaḥ | anutpādagatiko hi Mañjuśrīs tathāgataḥ | atha ca pratibimba iva lokeṣu dṛśyate | yathādhimuktikānāṃ ca sattvānāṃ darśanavaimātratayā, āyuḥpramāṇavaimātratāṃ darśayati | paripācanādhimuktibalādhānatayā bodhibhājaneṣu sattveṣu pratibhāsaprāpto bhavati | yathāśayādhimuktyā ca sattvā dharmaṃ śṛṇvanti | yathāśayena triyānam iti saṃjānanti, yathāśayena cādhimucyante || 木村他 (2004a: 28)
>
> 【訳】まさに同様に、文殊よ、如来・阿羅漢・正等覚者は動かず、思考せず、戯論せず、想定せず、分別しない。無想定であり、無分別であり、不思議であり、作意を持たず、寂静であり、冷静であり、不生であり、不滅であり、見られず、聞かれず、嗅がれず、味わわず、接触されず、相を持たず、識別を持たず、識別対象を持たないのである。なぜなら、如来は不生に存在する。しかし、諸々の世間において、映像のように見られる。また、信勝を持つ衆生たちに応じて、［如来の］姿の区別によって、寿命・大きさの区別を示す。［衆生を］成熟させること・信勝の力を保持することによって、［如来は］菩提の器である衆生たちにおいて、影像として獲得される者になる。また、願望と信勝に応じて、衆生たちは法を聞く。願望に応じて、［衆生たちは］「三乗がある」と考える。また、願望に応じて、［衆生たちは］信勝する。

このようにして、如来は不生不滅であり、戯論も想定も分別も持たない者である。このような如来は決して世人の認識対象にならない。声聞・独覚および世人たちの見た如来は真実としての如来ではなく、映像に過ぎないという結論に導く。如来の説法も衆生の聞法も影像にほかならない。この意味で、この『智光明荘厳経』の偈頌はチャンドラキールティの引用した『如来秘密経』・『華厳経』・『三昧王経』等と同様に、一字不説の説法観の教証である。

以上の諸教証の意図をまとめると、次のようになる。

『如来秘密経』	一字不説；虚空説法
『華厳経』	虚空説法
『三昧王経』	虚空説法 (abhāvasamudgataśabda) と一音説法
『智光明荘厳経』	如来と如来の説法は映像である

表4.8　チャンドラキールティに引用された一字不説の教証

これから見れば、『プラサンナパダー』の中で、チャンドラキールティは特に『如来秘密経』に由来する虚空説法を重んじる。この説によると、仏は無分別の境界に住しているが、神通力を通じて、虚空から説法の声を発する。このように、如来の説法と一字不説との矛盾を調和できる。

4.4.3　『入中論』の一字不説論

『プラサンナパダー』は『中論』の注釈書として、『中論』の構成および理屈に制限されることを免れない。これに対して、『入中論』(*Madhyamakāvatāra*) はチャンドラキールティに自由に自分の意見を宣揚する機会を与える。『入中論』において、「一字不説」を説明するために、チャンドラキールティは次の三偈を説く。

de yi longs spyod rdzogs sku bsod nams kyis ||
zin dang sprul pa mkha' gzhan las de'i mthus ||
sgra gang chos kyi de nyid ston 'byung ba ||
de las 'jig rten gyis kyang de nyid rig || MA 12.5*[86]
ji ltar rdza mkhan stobs chen ldan pas 'dir ||
yun rings 'bad pas ches bskor 'khor lo ni ||
de rtsol da lta skyes pa med bzhin du 'ang ||
'khor zhing bum pa la sogs rgyur mthong ltar || MA 12.6
de bzhin da lta skyes rtsol med bzhin du ||
chos kyi bdag can sku nyid la bzhugs de'i ||
'jug pa skye bo'i dge dang smon lam gyi ||
khyad par gyis 'phangs las ches bsam mi khyab || MA 12.7*[87]

---

*[86] チャンドラキールティの自註は次のようである。
bsod nams kyis 'dus byas pa'i sku las 'byung ba lta zhog gi de'i byin gyi rlabs kyis sprul pa dag las chos kyi de kho na nyid gsal bar byed pa'i sgra gang zhig 'byung ba de las kyang 'jig rten gyis de kho na nyid nges bar 'gyur ro || sprul pa dag las 'byung ba 'ba' zhig tu ma zad kyi gzhan yang de'i mthus sems dang sems las byung ba 'jug pa med du zin kyang | nam mkha' dang gzhan rtswa dang shing dang rtsig pa dang brag la sogs pa las de'i mthus sgra gang zhig 'byung ba de las kyang 'jig rten gyis de nyid rig pa yin no || MABh(de La Vallée Poussin, 1912: 359-360)=(D no.3862, 331a5-7)
【訳】［音声は］福徳によってなされた［受用］身から生じることは言うまでもなく、彼の加護によって諸変化［身］から法の真実を明らかす何らかの音声が生じるならば、それにもとづいても、世人は真実を決定することになる。変化［身］から生じるだけではなく、さらに彼の威力によって心と心所が活動しなくても、虚空や別に草・木・壁・岩などから彼の威力によって何らかの音声が生じるならば、それにもとづいても世人は真実を知るのである。

*[87] MA 12.6-7 について、チャンドラキールティの自註は次のようである。
de la gang gis na rtog pa med par gyur du zin kyang gdul ba'i bya ba ji ltar 'tsham pa ltar 'jug pas sems can gyi khams mtha' yas pa'i don byed par 'gyur ba | ji ltar sangs rgyas bcom ldan 'das 'di dag da ltar rnam par rtog pa mi mnga' zhing | yid bzhin gyi nor bu dang dpag bsam gyi shing dang 'dra bar ji ltar 'tsham par sems can gyi don sgrub pa lhur mdzad cing chos kyi dbyings las skad cig kyang mi bskyod la | sems can 'dul ba'i dus las kyang mi 'da' ba de bzhin du bdag kyang gyur cig ces byang chub sems dpa' sngar smon lam gang btab pa'i smon lam de'i shugs dang | gdul ba rnams kyi rnam pa de lta bu'i chos nyan par 'gyur ba'i las yongs su smin pa las bya ba'i khyad par de 'dra ba dag mngon pa yin no || de ltar na da ltar skyes pa'i 'bad rtsol med par de kho na nyid nye bar ston pa dang | sems can gyi don bya ba yang 'grub po zhes bya ba shes par bya'o || MABh(de La Vallée Poussin, 1912: 360-361)=(D no.3862, 331b2-5)
【訳】それに対して、どうしてすでに無分別になったとしても、教化対象に応じて適合に活動することによって、無限な衆生界の利益を為すことになるのか？仏世尊たちは現に分別を持たずに、如意珠と如意樹のように、適合に衆生の利益を成就することを専らとして、法界から一瞬間さえも離れなく、衆生を教化する時からも離れない。「私もこのようになるはずです」というように菩薩が以前に誓願を立てた。その誓願の力と、教化のそのような種類の法を聞いたことになるという業が成熟することにもとづいて、その

【訳】福徳 (*puṇya) に収められる彼の受用身 (*saṃbhogakāya) と変化［身］と、他の虚空から、彼の力によって、法の真実を教える何らかの音声が生じるならば、それにもとづいて世人も真実を知る。
あたかも上手な陶芸家によってここで長時間で努力によって大いに回された轆轤は、彼が現に努力をしないままに、回って、壺などの原因である、と見られるように、
同様に、現に努力が為されないままに、法を本質とする身に存在する彼の活動は、衆生の優れた善と誓願に引き起こされるから、非常に不思議である。

チャンドラキールティは『入中論』において仏の功徳を論じるに際して、「法身」・「受用身」（所流身）・「変化身」の三身に明白に言及する。そのうち、受用身と変化身の二身、および虚空・草木等の別のものから、法の真実 (*tattva) を教えるための音声が生じる。衆生はその音声にもとづいて真実を知ることになる。あたかも大いに回された轆轤は陶芸家の努力を離れても、回り続け、壺などを作るための原因になれる。同様に、仏は成仏以前の菩薩段階で発した誓願と善の余力によって、無分別のままに、音声を自動的に発する。

一見してわかるように、この説明は『如来秘密経』と『楞伽経』の一字不説論の融合である。すなわち、如来の法身は無分別であり、法界から一瞬間さえも離れないが、成仏以前の誓願によって如来の受用身と変化身と虚空から説法する。

以上の分析からすれば、チャンドラキールティの一字不説理解の特色は次にようにまとめられる。

1. 理証上、チャンドラキールティは「相」と「空性」と「無我」の三視点から一字不説の理を解釈する。二諦説にもとづいた「勝義上」という限定要素はチャンドラキールティに用いられていない。
2. 教証上、チャンドラキールティは『プラサンナパダー』においては、虚空説法をもって如来の説法と不説の矛盾を調和する『如来秘密経』・『華厳経』・『三昧王経』等の教証を重んじる。
3. 『入中論』においては、チャンドラキールティは『如来秘密経』と『楞伽経』の一字不説論の融合を求める。

4.5　小結

本章では、一字不説の説法観の展開を検討する上で、チャンドラキールティの理解と彼の思想の特色を考察した。

まず、一字不説の説法観は部派仏教の時代に、仏の優れた特性として大衆部によりは

ような優れた作用が現前する。以上のように現に努力を為さなくても、真実を教えることと、為されるべき衆生の利益も達成すると知るべきである。

じめて唱えられる。現存の *Samayabhedoparacanacakra* の諸訳本から見れば、一字不説の説法観は最初から大衆部にすでに成立した学説ではない。真諦訳『部執異論』は一音説法のみを説いており、一字不説に完全に言及していない。そのため、一字不説は後の時代に大衆部の宗義として『異部宗輪論』に編入されたのであろう。

『如来秘密経』は一字不説を提唱する大乗経典としてチャンドラキールティに大きな影響を与える。そこで、本章第二節は『如来秘密経』の一字不説を考察した。同経は一字不説の原因を「如来は常に禅定する」ことに纏める。また、一字不説と仏の説法の矛盾を調和するために、同経は虚空説法説を唱えている。『如来秘密経』によると、如来は常に禅定に住し、説法しないが、衆生の意楽に応じて神通力によって虚空から様々な音声を発する。

『如来秘密経』から一字不説を受け継いだ『楞伽経』は修行論と仏身論の二点から一字不説を論じる。先行研究は一字不説論の修行論の意味を詳細に論じた。本章第三節では、これまで本格的な研究が乏しかった仏身論の一字不説を考察した。『如来秘密経』の一字不説論と比べると、『楞伽経』の特色は三仏説を導入することである。『楞伽経』は、法性仏は一字不説であるが、所流仏と変化仏は説法すると語り、如来の説法と不説との矛盾の調和を図る。

チャンドラキールティの一字不説理解は『プラサナパダー』と『入中論』の二つの論書に見られる。『プラサナパダー』では、チャンドラキールティは四理証と八教証を駆使し、一字不説論を解釈する。そのうち、チャンドラキールティは『プラサナパダー』第 18 章において「相」と「空性」と「無我」の三視点から一字不説を説いている。この三理証をまとめると、次のようになる。

空性修行を通じて、本来不生不滅の法性や空性を証得する

⇓

心の活動が停止する

⇓

心に増益された相が停止する

⇓

相を対象とする言語活動が停止する

すなわち、仏は真実としての空性を証得することによって、心の活動および心に増益された相を停止させる。その結果、相を対象とする発語行為は最後に停止することになる。また、チャンドラキールティは『プラサナパダー』第 25 章において「戯論寂静」の理証をもって一字不説を説明する。本論文第 2 章ですでに説明したように、戯論 (prapañca) は内的な分別の原因から、外的な言語表現までの幅広い範囲のものごとを指す。そのため、戯論寂静の境地に住している仏は、言語表現を止めるたけでなく、分別・概念思惟も完全に静める。このように、一字不説の説法観は涅槃の異名としての「戯論寂静」に裏付けられている。

教証の場合、チャンドラキールティは『如来秘密経』を四回、『華厳経』を一回、『三昧

王経』を二回、『智光明荘厳経』を一回に引用する。これらの引用文の主題は次のようにまとめられる。

『如来秘密経』	一字不説；虚空説法
『華厳経』	虚空説法
『三昧王経』	虚空説法 (abhāvasamudgataśabda) と一音説法
『智光明荘厳経』	如来は無漏なる善法の映像である

このリストからみれば、『プラサンナパダー』では、チャンドラキールティは「虚空説法」説で如来の説法と不説の矛盾を調和する『如来秘密経』・『華厳経』・『三昧王経』等を重んじている。それに対して、『入中論』では、チャンドラキールティは『如来秘密経』と『楞伽経』を融合した一字不説論を唱えている。すなわち、如来の法身は無分別であり、法界から一瞬間さえも離れない。そのため、如来の法身は説法しない。しかし、仏は成仏以前の誓願によって、如来の受用身・変化身・虚空等から音声を発して説法する。

この一字不説論の理証と教証はそれぞれ空思想と大悲・三身・菩薩の誓願等の大乗仏教思想を代表している。これはチャンドラキールティの中観思想と大乗の接点の一つである[*88]。そのため、理証だけでなく、教証も中観論師の思想の形成に多大な影響を与えたことは看過できない。

[*88] 中観派の空思想と大乗の接点について、岸根 (2000: 289-292) は次のように説く。
「チャンドラキールティは空思想の説示を利他行や菩薩行の実践という課題と直結させて考えている。これらの実践を大乗の基本理念を考えるかぎり、チャンドラキールティが大乗と空思想の結びつきを強く意識していた中観思想家であると指摘できるであろう。従来、チャンドラキールティは帰謬論証を使用した中観思想家として捉えられ、主として論証方法の問題から、その思想史的意義を定位する場合が多いが、それとは別の観点から思想史を捉え直すことも重要と思われる。」

第 5 章

結論

本論文の考察結果をまとめると、まず、第 1 章では『青目注』、『無畏論』、吉蔵、チャンドラキールティ、ツォンカパの『中論』の構成理解を考察した。その結果、『青目注』と『無畏論』は「大乗の縁起＝不生不滅、小乗の縁起＝十二因縁」ということを基準として、『中論』を大乗教説と小乗教説に大別し、それぞれ三段科段と二段科段の科段体系を設ける。三論宗の祖とされる吉蔵は『青目注』の科段を継承する一方、『法華経』等の経典の影響の下で、三段科段をそれぞれ『法華経』にもとづいた三転法輪に配当する。つまり、最初の二十五品は根本法輪、第二十六品と第二十七品の 1 偈から 28 偈は枝末法輪、最後の 29-30 偈は摂末帰本法輪に相当すると位置づけられる。それに対して、チャンドラキールティは『十地経』・『稲竿経』等の経典に影響され、『中論』第 26 章以降の内容を小乗教説と見なす最初期の『中論』注釈書と異なり、『中論』全体の整合性を二無我に求める。チャンドラキールティの影響を受けるゲルク派の開祖であったツォンカパはさらに二無我説を眼目として、『中論』の各章を法無我や人無我のいずれに配当し、科段を施す。そのため、『中論』第 25 章「観涅槃品」の位置づけについて、各注釈者の理解は次のようにまとめられる。

1. 『青目注』・『無畏論』・吉蔵は「観涅槃品」を大乗教説の終わりと見なす。この構成理解は最初期の『中論』注釈書に遡れるので、中観派の古説であろう。
2. チャンドラキールティとツォンカパは『中論』の整合性を二無我に求めている。「観涅槃品」は大乗教説の終わりではなく、二無我の証得に導くものである。

次に、第 2 章では「有余依涅槃」・「無余依涅槃」、「生死即涅槃」、「戯論寂静」、「無住処涅槃」という四つの視点から、チャンドラキールティの涅槃観を考察した。

まず、チャンドラキールティは原始仏教以来の「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の区別を継承するが、upadhi を五蘊、upadhi に依拠したものを ātmasneha と定義する。『プラサンナパダー』第 18 章はアートマンが五取蘊に依拠して施設されるものであるという原理および空性修行の中で我執と我所執の滅を詳しく論じる。このように、原始仏教以来の二種類の涅槃は『プラサンナパダー』の中で、我執・我所執の煩悩と空性修行と関係づけられている。

次に、チャンドラキールティは輪廻と涅槃両者は聖者の対象ではなく、凡夫に構想された世俗諦であると規定し、「生死即涅槃」を論じる。「戯論寂静」について、チャンドラキールティは龍樹の『中論』を踏まえて、戯論 (prapañca) を分別の原因・煩悩・相・言語等と解釈する。その上で、彼は涅槃を一切の戯論の寂静であると再定義し、伝統説としての「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の価値を認めず、仏の境地は戯論寂静であると説明する。

「無住処涅槃」は龍樹の『中論』に見られない涅槃観である。『中論』注釈書としての『プラサナパダー』は同様に「無住処涅槃」を詳しく論じない。チャンドラキールテは彼の独自の著作である『入中論』において、これを詳細に論じる。同論の中で、チャンドラキールティは『法華経』の「化城喩」を挙げ、声聞独覚に証得された涅槃は単に如来が大悲にもとづいて声聞独覚を休憩させるために設けた方便であるが、仏菩薩は衆生救済のために決して涅槃に住しない「無住処涅槃」説を唱える。このような無住処涅槃の背景には、「生死即涅槃」と大乗仏教に重視された利他行の二つが見られる。

本論文の第 2 章に示された「生死即涅槃」と「戯論寂静」が『プラサンナパダー』第 25 章「観涅槃品」の二つの主題であるので、本論文の第 3 章と第 4 章はこの二つの主題をそれぞれ考察した。まず、「生死即涅槃」を論証するために、龍樹とチャンドラキールティは四句分別論法を用いる。従来の研究は、中観派の四句分別論法が矛盾律等に違反するとしばしば指摘するが、本論文は「主語の指示対象が存在しない命題の真偽問題」という視点から、「涅槃」という主語の指示対象の存在が中観派に認められないので、四句分別の四つの前主張を全部否定しても矛盾律等に違反しないと論じた。N は涅槃、B は存在物 (bhāva) を表示すると、四句分別の四つの前主張は次のように記号化できる。

論理式 α: $\exists x(Nx \wedge Bx) \vee \exists x(Nx \wedge \neg Bx) \vee \exists x(Nx \wedge x(Bx \wedge \neg Bx)) \vee \exists x(Nx \wedge \forall y((\neg By \wedge \neg\neg By) \leftrightarrow x = y))$

これらに対するチャンドラキールティの否定は次のようである。

論理式 β: $\neg\exists x(Nx \wedge B'x) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge \neg B'x) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge x(B'x \wedge \neg B'x)) \wedge \neg\exists x(Nx \wedge \forall y((\neg By \wedge \neg\neg By) \leftrightarrow x = y))$

前主張における存在物 (bhāva) という概念は有為法と無為法を指すが、チャンドラキールティに理解された存在物 (bhāva) は単に有為法だけを指す。そのため、本論文は、B' でチャンドラキールティに理解された bhāva を表す。また、中観論者であるチャンドラキールティにとって、いかなる個物 x も自性の点で実在しないので、論理式 β は矛盾律等の論理法則に違反しない。このような論法を通じて、チャンドラキールティは実体視された涅槃を排斥し、大乗仏教徒は涅槃に対しても執着すべきでなく、無限な衆生救済を放棄せずに続けるべきであると勧める。

最後に第 4 章では『中論』25.24 と『プラサンナパダー』に提示された一字不説の説法観を考察した。『中論』25.24 偈は仏の涅槃を戯論寂静と規定し、この境地に住する仏は誰に対しても説法しないと説く。一字不説の説法観は部派仏教の時代に、仏の優れた特性の一つとして大衆部によりはじめて唱えられる。その後、一字不説と仏の大悲による説法の事業との矛盾を調和するために、大乗経典『如来秘密経』はさらに虚空説法を説くことになる。つまり、如来は実際に禅定に住して説法しないが、神通力によって虚空から声

を発する。

それに対して、『如来秘密経』から一字不説を受け継いだ『楞伽経』は法性仏・所流仏・変化仏という三仏説を導入し、法性仏は一字不説であるが、所流仏と変化仏は説法すると主張し、同様に如来の説法と不説との矛盾の調和を企図した。

チャンドラキールティは『プラサナパダー』において、四理証と八教証をもって一字不説論を説明する。理証の中では、チャンドラキールティは「相」・「空性」・「無我」・「戯論寂静」の視点から、仏の一字不説を解釈する。教証の中では、チャンドラキールティは虚空説法を説く『如来秘密経』・『華厳経』等の大乗経典を重んじている。『入中論』では、チャンドラキールティは『如来秘密経』の虚空説法と『楞伽経』の三仏説の総合理論を唱える。すなわち、仏の法身は完全に沈黙しているが、変化身・受用身・虚空から音声を発して説法する。この理証と教証からみれば、チャンドラキールティは中観派の空思想と大乗仏教に重視された大悲や三身や菩薩の誓願等との結びつきを強く意識した中観論師であると考えられる。

第 II 部

テキスト編

第 6 章

Sanskrit Critical Edition

6.1 Introduction

Candrakīrti's *Prasannapadā*(PsP) is the most important commentary on Nāgārjuna's *Mūlamadhyamakakārikā*(MMK), partly due to the fact that in Tibetan Buddhism it is regarded as the bifurcation point of *Prsāṅgika and *Svātantrika Schools, and partly due to its completeness that allows modern scholars to recollect all the verses of MMK, not to mention that it is also indispensable for revealing Candrakīrti's own thoughts. Therefore, in these meanings, PsP is functioning as a landmark in the history of Madhyamaka philosophy.

During 1903-1913, Louis de La Vallée Poussin undertook the job of creating a critical edition of PsP and finally published this edition as de La Vallée Poussin (1903-13). According to its introduction(*Avant Props.*), de La Vallée Poussin consulted three paper manuscripts: the Paris, the Cambridge, and the Calcutta. Because these three paper manuscripts contain serious scribal errors, lacunae, and duplications, de La Vallée Poussin relied much on the Tibetan translation of PsP(PsP_T) and truly improved the Sanskrit readings. de La Vallée Poussin's critical edition has stood the test of time, till now, it is still regarded as the standard edition of PsP.

Since the publication of de La Vallée Poussin's edition, many scholars have provided many suggestions for emendation in their translations of PsP and studies. But very few of them seriously consulted a Sanskrit manuscript. This situation was changed only with the publication of "*Textcritical Notes on the Prasannapadā*" by Professor de Jong in 1978. In this article, with the help of a new discovered paper manuscript(named R by de Jong) provided by Giuseppe Tucci, de Jong compared de La Vallée Poussin's edition, PsP_T and the new R manuscript, and revealed the close relationship between PsP_T and R.

Since then, with the discovery of new manuscripts and the development of Digital Humanity, scholars have more access to manuscripts preserved separately around the world. Professor Toshiyuki Kishine published a new critical edition of PsP chapter 24 in 2001-2002(岸根, 2001a,c, 2002) based on eleven PsP paper manuscripts. Kragh (2006) published a new critical edition and translation of PsP chapter 17 based on four paper manuscripts and one palm-leaf manuscript. On

the basis of her Ph.D. dissertation, MacDonald (2015a) published a new edition of PsP chapter 1. In the first half of this critical edition, MacDonald consulted 14 paper manuscripts, one palm-leaf manuscript and Professor Yonezawa' hand copy of a palm-leaf manuscript preserved in Lhasa. After figuring out the stemmas of these texts, in the second half of this edition, ten paper manuscripts are eliminated and only the last six "better" manuscripts are consulted. Doctor Yoshiaki Niisaku finished his Ph.D. dissertation in 2015 which contains a new critical edition and translation of PsP chapter 18 on the basis of the six "better" manuscripts determinated by MacDonald.

In this thesis, I also used the six "better" manuscripts to creat a new critical edition of PsP chapter 25. I adopted different abbreviations of these six manuscripts from MacDonald (2015a) as follows:

abbr.	Catalogue Number	abbr. in MacDonald
P	Potala Palace Manuscript	Q
O	Oxford, Bodleian Library 1440-Ms. Sansk. a. 9 (R)	P
R	Keshar Library No.9-182= NGMPP reel. C19/8	D
T	Tokyo University Library No. 251	J
C	Cambridge University Library Add. 1483	L
N	NGMPP reel. E1294/03	B

I shall briefly describe these six manuscripts below.

ms. P[1]

According to Yonezawa (2005), the physical features of ms. P is as follows:

Material:	Palm-leaf
Measures:	4.5 by 57cm
Lines per folio:	7∼9
Physical condition:	83 leaves. The 10th, 16th, 43th and 86th leaves are missing. The 85th folio ends with saṃskṛtam aprati° (LVP 593.5). The right edge of some leaves is defect, thereby 7∼8 akṣaras on that part are missing.
Script:	Nepālī(?)

Chapter 25: folio 74b1-77b8. It is complete almost without any missing or damage. Only a few *akṣara*s are difficult to identify due to the ambiguity of the digital pictures.

From its contents, ms. P is precious for it contains many unique readings not attested by other manuscripts, even the palm-leaf ms. O. For example, in the commentary on MMK 25.24, Candrakīrti quoted a passage from *Tathāgataguhyasūtra*(TG). In ms. P, its reading is as follows: "yāṃ ca rātrim **anupādāya** parinirvāsyati …". PsP_T, Sanskrit manuscript of TG and its Tibetan translation all have the same reading on "**anupādāya**"(**len pa mi mnga' bar**). But mss. ORTCN all mistake

[1] I received the digital pictures of chapter 25 of this precious manuscript from Professor Yonezawa with the help of Professor Akira Saito. I'm extremely grateful to both of them.

"**anupādāya**" for "**upādāya**". Besides, compared with ms. O, ms. P is well preserved and suffered from a very limited damage and loss. Therefore, in this chapter, I choose ms. P as the copy-text. But different from Kragh (2006: 40-45)'s principle of textual criticism, which is aimed at preserving and reflecting the treatment of accidentals in copy-text, most accidentals, e.g. gemination, degemination, and inconsistent usage of anusvāra and homorganic nasals, in my critical edition, are standardized.

Date: Since the last folio of ms. P is missing, the exact date of it is not determinate. MacDonald (2015a: 52) conjectures that ms. P is more recent than ms. O.

Script: unhooked Nevālī

ms. O

According to Winternitz and Keith (1905: 254), the physical features of every chapter of ms. O is as follows:

> Candrakīrti's Madhyamakavṛtti, 14th cent. ?
> Contents: the Madhyamakavṛtti or Vinayasūtra of Candrakīrti, being a treatise on Metaphysics according to the Nihilistic system of Buddhism, see Burnouf, *Introd.*, pp.559 sq.; Hodgson, *Essay on Lit. of Nepal.*, p.20; Mitra, *Nepal. Buddh. Lit.*, pp.169-172. A list of the titles of the twenty-seven prakaraṇas is given by Bendall, *Buddh. Sansk. MSS.*, pp.114-116; they agree with the colophons still remaining in this very much injured MS. Prakaraṇa 2, ends of f.20v; 3, on f.22; 4, on f.23v; 7, on f.32; 8, on f.34v; 9, on f.36; 12, on f.42v; 15, on f.50v; 16, on f.55v; 17, on f.82; 23, on f.95; 25, on f.106v; 26, on f.110. After f.115, which contains a portion of prakaraṇa 27, come two leaves with the colophons of prakaraṇas 14 and 13 respectively. F.42 has been inserted as f52, and its place filled by another leaf on which only the 4 of the foliation number remains. It and the two end leaves must be three of the four lost ff.45-48. Edited by the Buddhist Text Society.
> *Bought* in 1900 from Dr. A.F.R. Hoernle.
> *Kept* in a cloth box. *Size of box:* $22\frac{1}{2} \times 2\frac{3}{4} \times 2\frac{3}{4}$ in.
> *Size of leaf:* $22 \times 1\frac{7}{8}$ in.
> *Material:* Palm-leaves, held together by two pieces of cardboard and a string passing through two holes at the sides.
> *No. of leaves:* 80 remain out of probably 115. (Dr. Hoernle says 180 out of 217, but this is doubtful.)
> *No. of columns:* 3, separated by a blank space one inch wide.
> *Date:* Dr. Hoernle assigns the ms to the first half of the 14th cent. Perhaps it belongs rather to the end, cf. the numerals with those of the MSS. of A.D. 1360, 1385, in Bendall's *Buddh. Sansk. Mss.*, plate V. The numerals for 89, 90, 100, agree most closely with those of no. 1693, ibid.
> *Character:* Nepalese.

Injuries: the end (perhaps two or three ff.) is lost, and also ff. I, 27-31, 33, one between 44 and 49, 52, 64-82, 87, 92-93, 96, 108, 109, 112. The rest is miserably mutilated.

MacDonald (2015a: 36) corrected folio numbers of its lost leaves to: 1, 27-31, 33, 48, 52, 64-82, 87, 92, 95-96, 108-110, 113.

Chapter 25: folio 102a3-106b6. The manuscript is suffering from serious injuries that the last several lines of recto-pages and the first several lines of verso-pages are almost completely damaged and many folios are missing. While fortunately, no folio of Chapter 25 is lost. I received the digital files of this ms. from Dr. NIISAKU Yoshiaki. These files are black-white photographs without a high photographic resolution. It is sometimes difficult to distinguish a stroke or anusvāra with block noises and wormholes. I used *Photoshop* software to sharpen and increase its contrast ratio. This definitely increased its legibility.

Colophon: no.

Date: late 1100s or 1200s(MacDonald, 2015a: 49)

Script: *Nepalese hooked writing*.

ms. R

Physical features recorded on the information card by NGMPP:

Reel No.:	C19/8
No. of leaves:	113
Material:	Nepalese paper
Size in cm:	39 ×16.1
Script:	late Nevārī

Chapter 25: folio 96b9-101b10.

Colophon : ācāryacandrakīrttipādoparacitāyāṃ prasannapadāyāṃ madhyamakavṛttau dṛṣṭiparikṣā nāma saptaviṃśatitamaṃ prakaraṇaṃ || ○ || samāptaṃ cedaṃ madhyamakaśāstraṃ sakalalaukika-lokottarapravacananītaneyārthavyākhyānanaipuṇyaviśāradaṃ śrāvakapratyekabuddhānuttarasaṃ-myaksaṃbuddhabodhimaṇḍāsanadāyakam iti || (112b2-4)

Date: late 19th or 20th century[1].”

ms. T

Ms. T preserved in the Tokyo University library was brought to Japan from Nepal or Tibet by Rev. Ekai Kawaguchi(河口慧海). According to the preface of Matsunami (1965), in 1913 Professor Junjirō Takakusu went to Nepal to collect Sanskrit mss. accompanied with Ekai Kawaguchi and

[1]Because some akṣaras in ms. R resemble the corresponding Devanāgarī characters, Kragh (2006: 39) inferred that: “If the principle is accepted that earlier Nevārī-mss have a script less resembling Devanāgarī than later Nevārī-mss, it may be concluded that ms. da(=ms. R) is a late ms, possibly belonging to the late 19th or 20th century. Stemmatically, the ms. belongs to a transmission other than attested by mss bajala(=mss NTC) and ms. da(=ms. R) often agrees with readings otherwise only attested by ms. pa(=ms. O).

Ryūtai Hasebe. And he brought back to Japan 180 Buddhist mss. . And Rev. Kawaguchi got another 390 Sanskrit mss during his prolonged stay in Nepal and Tibet. Since in Matsunami (1965) this manuscript is marked with (K) which represents Kawaguchi's collection, we can know that ms. T no. 251 is one of the collections of Rev. Kawaguchi. Nowadays, all the Sanskrit manuscripts preserved in the Tokyo University Library have been made public on the Internet[1].

Physical features(Matsunami, 1965: 95;356-357):

> Paper, 241 leaves, 6 lines, $14_{1/4} \times 3_{1/2}$ inch., Nepalese character, modern.

Same folio numbers are both located in the upper left and lower right margin in every verso-page. Above every upper left one, *vineya* is written. We can also witness some revisions, erasures and insertions in ms. T.

Chapter 25: folio 209a6-219b3.

Colophon(241a3-241b1): samāptaṃ cedaṃ madhyamakaśāstraṃ sakalalaukikalokottarapravacananītaneyārthavyākhyānanaipuṇyaviśāradaṃ śrāvakapratyekabuddhānuttarasamyaksaṃbuddhabodhimaṇḍāsanadāyakam iti || ○ || śubham || ye dharmāhetuprabhavā hetun teṣān tathāgataḥ || hy avadat teṣāṃ yo nirodha evamvādī mahāśramaṇaḥ || || ○ || naipālābde nilāhāre tanurahita paṃkodbhavotpannakhaṇḍe rākāyāṃ māsi caitre dviradavahanabhe kāvya ghasrāntaghasre || bhāṣā vyavyaṃnvayojjovyayabhavanakakaivallyadovīnavajī pūstaṃ vaineyasūtraṃ vyalikhad atim udāśākyasiṃhasya prītyai ||

Date: N. S. 851 (A.D. 1731)[2]

ms. C

Physical features(Cecil Bendall, 1883: 114):

> Paper; 178 leaves, 9 lines, $15 \times 4\frac{1}{2}$ in.; dated N. S. 901(A.D.1781); good Devanāgari hand.

Folio numbers are both located in the upper left and lower right margin in every verso-folio. But in one page, the left one is different with the right one. *Vineya* and *guru* are written above the folio numbers respectively.

Chapter 25: folio 154b1-162a7.

Colophon : samāptaṃ cedaṃ madhyamakaśāstraṃ sakalalaukikalokottarapravacananītaneyārthavyākhyānanaipuṇyaviśāradaṃ śrāvakapretyekabuddhānuntarasamyaksaṃbuddhbodhimaṇḍāsanadāyakam iti || samva 901 śubham

Date: N.S.901(A.D.1781)

ms. N

Physical features recorded on the information card by NGMPP:

[1] http://imglib.ioc.u-tokyo.ac.jp/

[2] The date of ms. T is deciphered in MacDonald (2015a: 64-65)

No. of leaves:	208 folios
Size in cm:	31.8 ×12.7 cm
Remarks:	paper
Script(s):	Nagari

Folio numbers are both located in the upper left and lower right margin in every verso-folio. In one page, the left and right folio numbers are the same. *Vineya* and *guru* are written above them respectively.

Colophon : samāptaṃ cedaṃ madhyamakaśāstraṃ sakalalaukikalokottarapravacananītaneyārthavyākhyānanaipuṇyaviśāradaṃ śrāvakapratyekabuddhānuttarasamyaksambuddhabodhimaṇḍāsanadāyakam iti || || nandeṣvaṅke tape śukle vāṇītithau samālikhet || vineyasūtram ity uktaṃ jvālāmunirir idaṃ paraṃ || sarvasūtrāntare dṛṣṭvā śāstreṣu nipunaṃ kṛtaṃ || jñānopayam ācāryyasya satjñānena dhīmatā || śrīr astu || śreyo 'stu samvat 959 māghaṣruklaśrīpaṃcamī ādityavāra

Date: N.S. 959(A.D.1839)

6.2 Stemma

About the manuscript relationships of *Prasannapadā*, Kragh (2006) and MacDonald (2015a) have both given detailed explanations and illustrated ms. relationships with stemmata which are based on *Prasannapadā* Chapter seventeen(*karmaphalaparīkṣā*) and Chapter one(*Pratyayaparīkṣā*) respectively. Kragh (2006) used the same five mss. as I did in this paper except ms. P which was not available at that time. His stemmatical analysis mainly focused on the substantive variants and solecisms of mss. . His stemma codicum is as follows:

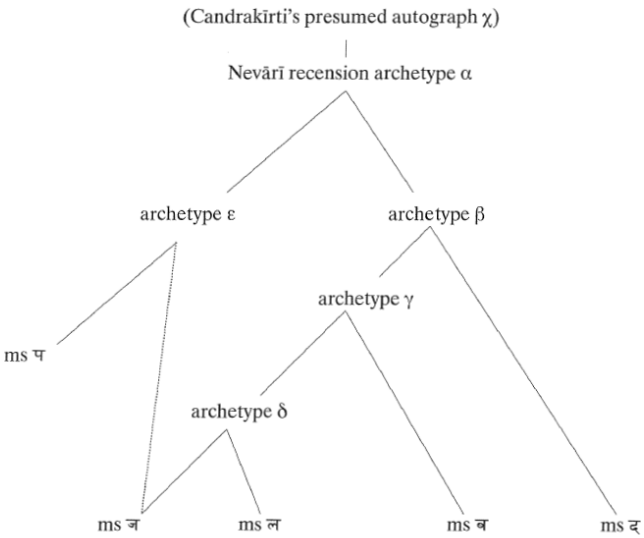


図6.1 Enlarged Stemma Codieum in Kragh (2006: 68)

The abbreviations of manuscripts in Kragh (2006) is different from mine. The comparison table is listed on page 128. The most noteworthy feature of this stemma is that ms. ja(=ms. T) is inferred to be contaminated by an archetype of ms. pa(=ms. O). Kragh (2006)'s main evidence to support this inference is that there are some problematic clusters of substantives c12, c13 and c14.

c12: sambandhā] saṃvaddhā RN; etad] tad RN; vijñapti°] avijñapti° RN; caiṣa] caika RN; cāṅkurādi°] cāṃkurā hi RN; udbhāvyānyathā°] udbhāvyanyayā° RN; prahāṇa-taḥ] pradānataḥ N; pradāṇataḥ R.

c13: sarvaiva] tarvaiva RCN; avijñaptayaḥ] avijñāptayas RCN; avijñaptayaḥ] avijñāptayas RCN; atraike] tatraike RCN.

c14: trividhaṃ] trividha° OT; śarīraceṣṭā] śarīraceṣṭāḥ OT; °prabhṛtir] °prabhṛti OT.

Especially, the substantives of c14 shared by mss. OT are not attested by any other mss. And "It is possible that ms. ja(=ms. T)is contaminated with only some readings from archetype ε. Given that the number of readings from ε in ms. ja(=ms. T) is not very big, this contamination is not likely to have occurred in the way that the scribe of ms. ja(=ms. T) actually used ε as as the second original. Rather, the small number of contaminated readings in ms. ja(=ms. T) could indicate that ms. ja(=ms. T) has preserved some readings from archetype ε in the form of marginalia, which at some point in the copying-process were incorporated into the text itself of ms. ja(=ms. T)."(Kragh, 2006: 68-69)

From my view, these evidences or examples are not strong enough to support the contamination supposition. These substantives could be just coincidence or the results of copyists' correction. For examples, in cluster c14, the substitution of trividha° for trividhaṃ in OT is a phenomenon of the loss of *anusvāra* which is very common in Sanskrit mss. . And the OTs' similarity on this point may be caused just by coincidence. The substitution of śarīraceṣṭāḥ for śarīraceṣṭā, namely the phenomenon of the addition of *visarga* may be the result of copyists' correction. All of these substantives can not rule out the possibilities of coincidence or correction. The best substantives based on which we can use to judge and infer the progress of mss.' transmission are, e.g. omission of a long passage, different text structures or totally meaningless or wrong readings.

In the first half of her critical edition, MacDonald (2015a) used sixteen manuscripts. Based on the recording of variants, she worked out the stemma for these manuscripts. And after eliminating ten apographs of existing mss., MacDonald (2015a) finished the second half part with two palm-leaf and four paper mss.. The stemma of all these mss. is as follows(see next page):

Based on her judgment on significant and insignificant mss., I used the same six best ones to edit *Prasannapadā* Chapter twenty-five in this dissertation. Upon completing of the critical edition, I would like to use the textual variants data to draw a stemma for these six mss.. My purpose is to provide the important data of PsP Chapter twenty-five to support, or maybe to trim MacDonald (2015a)'s excellent job a little bit.

My stemma for six mss. is attached below. Before entering into the analysis of nodes and branches, I need to explain the basic two assumptions or principles I am holding for stemmatology:

1. Parsimony. The number of changes and archetypes should be minimized. Only by finding

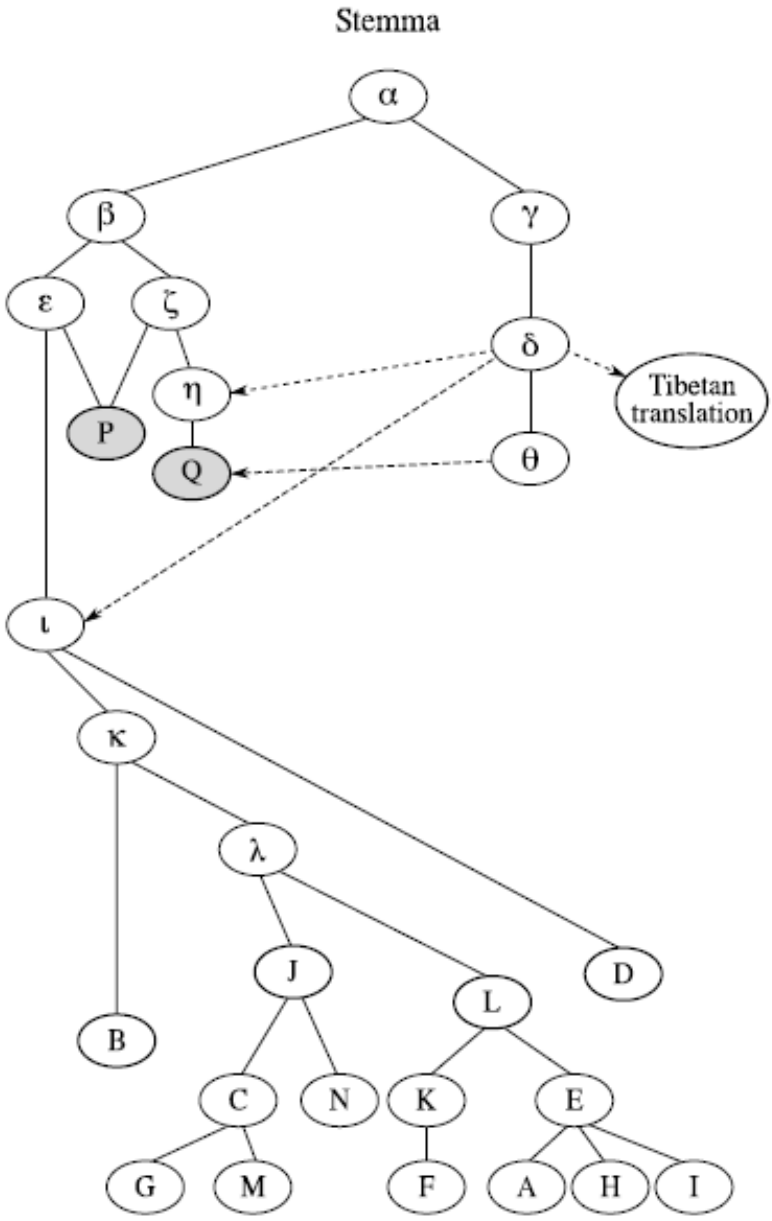


図6.2 Stemma for sixteen mss. in MacDonald (2015a)

strong evidence which could exclude the possibility of correction or coincidence, can the existence of an archetype or contamination be inferred.

2. Bifurcation(or dichotomy). In most cases, at one node only two branches are born. Of course, in philology bifurcation is not always corresponding to reality. But on account of that reality is always inaccessible, bifurcation is acceptable as a simplified way of representing relationships between manuscripts.

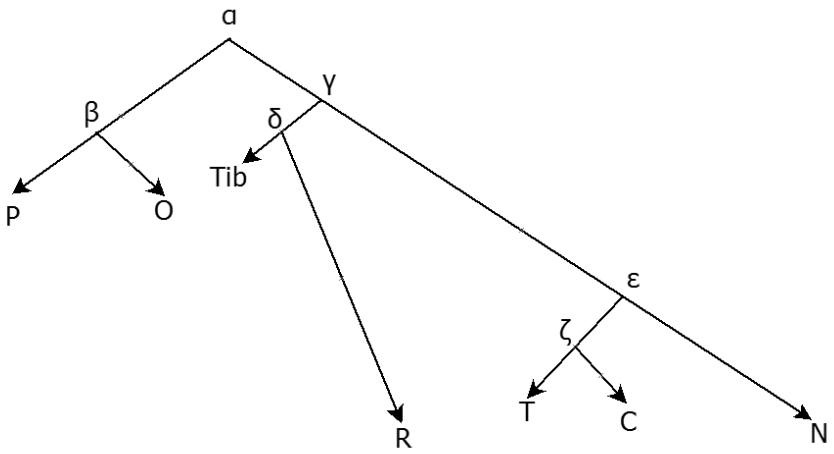


図6.3 Stemma for *Prasannapadā*

The two palm-leaf mss. PO share many unique readings not attested by any other mss. . The most important variants for locating POR and PsP$_{T}$ are:

a. page 155, line 11-12: PO; om. TCN; in ms. R and PsP$_{T}$, 25.14cd and its commentary is arranged in totally different sequences and places from mss. PO.

In mss. PO, MMK 25.14 and its commentary are read as follows (the information of variants is neglected here):

A. bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇa ubhayaṃ katham | 25.14ab

B. tayor abhāvo hy ekatra prakāśatamasor iva || 25.14cd

C. yathā hy ālokāndhakārayor ekadā ekatra veśmani parasparaviruddhayor asambhavaḥ | evaṃ

D. bhāvābhāvayor api parasparaviruddhayor ekatra nirvāṇe nāsti sambhava iti | ato bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇa ubhayaṃ katham | naiva bhaved ity abhiprāyaḥ ||

In these six mss. and PsP$_{T}$, four types of the structure of MMK 25.14 and its commentary can be distinguished:

type 1: mss. PO have the structure of *ABCD*;

type 2: ms. R has the structure of *ADBCD*;

type 3: mss. TCN have the structure of *AD*:

type 4: PsP$_{T}$ *ADBC*

b. page 147, line 5: vaiśeṣikakaṇādakāpilakādīnāṃ P; veśeṣikakaṇādakāpilādīnāṃ O; jaiminikāṇādakāpilādīnāṃ RTC; jaimininādakāpilādīnāṃ N; rgyal dpog pa dang | gzegs zan dang ser skya la sogs pa PsP$_{T}$.

c. page 150, line 14-17: POR, PsP$_{T}$; om. TCN.

In mss. POR and PsP$_{T}$, it reads as follows (the information of variants is neglected here):

POR : kiṃ kāraṇam | yasmān nirvāṇaṃ yatra bhāvo na nābhāvas tatra vidyate | iha hi bhāvaḥ svabhāvaparityāgād anyathā bhavann abhāva iti vyapadiśyate | yatra ca pakṣe nirvāṇaṃ bhāvo na bhavati viditadoṣatvāt | tatra pakṣe 'bhāvo 'pi nirvāṇaṃ na bhavati | bhāvasvarūpeṇāsiddha-rūpasyābhāvarūpatānupapatter ity abhiprāyaḥ ||

PsP$_{T}$: ci'i phyir zhe na | gang gi phyir | **gang la mya ngan 'das dngos min || de la dngos med yod ma yin** || zhes gsungs te | 'dir dngos po'i rang bzhin btang nas gzhan du gyur pa la dngos po med pa zhes bsnyad na | bstan zin pa'i nyes pas phyogs gang la mya ngan las 'das pa dngos po ma yin pa'i phyogs de la mya ngan las 'das pa dngos po med pa yang ma yin te | dngos po'i rang bzhin du ma grub pa'i ngo bo la dngos po med pa'i ngo bo nyid mi 'thad pa'i phyir ro snyam du dgongs pa yin no ||

This passage is completely omitted in mss. TCN.

These three variants are selected because they are so long that they can not be merely caused by scribes' own inclinations in punctuation, and at the same time the possibilities of scribes' correction or revision can also be eliminated. On the basis of these, we can infer that:

1. The palm-leaf P and O belong to a same sub-family and are descendent from a common archetype β.

Point *bc* show that POR and PsP$_{T}$ are in a close relationship. Point *a*, namely the *ABCD* structure, further suggests that PO belong to a seperated sub-family from ms. R and PsP$_{T}$. But given that both P and O contain their own unique readings which are not attested by each other, P and O are not in a father-son relationship and vice versa. For example, in page 146 line 1, "ca" is only omitted in ms. P. And in page 147 line 8, "kalpitasvabhāvasya nāstivādināṃ" is also only omitted in ms. P. Much more similar substantives could be found among these two mss. , which shows ms. O cannot be the descendent of ms. P.

On the other hand, some bad readings in ms. O are not inherited by ms. P, either. For example, in page 145 line 4, "necchanti" is read as "cchanti" in ms. O. This may be caused by the copyist's eye-jump. And in the reference to a gāthā of *Samādhirājasūtra* in page 146 line 5, ms. O has a bad reading "nāsti nāsti". This variant is not only against metre, but also incompatible with textual contexts. All of these show that ms. O is not the ancestor of ms. P either.

Therefore, mss. P and O are located in two individual branches of an individual sub-family and share a common archetype which I call it β. β is supposed to contain mss. POs' same readings, e.g. *ABCD* structure in point *a*, the "vaiśeṣika°" variant in point *b* and the long passage in point *c*, and contains no POs' unique variants.

2. Because of their same readings in point *b*, ms. R and mss. TCN belong to another separate subfamily and have a common archetype γ which is supposed to have *ADBC* structure in point *a*, "jaimini°" variant in point *b*, and the existence of the long passage in *c*. Only in this way, can the omittance of MMK 25.24cd and its commentary in mss. TCN be reasonably explained.

This subfamily can be further divided into two groups: ms. R and PsP$_{T}$ are descendant from an

archetype δ; and mss. TCN are from an archetype ε due to their variants described in point *a* and *c*.

Among them, δ is believed to be located very close to γ. In page 160 line 9, "priyaikaputrakapremānugatāśeṣatribhuvanajanena" has no correspondence in PsP$_T$. Sometimes, in PsP$_T$ translator Nyi ma grags tended to simplify or omit several parts of Candrakīrti's literacy expressions. I have no idea whether this is due to Nyi ma grags' personal attitude towards these kind of expressions or that the master copy which he used is different from any of the extant ones. If it is the later, it is possible to speculate that its archetype δ has the same reading "priyaikaputrakapremānugatāśeṣatribhuvanajanena" with ms. R, but lost this compound during the transmission to PsP$_T$.

In fact, PsP$_T$ is very difficult to be located in this stemma. According to the colophon of PsP$_T$ and Nyi ma grags's biography, he reedited his former translation using another eastern manuscript, which means this Tibetan translation was contaminated. But we have no knowledge on to what extent the contamination is. Here we can witness the similarity between ms. R and PsP$_T$. But in some places, e.g. as I mentioned before, in the reference to *Tathāgataguhyasūtra* only ms. P's reading "anupādāya" corresponds to PsP$_T$ and the Tibetan translation of *Tathāgataguhyasūtra*. But because we have no idea whether Nyi ma grags consulted the Tibetan translation of *Tathāgataguhyasūtra* when translating this part or not, so it is dangerous to connect ms. P or its archetype with the "contamination" on PsP$_T$ recklessly[*1]. Besides, PsP$_T$ omitted the second half part of the reference to *Tathāgataguhyasūtra*, which cannot be reasonably explained except assuming that Nyi ma grags abbreviated this passage for the sake of conciseness. This makes the location of PsP$_T$ more dubious. Therefore, in this paper, I would neglect the "contamination", treat PsP$_T$ as a solid and united one, and put it into the location neighbouring with ms. R in the group of δ.

3. Mss. TCN belong to the group of ε. The most distinguishable character of ε is that since the node of ε MMK 25.24cd and its commentary were totally lost.

Mss. TCN were scripted in 1731 A.D, 1781 A.D and 1839 A.D. Even though ms. T is the oldest one among these three mss, ms. T is not the direct ancestor of mss. C and N, because it contains some unique bad readings. For example, before MMK 25.6 in page 150 line 1, ms. T reads "bāhyātmiko bāhyā" which is not inherited by any others.

On the other hand, ms. C can not be the ancestor of ms. N, either. In 160 line 12, mss. TC both read "deyitā", but ms. N correctly reads it as "deśayitā". The most possible explanation on this is that mss. TCs' ancestor ζ has such a corrupt variant, but ms. N inherited the right one from ε . Some other supporting evidences are as follows:

- The first word in MMK 25.24: parvopalambhopaśamaḥ T; parvopalaṃbhopaśamaḥ C; pūr-

[*1] MacDonald (2015b) has proved that Nyi ma grags adopted "cut and paste" method in translating PsP$_T$'s citations from its corresponding Tibetan translated source texts. This hypothesis well explains why PsP$_T$ is frequently different from its Sanskrit manuscripts in Candrakīrti's citations. But with regard to the citations in other chapters of PsP, further studies are still needed.

vapilaṃbhopaśamaḥ N

- In page 154 line 16: nādupādāya TC; nānupādāya N
- Mss TC read "tahy(tahi)" in most cases in this chapter, but ms. N reads correctly as "tarhy"

These examples indicate that mss. TC are in a different sub-group from ms. N, and TCN are mutually independent.

At last, I shall discuss some limitations of my inference on this stemma. Firstly, only used six manuscripts are used and investigated in this dissertation. But just as MacDonald (2015a) shows, the more the better. Especially when to inference extinct archetypes and the relationships between them, it is needed to consult the variants of others manuscripts.

Secondly, in the following section, I would use the software *MEGA*, which is usually used in molecular evolution and phylogenetics, to analyze *daṇḍa*s in a statistical and quantitative method to evaluate the distances between manuscripts. But unfortunately, I did not figure out the possible method to format the texts of manuscripts into calculable data for statistical and quantitative analysis.

6.3 Analysis of *Daṇḍa*s

In most Sanskrit critical editions, whether Buddhist or not, the information of *daṇḍa*s in manuscripts is always neglected and in most cases *daṇḍa*s are used mainly based on editors' personal judgment. It is partly due to the fact that in Sanskrit grammar, no matter compiled by modern scholars or ancient Vaiyākaraṇas, seldom explanation or rules on *daṇḍa*s are introduced, and partly due to the meaningless and arbitrary use of *daṇḍa*s in manuscripts. For example, among the the six manuscripts used in this paper, both of ms. T and ms. C have more *dvidaṇḍa*s than they should: in ms. T, about 86% of *daṇḍa*s are *dvidaṇḍa*s, and in ms. C the ratio of *dvidaṇḍa*s even reaches as high as 97%.

However, it is reasonable to speculate that the *daṇḍa*s in a certain manuscript may inherit most of their forms from its exemplar or copy text, and therefore it may share a similar reading with the other manuscripts which are stemming from a common primary ancestor. This means that variants of *daṇḍa*s could reveal the relationships of manuscripts as well as textual variants. In order to prove this, I analyzed the data of the variants of *daṇḍa*s in these six manuscripts through the software *MEGA* which is usually used in molecular evolution and phylogenetics. The result is as follows(see next page):

From the recording of *daṇḍa* variants in my critical edition, we can observe that mss. PO shared many unique readings on *daṇḍa*s which are not attested by the others. They should belong to a separated subfamily from others. This is authentically shown by this stemma.

Mss. TC, as I mentioned before, used *dvidaṇḍa*s at a very high ratio, which is not witnessed in any other four manuscripts, their close relationship is also rightly depicted as belonging to the same subfamily far away from both mss. P and O.

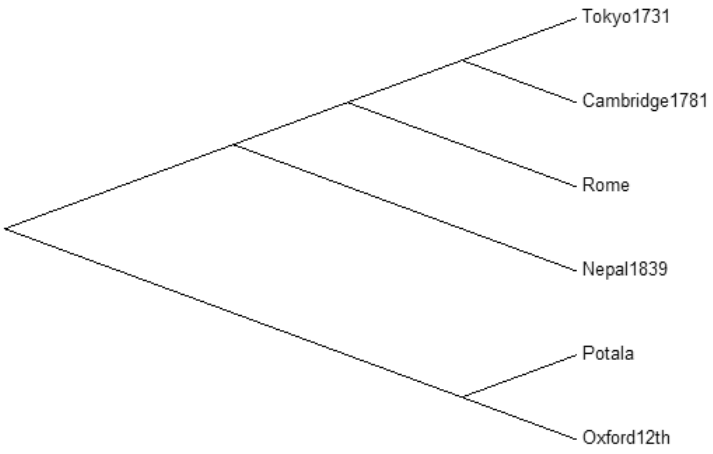


図6.4 Stemma Neighbour-Joining

Compared with them, mss. RN are so unique that they do not belong to any subfamily. But on account of the more frequent usage of *dvidaṇḍa*s in ms. R than N, ms. R is located much closer to mss. TC. In this stemma, ms. N is closer to mss. PO even than ms. R, which goes against "6.3 Stemma for *Prasannapadā*" in page 135. This suggests that ms. N was probably corrected during the process of copying.

Except for the location of ms. N, this stemma corresponds well with textual stemma in page 135, which shows the efficiency of applying the phylogenetic method to reveal the relationships of manuscripts.

However, there are some important differences between phylogenetics and stemmatology that should not be neglected.

1. Bifurcation or multifurcation.

Theoretically, DNA sequence splits into two descendant sequences at the time of speciation or gene duplication. Therefore, phylogenetic trees are usually bifurcating(Nei and Kumar, 2000: 75). In the case of Sanskrit manuscripts, we have no knowledge on which one, bifurcation or multifurcation, fits with real divergence and transmission of manuscripts. Because scribing is totally a job case by case. If a scribe copied three scripts based on one same exemplar, in its stemma the divergence at this node should be trifurcating. Therefore, even though bifurcation is adopted in stemmatology as default for the sake of convenience, the possibility of multifurcation should also be put in mind.

2. The phylogenetic trees can be used not only to show the divergence of DNA or protein sequences, but also to enumerate the length of each branch proportional to evolutionary times. With the help of branch length, we can figure out when a divergence happened. It is the same for stemmatology of manuscripts. But in stemmatology, branch length is usually ascertained on the basis of the information contained in colophons or palaeographic styles, rather than mathematical algorithms.

Therefore, the ways to calculate branch lengths in phylogenetics and stemmatology of manuscripts

are totally different. When we use phylogenetic methods or software to analyze manuscripts, we have to take this into consideration. That is the reason why in the stemma for *daṇda*s, I only used topology tree which shows the divergences of manuscripts only.

3. In phylogenetic trees, all the taxa are located at the end of a certain branch. There is a biological assumption here: no extant species can be regarded as descending from another. But in the case of manuscripts, some of them are highly possible to be the ancestor for some others, and both the ancestor and its descendants are extant. For instance, MacDonald (2015a: 88) ascribes ms. E(NGMPP B88/6) as the ancestor of mss. A(NGMPP A916/5), H(Tokyo No.250) and I(Tokyo No.252) on account of that

> Mss A, H and I all attest their own peculiar separative errors and omissions that are not repeated in E or in each other and therefore cannot have served as exemplars for each other. The errors and omissions of ms. E, on the other hand, do appear in A, H and I, allowing for the conclusion that these latter three stem from E.

It is possible that the ancestor and its descendants may both be preserved. Therefore, when using phylogenetic methods to analyze the transmission of manuscripts, we must be aware the final result may not really reflect the ancestor-descendant relationship, and sometimes some objects at the end of an edge should be ‘internalized’(Macé and Baret, 2006: 103).

4. In *daṇḍa*-analysis, *daṇḍa*s are formatted into calculable forms as follows:

ekadaṇḍa > A; *dvidaṇḍa* > T; *om.* > C; ø(severe damage of manuscripts) > -

In IUPAC single-letter codes, A, T, and C represents three kinds of amino acid respectively: Alanine, Threonine and Cysteine. In Neighbour-Joining method which I used to analyze *daṇḍa*-data, all characters are considered on the same ground. This means *ekadaṇḍa*, *dvidaṇḍa* and *om.* are regarded equally in the calculation. But in fact, in manuscripts they are not equal at all. For example, in the first page of my critical edition, before the citation of UP 8.9, there is a reading “vināśasādharmyeṇa |”. About the variants are recorded as “|] P; om. O; || RTCN”. Obviously, here ms. P is much closer to RTCN than O. But after formatting them into abbreviations of amino acid, the similar value between *ekadaṇḍa* and *dvidaṇḍa* is totally lost.

The transmission of manuscripts shares many conceptual similarities with the evolution of species, which has already been reported and tested by many scholars(石田, 2011; 師, 2002; Maas, 2008; 逢坂・山崎, 1999; Macé and Baret, 2006; Spencer et al., 2004). Following the same way, in this section, I used *MEGA* software to tally and analyze the variants of *daṇḍa*s in six manuscripts. Except for the special location of ms. N, the result corresponds well with the textual stemma in the former section, which shows the efficiency of applying phylogenetic methods to stemmatology of manuscripts. But at the same time, because of the differences between phylogenetics and stemmatology mentioned above, the underlying risks should not be neglected.

6.4 Editorial Policy

1. Apparatus I contains parallel passages and information of Candrakīrti's citations and **Lakṣaṇaṭīkā*'s explanations on certain words.
2. Apparatus II contains variants of *daṇḍas*.
3. Apparatus III contains variants of texts.
4. Folio numbers of Sanskrit manuscripts and LVP's critical edition are given in the outer margin. But only P, O and R manuscripts' line number are recorded.
5. Line numbers of the critical edition are given in the inner margin.
6. The division into paragraphs is editorial.
7. The following types of variants not reported are:
   - gemination of consonants after a semi-vowel, e.g., *dharma* written as *dharmma*
   - degemination of a double consonant before a semi-vowel, e.g., *sattva* written as *satva*
   - use of *anusvāra* for homorganic nasal consonants and vice-versa, e.g., *pañca* written as *paṃca*
   - irregular use of sibilants *ś*, *ṣ* and *s*
   - irregular use of *r* and *l*
   - indistinguishable *b* and *v*
   - non-application of *sandhi*
   - non-application of *avagraha*
   - application of *avagraha* as an indicator of blend of vowels, e.g., *tad yathāntavān* written as *tad yathā'ntavān*
8. The classical rules of *sandhi* have been consistently applied without reporting the actual readings of the manuscripts.
9. The *anusvāra*s in words have been replaced with the corresponding class nasal. But at the end of a word, *anusvāra* remains whatever consonant follows.

6.5 Sigla and Abbreviations

om.	omitted in
add.	added in
n.e.	no equivalent
em.	emended
cf.	confer
PsP_T	Tibetan translations of *Prasannapadā*

6.6 Editorial Signs

·	illegible part of an *akṣara* due to physical damage
··	illegible *akṣara* due to physical damage
ø	*akṣara*s unreadable due to severe damage(O manuscript only)
( )	uncertain reading
*	indicator of variants
|	ekadaṇḍa
||	dvidaṇḍa

6.7 Critical Edition

---

atrāha |[1]

yadi śūnyam idaṃ sarvam udayo nāsti na vyayaḥ |[2]
prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvāṇam iṣyate ||[3] MMK 25.1 T209b, R96b10

iha hi bhagavatā uṣitabrahmacaryāṇāṃ tathāgataśāsanapratipannānāṃ dharmānudharmapratipatti- P74b2, O102a4
yuktānāṃ pudgalānāṃ dvividhaṃ nirvāṇam upavarṇitaṃ sopadhiśeṣaṃ nirupadhiśeṣaṃ ca ||[4] R96b11

tatra niravaśeṣasyāvidyārāgādikasya kleśagaṇasya prahāṇāt [5] sopadhiśeṣaṃ nirvāṇam iṣyate |[6]
tatropadhīyate 'sminn ātmasneha ity upadhiḥ |[7] upadhiśabdenātmaprajñaptinimittāḥ pañcopādāna- R96b12
skandhā ucyante |[8] śiṣyata iti śeṣaḥ |[9] upadhir eva śeṣa upadhiśeṣaḥ |[10] saha upadhiśeṣeṇa vartata iti O102a5, N179b, R96b13
sopadhiśeṣam |[11] kiṃ tan nirvāṇam |[12] tac ca skandhamātrakam eva kevalaṃ satkāyadṛṣṭyādikleśata- P74b3
skararahitam avaśiṣyate |[13] nihatāśeṣacauragaṇagrāmamātrāvasthānasādharmyeṇa tat sopadhiśeṣaṃ R97a1
nirvāṇam ||[14]

yatra tu nirvāṇe skandhamātrakam api [15] nāsti tan nirupadhiśeṣaṃ nirvāṇam |[16] nirgata L520
upadhiśeṣo 'sminn iti kṛtvā |[17] nihatāśeṣacauragaṇasya grāmamātrasyāpi vināśasādharmyeṇa |[18] tad O102a6, R97a2
eva[a] cādhikṛtyocyate |[19] P74b4

abhedi[b] kāyo nirodhi saññā vedanā yattha rahiṃsu sabbā copaśamo saṃskārāṇāṃ

---

[a]tad eva-iti nirupadhiśeṣaṃ | *LṬ
[b]abhedi vinaṣṭaṃ | *LṬ

---

[1]|] PO ; || RCN ; || || T [2]|] PON ; || RTC [3]||] PRTCN ; | O [4]||] TCN ; | POR [5]POTCN ; || add. R [6]|] ORN ; || PTC [7]|] PO ; om. R ; || TCN [8]|] PTN ; ø O ; || RC [9]|] PORN ; || TC [10]|] P ; om. OTCN ; || R [11]|] P ; om. ORTCN [12]|] POR ; || TCN [13]|] POR ; || TCN [14]||] em.; | PO ; om. RTCN [15]PORT ; || add. C ; | add. N [16]|] R ; om. P ; ø O ; || TCN [17]|] P ; om. ORTCN [18]|] P ; om. O ; || RTCN [19]|] POT ; || RCN

---

2 udayo] POTCN ; udayā R 3 kasya] PORTC ; tasya N 4 iha] POTCN ; ihaṃ R 4 bhagavatā] PTCN ; bhagavātā O ; bhagavato R 4 tathāgataśāsana°] PORT ; tathāgataśāsane° CN 4 dharmānudharma°] TCN ; dhamm·nudha(r)mma° P ; (dh)armā···(rmma)° O ; dharmāṇāṃ dharmma° R 5 pudgalānāṃ] POR ; puṃgalānāṃ TCN 5 dvividhaṃ] ORCN ; dvividhan P ; vividhaṃ T 5 upavarṇitaṃ] N ; upavarṇṇitaṃ ORTC ; upavaṇṇitaṃ P 6 °gaṇasya] PORT ; °maṇasya C ; °maraṇasya N 6 nirvāṇam] ORTN ; nirvvāṇam P ; nirvāṇaḥm C 7 tatropadhīyate] POTCN ; tatropayoyate R 7 upadhiḥ] POTCN ; upadhiśa R 7 °prajñapti°] ORTCN ; °prapti° P 8 upadhiśeṣaḥ] PTCN ; om. O ; ° saha upadhiśaḥ || add. R 9 °śeṣam] em.; °śeṣaṃ POR ; °śeṣa TCN 9 tan] PRTCN ; tān O 10 °mātrā°] POTCN ; °māmātrā° R 10 °sādharmyeṇa] O ; °sādharmmeṇa PR ; sādharmeṇa TCN 10 tat sopadhiśeṣaṃ] PORCN ; tasyopadhiśeṣaṃ T 12 nirvāṇam] em.; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇaṃ TCN ; ø O ; om. R 13 nihatāśeṣacauragaṇasya] P ; nihatāśeṣacaugaṇasya O ; nihitāśeṣacauragaṇasya R ; nihitācauragaṇasya TCN 13 °sādharmyeṇa] O ; °sādharmmeṇa PR ; °sādharmeṇa TCN 13 tad] POTCN ; ted R 14 eva] POTCN ; eve R 14 cādhikṛtyocyate] PTCN ; cādhikṛ··cyate O ; vādhikṛtyācyate R 15 abhedi] POTCN ; abhodi R 15 saññā vedanā yattha] em.; saññā vedaṇā yaccha P ; ø O ; saṃvedaṇā patthai RC ; saṃvedanā patthai T ; saṃvedaṇā panthai N 15 sabbā copaśamo] P ; ø·aśamo O ; saccadhipasamo R ; saccadhimasamo TCN ; thams cad ... nye bar zhi ba dang PsPT 15 saṃskārāṇāṃ] em.; saṃskārāṇām P ; sa(mskā)rāṇāṃ O ; samvarāṇāṃ R ; sasvarāṇāṃ TCN

T210a viññānam atthaṃ gamet ||[1,a] UP 8.9

iti |[2] tathā |[3]

R97a3 asaṃlīnena[b] kāyena vedanām adhivāsayan |[4]

C155a pradyotasyeva nirvāṇaṃ vimokṣas tasya cetasaḥ ||[5,c] MP 44.11

O102a7 iti |[6] tad evaṃ nirupadhiśeṣaṃ nirvāṇaṃ skandhānāṃ nirodhāl labhyate ||[7]

R97a4 etac ca dvividhaṃ nirvāṇaṃ kathaṃ yujyate |[8] yadi kleśānāṃ skandhānāṃ ca nirodho bhavati |[9]

P74b5 yadā tu sarvam idaṃ śūnyaṃ naiva kiñcid utpadyate [10] nāpi kiñcin nirudhyate |[11] tadā kutaḥ kleśāḥ

R97a5, O102b1 kuto vā skandhā yeṣāṃ nirodhān nirvāṇaṃ syād iti |[12] tasmād vidyata eva bhāvānāṃ svabhāva iti ||[13]

L521 atrocyate |[14] nanv evam api sasvabhāvabhāvābhyupagame |[15]

yady aśūnyam idaṃ sarvam udayo nāsti na vyayaḥ |[16]

R97a6 prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvāṇam iṣyate ||[17] MMK 25.2

N180a svabhāvena hi vyavasthitānāṃ kleśānāṃ skandhānāṃ ca svabhāvasyānapāyitvāt [18] kuto nivṛttiḥ

R97a7, P74b6, O102b2 |[19] yatas tannivṛttyā nirvāṇaṃ syād iti |[20] tasmāt svabhāvavādināṃ naiva nirvāṇam upapadyate |[21]

---

[a]abhedi kāyo, nirodhi saññā, vedanā pi 'tidahaṃsu sabbā, vūpasamiṃsu saṅkhārā, viññāṇam attham āgamā. UP 8.9(Steinthal, 1885: 93); abhedi kāyo nirodhi saññā vedanā sītibhaviṃsu sabbā vūpasamiṃsu saṅkhārā viññāṇaṃ attham āgamā. UAK 8.9(Woodward, 1926: 433); gang na lus zhig 'du shes 'gags || tshor ba thams cad bral gyur zhing || 'du byed nye bar zhi ba dang || rnam par shes pa nub gyur pa || PsPT

[b]āryāśrāvako 'saṃlīnena dhyānarahitena | *LṬ

[c]ma zhum pa yi lus kyis ni || tshor ba dang du len pa na || de yi sems ni rnam par grol || mar me shi bar gyur pa bzhin || PsPT; asaṃlīnena cittena vedanā adhivāsayan | pradyotasyeva nirvāṇaṃ vimokṣas tasya cetasaḥ || MP 44.11(Waldschmidt, 1951b: T.3, 400)= AŚ 100.6(Vaidya, 1958: 261)= YBh(Schmithausen, 1991: 706); Asallīnena cittena vedanaṃ ajjhavāsayi : Pajjotasseva nibbānaṃ vimokkho cetaso ahū. Mahāparinibbāna Sutta(PTS 2, p.157)= ThG 906(PTS 40, p.83)=SN(PTS 1, p.159) ; n.e. 西晋白法祖譯『佛般泥洹經』、後秦佛陀耶舍共竺佛念譯『遊行經』、失譯『般泥洹經』; 「恬然絶思慮、亦復無諸受、如燈盡光滅、如來滅亦然。」 東晋法顯譯『大般涅槃經』巻三 (T7.1.205a16) ;「汝心莫沈沒、亦勿懷憂惱、佛證眞木叉、譬如燈焰滅。」 義淨譯『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻三十八 (T1451.24.400a12-13); cf.「由無下劣心、能忍受勤苦、彼所趣解脱、譬如燈盡滅。」 玄奘譯『瑜伽師地論』巻五十 (T1579.30.577b14-15); 「其心不懈怠、亦不住諸愛、心法漸解脱、如薪盡火滅。」 『雜阿含』1197 經 (T99.2.325b29-c1)

---

[1]||] em.; om. PORTCN [2]|] POR ; || TCN [3]|] em.; om. PTCN ; ø O ; || R [4]|] PN ; om. OR ; || TC [5]||] em.; om. PRTCN ; ø O [6]|] POR ; || TCN [7]||] TC ; | PORN [8]|] PN ; || RTC ; ø O [9]|] PRTN ; ø O ; || C [10]POTCN ; || add. R [11]|] PN ; om. OR ; || TC [12]|] P ; ø O ; || R ; om. TCN [13]||] RTCN ; | PO [14]|] POC ; || RTN [15]|] PR ; || ○ || O ; || TCN [16]|] PN ; ø O ; || RTC [17]||] PTC ; ø O ; | RN [18]ORTCN ; | add. P [19]|] PO ; om. RTCN [20]|] P ; ø O ; || RTCN [21]|] PO ; || R ; om. TCN

---

1 viññānam] em. viññāṇam P ; vijñānam R ; viñcāṇam O ; vimjānam T ; viñjānam CN 1 atthaṃ gamet] em.; athe gamed P ; arthagamed ORTCN 5 °śeṣaṃ] R ; °śeṣan PO ; °śeṣa TCN 5 nirodhāl] PORTN ; nirodhā C 6 dvividhaṃ] ORTCN ; dvividha P 6 nirvāṇaṃ] ORTN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa C 7 kiñcid] em.; kiṃcid PRTN ; ø O ; kicid C 7 kiñcin] em.; kiṃcin PRN ; kiñci·O ; kicin TC 8 nirodhān] P ; ·iø O ; nirodhe RTCN 9 °bhyupagame] PORTN ; °bhāvātyupagame C 10 udayo] PTCN ; uda·o O ; udayā R 12 vyavasthitānāṃ] PRTC ; ø O ; vyasthitānāṃ N 12 skandhānāṃ] TCN ; skandhānāñ P ; ø O ; skandhanāṃ R 12 svabhāvasyānapāyitvāt] PRTN ; ··bh(ā)v·sy(ā)··pāyitvā··O ; svabhāvasyāmapāyitvāt C 12 nivṛttiḥ] em.; nirvṛtiḥ P ; ø O ; nirvṛtir R ; nirvṛtti T ; nirvṛttir CN 13 °nivṛttyā] P ; ø O ; °nirvṛtyā R ; °nivṛtyā TCN 13 svabhāvavādināṃ] RCN ; svabhāvabhāvavādināṃ P ; ø O ; svabhāvabhāvādīnāṃ T

na ca śūnyatāvādinaḥ [1] kleśanivṛttilakṣaṇaṃ skandhanivṛttilakṣaṇaṃ vā nirvāṇam icchanti |[2] yatas teṣām ayaṃ doṣaḥ syād iti |[3] ato 'nupālambha evāyaṃ śūnyatāvādinām ||[4] R97a8

yadi khalu śūnyatāvādinaḥ [5] kleśānāṃ skandhānāṃ vā nivṛttilakṣaṇaṃ nirvāṇaṃ necchanti |[6] kiṃlakṣaṇaṃ tarhīcchanti ||[7] ucyate |[8] T210b

aprahīṇam asamprāptam anucchinnam aśāśvatam |[9] R97a9
aniruddham anutpannam etan nirvāṇam ucyate ||[10] MMK 25.3 O102b3, P74b7

yad dhi naiva prahīyate rāgādivat |[11] nāpi prāpyate [12] śrāmaṇyaphalavat |[13] nāpy ucchidyate skandhādivat |[14] yac cāpi na nityam aśūnyavat |[15] tat svabhāvato 'niruddham anutpannaṃ ca R97a10
sarvaprapañcopaśamalakṣaṇaṃ nirvāṇam uktam |[16] tat kutas tasminn itthaṃvidhe niṣprapañce R97a11, C155b, O102b4
kleśakalpanā yeṣāṃ kleśānāṃ prahāṇāt tan nirvāṇaṃ bhavet |[17] kuto vā skandhakalpanā tatra
yeṣāṃ skandhānāṃ nirodhāt tad bhavet |[18] yāvad dhy etāḥ kalpanāḥ pravartante tāvan nāsti L522, P74b8
nirvāṇādhigamaḥ |[19] sarvaprapañcakṣayād eva tadadhigamāt ||[20] R97a12

atha syād yady api nirvāṇe na santi [21] kleśāḥ |[22] na cāpi skandhāḥ |[23] tathāpi nirvāṇād arvāg vidyante |[24] tatas teṣāṃ parikṣayān nirvāṇaṃ bhaviṣyatīti ||[25] ucyate |[26] tyajyatām ayaṃ grāhaḥ |[27] R97a13
yasmān nirvāṇād arvāk svabhāvato vidyamānānāṃ na punar abhāvaḥ śakyate kartum |[28] tasmān O102b5, P74b9
nirvāṇābhilāṣiṇā tyājyaiṣā kalpanā |[29] vakṣyati hi |[30] N180b, R97b1

---

[1]PORN ; || add. TC [2]|] PN ; om. ORT ; || C [3]|] PO ; om. R ; || TCN [4]||] C ; | PRN ; ø O ; om. T [5]RN ; | add. P ; ø O ; || add. TC [6]|] P ; om. ORTCN [7]||] CN ; | PORT [8]|] em.; om. P ; || ○ || O ; || RTCN [9]|] PRTN ; ø O ; || C [10]||] RC ; | POTN [11]|] PON ; || RTC [12]ORTCN ; | add. P [13]|] PON ; || RTC [14]|] ON ; om. P ; || RTC [15]|] PO ; || RTCN [16]|] P ; om. ORTCN [17]|] PN ; ø O ; || RTC [18]|] POR ; || TCN [19]|] PON ; om. R ; || TC [20]||] RTCN ; | PO [21]POR ; || add. TC ; | add. N [22]|] P ; om. ORTCN [23]|] em.; om. PORTCN [24]|] PN ; om. OR ; || TC [25]||] C ; | PORN ; om. T [26]|] PON ; || RTC [27]|] em.; om. PORTCN [28]|] PORN ; || TC [29]|] PON ; || RC ; om. T [30]|] POTN ; om. R ; || C

---

1 °nivṛtti°] P ; °nirvṛtti° OTCN ; °nirvṛti° R 1 skandhanivṛttilakṣaṇaṃ] em.; skandhanirvṛttilakṣaṇaṃ O ; om. PRTCN ; phung po ldog pa'i mtshan nyid can PsPT 1 icchanti] ORCN ; icchaṃti T ; icchati P 2 ayaṃ] ORTCN ; om. P ; 'dir PsPT 2 ato] POTCN ; om. R 2 'nupālambha] P ; anupālambha R ; nupālaṃbha C ; nupālambha N ; ø O ; nupalaṃbha T 3 °vādinaḥ] PRN ; ø O ; °tinaḥ T ; °dinaḥ C 3 nivṛtti°] P ; nirvṛtti° ON ; nirvṛti° RTC 3 nirvāṇaṃ] RTCN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa O 3 necchanti] PTCN ; cchanti O ; nacchanti R 4 tarhīcchanti] PRC ; ···cchanti O ; tarhīcchaṃti N ; tahīcchanti T 5 aśāśvatam] em.; aśāśvataṃ T ; aśāsvataṃ CN ; aśāśvātaṃ P ; ø O ; aṇāsvātaṃ R 6 etan] POR ; etaṃ N ; eva nirvāṇam eta T ; etan nirvāṇam eta C 7 dhi] PO ; vi RTCN 7 rāgādivat] POTCN ; rāgādivada R 7 śrāmaṇyaphalavat] PR ; śrāmanyaphalavat CN ; śrāvaṇyahalavat O ; śrāmanyahalavat T 8 'niruddham] R ; niruddham TCN ; 'niddham P ; ···(ru)ddha·O 9 uktam] em.; uktaṃ PRTCN ; ukta O 9 kutas] PORN ; kuta TC 9 itthaṃvidhe] O ; itthamvidhe P ; inthaṃvidhi T ; itthaṃvidhi RCN 9 niṣprapañce] POR ; niṣprapaṃce TC ; nipprapañca N 10 kleśānāṃ] PORN ; kleśanāṃ TC 10 prahāṇāt] PRTC ; pra··ø O ; prahāhāt N 10 tan] PCN ; ø O ; ta RT 11 skandhānāṃ] OR ; skaṃdhānāṃ N ; skandhāṃ P ; skandhānā TC 11 bhavet] POTCN ; bhaveta R 11 dhy etāḥ] PORC ; dhetoḥ TN 11 kalpanāḥ] POR ; kalpanā TCN 12 °dhigamaḥ] PRTCN ; °gamaḥ O 12 °kṣayād] P ; °parikṣayād OTCN ; °parikṣeyād R 12 tadadhigamāt] POR ; ta adhigamāt TC ; to 'dhigamāt N 13 nirvāṇe] RCN ; nirvvāṇe P ; nirvāṇa OT 13 na] OTCN ; nā P ; naṃ R 13 skandhāḥ] em.; skandhās PO ; skaṃdhās RN ; skandhā TC 14 nirvāṇaṃ] ORCN ; nirvvāṇam P ; nirvāṇa T 14 tyajyatām] PRTN ; tyajyatāṃm O ; bhyajyatām C 15 nirvāṇād] TCN ; na nirvvāṇād P ; n(ir)v·nād O ; nirvāṇāṃd R 15 arvāk] OTCN ; arvvāk P ; arvāka R 15 na] ORTCN ; om. P 15 śakyate] PRTCN ; śakṛte O 15 kartum] em.; kartuṃ PTC ; karttuṃ N ; kartuḥ O ; karttu R 16 °bhilāṣiṇā] POTCN ; °ṃbhilāṣiṇā R 16 vakṣyati] ORTCN ; bhakṣyati P

nirvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ[a] saṃsaraṇasya ca |[1]
T211a na tayor antaraṃ kiñcit susūkṣmam api vidyate ||[2] MMK 25.20

R97b2, P75a1 iti |[3] tad evaṃ nirvāṇe na kasyacit prahāṇam |[4] nāpi kasyacin nirodha iti vijñeyam |[5] tataś ca
O102b6 niravaśeṣakalpanākṣayarūpam eva nirvāṇam |[6] uktaṃ ca bhagavatā |[7]

nirvṛti dharmāṇa na asti dharmā
ye neha nāsti na te jātu asti |[8]
R97b3 astīti nāstīti ca kalpanāvatām
evaṃ carantāna na duḥkha śāmyati ||[9,b] SR 9.26

iti |[10] asyā gāthāyā ayam arthaḥ |[11] nirvṛtau nirupadhiśeṣe nirvāṇadhātau [12] dharmāṇāṃ
R97b4, O102b7 kleśakarmajanmalakṣaṇānāṃ skandhānāṃ vā sarvathāstaṃgamād astitvaṃ nāsti |[13] etac ca
L523, P75a2 sarvavādinām abhimatam |[14] ye tarhi dharmā iha nirvṛtau na santi |[15] pradīpodayād andhakāro-
R97b5 palabdharajjusarpabhayādivan na te jātu [16] asti |[17] na te dharmāḥ [18] kleśakarmajanmādilakṣaṇāḥ
kasmiṃścit kāle saṃsārāvasthāyām api tattvato vidyante |[19] na hi rajjvām andhakārāvasthāyāṃ
C156a, R97b6, O103a1 svarūpataḥ sarpo 'sti |[20] sadbhūtasarpavad andhakāre 'py āloke 'pi kāyacakṣurbhyām [21] agrahaṇāt ||[22]

[a]koṭiḥ paryantaḥ | *LṬ

[b]nivṛtti dharmāṇa na asti dharmā yeneti nāsti na te jātu asti | astīti nāstīti ca kalpanāvatāmevaṃ carantāna na duḥkha śāmyati || SR 9.26(Vaidya, 1961: 48); nirvṛti dharmāṇa na asti dharmā yeneti nāsti na te jātu asti | astīti nāstīti ca kalpnāvatāṃ evaṃ carantāna na duḥkha śāmyati || SR 9.26(Cüppers, 1990: 41);「緣起法無有、無有更不有、分別有無者、是則苦不滅。」那連提耶舍譯『月燈三昧經』巻二 (T639.15.558a12-13); mya ngan 'das la chos rnams yod nyid med || chos gang der med de dag gzhar yang med || yod dang med ces rtog pa dang ldan zhing || de ltar spyod rnams sdug bsngal nyer mi zhi || PsPT

[1]|] P ; om. OTCN ; || R [2]||] em.; om. PORTCN [3]|] PO ; || RTCN [4]|] OR ; om. PTCN [5]|] POR ; || TCN [6]|] POR ; om. T ; || CN [7]|] PR ; om. O ; || TCN [8]|] PORN ; || TC [9]||] em.; om. PORTCN [10]|] POR ; || TCN [11]|] POT ; || RCN [12]PORCN ; || add. T [13]|] PON ; || RTC [14]|] PORN ; || TC [15]|] P ; om. ORTCN [16]POR ; || add. TC ; | add. N [17]|] O ; om. PRTCN [18]ORTCN ; | add. P [19]|] PO ; || RTCN [20]|] PORN ; || TC [21]ORTCN ; | add. P [22]||] RTC ; | PON

1 ca] ORTCN ; om. P 1 koṭiḥ] PO ; om. R ; koṭi TCN 1 ca] PRTCN ; cā O 2 na tayor] P ; na tāyor O ; na yor R ; vidyār TCN 2 antaraṃ] O ; antaraṅ P ; aṃtaraṃ C ; antarī R ; antavaṃ TN 2 kiñcit] PO ; kiṃcit TCN ; kicit R 2 susūkṣmam api] PO ; suśūkṣmam api R ; susūkṣma TCN 3 evaṃ] ORTCN ; eva P 3 vijñeyam] em.; vijñeyaṃ POTCN ; vijñayaṃ R 4 °kalpanākṣayarūpam] PTCN ; °kalpa··(kṣa)yarūpam O ; °kalpakṣayarūpam R 4 bhagavatā] POTCN ; bhagavato R 5 nirvṛti] O ; nirvvitti P ; nirvṛtti RTCN 5 dharmāṇa] PR ; dharmāna TCN ; dharmāṇā O 5 na asti] PRTCN ; nāsti nāsti O 5 dharmā] POR ; dharmo TCN 7 ca] POR ; om. TCN 7 kalpanāvatām] PRTCN ; kalpanācatām O 8 evaṃ] PRCN ; evañ O ; eva T 9 asyā] POTCN ; asmā R 9 nirvṛtau] PTCN ; nirvṛttau O ; nivṛtau R 10 °janma°] POTCN ; °jatma° R 10 vā] POTCN ; cā R 10 astitvaṃ] RCN ; astitvan P ; astistitvaṃ O ; astitva T 10 etac] POR ; eva TCN 11 sarvavādinām] RCN ; sarvvavādinām PO ; sarvādinām T 11 nirvṛtau] PRTCN ; nivṛttau O 11 na santi] PRTCN ; sānti O 12 °rajjusarpa°] PO ; °rajusarppa° R ; °rajjusarva° TCN 12 °janmādi°] OTCN ; °janma° P ; °jatmādi° R 13 kasmiṃścit] POTCN ; kasmiścit R 13 kāle] POTCN ; kāla R 13 tattvato] P ; tatvato ORT ; tatvatā CN 13 rajjvām] PO ; rajvom R ; rajjvam TN ; rakṣvam C

kathaṃ tarhi saṃsāra iti cet |[1] ucyate |[2] ātmātmīyāsadviparyāsagrahagrastānāṃ bālapṛthagjanānām [3] asatsvarūpā api bhāvāḥ [4] satyataḥ pratibhāsante |[5] taimirikāṇām ivāsatkeśamaśakādaya ity āha |[6] R97b7, P75a3

astīti nāstīti ca kalpanāvatām
evaṃ carantāna na duḥkha śāmyati ||[7] SR 9.26cd T211b, R97b8

iti |[8] astīti bhāvasadbhāvakalpanāvatāṃ [9] jaiminīyakāṇādakāpilādīnāṃ vaibhāṣikaparyantānām |[10] N181a, O103a2
nāstīti ca kalpanāvatāṃ nāstikānām apāyagatiniṣṭhānām |[11] tadanyeṣāṃ[a] cātītānāgatasaṃsthānāvijña- R97b9
ptiviprayuktasaṃskāranāstivādināṃ tadanyadastivādinām |[12] kalpitasvabhāvasya nāstivādināṃ P75a4
paratantraparinispannasvabhāvayor astivādinām |[13] evam astināstivādinām evaṃ carantāna na R97b10
duḥkhaṃ saṃsāraḥ śāmyatīti |[14] tathā |[15] O103a3

yatha saṅkitena viṣasañjñata abhyupaiti [16] L524
no cāpi koṣṭhagatu so viṣu pādyate ca |[17] R97b11
evam eva bāl' upagato ahumahya eṣo
sañjñāya jāyi mriyate ca sadā abhūto ||[18,b] RGS 22.6

[a]tad anyeṣāṃ vā-iti Sautrāntikānāṃ | *LṬ

[b]yatha śaṅkitena viṣa-saṃjñata abhyupaiti no cāsya koṣṭha-gatu so viṣ' upadyate ca | em eva bāl' upagato ahu-mahya eṣo saṃjñāya jāyi mriyate ca sadā a-bhūto || RGS(Yuyama, 1976: 90); yatha śaṅkitena viṣasaṃjñata abhyupaiti no cāsya koṣṭhagatu so pi pātyate ca | em eva bālu pagato ahumahya eṣo ahasaṃjñi jāyi mriyate ca sadā abhūto || RGS(Obermiller, 1992: 85);「譬如得食疑有毒、以虚妄見而不食、愚人妄心生我想、以我想故有生死。」宋法護譯『佛説佛母寶德藏般若波羅蜜經』巻二「善友品」(T229.8.682a11-12); ji ltar dogs pa'i 'du shes kyis ni dug langs pa || dug de khong du song ba med kyang brgyal bar 'gyur || de bzhin byis pa bdag dang bdag gir khas len pa || bdag der 'du shes yang dag min rtag skye zhing 'chi ||

[1]|] O ; om. PT ; || RCN [2]|] PO ; || RTCN [3]POR ; || add. TC ; | add. N [4]PO ; || add. RTC ; | add. N [5]|] O ; om. PRTCN [6]|] POR ; || TCN [7]||] em.; om. PORTCN [8]|] PO ; || RN ; om. TC [9]ORTCN ; | add. P [10]|] O ; om. PRTCN [11]|] em.; om. PORTCN [12]|] em.; om. PORTCN [13]|] em.; om. PORTCN [14]|] PON ; || RTC [15]|] PO ; om. RTCN [16]PO ; || add. RTC ; | add. N [17]|] PON ; || RTC [18]||] em.; om. PORTCN

1 ° sadviparyāsagrahagrastānāṃ] RCN ; °sadviparyāsagrahastānām P ; °sadviparyāsagrastānāṃ O ; °sagrahagrastānāṃ T ; bdag dang bdag gi bar yang dag pa ma yin pa'i phyin ci log gi gdon gyis bzung ba rnams PsPT 2 bhāvāḥ] PORCN ; bhāvāt T 2 taimirikāṇām] P ; taimirikānām ON ; temirikāṇām R ; mirikānām T ; tesirikānām C 2 ivāsatkeśamaśakādaya] P ; iti vāsatkeśamaśakādaya O ; ivāsakleśamasakādaya R ; ivāsatkeśasamakādaya TCN 3 ca] POR ; om. TCN 5 jaiminīyakāṇādakāpilādīnāṃ] em.; vaiśeṣikakaṇādakāpilakādīnāṃ P ; veśeṣikakaṇādakāpilādīnāṃ O ; jaiminikāṇādakāpilādīnāṃ RTC ; jaimininādakāpilādīnāṃ N ; rgyal dpog pa dang | gzegs zan dang ser skya la sogs pa PsPT; jaiminīyakāṇādakāpilādīnāṃ LVP 6 ca] ORTCN ; om. P 6 °niṣṭhānām] em.; °niṣṭhānāṃ PTN ; °niṣṭhānāt O ; °niṣṭānāṃ R ; °miṣṭānāṃ C 6–7 cātītānāgatasaṃsthānāvijñapti°] em.; cātītānāgatasaṃsthānā'vijñapti° P ; vā'tītānāgatasaṃsthānāvijñapti° O ; vā'tītānāgatasaṃsthānāṃvijñapti° R ; vātītānāgatasaṃsthānāvijñapti° T ; vā'tītānāgatasaṃsthānāvijñapti° C ; vā atītānāgatasaṃsthānāvijñapti° N 7 °āstivādināṃ] PRTCN ; °āstikavādināṃ O ; 7 tadanyadasti°] ORTCN ; tadanyāsti° P 7 kalpitasvabhāvasya nāstivādināṃ] O ; om. P ; kalpite svabhāvasya nāstivādināṃ RTCN 8 paratantra°] PTC ; parataṃtra ON ; paratatra° R 8 evam] PRTCN ; eva O 8 astināstivādinām evaṃ] PTCN ; astināstivādināṃm evaṃ R ; om. O 8 carantāna] P ; carantāṃna O ; caratāṃ RTCN 9 duḥkhaṃ] ORTCN ; duḥkha P 9 saṃsāraḥ] POTCN ; saṃsāra R 10 yatha] P ; yathā ORTCN 10 °sañjñata] em.; °saṃjñata PRTCN ; °saṃjñita O 11 cāpi] PRTCN ; cāpa O 11 koṣṭhagatu] PORN ; koṣṭhagaṃtu T ; koṣṭagatu C 11 so] PO ; sā RTCN 11 viṣu] P ; visū O ; viṣū RTN ; viṣṭa C 11 pādyate ca] em.; pātyate P ; papadyate ca O ; papadyate RTCN 12 upagato] PRTC ; ugato O ; ūpagato N 12 ahumahya] em.; aṅgamahya P ; aṅgaṃmajā O ; aṅgaṃmajña R ; aṅgamajñā T ; aṃgamajñā C ; aṃgasaṃjñā N 12 eṣo] PO ; eṣā RTCN 13 jāyi] PO ; jāpi RTCN 13 mriyate] PORN ; triyate TC 13 ca] P ; om. ORTCN 13 sadā abhūto] PTCN ; sadābhūto O ; sadā abhūtā R

iti |[1] tad evaṃ na kasyacin nirvāṇe prahāṇaṃ nāpi kasyacin nirodha iti vijñeyam |[2] tataś ca
R97b12, P75a5 sarvakalpanākṣayarūpam eva nirvāṇam |[3] yathoktam ārya*ratnāvalyām |[4]

O103a4 na cābhāvo 'pi nirvāṇaṃ kuta evāsya[a] bhā*vatā |[5]
bhāvābhāvaparāmarśakṣayo nirvāṇam ucyate ||[6,b] RĀ 1.42

R97b13 iti |[7] ye* tu sarvakalpano*paśamarūpaṃ nirvāṇam apratipadyamānā bhāvābhāvatadubhayānu*bhaya- 5
rūpaṃ nirvāṇaṃ parikalpayanti |[8] tān praty ucyate |[9]

bhāvas tāvan na nirvāṇaṃ jarāmaraṇalakṣaṇam |[10]
C156b,R98a1, T212a prasajy*ate 'sti bhāvo hi na jarāmaraṇaṃ vinā ||[11] MMK 25.4

L525, O103a5, P75a6 tatraike bhāvato nirvāṇam abhini*viṣṭā [12] ev*am ācak*ṣate |[13] iha kleśakarmajan*masantānapravṛttiniya-
R98a2,N181b tarodh*abhūto jalapravāharodhabhūtase*tusthānīyo nirodhā*tmakaḥ [14] padārthas ta*n nirvāṇam |[15] na 10
cāvidyamānasvab*hāvo dharma evaṃ kāryakārī dṛśyate ||[16]
nanu ca

R98a3 yo 's*yā nandīrāgasahagatāyās tṛṣṇāyāḥ [17] kṣayo virāgo nirodho nirvāṇam ||[18c]

O103a6 ity uktam |[19] na ca* kṣayamātraṃ [20] bhā*vo bhavitum arha*ti |[21] tathā

PsPT; **yathā** śuṇṭhīṃ **viṣa**buddhyā bhakṣitvā maraṇatrāsād udaragatam api pātayati | na paramārthatas tadviṣaṃ | **evaṃ bālā** api-iti | viṣe viṣa**saṃjñitayā** | **ahu** | ahaṃ | **mahya** | mama | *LṬ

[a]asya-iti nirvāṇasya | *LṬ

[b]na cābhāvo ’pi nirvāṇaṃ kuta evāsya bhāvatā | bhāvābhāvaparāmarśakṣayo nirvāṇam ucyate || RĀ 1.42(Hahn, 1982: 18); 「無尚非涅槃、何況當是有、有無執淨盡、佛説名涅槃。」 『寶行王正論』(T1656.32.494a29-b1)

[c] cf. tatra samudaya āryasatyaṃ tṛṣṇā paunarbhavikī nandīrāgasahagatā tatra tatrābhinandinī || tatra niro[dha ā]ryasatyaṃ yad asyā eva tṛṣṇāyā aśeṣaprahāṇaṃ || ŚBh(Shukla, 1973: 252); yo etasyaiva tṛṣṇāye nandīrāgasahagatāye tatratatrābhinandinīye aśeṣakṣayo virāgo nirodho tyāgo prahāṇo pratiniḥsargo ayaṃ bhikṣavo duḥkhanirodho āryasatyaḥ || MV 3(Senart, 1897: 332).

---

[1]|] POT ; om. R ; || CN [2]|] POR ; || TCN [3]|] POR ; || TCN [4]|] POR ; || TCN [5]|] PORN ; || TC [6]||] em.; om. PORTCN [7]|] O ; om. P ; || RTCN [8]|] PN ; om. ORTC [9]|] PRN ; || ○ || O ; || TC [10]|] POR ; om. TCN [11]||] PR ; | O ; om. TCN [12]ORTCN ; | add. P [13]|] PO ; || RTCN [14]ORTCN ; | add. P [15]|] em.; om. PORTCN [16]||] TCN ; | POR [17]ORTCN ; | add. P [18]||] em.; om. PRTCN ; ø O [19]|] RT ; om. P ; ø O ; || CN [20]ORTCN ; | add. P [21]|] PO ; om. RTCN

---

2 ārya°] PO ; āryya° R ; ārye° TC ; āryye° N 3 bhāvatā] PO ; bhāvanā RTCN 5 ye] ORTCN ; ya P 5 °kalpanopaśama°] POTCN ; °kalparopaṇama° R 5–6 °ubhayānubhayarūpaṃ] ORTCN ; °ubhayarūpaṃ P 8 prasajyate 'sti] P ; prasajyetāsti OTCN ; prasajyatāsti R 9 abhiniviṣṭā] ORTC ; abhiniviṣṭhā P ; abhiviṣṭā N 9 evam] POTCN ; eva R 9 ācakṣate] POTCN ; vyācakṣate R 9 °janma°] POTCN ; °jatma° R 9–10 °niyatarodhabhūto] PRN ; ° || niyatarodhabhūto TC ; °nirodhabhūta O 10 °bhūtasetu°] POTCN ; °bhūjasatu° R 10 nirodhātmakaḥ] PTCN ; nirodhā-kaḥ O ; nirodhabhāvātmakaḥ R 10 tan] ORN ; om. P ; ta TC 11 svabhāvo] PTCN ; ···vo O ; svabhāvā R 13 'syā] PO ; 'sya RTCN 14 ca] PR ; ø O ; ya TCN 14 bhāvo] PORC ; bhāve TN 14 arhati] PRTCN ; arhanti O

pradyotasyeva nirvāṇaṃ vimokṣas tasya cetasaḥ ||[1] MP 44.11cd P75a7

ity uktam |[2] na ca pradyotasya nivṛttir bhāva ity upapadyate ||[3] R98a4

ucyate |[4] naitad evaṃ vijñeyam |[5] tṛṣṇāyāḥ [6] kṣayas tṛṣṇākṣaya [7] iti |[8] kiṃ tarhi tṛṣṇāyāḥ kṣayo 'sminn iti nirvāṇākhye dharme sati bhavati |[9] sa tṛṣṇākṣaya iti vaktavyaḥ |[10] pradīpaś ca R98a5
dṛṣṭāntamātram |[11] tatrāpi yasmin sati [12] cetaso vimokṣo bhavatīti veditavyam iti ||[13] O103a7

evaṃ bhāve nirvāṇe vyavasthāpite [14] ācāryo nirūpayati |[15] bhāvas tāvan na nirvāṇam iti |[16] kiṃ P75a8, R98a6
kāraṇam |[17] yasmāj jarāmaraṇalakṣaṇaṃ prasajyate |[18] bhāvasya jarāmaraṇalakṣaṇāvyabhicāritvāt |[19]
tataś ca nirvāṇam eva tan na syāt |[20] jarāmaraṇalakṣaṇatvād vijñānādivad ity abhiprāyaḥ |[21] tām eva R98a7
ca jarāmaraṇalakṣaṇāvyabhicāritāṃ [22] spaṣṭayann āha |[23] asti bhāvo hi na jarāmaraṇaṃ vineti |[24] yo O103b1, P75a9, T212b
hi jarāmaraṇarahitaḥ [25] sa bhāva eva na bhavati |[26] khapuṣpavaj jarāmaraṇarahitatvāt ||[27] R98a8

kiṃ cānyat |[28]

bhāvaś ca yadi nirvāṇaṃ nirvāṇaṃ saṃskṛtaṃ bhavet |[29] L526
nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ [30] kvacana kaścana ||[31] MMK 25.5 P75b1

yadi nirvāṇaṃ bhāvaḥ syāt [32] tadā tan nirvāṇaṃ [33] saṃskṛtaṃ bhavet |[34] vijñānādivad bhāvatvāt R98a9, N182a, C157a
|[35] yas tv asaṃskṛto nāsau bhāvaḥ |[36] tad yathā kharaviṣāṇādivad iti |[37] vyatirekam upadarśayann O103b2
āha |[38] nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ [39] kvacanety adhikaraṇe deśe kāle siddhānte vā |[40] kaścanety R98a10, P75b2

---

[1]|| em.; om. PORTCN [2]|] POR ; || TCN [3]||] CN ; | POR ; om. T [4]|] POR ; || TCN [5]|] PRT ; ø O ; || C ; om. N [6]RTCN ; | add. P ; ø O [7]PRTC ; ø O ; | add. N [8]|] P ; ø O ; om. RTCN [9]|] PON ; || RTC [10]|] PR ; ø O ; || TCN [11]|] PR ; ø O ; om. TCN [12]RTCN ; | add. P ; ø O [13]||] RTCN ; om. P ; | O [14]TCN ; | add. PO ; || add. R [15]|] P ; ø O ; om. RTCN [16]|] P ; ø O ; om. RTCN [17]|] em.; om. PRTCN ; ø O [18]|] P ; ø O ; om. RTCN [19]|] PORN ; || TC [20]|] PN ; ø O ; om. R ; || TC [21]|] PT ; ø O ; || RCN [22]PRTN ; | add. O ; || add. C [23]|] PR ; || OTCN [24]|] PO ; || RTC ; om. N [25]PR ; ø O ; | add. TN ; || add. C [26]|] PT ; ø O ; || RCN [27]||] TC ; | PRN ;ø O [28]|] PRN ; ø O ; || TC [29]|] PN ; ø O ; || RTC [30]R ; | add. PTN ; ø O ; || add. C [31]||] PTC ; ø O ; | RN [32]PR ; ø O ; || add. TC ; | add. N [33]RTCN ; | add. P ; ø O [34]|] ORN ; om. PT ; || C [35]|] PORN ; || TC [36]|] PRTN ; om. O ; || C [37]|] PON ; || RTC [38]|] PR ; ø O ; || TCN [39]PTCN ; ø O ; || add. R [40]|] ORTN ; om. P ; || C

---

1 pradyotasyeva] P ; pradyotasyaiva O ; pradyotasye R ; pradyotasyai TC ; pradyotasya eva N 1 nirvāṇaṃ] ORC ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa TN 2 nivṛttir] O ; nirvṛttir P ; nirvṛti R ; nirvṛtti TCN 3 naitad] PRCN ; ø O ; naivad T 3 tṛṣṇāyāḥ] PR ; ø O ; tṛṣṇāyā TCN 3 kṣayas] PRN ; ø O ; kṣaya TC 3 tṛṣṇāyāḥ] PR ; ø yāḥ O ; tṛṣṇāyā TCN 4 iti] ORTCN ; om. P 4 nirvāṇākhye] ORCN ; nirvvāṇākhye P ; nirvāṇāsye T 4 vaktavyaḥ] P ; ø O ; vaktavyaṃ RTCN 5 dṛṣṭānta°] PR ; ø O ; nirvāṇa° TCN 5 sati] RTCN ; siti P ; ø O 5 cetaso] PO ; cetso RTCN 6 vyavasthāpite] OR ; vyavasthāpyate P ; vyavasthāyito TC ; vyavasthāpito N 6 ācāryo] POTCN ; ācāryā R 6 iti] P ; ø O ; om. RTCN 7 jarā°] PTCN ; ø O ; ajarā° R 7 °lakṣaṇaṃ] RTCN ; lakṣaṃ P ; ø O 8 °lakṣaṇatvād] PRCN ; ø O ; °lakṣaṇalakṣaṇatvād T 9 °cāritāṃ] PORTN ; °cāritaṃ C 9 bhāvo] ORTCN ; bhāvā P 9 hi] ORTCN ; ti P 9 °maraṇaṃ] PTCN ; °maraṇam O ; °maraṇa R 10 bhavati] P ; ø O ; saṃbhavati RTCN 10 jarā°] RTCN ; ø O ; ja° P 11 kiṃ] PTCN ; ø O ; ki R 12 nirvāṇaṃ] RTC ; nirvvāṇaṃ P ; ø O ; nirvāṇa N 12 saṃskṛtaṃ] TCN ; saṃskṛtam P ; ø O ; saṃskṛte R 13 nāsaṃskṛto] PTCN ; ø O ; rāsaṃskṛto R 13 vidyate hi] P ; ø O ; hi vidyate RTCN 13 kaścana] PR ; ø O ; kaścanaḥ TCN 14 nirvāṇaṃ] TCN ; nirvvāṇaṃ P ; ø O ; nirvāṇa R 14 tadā] PRT ; ø O ; dā C 14 bhāvatvāt] OR ; bhāvāt P ; bhāvitvāt TCN 15 nāsau] PORCN ; sau T 15 kharaviṣāṇādivad] P ; khapuṣpaśaśaviṣāṇavad O ; kharavidhāṇavad R ; khalaviṣāṇavad T ; kharaviṣāṇavad CN ; bong bu'i rwa PsPT 15 upadarśayann] PRTC ; upadaø O ; upadayann N 16 vidyate hi] P ; ø O ; hi vidyeta RC ; hi vidyate TN 16 bhāvaḥ] PTCN ; ø O ; bhāve R 16 kvacanety adhikaraṇe] PR ; ø O ; kvacanety ādhikaraṇe T ; kvacanebhyodhikaraṇe CN 16 deśe] RTCN ; deśa P ; ø O

ādheya ādhyātmiko bāhyo vety arthaḥ ||[1]
kiṃ cānyat |[2]

R98a11 bhāvaś ca yadi nirvāṇam anupādāya tat katham |[3]
O103b3 nirvāṇaṃ nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyate ||[4] MMK 25.6

yadi bhavanmatena nirvāṇaṃ bhāvaḥ syāt [5] tad upādāya bhavet |[6] svakāraṇasāmagrīm āśritya bha-
R98a12 ved ity arthaḥ |[7] na caivam upādāya nirvāṇam iṣyate |[8] kiṃ tarhy anupādāya |[9] tad yadi bhāvo ni-
P75b3 rvāṇam anupādāya tat kathaṃ nirvāṇaṃ syāt |[10] naivānupādāya syāt |[11] bhāvatvād vijñānādivat |[12]
R98a13, O103b4 vyatirekakāraṇam āha |[13] nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyata iti ||[14]
L527, T213a atrāha |[15] satyaṃ bhāvo na nirvāṇaṃ [16] yathoditadoṣaprasaṅgāt |[17] kiṃ tarhy abhāva eva nirvāṇaṃ
R98b1 [18] kleśajanmanivṛttimātratvād iti ||[19] ucyate |[20] etad apy ayuktam |[21] yasmāt |[22]

bhāvo yadi na nirvāṇam abhāvaḥ [23] kiṃ bhaviṣyati |[24]
nirvāṇaṃ yatra bhāvo na nābhāvas tatra vidyate ||[25] MMK 25.7

O103b5, P75b4,R98b2 yadi bhāvo nirvāṇaṃ neṣyate |[26] yadi nirvāṇaṃ bhāva iti neṣyate |[27] tadā kim abhāvo bhaviṣyati
nirvāṇam |[28] abhāvo 'pi na bhaviṣyatīty abhiprāyaḥ |[29] kiṃ kāraṇam |[30] yasmān nirvāṇaṃ yatra bhāvo
R98b3 na nābhāvas tatra vidyate |[31] iha hi bhāvaḥ [32] svabhāvaparityāgād [33] anyathā bhavann [34] abhāva iti
vyapadiśyate |[35] yatra ca pakṣe [36] nirvāṇaṃ bhāvo na bhavati viditadoṣatvāt |[37] tatra pakṣe 'bhāvo 'pi
O103b6, R98b4,P75b5 nirvāṇaṃ na bhavati |[38] bhāvasvarūpeṇāsiddharūpasyābhāvarūpatānupapatter ity abhiprāyaḥ ||[39]
R98b5 kleśajanmanor abhāvo nirvāṇam iti ced evaṃ tarhi kleśajanmanor anityatā nirvāṇam iti syāt |[40]
N182b anityataiva hi kleśajanmanor abhāvo nānyad ity ato 'nityataiva nirvāṇaṃ syāt |[41] na caitad iṣṭam |[42]

[1]||] TCN ; | POR [2]|] PRN ; || ○ || O ; || TC [3]|] PR ; ø O ; om. TN ; || C [4]||] PRTC ; | ON [5]PO ; || add. RTC ; | add. N [6]|] PON ; || RTC [7]|] PON ; || RTC [8]|] P ; ø O ; om. RTCN [9]|] ORN ; om. P ; || TC [10]|] N ; om. PO ; || RTC [11]|] em.; om. PORCN ; || T [12]|] P ; ø O ; || RTCN [13]|] PO ; || RTCN [14]||] RTCN ; | PO [15]|] PO ; || RTCN [16]ORTCN ; | add. P [17]|] P ; om. ORN ; || TC [18]ORTCN ; | add. P [19]||] RC ; | PON ; om. T [20]|] PON ; om. R ; || TC [21]|] O ; om. PRTCN [22]|] PR ; || ○ || O ; om. TCN [23]ORTCN ; | add. P [24]|] PORN ; || TC [25]||] PTC ; | ORN [26]|] PN ; om. OR ; || TC [27]|] N ; om. PORC ; || T [28]|] PORN ; || TC [29]|] PON ; om. R ; || TC [30]|] OR ; om. P [31]|] PO ; || R [32]PO ; || add. R [33]PO ; || add. R [34]PO ; || add. R [35]|] PO ; || R [36]PR ; | add. O [37]|] P ; om. OR [38]|] PO ; om. R [39]||] TC ; | PORN [40]|] PON ; || RTC [41]|] PON ; || RTC [42]|] PORTN ; || C

1 ādheya] PR ; ādheye O ; ādhyeye TCN 1 bāhyo] PO ; bāhyā RCN ; bāhyātmiko bāhyā T 1 vety] PRTCN ; ceti O 5 tad] POTCN ; yad R 5 svakāraṇasāmagrīm] PRCN ; svakāraṇasāmāgrīm O ; svakārasāmagrīm T 6 kiṃ] PTCN ; ø O ; ki R 6 tarhy] PRN ; ··rhy O ; tahy TC 6 anupādāya] PRTC ; ·nupād(ā)·a O ; unupādāya N 7 anupādāya] POTCN ; anupādāye R 7 bhāvatvād] POR ; bhāvatvā TCN 8 bhāvo] POTCN ; bhāvā R 9 satyaṃ] P ; yadi ORTCN ; bden PsPT 9 na] POR ; hi TCN ; ma yin pa PsPT 9 tarhy] ORN ; tahy PTC 9 abhāva] POR ; ābhāva TCN 10 °janmanivṛttimātratvād] O ; °janmanivṛtimātratvavad P ; °jatmanirvṛttimātratvād R ; °janmanirvṛttimātratvād TCN 10 etad] POTCN ; eted R 10 ayuktam] em.; ayuktaṃ POTCN ; ayukta R 12 nirvāṇaṃ] ORCN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa T 12 nābhāvas] PORTC ; bhāvas N 13 nirvāṇaṃ] RTCN ; nirvvāṇaṃ P ; om. O 13 abhāvo] ORTCN ; bhāvo P ; dngos po med par PsPT 14 bhaviṣyatīty] POTCN ; bhaviṣyatity R 14–17 kiṃ kāraṇam ° ity abhiprāyaḥ] om. TCN 15 nābhāvas] OR ; abhāvas P 15 iha] PO ; ihaṃ R 15 °parityāgād] PO ; °parityāgāta R 16 pakṣe] PO ; kṣaye R 16 vidita°] OR ; vihita° P 16 pakṣe] PO ; yakṣe R 16 'bhāvo] PO ; 'bhāvā R 17 °svarūpeṇā°] PO ; °svarūpyeṇā° R 17 °rūpatā°] PO ; °rūpato° R 18 °janmanor] POTCN ; °jatmanor R 18 anityatā] PORCN ; anityato T 19 °janmanor] POTCN ; °jatmanor R

ayatnenaiva mokṣaprasaṅgād ity ayuktam evaitat ||[1]

kiṃ cānyat |[2]

yady abhāvaś ca nirvāṇam anupādāya tat katham |[3] O103b7,R98b6, C157b

nirvāṇaṃ na hy abhāvo 'sti yo 'nupādāya vidyate ||[4] MMK 25.8

tatrābhāvo 'nityatā bhāvaṃ copādāya prajñapyate |[5] kharaviṣāṇādīnām anityatānupalambhāt |[6] la- P75b6, R98b7
kṣaṇam āśritya lakṣyaṃ prajñapyate |[7] lakṣyam āśritya ca lakṣaṇam |[8] ataḥ parasparāpekṣikāyāṃ L528
lakṣyalakṣaṇapravṛttau kuto lakṣyaṃ bhāvam anapekṣyānityatā bhaviṣyati |[9] tasmād abhāvo 'py u- O104a1, R98b8
pādāya prajñapyate |[10] tato yady abhāvaś ca nirvāṇaṃ tat katham anupādāya nirvāṇaṃ bhaved u-
pādāyaiva tad bhavet |[11] abhāvatvād vināśavat |[12] etad eva spaṣṭayann āha |[13] na hy abhāvo 'sti yo P75b7, R98b9
'nupādāya vidyata iti ||[14] T213b

yadi tarhy abhāvo 'nupādāya nāsti kim idānīm upādāya vandhyāputrādayo 'bhāvā bhaviṣyanti | O104a2
kenaitad uktaṃ vandhyāputrādayo 'bhāvā iti |[15] uktaṃ hi pūrvam |[16] R98b10

bhāvasya ced aprasiddhir abhāvo naiva sidhyati |[17]

bhāvasya hy anyathābhāvam abhāvaṃ bruvate janāḥ ||[18] MMK 15.5

iti |[19] tasmān na vandhyāputrādīnām abhāvatvam |[20] yatrāpy ucyate |[21] R98b11

ākāśaṃ śaśaśṛṅgaṃ ca vandhyāyāḥ putra eva ca |[22] P75b8

asantaś cābhilapyante tathā bhāveṣu kalpanā ||[23,a] LA 10.453

---

[a]ākāśaṃ śaśaśṛṅgaṃ ca vandhyāyāḥ putra eva ca | asantaś cābhilapyante tathā bhāveṣu kalpanā || LA 10.453(南條, 1923: 322) =「虚空及兔角、及與石女兒、分別法如是、無而説名字。」 元魏菩提流支譯『入楞伽經』卷十「總品」(T671.16.576a21-22); ne. 劉宋求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』; 唐實叉難陀譯『大乘入楞伽經』。
cf. ākāśaṃ śaśaśṛṅgaṃ ca vandhyāyāḥ putra eva ca | asanto hy abhilapyante tathā bhāveṣu kalpanā || LA 2.166(南條, 1923: 105) =「如虚空兔角、及與槃大子、無而有言説、如是性妄想。」 劉宋求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』卷二「一切佛語心品」(T670.16.493b07-08) =「如虚空兔角、及與石女兒、無而有言説、如是妄分別。」 元魏菩提流支譯

---

[1]||] RTC ; | PON [2]|] PN ; || ○ || O ; om. R ; || TC [3]|] PO ; om. RTN ; || C [4]||] PRTC ; | ON [5]|] POR ; || TCN [6]|] PON ; || RTC [7]|] em.; om. PORN ; || TC [8]|] POR ; || TCN [9]|] PO ; || RTC ; om. N [10]|] PO ; || RTCN [11]|] PON ; || RTC [12]|] ON ; om. P ; || RTC [13]|] PO ; || RTCN [14]||] RTCN ; | PO [15]|] PO ; || RTCN [16]|] R ; om. POT ; || CN [17]|] PORN ; || TC [18]||] em.; om. PORTCN [19]|] PO ; || RTCN [20]|] POR ; om. T ; || CN [21]|] PO ; || RTCN [22]|] PORN ; || TC [23]||] em.; om. PORTCN

---

1 °prasaṅgād] O ; °prasaṃgād PRCN ; °praṃgād T 5 ° viṣāṇādīnām] PORCN ; °vikhāṇādinām T 6 lakṣyaṃ] OCN ; lakṣyam P ; lakṣaṃ RT 6 prajñapyate] ORTCN ; om. P 6 lakṣyam] O ; om. P ; lakṣam RTCN 6 ca] PORTC ; om. N 6 ataḥ] POTCN ; aṅgaḥ R 6 parasparāpekṣikāyāṃ] P ; parasparāpekṣikṣyāṃ O ; parasparāpekṣikyāṃ RTCN 7 lakṣyalakṣaṇapravṛttau] RTCN ; lakṣyalakṣaṇavṛttau P ; lakṣyālakṣaṇapravṛttau O 7 anapekṣyānityatā] P ; ānapekṣānityatā O ; anapekṣyānityato R ; anapekṣānityatā TC ; anapekṣānityato N 9 abhāvatvād] PORCN ; abhāvad T 9 spaṣṭayann] PONC ; spaṣṭhayann RT 9 āha] ORTCN ; āya P 11 tarhy] PORN ; tahy TC 11 vandhyā°] POT ; vaṃdhyā° N ; vadhyā° R ; vandhā° C 11–12 bhaviṣyanti | ° 'bhāvā] PN ; bhaviṣyanti || ° 'bhāvā TC ; om. O ; bhaviṣyanti | ° 'bhāvo R 14 °bhāvam] POCN ; °bhāvem R ; °bhāvas T 15 abhāvatvam] em.; abhāvatvaṃ PORCN ; abhāvaṃ T 16 °śṛṅgaṃ] em.; °śṛṅgaṃñ P ; °śṛṅgañ O ; °śṛṃgaṃ CN ; °śaṅgaṃ R ; °śṛṃga T 16 ca vandhyāyāḥ] PO ; vandhyāyāḥ R ; ca vandhyāyā TC ; ca vaṃdhyāyā N 17 bhāveṣu] ORTCN ; bhāve P

R98b12, O104a3, N183a iti |[1] atrāpi bhāvakalpanāpratiṣedhamātraṃ nābhāvakalpanā |[2] bhāvatvāsiddher eveti vijñeyam
P76a1 |[3] vandhyāputra iti śabdamātram evaitat |[4] nāsyārtha upalabhyate |[5] yasyārthasya bhāvatvam
R98b13 abhāvatvaṃ ca syād iti |[6] kuto 'nupalabhyamānasvabhāvasya bhāvābhāvakalpanā yokṣyate |[7] tasmān
na vandhyāputro 'bhāva iti [8] vijñeyam |[9] tataś ca sthitam etan na hy abhāvo 'sti yo 'nupādāya vidyata
iti ||[10]

R99a1, O104a4, P76a2 atrāha |[11] yadi bhāvo nirvāṇaṃ na bhavati |[12] abhāvo 'pi |[13] kiṃ tarhi nirvāṇam iti ||[14] ucyate |[15] iha
C158a hi bhagavadbhis [16] tathāgataiḥ |[17]

L529 ya ājavaṃjavībhāva upādāya pratītya vā |[18]
R99a2 so 'pratītyānupādāya nirvāṇam upadiśyate ||[19] MMK 25.9

tatrājavaṃjavībhāva āgamanagamanabhāvo janmamaraṇaparamparety arthaḥ |[20] sa cāyam
T214a, R99a3 ājavaṃjavībhāvaḥ kadācid dhetupratyayasāmagrīm āśrityāstīti prajñapyate |[21] dīrghahrasvavat
O104a5 |[22] kadācid utpadyata iti [23] prajñapyate |[24] pradīpaprabhāvat |[25] bījāṅkuravat |[26] sarvathā yady
P76a3, R99a4 ayam upādāya prajñapyate |[27] yadi vā pratītya jāyata iti [28] vyavasthāpyate |[29] sarvathāsya
janmamaraṇaparamparāprabandhasyāpratītya vānupādāya vā yāpravṛttis tan nirvāṇam iti

『入楞伽經』巻四「集一切佛法品」(T671.16.534c11-12) =「如虚空兔角、及與石女兒、無而有言説、妄計法如是。」唐實叉難陀譯『大乘入楞伽經』巻三「集一切法品」(T672.16.603a28-29).

[1]|] POR ; || TCN [2]|] ORN ; om. P ; || TC [3]|] OR ; om. P ; || TCN [4]|] em.; om. PORTCN [5]|] PRTN ; om. O ; || add. C [6]|] P ; om. ORTCN [7]|] PR ; om. O ; || TCN [8]POTCN ; | add. R [9]|] PORCN ; || T [10]||] RTCN ; | PO [11]|] POT ; || RCN [12]|] ORTN ; om. P ; || C [13]|] em.; om. PORTCN [14]||] em.; om. PORTCN [15]|] ORN ; om. P ; || TC [16]ORTCN ; | add. P [17]|] RN ; om. PT ; || ○ || O ; || C [18]|] PORN ; om. T ; || C [19]||] PRTCN ; | O [20]|] PO ; || RTCN [21]|] PON ; om. R ; || TC [22]|] PON ; || RTC [23]PRN ; | add. O ; || add. TC [24]|] R ; om. PO ; || TCN [25]|] POR ; || T ; om. CN [26]|] PORN ; || TC [27]|] PN ; om. O ; || RTC [28]ORN ; | add. P ; || add. TC [29]|] ON ; om. PR ; || TC

1 atrāpi] P ; tatrāpi ORTCN 1 bhāvatvāsiddher] PRTCN ; bhāvāsiddher O 1 eveti] POTCN ; aveti R 1 vijñeyam] em.; vijñeyaṃ ORTCN ; jñeyaṃ P 2 śabdamātram] POTCN ; śabdamātra iti śabdamātras R 3 abhāvatvaṃ] RTCN ; abhāvatvañ O ; va(stu)bhāvatvaṃ P 3 ca] OR ; om. P ; va TCN 3 'nupalabhyamāna°] O ; nupalabhyamāna° PTCN ; 'nupalambhamāna° R 3 yokṣyate] POC ; yākṣyate R ; yojyate TN 4 vandhyāputro 'bhāva] PO ; vandhyāputrābhāva RCN ; vandhyāputrabhāva T 4 sthitam etan] PORT ; sthitam evaṃ C ; sthitavan N 4 vidyata] POR ; vijñata TC ; vijñapyata N 6 abhāvo] POTCN ; abhāvā R 6 iha] POTCN ; ihā R 7 bhagavadbhis] OCN ; bhagavadbhiḥ P ; bhagavadbhīs R ; bhavadbhis T 8 pratītya] PORTC ; pratītye N 9 upadiśyate] POTCN ; upadiśyat R 10 °javībhāva] PRTCN ; °javījabhāva O 10 āgamanagamanabhāvo] PR ; āgamanāgamanabhāvo O ; āgamanagamanabhāva TCN 10 janmamaraṇaparamparety] PO ; jatmamaraṇaparasparety R ; janmamaraṇaparasparety TCN ; skye ba dang 'chi ba gcig nas gcig tu brgyud pa PsPT 11 °javībhāvaḥ] POTCN ; °javābhāvaḥ R 11 dhetupratyayasāmagrīm] ORTN ; tupratyayasāmagrīm P ; dhetupratyayamāsagrīm C 11 āśrityāstīti] PORN ; āśrityostīti TC 11 prajñapyate] POR ; prajñapyante TCN 11 dīrghahrasvavat] em.; dīrghahrasvavata P ; ·īr·øt O ; na dīrghahrasvavat RTCN ; ring po dang thung ngu bzhin no PsPT 12 prajñapyate] PRTCN ; om. O 12 pradīpaprabhāvat] R ; pradīpaprabhāvavat PTCN ; om. O ; mar me'i 'od bzhin no PsPT 12 bījāṅkuravat] em.; bījāṃkuravat POTCN ; om. R, PsPT 13 yadi vā pratītya] ORTCN ; yā vividhā pratītya P 13 jāyata] POTCN ; jāyatye R 13 vyavasthāpyate] PORCT ; ° iti add. N 13 sarvathāsya] ORTCN ; 'sya P 14 janma°] PTCN ; ··nma° O ; jatma° R 14 °paramparāprabandhasyā°] em.; °paraṃparāprabandhasyā° P ; °paramparāpra····ā O ; °paraṃparāprabandhumyā ° R ; °paraṃ | parāprabandhasyā° T ; °paraṃparāprabaṃdhasyā° C ; °parasparāprabaṃdhasyā° N 14 vānupādāya vā yāpravṛttis] em.; vānupādāya vā yā 'pravṛttis R ; ··'pādā(ya) vā yā 'pravṛttis O ; vā 'nupādāya vā 'pravṛttis P ; vānupādāya vā yo 'pravṛtti TC ; vānupāyedo vyayo 'pravṛtti N

vyavasthāpyate |[1] na cāpravṛttimātraṃ bhāvo 'bhāvo veti parikalpayituṃ pāryata iti |[2] evaṃ na bhāvo nābhāvo nirvāṇam ||[3] R99a5 O104a6

atha vā yeṣāṃ saṃskārāḥ saṃsarantīti pakṣas teṣāṃ pratītya pratītya ya utpādaś ca vināśaś ca so 'pratītyāpravartamāno nirvāṇam iti kathyate |[4] yeṣāṃ tu pudgalaḥ saṃsarati [5] teṣāṃ tasya nityānityatvenāvācyasya tat tad upādānam āśritya ya ājavaṃjavībhāvaḥ sa upādāya pravartate |[6] sa evopādāyopādāya pravartamānaḥ [7] sann idānīm anupādāyāpravartamāno nirvāṇam iti vyapadiśyate |[8] na ca saṃskārāṇāṃ pudgalasya vāpravṛttimātrakaṃ bhāvo 'bhāvo veti śakyaṃ parikalpayitum ity ato 'pi na bhāvo nābhāvo nirvāṇam iti yujyate ||[9] P76a4,R99a6, N183b L530 R99a7, O104a7 R99a8

kiṃ cānyat |[10] P76a5

prahāṇaṃ cābravīc chāstā bhavasya vibhavasya[a] ca |[11]
tasmān na bhāvo nābhāvo nirvāṇam iti yujyate || MMK 25.10

tatra sūtra uktam |[12] T214b, O104b1

ye kecid bhikṣavo bhavena[b] bhavasya niḥsaraṇaṃ[c] paryeṣante |[13] vibhavena vāparijñānaṃ tat teṣām ||[14,d] R99a9

iti |[15] ubhayaṃ hy etat parityājyam |[16] bhavatṛṣṇā vibhavatṛṣṇā ca |[17] na caitan nirvāṇaṃ C158b

---

[a]**vibhav**o abhāvaḥ | *LṬ
[b]**bhavena** bhāvarūpatvena | *LṬ
[c]**niḥsaraṇaṃ** nirvāṇaṃ | *LṬ
[d]cf. ye hi keci bhavena bhavasya niḥśaraṇam āhuḥ sarve te bhavā aniḥśaraṇā ti vademi | See MV(Senart, 1890: 418). And de La Vallée Poussin determined this citation closest to Udāna 3.10 : ye hi keci samaṇā vā brāhmaṇā vā bhavena bhavassa vippamokkham āhaṃsu, sabb' ete avippamuttā bhavasmā 'ti vadāmi. ye vā pana keci samaṇā vā brāhmaṇā vā vibhavena bhavassa nissaraṇam āhaṃsu, sabb' ete anissaṭā bhavasmā 'ti vadāmi. (PTS 43, p.33).

---

[1]|] PORN ; || TC [2]|] PR ; ø O ; || TCN [3]||] TCN ; om. P ; | OR [4]|] R ; om. P ; ø O ; || TCN [5]PR ; ø O ; || add. TC ; | add. N [6]|] PR ; ø O ; || TCN [7]RTCN ; | add. P ; ø O [8]|] PO ; || RTCN [9]||] TCN ; | P ; ø O ; om. R [10]|] P ; ø O ; || RTCN [11]|] PN ; ø O ; || RTC [12]|] POR ; || TCN [13]|] P ; om. ORTCN [14]||] em.; om. PORTCN [15]|] PON ; || RTC [16]|] P ; ø O ; om. RTCN [17]|] P ; ø O ; om. RTCN

---

1 cāpravṛttimātraṃ] PTC ; cāpravṛtti·ā·ṃ O ; vāpravṛttimātraṃ R ; cāpravṛttimātra N 1 'bhāvo] P ; bhāvo O ; 'bhā RTCN 1 parikalpayituṃ] POR ; parikalpituṃ TCN 1 pāryata] P ; pāry···O ; pārthata R ; prārthata TCN 3 pakṣas] POTCN ; pakṣes R 3 teṣāṃ] PORTN ; teṣī C 3 pratītya pratītya ya] OTCN ; pratītyāpratītya ya P ; pratītya pratītyaḥ R 4 so] PTCN ; sā OR 4 'pratītyāpravartamāno] em.; 'pratītyāpravarttamāno OP ; 'prītyāpravarttamānā R ; 'pratītyapravartamāno TCN 4 pudgalaḥ] PR ; ø O ; puṃgalaḥ TCN 5 °vācyasya] PO ; °vāyasya R ; °vācya TC ; °vācyaṃ N 6 evopādāyopādāya] RTCN ; evopādāya P ; ø O ; rgyur byas shing rgyur byas nas PsPT 6 pravartamānaḥ] em.; pravarttamānaḥ P ; ø O ; pravarttayamānā R ; pravarttayamāna TCN 6 sann °māno] em.; sann idānīm anupādāyāpravarttamāno P ; ødānīm anupādāyāpravarttamāno O ; om. R ; sann idānīm anupādāya pravarttayamāno TC ; sann idānīm anupādāya pravarttayamāṇo N ; sann idānīm anupādāy[ā]pravartayamāno LVP 7 pudgalasya] POR ; puṃgalasya TCN 7 °mātrakaṃ] TCN ; °mātraṃ P ; °mā(tra)··O ; °mātre R 7 'bhāvo] PTCN ; ·ā··O ; 'bhāvā R 8 nābhāvo] TCN ; om. P ; ø O ; nābhāvā R 8 yujyate] PTCN ; ø O ; pujyate R 10 prahāṇaṃ] P ; ø O ; pramāṇaṃ RTN ; pramāṇa C 10 cābravīc] PRCN ; ø O ; cāpravīc T 13 ye] POTCN ; e R 13 paryeṣante] PTC ; paryyeṣante N ; paryevyente O ; paryaṣante R 14 vāparijñānaṃ] em.; vā 'parijñānaṃ PTCN ; vā aparijñānaṃ O ; vā | parijñānaṃ R 15 bhavatṛṣṇā] PR ; ø O ; bhavetṛṣṇā TCN

R99a10 prahātavyam [1] uktaṃ bhagavatā |[2] kiṃ tarhy aprahātavyam |[3] tad yadi nirvāṇaṃ bhāvarūpaṃ
P76a6 syād abhāvarūpaṃ vā |[4] tad api prahātavyaṃ bhavaty eva |[5] na ca prahātavyam |[6] tasmān na bhāvo
O104b2, R99a11 nābhāvo nirvāṇam iti yujyate ||[7]

yeṣām api kleśajanmanos tatrābhāvād abhāvarūpaṃ nirvāṇam |[8] svayaṃ ca bhāvarūpatvād bhā-
R99a12 varūpam ity ubhayarūpam |[9] teṣām ubhayarūpam api nirvāṇaṃ nopapadyata iti pratipādayann āha
|[10]

L531 bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇam ubhayaṃ yadi |[11]
bhaved abhāvo bhāvaś ca mokṣas tac ca na yujyate ||[12] MMK 25.11

O104b3, N184a, R99a13 yadi bhāvābhāvobhayarūpaṃ nirvāṇaṃ syāt tadā bhāvaś cābhāvaś ca mokṣa iti syāt |[13] tataś ca
P76a7 [14] yaḥ saṃskārāṇām ātmalābhas[a] | tasya ca vigamaḥ[b] |[15] sa eva mokṣaḥ syāt |[16] na ca saṃskāra eva
mokṣa iti yujyate |[17] ata evāha |[18] tac ca na yujyata iti ||[19]
R99b1 kiṃ cānyat |[20]

bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇam ubhayaṃ yadi |[21]
nānupādāya nirvāṇam upādāyobhayaṃ hi tat ||[22] MMK 25.12

O104b4, R99b2 yadi bhāvābhāvarūpaṃ nirvāṇaṃ syāt tadā hetupratyayasāmagrīm upādāyāśritya bhaven
P76a8,T215a nānupādāya |[23] kiṃ kāraṇam |[24] yasmāt [25] upādāyobhayaṃ hi tat |[26] bhāvam upādāyābhāvo 'bhāvaṃ
R99b3 copādāya bhāva iti kṛtvā |[27] ubhayam etad bhāvaṃ cābhāvaṃ copādāyaiva bhavati nānupādāya |[28]
O104b5 evaṃ nirvāṇaṃ bhaved bhāvābhāvarūpatvād |[29] na caitad evam iti na yuktam etat ||[30]

---

[a] **ātmalābha** iti bhāvarūpaḥ | *LṬ
[b] **tasya ca vigama** rūpa iti abhāvarūpaḥ | *LṬ

---

[1] P ; ø O ; || add. RTCN [2] |] em.; om. PRTCN ; ø O [3] |] PRTN ; ø O ; || C [4] |] PN ; ø O ; om. R ; || TC [5] |] P ; ø O ; om. RTCN [6] |] P ; ø O ; || RTCN [7] ||] RCN ; | POT [8] |] em.; om. PORTCN [9] |] em.; om. PRTCN ; ø O [10] |] R ; || PTCN ; || ○ || O [11] |] P ; ø O ; || RC ; om. TN [12] ||] PRTC ; ø O ; | N [13] |] PON ; || RTC [14] PRTCN ; | add. O [15] |] P ; om. OTCN ; || R [16] |] ORN ; om. P ; || TC [17] |] R ; om. P ; ø O ; || TCN [18] |] POR ; || TCN [19] ||] C ; | PO ; om. RTN [20] |] P ; || ○ || O ; || RTCN [21] |] POTN ; om. R ; || C [22] ||] PRTC ; ø O ; | N [23] |] POR ; om. N ; || TC [24] |] O ; om. PRTCN [25] RTCN ; | add. PO [26] |] PON ; om. RTC [27] |] PON ; om. RT ; || C [28] |] POR ; || TCN [29] |] RTN ; om. P ; ø O ; || C [30] ||] RC ; | POTN

---

2 syād abhāvarūpaṃ] RTCN ; om. P ; ø O 4 °janmanos] POTCN ; °jatmanos R 4 tatrābhāvād] ORTCN ; tatra bhāvād P 4 bhāvarūpatvād] OTN ; bhāvarūpatvāt C ; bhāvatvād P ; bhāvarūpaṃtvād R 5 teṣām] P ; teṣāṃm R ; ø O ; yeṣām TCN 5 ubhayarūpam] RTCN ; ubhayam P ; ø O 7 abhāvo bhāvaś] PO ; bhāvā 'bhāvaś R ; bhāvo 'bhāvaś TCN 7 ubhayaṃ] PTCN ; ubhaya·O ; ubheyaṃ R 9 nirvāṇaṃ] ORCN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa T 9 cābhāvaś] ORTCN ; om. P 9 syāt] PORTN ; syās C 10 yaḥ] PORN ; ya T ; pra C 10 ātmalābhas] PORTN ; ātmanābhas C 10 syāt] OTCN ; syān P ; syāta R 11 mokṣa] PRTCN ; mokṣya O 11 na] ORTCN ; om. P 11 yujyata] POTCN ; yujya R 12 kiṃ] RTN ; kiñ O ; ki PC 13 yadi] PTCN ; ··di O ; di R 15 °pratyayasāmagrīm] PTCN ; °pratyayasāmāgrīm O ; °pratyeyasāmagrīm R 16 nānupādāya] PON ; nādupādāya TC ; nātradupādāya R 16 yasmāt] PO ; tasmād RTCN 16 upādāyobhayaṃ] POTCN ; upādāyābhayaṃ R 16 °bhāvo] POTCN ; °bhāvā R 17 etad] POTCN ; atad R 17 cā°] POTCN ; vā° R 17 copādāyaiva] OTCN ; copādāyaivaṃ P ; cāpādāyayaiva R 17 bhavati] POTCN ; bhavatī R 18 °rūpatvād] em.; °rūpatvān P ; °rūø O ; °rūpaṃ RTCN 18 caitad] PRCN ; ø O ; caitabd T 18 etat] PRTCN ; itat O

kiṃ cānyat |[1]

bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇam ubhayaṃ katham |[2]
asaṃskṛtaṃ hi nirvāṇaṃ bhāvābhāvau ca saṃskṛtau ||[3] MMK 25.13 R99b4

bhāvo hi svahetupratyayasāmagrīsambhūtatvāt saṃskṛtaḥ |[4] abhāvo 'pi bhāvaṃ pratītya L.532, P76a9
sambhūtatvāj jātipratyayaṃ jarāmaraṇam iti vacanāc ca saṃskṛtaḥ |[5] tad yadi bhāvābhāvasvabhāvaṃ R99b5
nirvāṇaṃ syāt |[6] tadā nāsaṃskṛtaṃ saṃskṛtam eva tat syāt |[7] na ca saṃskṛtam iṣyate |[8] tasmān na O104b6, C159a
bhāvābhāvasvarūpaṃ nirvāṇaṃ yujyate ||[9] R99b6

athāpi syāt |[10] naiva hi nirvāṇaṃ bhāvābhāvasvarūpam |[11] kiṃ tarhi nirvāṇe bhāvābhāvāv iti |[12]
evam api na yuktam |[13] kuto [14] yasmāt |[15]

bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇa ubhayaṃ katham |[16] P76b1, R99b7
tayor abhāvo hy ekatra prakāśatamasor iva ||[17] MMK 25.14

yathā hy ālokāndhakārayor ekadā ekatra veśmani parasparaviruddhayor asambhavaḥ | evaṃ bhā- O104b7
vābhāvayor api parasparaviruddhayor ekatra nirvāṇe nāsti sambhava iti |[18] ato bhaved abhāvo bhāvaś N184b
ca nirvāṇa ubhayaṃ katham |[19] naiva bhaved ity abhiprāyaḥ ||[20]
idānīṃ yathā [21] naiva bhāvo naivābhāvo nirvāṇaṃ yujyate |[22] tathā pratipādayann āha |[23] R99b9, R99b10

naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇam iti [24] yāñjanā |[25] P76b2, O105a1
abhave caiva bhāve ca sā siddhe sati sidhyati ||[26] MMK 25.15

[1]|] PN ; || ○ || O ; || RTC [2]|] OR ; om. P ; || TCN [3]||] POC ; | RTN [4]|] POTN ; || RC [5]|] ON ; om. P ; || RTC [6]|] N ; om. PORT ; || C [7]|] P ; om. ORTCN [8]|] PO ; || RTCN [9]||] RTCN ; | PO [10]|] P ; om. ORTCN [11]|] P ; om. ORTCN [12]|] PON ; || RTC [13]|] PO ; om. R ; || TCN [14]POTCN ; || add. R [15]|] P ; || ○ || O ; om. RTCN [16]|] POR ; om. T ; || CN [17]||] P ; | O [18]|] O ; om. PR ; || TCN [19]|] POR ; || TC ; om. N [20]||] RTCN ; | PO [21]PORTN ; || add. C [22]|] O ; om. PRTCN [23]|] PR ; || ○ || O ; || TCN [24]PO ; || add. RTCN [25]|] POC ; om. R ; || TN [26]||] PRTC ; | ON

3 hi] PORCN ; om. T 3 nirvāṇaṃ] RTCN ; nirvāṇam O ; ° nirvvāṇaṃ add. P 4 °pratyayasāmagrīsambhūtatvāt] em.; °pratyayasāmagrīsaṃbhūtatvāt PTCN ; °pratyayasāmagrīsadbhūtatvāt O ; °pratyeyasāmagrīsaṃbhūtatvāt R 4 saṃskṛtaḥ] POTCN ; saskṛtaḥ R 4 bhāvaṃ] em.; bhābhāvaṃ P ; om. ORTCN ; dngos po la PsPT 5 sambhūtatvāj] P ; saṃbhūtatvāt RCN ; saṃbhūtatvāj T ; sadbhūtatvāj O 5 jātipratyayaṃ] PO ; jātīpratyayaṃ R ; jātipratyaya TCN 5 °maraṇam] OR ; °maṇam P ; °maraṇa TCN 5 iti] POR ; om. TCN 5 vacanāc] POTCN ; vacanā R 5 tad] POR ; yad TCN 5 bhāvābhāvasvabhāvaṃ] TCN ; bhāvasvabhāvaṃ P ; bhāvābhāvasvabhāva O ; bhāvo bhāvasvabhāvaṃ R 6 nāsaṃskṛtaṃ] RCN ; nāsaṃskṛtam P ; nā··skṛtaṃ O ; nāsaṃskṛta T 6 saṃskṛtam] OTCN ; om. P ; saskṛtam R 6 tat syāt] P ; tat syān R ; tasmān OTCN 7 °svarūpaṃ] ORTCN ; °rūpaṃ P 7 nirvāṇaṃ] OCN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa RT 8 °svarūpam] em.; °svarūpaṃ PORCN ; °sya rūpaṃ T 8 bhāvābhāvāv] PORTN ; bhāvābhāvov C 9 yuktam] em.; yuktaṃ POTCN ; yukta R 9 yasmāt] PO ; yasmād N ; yasmā RTC 10 nirvāṇa] TCN ; nirvāṇe PR ; nirvāṇam O 11 tayor ° iva] PO ; om. RTCN,PsPT 12 yathā hy ° asambhavaḥ | evaṃ] P ; yathā hy ° asambhava evam O ; om. RTCN,PsPT 13 ekatra] POTCN ; ekatu R 13 sambhava] O ; saṃbhava RTCN ; sambandha P 14 ubhayaṃ] ORTCN ; uyayaṃ P 14 naiva] POTCN ; naivaṃ R 15 idānīṃ] POTCN ; katham ity āha | **tayor abhāvo hy akatra prakāśatamasār ivaḥ** || yathā hy ālokāndhakārayor ekaśā ekatra veśmani parasparaviruddhayor asaṃbhavaḥ evaṃ bhāvābhāvayor api parasparaviruddhayor ekatu nirvāṇe nāsti saṃbhava iti || ato **bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvāṇa ubhayaṃ kathaṃ** | naiva bhaved ity abhiprāyaḥ idānīṃ R 16 naivābhāvo] PRTC ; naiva bhāvo O ; naivābhāvā N 16 iti] POTCN ; itiḥ R 16 yāñjanā] P ; yā 'ñjanā OTCN ; yo 'ñjanā R 17 ca] POTCN ; ra R

L533, R99b11, T215b yadi hi bhāvo nāma kaścit syāt tadā tatpratiṣedhena naiva bhāvo nirvāṇam ity eṣā kalpanā |[1] yadi
R99b12 ca kaścid abhāvaḥ syāt tadā tatpratiṣedhena naivābhāvo nirvāṇaṃ syāt |[2] yadā ca bhāvābhāvāv eva
O105a2 na stas tadā tatpratiṣedho 'pi nāstīti |[3] tasmān naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇam iti yā kalpanā sāpi
P76b3 nopapadyata eveti |[4] na yuktam etat ||[5]
R99b13 kiṃ cānyat |[6]

naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇaṃ yadi vidyate |[7]
naivābhāvo naiva bhāva iti kena tad ajyate ||[8] MMK 25.16

R100a1 yad etan nirvāṇaṃ yadi naivābhāvaṃ naiva bhāvarūpam astīti parikalpyate |[9] kena tadānīṃ tad i-
tthaṃvidhaṃ nobhayarūpaṃ nirvāṇam astīty [10] ajyate [11] gṛhyate [12] prakāśyate vā |[13] kiṃ tava nirvāṇe
O105a3, R100a2, P76b4 kaścid evaṃvidhaḥ pratipattāsti |[14] atha nāsti ||[15] yady asti |[16] evaṃ sati nirvāṇe 'pi tavātmā syāt
|[17] na ceṣṭaṃ nirupādānasyātmano 'stitvābhāvāt ||[18] atha nāsti tadā kena tad itthaṃvidhaṃ nirvā-
R100a3 ṇam astīti paricchidyate |[19] saṃsārāvasthitaḥ paricchinattīti cet |[20] yadi saṃsārāvasthitaḥ paricchi-
O105a4,C159a,N185a natti |[21] sa kiṃ vijñānena[a] paricchinatti |[22] uta jñānena[b] |[23] yadi vijñāneneti [24] parikalpyate |[25] tan
R100a4 na yujyate |[26] kiṃ kāraṇam |[27] yasmān nimittālambanaṃ [28] vijñānam |[29] na ca nirvāṇe kiñcin ni-
P76b5 mittam asti |[30] tasmān na tat tāvad vijñānenālambyate |[31] jñānenāpi na jñāyate |[32] kiṃ kāraṇam |[33]
T216a, R100a5 yasmāj [34] jñānena hi śūnyatālambanena bhavitavyam |[35] tac cānutpādarūpam eveti |[36] kathaṃ [37]

[a]**vijñānena** sāmvṛtena | *LṬ
[b]**jñānena** pāramārthikena *LṬ

[1]|] PR ; om. OTCN [2]|] PORN ; || TC [3]|] O ; om. PTCN ; || R [4]|] ON ; om. P ; || RTC [5]||] em.; | PO ; om. RTCN [6]|] PN ; || ○ || O ; om. R ; || TC [7]|] PORN ; || TC [8]||] PRTC ; | ON [9]|] PR ; om. O ; || TCN [10]POR ; || add. TC ; | add. N [11]O ; | add. PN ; || add. RTC [12]ORTCN ; | add. P [13]|] RN ; om. POT ; || C [14]|] RCN ; om. PO ; || T [15]||] C ; | PORN ; om. T [16]|] RCN ; om. POT [17]|] em.; om. PORTCN [18]||] RTCN ; | PO [19]|] PORN ; || TC [20]|] ON ; om. P ; || RTC [21]|] P ; om. ORTCN [22]|] POR ; || TCN [23]|] PO ; om. RTN ; || C [24]PORN ; || add. TC [25]|] P ; om. ORTCN [26]|] PO ; om. RTCN [27]|] ORN ; om. PT ; || C [28]POTCN ; || add. R [29]|] T ; om. PO ; || RCN [30]|] PON ; || RTC [31]|] PON ; || RTC [32]|] PO ; om. RTCN [33]|] PORT ; || C ; om. N [34]PT ; | add. ON ; || add. RC [35]|] PN ; om. O ; || RTC [36]|] P ; om. ORTCN [37]PON ; | add. R ; || add. TC

1 kaścit] ORTCN ; kaścita P 1 syāt] ON ; ° syāt add. PTC ; ° syā add. R 1 tat°] POTCN ; ttat° R 1 eṣā] POTCN ; eṣāṃ R 2 ca] P ; om. ORTCN 3 stas] PORTN ; s C 3 nāstīti] PORTC ; tat ° add. N 3 naivābhāvo naiva bhāvo] P ; naiva bhāvo naivābhāvo ORTCN 3 yā] POCN ; yī R ; yāṃ T 4 nopapadyata eveti] OTCN ; nopapadyate eveti P ; nopapadyatānuceti R 5 cānyat] POTCN ; cānyatā R 6 naivābhāvo] PO ; naivābhāvā RTCN 6 naiva bhāvo] PORN ; naivābhāvo TC 7 iti] PRTCN ; chati O 7 ajyate] PRTN ; ahate O ; akṣyate C 8 yadi] P ; om. ORTCN ; gal te PsPT 8 kena tadānīṃ] ORN ; kenedīnīṃ P ; kena tadāniṃ TC 9 nobhaya°] POTCN ; nābhaya° R 9 ajyate] PRTCN ; ahyate O 9 kiṃ] PORTN ; ki C 9 tava] PO ; tatra RTCN ; de la PsPT 9 nirvāṇe] ORTC ; nirvvāṇe P ; nirvāṇaṃ N 10 °vidhaḥ] PRTCN ; °vidha O 10 asti] RTC ; asty PN ; api O 10 tavātmā] POR ; tavātma TCN 11 nirupādānasyātmano] ORTCN ; nirūpādānasyātmano P 11 'stitvābhāvāt] POTCN ; dastitvābhāvāt R 11 tadā] POR ; om. TCN ; de'i tshe PsPT 11 kena tad] POR ; kenaitad TCN 11 itthaṃvidhaṃ] TCN ; itthamvidhan P ; itheṃvidhaṃ O ; itthaṃvipaṃ R 12 saṃsārāvasthitaḥ] POR ; saṃsārāvasthita TC ; saṃsārāvasthitaṃ N 12 paricchinattīti] PTCN ; paricchi··ttīti O ; paricchittīti R 13 jñānena] POTCN ; jñāneneti R 13 yadi vijñāneneti] PTCN ; yadi vijñānena O ; om. R 14 nimittālambanaṃ] PRTCN ; nimittālamba O 14 kiñcin] em.; kiṃcin PRTCN ; kiñci O 15 asti] POTCN ; āsti R 15 tat] ORTCN ; nat P 16 śūnyatālambanena] PO ; śūnyatārambanena TN ; śūnyetālambanena R ; śūnyatāraṃbanaṃna C 16 bhavitavyam] em.; bhavitavyaṃ POTCN ; bhatavyaṃ R 16 eveti] POTCN ; evati R

tenāvidyamānasvarūpeṇa naivābhāvo naiva bhāvo nirvāṇam iti gṛhyate |[1] sarvaprapañcātītarūpatvāj jñānasyeti |[2] tasmān na kenacin nirvāṇaṃ naivābhāvo naiva bhāva iti vyajyate |[3] anajyamānam aprakāśyamānam agṛhyamāṇaṃ tad evam astīti na yujyate ||[4] O105a5, L534, R100a6

sarvathā [5] yathā ca nirvāṇe etāś catasraḥ kalpanā na sambhavanti |[6] evaṃ nirvāṇādhigantary api tathāgate etāḥ kalpanā naiva sambhavantīti pratipādayann āha |[7] P76b6, R100a7

paraṃ nirodhād bhagavān bhavatīty eva nājyate |[8] O105a6

na bhavaty ubhayaṃ ceti [9] nobhayaṃ ceti nājyate ||[10] MMK 25.17 R100a8

uktaṃ hi pūrvam |[11]

ghanagrāho gṛhītas tu yenāstīti tathāgataḥ |[12]
nāstīti vā vikalpaṃ sa nirvṛtasya vikalpayet ||[13,a]MMK 22.13

iti |[14] evaṃ tāvat paraṃ nirodhād bhavati [15] tathāgato na bhavati ceti nājyate |[16] etad dvayasyābhāvād ubhayam ity api nājyate |[17] ubhayasyābhāvād eva [18] nobhayam iti [19] nājyate |[20] na ca gṛhyate ||[21] P76b7, R100a9 O105a7

na ca kevalaṃ paraṃ nirodhāc caturbhiḥ prakārair bhagavān nājyate |[22] api ca |[23] R100a10

tiṣṭhamāno 'pi bhagavān bhavatīty eva nājyate |[24]
na bhavaty ubhayaṃ ceti nobhayaṃ ceti nājyate || MMK 25.18

---

[a]cf. yena grāho gṛhītas tu ghano 'stīti tathāgataḥ | nāstīti sa vikalpayan nirvṛtasyāpi kalpayet || LVP, Chap.23, p.447. Mss of 22.13 read as follows. ø gṛ··tas tu ghanāstīti tathāgataḥ | nāstīti vā vikalpaya a nirvṛttasyāpi kalpayet || O86b3-4 ; ghanagrāho gṛhītas tu yenāstīti tathāgataḥ | nāstīti vā vikalpayan nirvṛtasyāpi kalpayet || R81b7 ; yena grāho gṛhītas tu yenāstīti tathāgataḥ | nāstīti vā vikalpayan nirvṛtasyāpi kalpayet || T177a5-6,C129b7-8,N151a6-7 ; gang gis di bzhin shegs yod ces || 'jin pa stug pos gzung gyur pa || de ni mya ngan 'das pa la || med ces rnam rtog rtog par byed || PsPT22.13. See translation notes.

---

[1]|] P ; om. ORTCN [2]|] PO ; || RTC ; om. N [3]|] PO ; || RTC ; om. N [4]||] RTCN ; | P ; om. O [5]PON ; | add. RT ; || add. C [6]|] P ; om. ORTCN [7]|] PR ; ø O ; || TCN [8]|] POR ; || TCN [9]PORTC ; | add. N [10]||] PRTC ; | ON [11]|] ORN ; om. PT ; || C [12]|] POTN ; om. R ; || C [13]||] em.; om. PRTCN ; ø O [14]|] PO ; || RTCN [15]PT ; ø O ; | add. RN ; || add. C [16]|] PN ; ø O ; om. R ; || TC [17]|] PN ; ø O ; || RTC [18]ORTCN ; | add. P [19]POR ; || add. TC ; | add. N [20]|] P ; om. ORTCN [21]||] RTC ; | PO ; om. N [22]|] POR ; || TCN [23]|] P ; ø O ; om. RTCN [24]|] PN ; ø O ; || RTC

---

1 tenāvidyamānasvarūpeṇa naivābhāvo] PRTCN ; tenāvidyamānasvarūpeṇaivābhāvo O 1 naiva bhāvo] POTCN ; om. R 1 °rūpatvāj] em.; °rūpatvāt PN ; øpatvā O ; °rūpatvā RTC 2 vyajyate] PO ; ajyate RTC ; ahyate N 2 anajyamānam] PORC ; anahyamānam TN 3 °mānam] PTCN ; °mānasy O ; °mānen R 4 ca] RTCN ; ·a O ; om. P 4 sambhavanti] P ; sambhavaty O ; saṃbhavaṃ R ; saṃbhavaty TCN 4 evaṃ] POTCN ; bhāvaṃ R 4 api] POR ; epi TN ; evi C 5 tathāgate] PRTCN ; tathāgatena O 5 naiva] ORTCN ; na P 5 sambhavantīti] O ; saṃbhavaṃtīti R ; sambhavaṃtīti T ; saṃbhavantīti CN ; sambhavatīti P 7 nobhayaṃ ceti] OTCN ; nobhayaṃ veti P ; om. R 10 vā] PTCN ; ø O ; cā R 10 vikalpaṃ] P ; viø O ; kalpayana R ; kalpayan TCN ; rnam rtog PsPT 10 nirvṛtasya] PTCN ; ø O ; nirvatasya R 10 vikalpayet] em.; vikalpayed PTCN ; ø O ; vikalpayed R 11 etad] em.; etat P ; ø O ; eta RTCN 12 ubhayam] PTCN ; uø O ; ubheyam R 12 ca] P ; om. ORTCN 14 paraṃ] POCN ; paran T ; pare R 14 nirodhāc] POTN ; nirodhāś R ; nirodhā C 14 ca] P ; ø O ; cā RTCN 15 tiṣṭhamāno] PRN ; ø O ; tiṣṭamāno TC 16 ceti] ORTCN ; veti P 16 ceti] RTCN ; veti P ; ø O

L535,N185b, R100a11 yathā ca nājyate tathā tathāgataparīkṣāyāṃ pratipāditam |[1] ata eva |[2]

P76b8, T216b na saṃsārasya nirvāṇāt kiñcid asti viśeṣaṇam |[3]

O105b1 na nirvāṇasya saṃsārāt kiñcid asti viśeṣaṇam ||[4] MMK 25.19

R100a12, C160a yasmāt tiṣṭhann api bhagavān bhavatīty evamādinā nājyate |[5] parinirvṛto 'pi nājyate [6] bhavatīty evamādinā |[7] ata eva saṃsāranirvāṇayoḥ [8] parasparato nāsti kaścid viśeṣo vicāryamāṇayos tulyarū-

R100a13 patvāt |[9] yac cāpīdam uktaṃ bhagavatā |[10]

P76b9 anavarāgro hi bhikṣavo jātijarāmaraṇasaṃsāraḥ ||[11,a]

O105b2 iti |[12] tad apy ata evopapannaṃ |[13] saṃsāranirvāṇayor viśeṣasyābhāvāt |[14] tathā hi |[15]

R100b1 nirvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca |[16]

na tayor antaraṃ kiñcit susūkṣmam api vidyate ||[17] MMK 25.20

T217a, R100b2, P77a1 na ca kevalaṃ saṃsārasya nirvāṇenāviśiṣṭatvāt [18] pūrvāparakoṭikalpanā na sambhavati |[19] yā apy etāḥ |[20]

L536 paraṃ nirodhād antādyāḥ śāśvatādyāś ca dṛṣṭayaḥ |[21]

O105b3 nirvāṇam aparāntaṃ[b] ca pūrvāntaṃ ca samāśritāḥ ||[22] MMK 25.21

R100b3 tā apy ata eva nopapadyante |[23] saṃsāranirvāṇayor ubhayor api prakṛtiśāntatvenaikarasatvāt |[24]

[a]cf.DA XV ; SN II, p.179, 193 ; III p.141, 151, etc. e.g. anavarāgro bhikshavaḥ saṃsāro 'vidyānivaraṇānāṃ sattvānāṃ tṛishnā-saṃyojanānāṃ tṛishṇārgalabaddhānāṃ dīrgham adhvānaṃ saṃdhāvatāṃ saṃsaratāṃ pūrvā koṭiḥ na prajñāyate duḥkhasya. DA XV(Cowell and Neil, 1886: 197)

[b]**aparāntam** iti saṃsārasya-iti śeṣaḥ | *LṬ

[1]|] R ; om. P ; ø O ; || TCN [2]|] PTC ; ø O ; || R ; om. N [3]|] PR ; ø O ; || TC ; om. N [4]||] PCN ; | ORT [5]|] PON ; || RTC [6]RTCN ; | add. P ; ø O [7]|] PR ; ø O ; || TCN [8]RTCN ; | add. P ; ø O [9]|] PON ; || RTC [10]|] P ; ø O ; om. RTCN [11]||] em.; om. PRTCN ; ø O [12]|] PT ; ø O ; om. R ; || CN [13]|] P ; ø O ; om. RTCN [14]|] ORN ; om. PT ; || C [15]|] R ; om. PTN ; || ○ || O ; || C [16]|] POR ; om. TCN [17]||] PRTC ; ø O ; om. N [18]PO ; | add. RN ; || add. TC [19]|] ORTN ; om. P ; || C [20]|] PTN ; ø O ; om. R ; || C [21]|] PRTN ; ø O ; || C [22]||] PTCN ; | O ; om. R [23]|] P ; om. ON ; || RTC [24]|] PON ; || RTC

1 nājyate] PO ; rājyaṃ na cājyaṃ R ; nājyaṃ na cājyaṃ TN ; nājyaṃ na cākṣyaṃ C 1 pratipāditam] P ; pratipāditaṃ TCN ; ø O ; prattipāditaṃ R 2 kiñcid] C ; kiṃcid PTN ; ø O ; kicid R 4 bhavatīty] POTCN ; bhavatity R 5 parasparato] PRCN ; ø O ; parasparayo T 5 vicāryamāṇayos] P ; vicāryamānayos TC ; vicāryyamānayos N ; ø·····yos O ; nicāryamāṇayos R 7 hi] RTCN ; ø O ; om. P 7 °maraṇasaṃsāraḥ] em.; °maranasaṃsāra R ; °maraṇasaṃsāra TCN ; °maṇasaṃsāra P ; ø O 8 tad] PTCN ; ø O ; ted R 8 ata] PTCN ; ø O ; ate R 8 evopapannaṃ] RTCN ; eva nopapannaṃ P ; ø O ; 'thad pa yin PsPT 8 °nirvāṇayor] ON ; °nirvvāṇayo P ; °nirvāṇayo RTC 9 saṃsaraṇasya] PRTCN ; sasaraṇasya O 10 na] POTCN ; ra R 10 tayor] PTN ; ta(yo)r O ; tayār R 10 susūkṣmam] P ; suśūkṣmam RTN ; su·ūø O ; saśūkṣmam C 11 ca] RTCN ; ø O ; om. P 11 nirvāṇenāviśiṣṭatvāt] PTC ; ø ṇen·viśiṣṭatvāt O ; nervāṇanāviśiṣṭatvāt R ; nirvāṇenāviśiṣṭhatvāt N 14 aparāntaṃ] PCN ; ø ntañ O ; aparānta RT 14 pūrvāntaṃ] RCN ; pūrvāntañ P ; pūrvāntañ O ; pūrvānta T 15 ata] OR ; eta PTN ; e C 15 nopapadyante] POT ; nopapadyaṃte CN ; nāpapadyate R 15 ubhayor] POTCN ; ubhabhayor R

tatra paraṃ nirodhād ity anenopalakṣaṇena catasro dṛṣṭayaḥ parigṛhyante |[1] tad yathā bhavati [2] tathāgataḥ [3] paraṃ maraṇāt |[4] na bhavati tathāgataḥ [5] paraṃ maraṇāt |[6] bhavati ca na bhavati ca tathāgataḥ R100b4, P77a2
[7] paraṃ maraṇāt |[8] naiva bhavati na na bhavati tathāgataḥ [9] paraṃ maraṇād iti |[10] etāś catasro dṛṣṭayo O105b4
nirvāṇaparāmarśeṇa pravṛttāḥ ||[11] R100b5

antādyā api catasro dṛṣṭayaḥ |[12] tad yathā |[13] antavān loko 'nantavān loko [14] 'ntavāṃś cānanta- N186a
vāṃś ca naivāntavān nānantavān loka iti |[15] etāś catasro dṛṣṭayo 'parāntaṃ samāśritya pravṛttāḥ ||[16] R100b6
tatrātmano lokasya cānāgatam utpādam apaśyann antavān [17] loka ity evaṃ kalpayann [18] aparāntam O105b5, P77a3
ālambya pravartate |[19] evam anāgatam utpādaṃ paśyann anantavān loka iti pravartate |[20] paśyaṃś R100b7, C160b
cāpaśyaṃś cobhayathā pratipadyate |[21] dvayapratiṣedhena naivāntavān nānantavān iti pratipadyate
||[22]

śāśvato loko 'śāśvato lokaḥ [23] śāśvataś cāśāśvataś ca naiva śāśvato naivāśāśvato loka ity etāś R100b8, T217b, O105b6
catasro dṛṣṭayaḥ [24] pūrvāntaṃ samāśritya pravartante |[25] tatrātmano lokasya cātītam utpādam P77a4
apaśyan [26] śāśvato loka iti prapadyate |[27] paśyann aśāśvata iti pratipadyate |[28] paśyaṃś cāpaśyaṃś R100b9
ca śāśvataś cāśāśvataś ceti pratipadyate |[29] naiva paśyan nāpaśyan naiva śāśvato nāśāśvataś ceti R100b10
pratipadyate |[30] pūrvāntam āśritya ||[31]

tāś caitā dṛṣṭayaḥ [32] kathaṃ yujyante |[33] yadi kasyacit padārthasya kaścit svabhāvo bhavet tasya L537, O105b7
bhāvābhāvakalpanāt [34] syur etā dṛṣṭayaḥ |[35] yadā tu saṃsāranirvāṇayor aviśeṣaḥ pratipāditaḥ |[36] tadā R100b11, P77a5
|[37]

śūnyeṣu sarvadharmeṣu kim antaṃ kim anantavat |[38]

---

[1]|] POR ; || TCN [2]ORTCN ; | add. P [3]ORTCN ; | add. P [4]|] PON ; || RTC [5]ORTN ; | add. P ; || add. C [6]|] PON ; om. R ; || TC [7]RTCN ; | add. P ; ø O [8]|] PR ; ø O ; || TCN [9]ORTN ; | add. P ; || add. C [10]|] PR ; om. O ; || TCN [11]|| TC ; | PON ; om. R [12]|] O ; om. PR ; || TCN [13]|] OR ; om. P ; || TCN [14]PRTCN ; | add. O [15]|] PO ; || RTCN [16]||] RTCN ; | P ; om. O [17]PORCN ; || add. T [18]PO ; || add. RTC ; | add. N [19]|] PORN ; || TC [20]|] POR ; || TCN [21]|] PON ; || RTC [22]||] RTCN ; | PO [23]POT ; | add. RN ; || add. C [24]POT ; || add. RC ; | add. N [25]|] POR ; || T ; om. CN [26]PORCN ; || add. T [27]|] POR ; || TCN [28]|] PORN ; || TC [29]|] POR ; || TCN [30]|] PRN ; om. O ; || TC [31]||] em.; om. PORTCN [32]PO ; || add. RTC ; | add. N [33]|] POC ; om. RN ; || T [34]PO ; | add. RN ; || add. TC [35]|] PO ; || RTC ; om. N [36]|] em.; om. PORTCN [37]|] P ; || ○ || O ; om. RTCN [38]|] PON ; || RTC

---

1 anenopalakṣaṇena] PTCN ; anenālakṣa·e··O ; enenopalakṣaṇena R 1 catasro] PTN ; cataśro R ; ø O ; catamro C 2 paraṃ] RC ; param P ; para(ṃ) O ; paraṃ maraṃ T ; para N 2 ca] PORTN ; va C 3 paraṃ] PRTC ; ø O ; para N 3 etāś] PRTCN ; evāś O 3 catasro] PO ; cataśrā R ; catasrā TCN 3 dṛṣṭayo] PRTCN ; dṛṣṭayor O 4 °parāmarśeṇa] em.; °parāmarṣeṇa ORTCN ; °prarāmarśena P 5 antādyā] POR ; antādyo TCN 5 catasro] PO ; cataśrā R ; ca TCN 5 loko] PRTCN ; om. O ; 'jig rten PsPT 5 'nantavān loko] R ; 'nanta loko P ; nā'ntavān O ; om. TCN ; 'jig rten mtha' dang mi ldan no || PsPT 5 'ntavāṃś] P ; antavāṃś O ; 'nantavāṃś RTC ; 'naṃtavāṃś N 6 nānantavān] PRTC ; nānaṃtavān N ; nāntavān O 6 catasro] POTCN ; cataśrā R 7 cānāgatam] PR ; cā(nā)g·ø O ; vānāgatam TCN 7 kalpayann] P ; kalpayan ORTN ; kalpayen C 7 aparāntam] POTCN ; aparāntem R 8 ālambya] POT ; ālabya R ; ālapya CN 8 paśyann] P ; paśyan RTCN ; paśyana O 8 paśyaṃś] ORCN ; paśyǎś P ; paśyaś T 9 dvayapratiṣedhena naivāntavān] RTCN ; dvayapratiṣedhena naivāntavā·O ; dvayapratiṣedhenaivāntavān P 9 nānantavān] PT ; ø·ān O ; nānantavām R ; vānantavān C ; ānaṃtavān N 11 śāśvataś] PORTN ; śvāśvataś C 11 naivāśāśvato] ORTCN ; nāśāśvato P 12 samāśritya] PORCN ; pūrvāntaṃ ° add. T 12 pravartante] em.; pravarttante P ; pravarttamte O ; pravarttate RTCN 12 utpādam] PO ; utpādaṃ RTN ; utpāda C 13 apaśyan] PO ; paśyan RTCN ; mthong bas PsPT 13 paśyann] P ; paśyana O ; apaśyann RTCN ;ma mthong bas PsPT 13 paśyaṃś] OTCN ; paśyǎś P ; paśyaś R 14 śāśvataś cāśāśvataś] PR ; ·āsvata·cā····O ; śāśvaścataś T ; śāścataś C ; śāśvataś N 14 naiva paśyan] PRTCN ; naivāpaśyana O 14 nāpaśyan] P ; na nāpaśyan O ; naivāpaśyan RTCN 14 nāśāśvataś] ORTCN ; nāśaśvataś P 15 pūrvāntam] ORTN ; pūrvvāntam P ; purvāntam C 15 āśritya] PRTCN ; āśrityā O 16 tāś] PRTCN ; taś O 16 svabhāvo] POTCN ; svabhāvā R 19 anantavat] POTC ; anaṃtavat N ; anantavet R

kim antavac cānantaṃ ca nānantaṃ nāntavac ca kim ||[1] MMK 25.22

R100b12 kiṃ tad eva kim anyat kiṃ śāśvataṃ kim aśāśvatam |[2]

N186b, O106a1 aśāśvataṃ śāśvataṃ ca kiṃ vā nobhayam apy atha ||[3] MMK 25.23

R100b13 caturdaśāpy etāny avyākṛtavastūni |[4] asati bhāvasvarūpe naiva yujyante |[5] yas tu bhāvasva-
P77a6 rūpam adhyāropya tadvigamāvigamata etā dṛṣṭīr utpādyābhiniviśate |[6] tasyāyam abhiniveśo
R101a1 nirvāṇapuragāminaṃ panthānaṃ viruṇaddhi |[7] sāṃsārikeṣu ca duḥkheṣu niyojayatīti vijñeyam ||[8]
O106a2, T218a atrāha |[9] yady evaṃ bhavatā nirvāṇam api pratiṣiddham |[10] nanu ca ya eṣa bhagavatānantacaritasa-
R101a2, C161a ttvarāśyanuvartakena viditāviparītasakalajagadāśayasvabhāvena mahākaruṇāparatantreṇa priyaikapu-
P77a7 trakapremānugatāśeṣatribhuvanajanena caritapratipakṣānurūpo dharmo deśito lokasya nirvāṇādhiga-
R101a3 mārtham |[11] sa evaṃ sati vyarthaka eva jāyate ||[12] ucyate |[13] yadi kaścid dharmo nāma
O106a3,L538 svabhāvarūpataḥ syāt |[14] kecic ca sattvās tasya dharmasya śrotāraḥ syuḥ |[15] kaścid vā deśayitā
R101a4 buddho bhagavān nāma bhāvasvabhāvataḥ syāt |[16] tadā syād etad evam ||[17] yadā tu |[18]

sarvopalambhopaśamaḥ prapañcopaśamaḥ śivaḥ |[19]
na kvacit kasyacit [20] kaścid dharmo buddhena deśitaḥ ||[21] MMK 25.24

P77a8, R101a5, O106a4 tadā kuto 'smākaṃ yathoktadoṣaprasaṅgaḥ |[22] iha sarveṣāṃ prapañcānāṃ nimittānāṃ yad upaśamo
'pravṛttis tan nirvāṇam |[23] sa eva copaśamaḥ [24] prakṛtyaivopaśāntatvāc chivaḥ |[25] vācām apravṛtter
R101a6, N187a vā prapañcopaśamaḥ |[26] cittasyāpravṛtteḥ [27] śivaḥ |[28] kleśānām apravṛtter vā prapañcopaśamo

[1] ||] PRTC ; || ○ || O ; | N [2] |] PORN ; || TC [3] ||] PRTC ; | ON [4] |] PORN ; || TC [5] |] PORN ; || TC [6] |] P ; om. ORTCN [7] |] PO ; om. RTCN [8] ||] RTCN ; | PO [9] |] OC ; om. P ; || RTN [10] |] ORN ; om. P ; || TC [11] |] P ; om. ORTCN [12] ||] TCN ; | POR [13] |] PO ; || RTCN [14] |] RN ; om. PO ; || TC [15] |] em.; om. PORTCN [16] |] em.; om. PORTCN [17] ||] em.; om. PORTCN [18] |] P ; || ○ || O ; || RTC ; om. N [19] |] POTN ; om. R ; || C [20] PON ; || add. RT ; | add. C [21] ||] PTC ; | ORN [22] |] PORN ; || TC [23] |] em.; om. PORTCN [24] O ; | add. PRT ; || add. CN [25] |] PON ; || RTC [26] |] P ; om. ORTCN [27] ORTCN ; | add. P [28] |] PO ; om. RTCN

1 kim antavac ° ca kim] em.; kim antavac cānantañ ca nānantaṃ nāntavac ca kiṃ P ; kim anantavac cānantaṃ nāntavac ca kiṃ O ; kim anantavad yānantaṃ nācāntaṃ nāntavac ca kiṃ R ; kim anantavac cānantaṃ nāntaṃ nāntavac ca kiṃ TCN 2 anyat] PRTCN ; anyata O 2 kiṃ] ORTCN ; ki P 2 śāśvataṃ] POTCN ; śvāśvataṃ R 3 vā] PO ; cā R ; vo T ; co C ; ca N 3 atha] POR ; aca TCN 4 °vastūni] PORN ; °vastūti TC 4 °svarūpe] POTCN ; °svarūpye R 5 adhyāropya] POTCN ; adhyārāpya R 5 tadvigamāvigamata] P ; tadvigamāvigata O ; tadvigamādhigata RTCN 5 etā] POR ; evā TCN 5 dṛṣṭīr] PRTCN ; dṛṣṭār O 5 utpādyābhiniviśate] PRN ; ūtpādyābhiniviśate O ; utpādyābhiniveśate TC 6 °puragāminaṃ] ORTCN ; °gāminaṃ P 6 panthānaṃ] PON ; patthānaṃ RTC 6 viruṇaddhi] OR ; ruṇaddhi P ; viruṇarddhi TCN 6 sāṃsārikeṣu] PO ; saṃsārikeṣu RTCN 7 atrāha] ORTCN ; om. P 7 yady ° pratiṣidham] em.; yady ° pratiṣiddhaṃ ORTCN ; om. P 7–8 °caritasattva°] em.; °caritasatva° PORTN ; °caritasatvaḥ° C 8 °āśayasvabhāvena] POTCN ; °āṇayasvabhāvena R 8 °paratantreṇa] PRTC ; °paratantraiṇa O ; °paratatreṇa N 8 priyaika°] PRTCN ; priyeka° O 9 °tribhuvanajanena] ORTN ; °tribhuvajanena P ; °tribhuvamajanena C 9 °pratipakṣānurūpo] PTN ; °pratipak··urūpo O ; °pratiyakṣā arūpo R ; °pratiyakṣārūpo C 9–10 nirvāṇādhigamārtham] em.; nirvvāṇādhigamārthaṃ P ; nirvāṇādhigamārthaṃ ORCN ; nirvāṇādhigamārtha T 10 vyarthaka] P ; vyartha ORTCN 10 dharmo] POTCN ; dharmā R 11 svabhāvarūpataḥ] ORTCN ; svarūpataḥ P 11 deśayitā] PORN ; deyitā TC 12 °svabhāvataḥ] PO ; °svabhāvaḥ RTCN 12 tadā syād] POR ; om. TCN 12 yadā] PORTN ; ya C 13 sarvopalambhopaśamaḥ] O ; sarvvopalambhopaśamaḥ P ; sarvopalaṃbhopaśamaḥ R ; parvopalambhopaśamaḥ T ; parvopalaṃbhopaśamaḥ C ; pūrvopalaṃbhopaśamaḥ N 13 prapañcopaśamaḥ] O ; prapaṃcopaśamaḥ PTCN ; prapaṃcāpaśamaḥ R 14 kvacit] POTCN ; kvaścit R 15 sarveṣāṃ] OTCN ; sarvveṣāṃ P ; sarvaṣāṃ R 15 yad] OR ; ya PTCN 16 prakṛtyaivopaśāntatvāc] POT ; prakṛtyecopaśāntatvāc R ; prakṛtvaivopaśāntatvāc C ; prakṛtvaivopaśāṃtatvāc N 17 apravṛtter] P ; apravṛttyā ORTCN 17 prapañcopaśamo] PON ; prapaṃcāpraśamo R ; prapacopaśamo TC

janmāpravṛttyā vā [1] śivaḥ |[2] kleśaprahāṇena vā [3] prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena vā P77b1
śivaḥ |[4] jñeyānupalabdhyā vā prapañcopaśamaḥ |[5] jñānānupalabdhyā śivaḥ ||[6] yadā caivaṃ buddhā R101a7, O106a5
bhagavantaḥ [7] sarvaprapañcopaśāntarūpe nirvāṇe śive 'sthānayogena sthitā nabhasīva haṃsarājāno T218b
sthitāḥ [8] svapuṇyajñānasambhārapakṣapātavāte[a] |[9] vātaś ca gagane gaganasyākiñcanatvāt |[10] tadā R101a8, P77b2
5 sarvanimittānupalambhān na kvacid deveṣu vā manuṣyeṣu vā na kasyacid devasya vā manuṣyasya L539, R101a9
vā na kaścid dharmaḥ [11] sāṅkleśiko vā vaiyavadāniko vā deśita iti [12] vijñeyam ||[13] O106a6
yathoktam āryatathāgataguhyasūtre |[14]

yāṃ ca rātriṃ śāntamate [15] tathāgato 'nuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ R101a10
|[16] yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati |[17] atrāntare tathāgatenaikam apy akṣaraṃ
10 nodāhṛtaṃ [18] nāpi pravyāharati [19] nāpi vyāhariṣyati |[20] atha ca yathādhimuktāḥ sa- P77b3,C161b, R101a11
rvasattvā nānādhātvāśayās tāṃs tāṃ vividhāṃ tathāgatavācaṃ niścarantīṃ sañjānanti O106a7
|[21] teṣām evaṃ pṛthak pṛthag bhavati |[22] ayaṃ bhagavān asmabhyam amuṃ dharmaṃ R101a12
deśayati |[23] vayaṃ ca tathāgatasya dharmadeśanāṃ śṛṇumaḥ |[24] tatra tathāgato na ka-
lpayati [25] na vikalpayati |[26] sarvakalpavikalpajālavāsanāprapañcavigato hi śāntamate O106b1,R101a13
15 tathāgataḥ ||[27,b] TG P77b4

[a]tatra **pakṣapādatapāte** pakṣiṇaḥ santi | *LṬ
[b]Shāstri (1917: 17-21); 西晋竺法護譯『大寶積經』巻十「密迹金剛力士会」(T310.11.55c6-16); 宋法護譯『佛説如来不思議秘密大乗經』巻七「如来語密不思議品」(T312.11.719b21-c3). cf. yāṃ ca rātriṃ tathāgato 'bhisaṃbuddho yāṃ

[1]ORTCN ; | add. P [2]|] O ; om. PN ; || RTC [3]ORTCN ; | add. P [4]|] OTN ; om. P ; || RC [5]|] P ; ø O ; om. RTCN [6]||] RTC ; | PON [7]PORT ; || add. C ; | add. N [8]OR ; | add. PN ; || add. TC [9]|] P ; om. ORTCN [10]|] em.; om. PORTCN [11]PRTCN ; | add. O [12]PORN ; | add. T ; || add. C [13]||] TN ; | PRC ; || ○ || O [14]|] POR ; || TCN [15]PR ; ø O ; || add. TCN [16]|] em.; om. PRTCN ; ø O [17]|] POR ; || TCN [18]PORTN ; || add. C [19]RTCN ; | add. P ; ø O [20]|] PR ; ø O ; || TCN [21]|] PRN ; ø O ; || TC [22]|] P ; ø O ; || RTCN [23]|] PRN ; ø O ; || TC [24]|] PN ; ø O ; || RTC [25]RN ; | add. P ; ø O ; || add. TC [26]|] PN ; ø O ; om. R ; || TC [27]||] em.; om. PORTCN

1 janmāpravṛttyā] PO ; janmāpravṛtyā N ; jatmāpravṛttyā R ; janmopravṛttyā T ; janmāpravṛtyā C 1 prapañcopaśamo] PO ; prapaṃcopaśamo TCN ; prapaṃcāpaśamo R 1 vā] ORTCN ; ° | prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena vā add. P 2 jñeyānupalabdhyā] PORCN ; jñeyānupalabdhā T 2 prapañcopaśamaḥ] P ; prapaṃcopaśamo TCN ; prapañcoø O ; prapaṃcopaśamā R 2 jñānānupalabdhyā] PR ; ønupalabdhyā O ; jñānonupalabdhyā TCN 2 caivaṃ] PORCN ; caiva T 2 buddhā] PORCN ; buddho T 3 sarvaprapañcopaśāntarūpe] O ; sarvaprapaṃcopaśāntarūpe TCN ; sarvvaprapañcopaśamaśāntarūpe P ; sarvaprapaṃcāpaśāntarūpye R 3 śive] OTCN ; śivo P ; śiva R 3 °yogena] POTC ; °yogema R ; °yogana N 3 sthitā nabhasīva] P ; sthito nabhasīva O ; nabhasīva RCN ; nabhasī T 3 °rājāno] P ; °rājānaḥ R ; °rājānāḥ O ; °rānaḥ TCN 4 sthitāḥ] ORTCN ; 'sthitāḥ P ; gnas pa PsPT 4 °pakṣapātavāte] P ; °·····ā··vāte O ; °yakṣayātavāte R ; °pakṣayotavāte TCN 4 gaganasyākiñcanatvāt] em.; gaganasyākiṃcanatvāt RTCN ; gaganaṃ cākiṃcanatvāt P ; gaganasyākiñcinatvāt O 5 vā] PORTN ; cā C 5 manuṣyeṣu] PORTC ; manaṣyeṣu N 6 sāṅkleśiko] em.; sāṃkleśiko POTCN ; sāṃkleśikāṃ R 6 vaiyavadāniko] POTCN ; cayavadānikā R 7 yathoktam] POTCN ; yathāktam R 8 tathāgato] PTCN ; ·a·āga·o O ; tathāgatā R 8 'nuttarāṃ] P ; nuttarāṃ RN ; ···āṃ O ; nuttarāyāṃ T ; nuntarāṃ C 9 anupādāya] P ; upādāya ORTCN ; len pa mi mnga' bar PsPT 9 atrāntare] PRTN ; atrāø O ; amrāntare C 9 akṣaraṃ] PR ; ø O ; akṣayaṃ TCN 10 nodāhṛtaṃ] PR ; n·pravyāhṛtaṃ O ; ° na vyāhṛtaṃ add. TCN 10 pravyāharati] RCN ; vyāharati P ; ø O ; pravyāhārati T 10 vyāhariṣyati] P ; ø O ; pravyāhariṣyati RCN ; pravyāharati T 10–15 atha ca ° tathāgataḥ] om. PsPT 11 nānādhātvāśayās] PRTCN ; nānā··yadhātvāśayāṃs O 11 tāṃs] R ; tāṃ P ; tā O ; tās TCN 11 vividhāṃ] PRTCN ; vividhātu O 11 niścarantīṃ] P ; nisca···īṃ O ; niścarantīti R ; niścaranti T ; niścarantī CN 11 sañjānanti] em.; saṃjānanti PR ; ··ṃø O ; sajānantī TCN 12 evaṃ] RTCN ; eva P ; ø O 12 asmabhyam] em.; asmadbhyo P ; ø O ; asmabhyāṃ RTC ; asmabhyām N 12 amuṃ] N ; 'mun P ; 'muṃ TC ; ø O ; 'mu R 12 dharmaṃ] CN ; dharmmaṃ P ; dharman T ; ø O ; dharmma R 13 deśayati] PR ; ø O ; darśayati TCN 13 ca] RTCN ; om. P ; ø O 14 °jāla°] PTCN ; ø O ; °jāna° R 14 °vigato] PR ; øto O ; °vigatā TN ; °vigatau C

iti vistaraḥ |[1] tathā |[2]

avāco 'nakṣarāḥ [3] sarve śūnyāḥ śāntādinirmalāḥ |[4]
N187b ya evaṃ jānatī dharmān kumārā buddha socyate ||[5,a] TG

R101b1, T219a iti ||[6] yadi tarhy evaṃ na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ |[7] tatra katham ime 'tivicitrāḥ [8] pravacanavyavahārāḥ prajñāyante ||[9] ucyate |[10] avidyānidrānugatānāṃ dehināṃ 5
O106b2, R101b2 svapnāyamānānām iva svavikalpābhyudaya eṣaḥ |[11] ayaṃ bhagavān sakalatribhuvanasurā-
P77b5 suranaranātha imaṃ dharmam asmabhyaṃ deśayatīti ||[12] yathoktaṃ bhagavatā |[13]

L540 tathāgato hi pratibimbabhūtaḥ [14]
R101b2 kuśalasya dharmasya anāsravasya |[15]
naivātra tathatā na tathāgato 'sti 10
bimbaṃ ca saṃdṛśyati sarvaloke ||[16,b] JĀA II.10.2

O106b3, R101b4 iti |[17] etac ca tathāgatavāgguhyaparivarte vistareṇa vyākhyātam |[18] tataś ca nirvāṇārthaṃ dharma-deśanāyā abhāvāt kuto dharmadeśanānāṃ sadbhāvena nirvāṇasyāstitvaṃ bhaviṣyati |[19] tasmān ni-

ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntare ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtam na pravyāhariṣyati avacanaṃ buddhavacanam iti ... yāṃ ca rātriṃ tathāgato ’bhisaṃbuddho yāṃ ca rātriṃ parinirvāsyati atrāntara ekam apy akṣaraṃ tathāgatena nodāhṛtaṃ nodāhariṣyati || LA Chap.3(南條, 1923: 142-144) ; yasyāṃ ca rātrau tathāgato ’nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbuddho yasyāṃ ca rātrau parinirvṛttaḥ etasminn antare bhagavatāikam apy akṣaraṃ nodāhṛtaṃ na pravyāhṛtam | sadā samāhitāś ca tathāgatā na vitarkayanti na vyavacārayanti | LA Chap.7(南條, 1923: 230)

[a]「是議無文字、而反宣文字、人中尊所作、班宣我當持。」 西晋竺法護譯『大寶積經』巻十四「密迹金剛力士会」(T310.11.79a23); 「諸法本来無文字、無中假以文字説、聖尊悲愍故敷宣、我當受持而流演。」 宋法護譯『佛説如来不思議秘密大乗經』巻二十「嘱累正法品」(T312.11.750b29-c1)

[b]JĀA II.10.2(木村他, 2004b: 54)(木村他, 2004a: 37); 「無漏善法中、無如及如来、依彼善法力、現世如鏡像。」 元魏曇摩流支譯『如来莊嚴智慧光明入一切佛境界經』巻一 (T357.12.242b18-19); n.e. 梁僧伽婆羅譯『度一切諸佛境界智嚴經』; 「如来所成如影像、一切善法皆無漏、一切皆遍佛眞如、三種影像世間現。」 宋法護譯『佛説大乗入諸佛境界智光明莊嚴經』巻二 (T359.12.257a7)

[1]|] PO ; || RTCN [2]|] em.; om. PORTCN [3]POR ; || add. C ; | add. TN [4]|] OTN ; om. PR ; || C [5]||] em.; om. PRTCN ; ø O [6]||] TC ; om. P ; ø O ; | RN [7]|] P ; ø O ; om. RTCN [8]PR ; ø O ; | add. TN ; || add. C [9]||] C ; | PRN ; ø O ; om. T [10]|] PN ; ø O ; || RTC [11]|] PO ; || RTCN [12]||] RTCN ; | P ; om. O [13]|] P ; ø O ; om. RN ; || TC [14]PT ; ø O ; || add. RCN [15]|] PO ; om. RTCN [16]||] em.; om. PRTCN ; ø O [17]|] PR ; ø O ; || TCN [18]|] P ; ø O ; om. R ; || TCN [19]|] PON ; || RTC

2 avāco] em.; 'vāco PO ; 'vācā R ; avoca T ; 'vova C ; 'vocann N 2 sarve] em.; sarvve P ; saø O ; sarva RTCN 3 evaṃ] RTCN ; eva P ; ø O 3 jānatī] PR ; ø O ; jānanti T ; jānantī C ; jānaṃtī N 3 dharmān] R ; dharmmān P ; ø O ; dharmāṇa TCN 3 kumārā] P ; ø O ; akumārā R ; kumāro TCN 3 buddha socyate] em.; buddha socyata PTCN ; ø O ; buddhasyacyata R 4 tarhy] PRN ; ø O ; tahy TC 4 evaṃ] PTCN ; ø O ; avaṃ R 4 na] P ; ø O ; om. RTCN 4 kaścid] CN ; om. PT ; ø O ; kaści R 4 dharmo] TCN ; dharmmo P ; ø O ; dhamī R 4 deśitaḥ] P ; deśitas RN ; ø O ; deśi TC 4 tatra] P ; ø O ; tat RTCN 5 'tivicitrāḥ] PR ; tivicitrāḥ CN ; ø O ; tavicitrāḥ T 5 ucyate] PR ; ø O ; ucyante TCN 6 svapnāyamānānām] RTCN ; svapnāyamānām P ; øm O 6 svavikalpābhyudaya] PORTN ; svavikalpātyudaya C 7 °naranātha] ORCN ; °narā 'tha P ; °nātha T 7 asmabhyaṃ] ORTCN ; asmādbhyo P 7 yathoktaṃ] PTCN ; ya·o··O ; yathāktaṃ R 10 tathatā] PORTC ; tathāgatā N 10 na] PRTCN ; ya O 11 bimbaṃ] CN ; bimbañ PR ; ··b·ñ O ; bimba T 12 °guhyaparivarte] em.; °guhyaparivartte RTCN ; °uhyaparivartta P ; ø O 12 nirvāṇārthaṃ] OCN ; nirvvāṇārthan P ; nirvāṇārthan T ; nirvāṇārtha R 13 abhāvāt] ORTCN ; ābhāvāt P 13 dharma°] TCN ; dharmma° PR ; dharmo° O

rvāṇam api nāstīti siddham ||[1] uktaṃ ca bhagavatā |[2] C162a, P77b6

anirvāṇaṃ hi nirvāṇaṃ lokanāthena deśitam |[3] R101b5
ākāśena[a] kṛto granthir ākāśenaiva mocitaḥ ||[4,b] ACS

iti |[5] tathā |[6]

na teṣāṃ bhagavan buddhotpādo ye kasyacid dharmasya utpādaṃ vā nirodhaṃ ve- O106b4
cchanti |[7] na teṣāṃ bhagavan saṃsārasamatikramo ye nirvāṇaṃ bhāvataḥ paryeṣante R101b6
|[8] tat kasya hetoḥ |[9] nirvāṇam iti bhagavan yaḥ praśamaḥ [10] sarvanimittānām [11]
uparatiḥ [12] sarveñjitasamiñjitānām[c] |[13] tad ime bhagavan mohapuruṣāḥ svākhyāte R101b7, L541, P77b7
dharmavinaye pravrajya tīrthikadṛṣṭau nipatitā nirvāṇaṃ bhāvataḥ [14] paryeṣante |[15] T219b
tad yathā [16] tilebhyas tailaṃ kṣīrāt sarpiḥ |[17] atyantaparinirvṛteṣu bhagavan sarvadha- O106b5, N188a,R101b8
rmeṣu ye nirvāṇaṃ mārganti |[18] tān aham ābhimānikāṃs tīrthikānn iti vadāmi |[19] na
bhagavan yogācāraḥ samyakpratipannaḥ [20] kasyacid dharmasyotpādaṃ vā nirodhaṃ R101b9
vā karoti |[21] nāpi kasyacid dharmasya prāptim icchati nābhisamayam ||[22,d] BVCP

---

[a] **ākāśena** | ākāśasamena tathāgatena | *LṬ

[b] 「世尊所演説、假號名泥洹、喩之若虚空、度於無所有。」 西晋竺法護譯『佛説阿惟越致遮經』巻二「釋果想品」(T266.9.213c14-15); 「涅槃非涅槃、救度於世間、猶如空中結、以空而自解。」 安公涼土異經『不退轉法輪經』巻三「重釋二乘相品」(T267.9.240b27-28); 「自在導世師、不可説而説、於空中作結、即空而解之。」 劉宋智嚴譯『佛説廣博嚴淨不退轉輪經』巻三 (T268.9.270c13-14)

[c] vidhimukhena vikalpapracaro niñjitaṃ | pratiṣedhamukhena-**aniñjitaṃ** | *LṬ ; cf. sarveñjitamananāsyaṃditavikalpāpagato bhavati. DBh(Kondo, 1936: 134-135); sarveñjitamanyasyanditānām VKN(高橋他, 2006: 36)

[d] 西晉竺法護譯『持心梵天所問經』巻一「分別法言品」(T585.15.4c2-13); 姚秦鳩摩羅什譯『思益梵天所問經』巻一「分別品」(T586.15.36c25-37a4); 元魏菩提流支譯『勝思惟梵天所問經』巻一 (T587.15.66c11-21); the critical edition of BVCP$_T$ see Goshima (1981: 31-32).

---

[1] ||] CN ; | PORT [2] |] PR ; ø O ; || TCN [3] |] PON ; om. R ; || TC [4] ||] em.; om. PORTCN [5] |] PO ; || RTCN [6] |] O ; om. PRTCN [7] |] POT ; || RCN [8] |] POR ; || TCN [9] |] em.; om. PORTC ; || N [10] POR ; | add. TN ; || add. C [11] PRTCN ; | add. O [12] PO ; || add. RTC ; | add. N [13] |] em.; om. PORTCN [14] POTCN ; || add. R [15] |] POR ; || TCN [16] PRTC ; ø O ; || add. N [17] |] PON ; || RTC [18] |] RN ; om. POT ; || C [19] |] POR ; || TCN [20] PO ; || add. RTC ; | add. N [21] |] PORN ; || TC [22] ||] em.; om. PORTCN

---

2 nirvāṇaṃ] RCN ; nirvvāṇaṃ P ; ø O ; nirvāṇa T 2 deśitam] em.; deśitaṃ PRTCN ; ceśitaṃ O 3 kṛto] POCN ; kṛtā R ; sthito T 3 granthir] POTCN ; gratthir R 3 ākāśenaiva] RTCN ; ākānaiva P ; ā-ś·naiva O 6 teṣāṃ] RTCN ; teṣām O ; teṣā P 6 paryeṣante] PTC ; paryyeṣante N ; paryeṣyante O ; paryyaṣante R 7 hetoḥ] ON ; heto PRTC 8 uparatiḥ] O ; uparati P ; aparatiḥ R ; urparati TCN 8 sarveñjitasamiñjitānām] em.; sarvveñjitasaniñjitānāṃ O ; sarvve'ñjitasañcitānāṃ P ; savejita anijitānāṃ R ; sarvejita aniṃjitānāṃ TC ; sarvejita anijitānāṃ N ; rnam par rtog pa thams cad 'gags pa PsP$_T$; sarveñjitasaṃmiñjitānāṃ LVP 8 bhagavan] PRTCN ; bhagavana O 8 °puruṣāḥ] RTCN ; °purūṣāḥ P ; °p·ruṣāḥ O 8 svākhyāte] POTCN ; svākhyātaṃ R 9 °vinaye] PO ; °vinaya RTCN 9 pravrajya] PR ; pravarjya ON ; pravajya T ; pravakṣya C 9 nirvāṇaṃ] OR ; nirvvāṇaṃ P ; ni nirvāṇaṃ TCN 9 paryeṣante] PTCN ; paryeṣyante O ; paryaṣante R 10 tilebhyas] PRN ; øbhyas O ; tilebhya TC 10 atyantaparinirvṛteṣu] PRT ; atyantaparinivṛteṣu O ; abhyantaparinirvṛteṣu C ; abhyaṃtaparinirvṛteṣu N 10 bhagavan] PRTCN ; bhagavana O 11 nirvāṇaṃ] RTCN ; nirvvāṇaṃ P ; nirvāṇa O 11 mārganti] RTCN ; mārgganti P ; mārgnanti O 11 ābhimānikāṃs] PR ; abhimāni··O ; ābhimānikās TCN 12 bhagavan] ORN ; bhavan P ; bhagavana TC 12 samyakpratipannaḥ] POTCN ; samyakpratipanna R 12 kasyacid] POTCN ; kasyaci R 12 dharmasyotpādaṃ] TCN ; dharmmasyotpādaṃ P ; dharmasyotpāda O ; dharmmasyātpādaṃ R 12 vā] PRTCN ; om. O 13 nābhisamayam] ORTCN ; nābhisamaya P

iti vistaraḥ ||[1]

P77b8,O106b6, R101b10 ācāryacandrakīrtipādoparacitāyāṃ prasannapadāyāṃ madhyamakavṛttau nirvāṇaparīkṣā nāma pañcaviṃśatitamaṃ prakaraṇam ||

[1] ||] R ; | P ; || ○ || O ; || || TCN

2 ācārya°] ORC ; ity ācārya° T ; ācāryya° N ; ārcārya° P 2 °pādoparacitāyāṃ] POTCN ; °pādāparacitāyāṃ R 2 °padāyāṃ] POTCN ; °pradāyāṃ R 2 madhyamaka°] OTCN ; madhyaka° P ; sadhyamaka° R 2 °parīkṣā] POTCN ; °parākṣā R

第 7 章

Tibetan Critical Edition

7.1 Introduction

In preparing this critical edition of Tibetan translation of PsP Chap.25, the following five editions are used.

abbr.	Catalogue Number
D	sDe dge edition, 東北 No.3860, dbu ma, ’a 173a7-182a6
C	Co ne edition, No.3826, dbu ma, ’a 171a1-179b4
P	Peking edition, 大谷 No.5260, dbu ma, ’a 196a5-206a2
N	sNar thang edition, No.4033, dbu ma, ’a 196a3-206a7
G	Golden edition, No.3259, dbu ma, ’a 242b6-255a3

7.2 Editorial Policy

1. sDe dge edition is used as the basic text.
2. The **bsdu yig**s occurred in N and G editions are not recorded in the critical notes.
3. In prose, the different uses of ’*ang* or ’*am* after **mtha’ med** words are not recorded.
4. The indistinct uses of *p* and *b*, *d* and *ng* are not recorded.

7.3 Sigla and Abbreviations

om. omitted
add. added
ill. illegible

7.4 The Critical Edition of the Tibetan Translation of *Prasannapadā* Chap.25

[D173a7,C171a1,P196a5,N196a3,G242b6]

’dir smras pa |

gal te ’di dag kun stong na ||
’byung ba med cing ’jig pa med ||
gang zhig spong dang ’gog[1] pa (G243a) las ||
mya ngan ’da’ bar ’gyur bar ’dod || MMK 25.1

’di na bcom ldan ’das (D173b1) kyis gang zag tshangs par spyod pa bsten zhing | de bzhin gshegs pa’i bstan pa la zhugs pa chos kyi[2] rjes su mthun pa’i chos kyi nan tan dang ldan pa rnams la | mya ngan las ’das pa rnam pa gnyis su[3] gsungs te | phung po lhag ma dang bcas pa dang | phung po lhag ma med pa’o ||

(D173b2) de la ma rig[4] pa dang ’dod chags la sogs pa nyon mongs pa’i tshogs ma lus par spangs pa las phung po lhag ma dang bcas pa’i mya ngan las ’das par ’dod do || de la ’di la bdag la chags pa la[5] bsten pas na phung po ste | bdag tu gdags pa’i rgyu nye bar len pa’i phung po (D173b3) lnga la phung po’i sgras (P196b) brjod do || lhag ma lus pas na lhag ma’o || phung po nyid lhag ma yin pas na phung po lhag ma’o || phung po lhag ma dang lhan cig gnas pas na phung po lhag ma dang bcas pa’o || de ci yin zhe na | mya ngan las ’das pa’o || de yang chom rkun gyi tshogs (D173b4) ma lus par bsad de grong[6] tsam ’dug pa dang chos mthun par ’jig tshogs la lta ba la sogs pa nyon mongs pa’i chom rkun dang bral (N196b) ba phung po tsam ’ba’ zhig lus pa ste | de ni phung po lhag ma dang bcas pa’i mya ngan las ’das pa’o ||

chom rkun gyi tshogs ma lus par bsad (D173b5) de grong tsam po yang zhig pa dang chos mtshungs par [7] mya ngan las ’das pa gang la phung po tsam yang yod pa ma yin pa de ni phung po lhag ma med pa’i mya ngan las ’das pa ste | ’di phung po’i lhag ma dang bral ba’i phyir ro || de nyid kyi (G243b) dbang du mdzad nas |

gang na lus zhig ’du shes (D173b6) ’gags[8] ||
tshor ba thams cad bral gyur zhing ||
’du byed nye bar zhi ba dang ||
rnam par shes pa nub gyur pa ||[9] UP 8.9

zhes bya ba dang | de bzhin du |[10]

---

[1] ’gog] DC; ’gag PNG [2] kyi] PNG; om. DC [3] su] DC; om. PNG [4] rig] DCPG; rigs N [5] la] PNG; om. DC [6] grong] PNG; grang DC [7] DC; | add. PNG [8] ’gags] DC; ’gal P; ’gag NG [9] ||] CG; | DPN [10] |] DC; PNG om.

ma zhum pa yi[1] lus kyis ni ||
tshor ba dang du len pa na ||
de yi sems ni rnam par grol ||
mar me shi bar gyur pa bzhin || MP 44.11

(D173b7) zhes bshad do || de'i phyir phung po lhag ma med[2] pa'i mya ngan las 'das pa de ni phung po 'gags pa (C171b) las 'thob bo ||

mya ngan las 'das pa rnam pa gnyis po de[3] ji ltar rung bar 'gyur zhe na | gal te nyon mongs pa rnams dang phung po rnams 'gags par gyur pa yin na[4] | gang (D174a1) gi tshe 'di dag thams cad stong pa yin zhing | cung zad kyang skye ba med la cung zad kyang 'gag pa yang med pa de'i tshe | gang dag 'gags[5] pa las mya ngan las 'da' bar 'gyur ba |[6] nyon mongs pa 'am[7] phung po rnams yod par ga la 'gyur | de'i phyir dngos po (D174a2) rnams kyi rang bzhin yod pa nyid do zhes 'dzer to ||

brjod par bya ste | de ltar rang bzhin khas len na yang |

gal te 'di kun mi stong na ||
'byung ba med cing 'jig pa med[8] ||
gang zhig spong dang (P197a) 'gags[9] pa las ||
mya ngan 'das par 'gyur bar 'dod || MMK 25.2

gang las de dag log (D174a3) pas mya ngan las[10] 'da' bar 'gyur ba | nyon mongs pa rnams dang phung po rang bzhin gyis rnam par gnas pa rnams[11] ldog par ga la 'gyur te | rang bzhin la ldog pa med pa'i phyir ro || de'i phyir rang bzhin dang bcas par smra ba la mya ngan las 'das pa (N197a) mi 'thad pa nyid do || gang las (D174a4) de dag la nyes pa 'dir 'gyur ba | stong pa nyid du smra ba rnams kyis ni mya ngan las 'das pa (G244a) nyon mongs pa ldog pa'i mtshan nyid can nam [12] phung po ldog pa'i mtshan nyid can 'dod pa ma yin no || de'i phyir stong pa nyid du smra ba rnams la klan ka 'dir mi 'gyur ba nyid do ||

gal te stong pa (D174a5) nyid du smra ba rnams mya ngan las 'das pa phung po rnams sam | nyon mongs pa rnams log pa'i mtshan nyid can mi 'dod na | mtshan nyid gang dang ldan pa zhig 'dod ce na | brjod pa |

spangs pa med pa 'thob med pa ||
chad pa med pa rtag med pa ||
'gag pa med pa skye med (D174a6) pa ||
de ni mya ngan 'das par brjod || MMK 25.3

gang zhig 'dod chags la sogs pa ltar spangs pa med cing | dge sbyong gi 'bras bu ltar 'thob pa med pa | phung po la sogs pa ltar chad pa yang med la | gang yang mi stong pa ltar rtag pa ma yin pa |[13] rang bzhin gyis 'gag pa med (D174a7) pa skye[14] ba med pa spros pa thams cad nye bar zhi ba'i mtshan

[1]zhum pa yi] DC; zhum pa'i PNG [2]med] DCNG; mad P [3]de] CPNG; da D [4]gyur pa yin na] DC; gyur pa na yin na PNG [5]'gags] DCPN; 'gag G [6]|] PNG; om. DC [7]pa 'am] PNG; pa'ang DC; vā LVP [8]med] DPNG; mod C [9]'gags] DCPN; 'gag G [10]las] DC; om. PNG [11]rnams] PNG; om. DC [12]DC; | add. PNG [13]|] DPNG; om. C [14]skye] CPNG; ge D

nyid can de ni mya ngan las ’das par bshad do || de’i phyir rnam pa de lta bu de la nyon mongs pa gang dag spangs pas de mya ngan las ’da’ bar ’gyur ba | nyon mongs par rtog pa ga la yod (C172a) cing[1] | phung po gang dag (D174b1) ’gags pas de ’thob par ’gyur ba phung por rtog pa yang ga la yod | ji srid du rtog pa ’di dag ’byung ba de srid du mya ngan las ’das pa thob pa yod pa ma yin te | spros pa thams cad zad pa nyid las de ’thob pa’i phyir ro ||

ci ste mya ngan las ’das pa la nyon (P197b) mongs pa rnams med (D174b2) cing phung po rnams kyang med mod kyi | de lta na yang mya ngan las ’das pa’i snga rol na yod (G244b) pa yin no || de’i phyir de dag ’gags pa ni spros pa zad pa las mya ngan las ’das pa yin par ’gyur ro snyam na | brjod pa | ’dzin pa ’di ni dor bar (N197b) bya’o || gang gi phyir mya ngan las (D174b3) ’das pa’i snga rol na rang bzhin gyis yod pa rnams ni yang dngos po med par bya bar mi nus te | de’i phyir mya ngan las ’das pa ’dod pas rtog pa ’di dor bar bya’o ||

mya ngan ’das mtha’ gang yin pa ||
de ni ’khor ba’i mtha’ yin te ||
de gnyis khyad par cung zad ni ||
shin tu phra ba’ang (D174b4) yod ma yin || MMK 25.20

zhes ’chad par ’gyur ro || bcom ldan ’das kyis kyang |[2]

mya ngan ’das la chos rnams yod nyid med ||
chos gang der med de dag gzhar yang med ||
yod dang med ces rtog pa dang ldan zhing ||
de ltar spyod rnams sdug bsngal nyer mi zhi || SR 9.26

zhes (D174b5) gsungs pa yin pas[3] so || tshigs su bcad pa ’di’i don ni ’di yin te | mya ngan las[4] ’das la[5] ste phung po lhag ma med pa’i mya ngan las ’das pa’i dbyings na’o || chos rnams ni nyon mongs pa dang las dang skye ba’i mtshan nyid can rnams sam phung po rnams te | rnam pa thams (D174b6) cad du bral ba’i phyir yod pa nyid med do || ’di ni rgol ba thams cad kyi[6] ’dod pa yin no || mar me gtang[7] bas mun par thag pa la sbrul du dmigs pa ltar chos gang dag mya ngan las ’das pa ’di la yod pa ma yin pa de dag ni gzhar yang med de |[8] nyon mongs pa dang las dang skye ba’i (D174b7) mtshan nyid can gyi chos de dag ni ’khor ba’i gnas skabs kyi dus ’ga’ zhig na yang de kho na nyid du yod pa ma yin no || ’di ltar mun pa’i gnas skabs na thag pa la sbrul (G245a) rang gi ngo bos yod pa ni ma yin te | yod par gyur pa’i sbrul ltar mun pa dang snang (C172b) bar yang ’dzin par (D175a1) ’gyur ba’i phyir ro ||

’o na ji ltar ’khor ba yin zhe na | brjod pa | rab rib can rnams la (P198a) skra shad dang sbrang bu mchu rings la sogs pa snang ba ltar dngos po yod pa mi yin pa’i rang bzhin can dag kyang byis pa bdag dang bdag[9] gi bar yang dag pa ma yin pa’i (D175a2) phyin[10] ci log gi gdon gyis[11] bzung[12] ba rnams bden[13] (N198a) par snang ba yin no zhes gsungs pa ni |

[1]cing] DC; om. PNG [2]|] CPNG; || D [3]pa yin pas] DC; om. PNG [4]las] DC; om. PNG [5]la] PNG; pa DC; nirvṛttau LVP [6]kyi] DC; kyis PNG; LVP sarvavādinām [7]gtang] DC; btang PNG [8]de |] PNG; do || DC [9]bdag] DPNG; ’dag C [10]phyin] CPNG; phyir D [11]gyis] DCPG; kyis N [12]bzung] DC; gzung PNG [13]°rnams bden] DC; °rnams la bdan P; °rnams la bden NG

yod dang med ces rtog pa dang ldan zhing ||
de ltar spyod rnams sdug bsngal nyer mi zhi || SR 9.26cd

zhes bya'o[1] || yod do zhes dngos po yod par rtog pa dang ldan pa rgyal dpog[2] pa dang | gzegs[3] zan (D175a3) dang ser skya la sogs pa bye brag tu smra ba rnams[4] la thug[5] pa rnams dang | med ces rtog pa dang ldan pa med pa pa[6] rnams dang | de dag las gzhan 'du byed 'das pa dang ma 'ongs pa dang | rnam par rig byed ma yin pa dang |[7] mi ldan pa'i 'du byed med par smra zhing de las gzhan yod (D175a4) par smra ba rnams dang | kun du brtags pa'i ngo bo nyid med par smra zhing | gzhan gyi dbang dang yongs su grub pa'i ngo bo nyid yod par smra ba rnams te | de ltar yod pa dang med par smra ba rnams kyi sdug bsngal te 'khor ba zhi bar mi 'gyur ro zhes ro [8] zhes bya'o || de bzhin du |

ji ltar (D175a5) dogs pa'i 'du shes kyis ni dug langs pa ||
dug de khong du song ba med kyang brgyal bar 'gyur ||
de bzhin byis pa bdag dang bdag gir khas len pa ||
bdag der 'du shes yang dag min rtag skye zhing 'chi || RGS 22.6

zhes kyang gsungs so || de'i phyir de ltar[9] na || mya ngan (D175a6) las (G245b) 'das pa la 'ga' yang spangs pa med la | 'ga' yang 'gag pa med do zhes shes par bya'o || de'i phyir rtog[10] pa thams cad zad pa nyid mya ngan las 'das pa yin no ||

ji skad du 'phags pa rin po che'i phreng ba las kyang |

mya ngan 'das pa dngos med pa'ang ||
min na (D175a7) de dngos ga la yin ||
dngos dang dngos po med 'dzin pa ||
zad pa mya ngan 'das zhes bya || RĀ 1.42

zhes bshad do | gang[11] dag mya ngan las 'das pa kun du rtog pa thams cad nye bar zhi ba'i ngo bo ma rtogs shing | mya ngan (P198b) las 'das pa dngos po dang dngos po med pa dang de gnyi ga dang | gnyi (D175b1) ga ma yin pa'i ngo bor[12] yongs su rtog par (N198b) byed pa | de dag la brjod pa |

re zhig mya ngan 'das dngos min ||
rga shi'i mtshan nyid thal (C173a) bar 'gyur ||
rga dang 'chi ba med pa yi ||
dngos po yod pa ma yin no || MMK 25.4

de la mya ngan las 'das pa dngos por mngon par zhen pa kha cig ni 'di skad du [13] (D175b2) 'dir mya ngan las 'das pa ni nyon mongs pa dang las dang skye ba'i rgyun 'jug pa nges par 'gog par 'gyur ba | chu'i rgyun 'gog pa'i chu lon dang 'dra ba'i don dngos po'i bdag nyid can yin te | yod pa ma yin pa'i rang bzhin gyi chos ni de ltar 'bras bu byed par yang ma mthong ngo ||

[1]bya'o] DC; bya ba'o PNG [2]dpog] DCG; dpogs P; dpeg N [3]gzegs] CPNG; gzigs D [4]rnams] DC; om. PNG [5]thug] DCNG; thugs P [6]pa] DC; om. PNG [7]|] DCPN; om. G [8]DC; || add. PNG [9]ltar] PNG; lta bas DC [10]rtog] DCG; rtogs PN [11]gang] DCPN; de G [12]bor] DPNG; bos C [13]DC; | add. PNG

(D175b3) gal te ’di dga’ ba’i ’dod chags dang lhan cig tu ’gyur[1] pa’i sred pa zad cing ’dod chags dang bral ba ’gog pa gang yin pa de ni mya ngan las ’das pa’o zhes gsungs pa ma yin nam | zad pa tsam ni dngos po yin par ’os pa yang ma yin no || de bzhin du |

mar me shi bar (D175b4) gyur pa ltar ||
de yi sems ni rnam par (G246a) thar || MP 44.11cd

zhes gsungs te | mar me shi ba ni dngos po yin no zhes bya bar yang mi ’thad do zhe[2] na | smras pa | sred pa zad pa ni sred[3] pa zad pa’o zhes de ltar ni shes par mi bya’o || ’o na ci zhe na | mya ngan las ’das pa zhes bya ba’i chos de (D175b5) yod na sred pa zad par ’gyur ba de ni sred pa zad pa’o zhes bya bar rig par bya’o || mar me ni dpe tsam du zad do || der yang gang yod na sems thar par ’gyur ba yin no zhes bya bar rig par bya’o zhes smra’o ||

de ltar mya ngan las ’das pa dngos po rnam par (D175b6) gnas pa yin dang | **re zhig mya ngan ’das dngos min** || zhes slob dpon nges par rtog par mdzad do || de[4] ci’i phyir zhe na | gang gi phyir | rga shi’i mtshan nyid thal bar ’gyur te | dngos po ni rga shi’i mtshan nyid la mi ’khrul ba’i phyir ro || de’i (D175b7) phyir de mya ngan las ’das pa nyid du yang mi ’gyur te | rga shi’i mtshan nyid can yin pa’i (P199a) phyir |[5] rnam par shes pa la sogs pa bzhin no (N199a) zhes bya bar dgongs pa yin no ||

rga shi’i mtshan nyid la mi ’khrul ba de nyid bsal[6] bar bya ba’i phyir | **rga dang ’chi ba med pa** (D176a1) **yi || dngos po yod pa ma yin no** || zhes bshad de | rga shi dang bral ba gang yin pa de ni dngos po nyid ma yin te | rga shi dang bral ba’i phyir nam mkha’i me tog bzhin no ||

gzhan yang |[7]

gal te mya ngan ’das dngos na ||
(C173b) mya ngan ’das pa ’dus byas ’gyur ||
(D176a2) dngos po[8] ’dus byas ma yin pa ||
’ga’ yang gang na’ang yod ma yin || MMK 25.5

gal te mya ngan las ’das pa dngos po yin na ni de’i tshe mya ngan las ’das pa de ’dus byas su ’gyur te | dngos po yin pa’i phyir (G246b) rnam par shes pa bzhin no || gang ’dus byas ma yin pa de ni dngos por mi ’gyur te | (D176a3) dper na bong bu’i rwa bzhin no || ldog pa bshad pa’i phyir || **dngos po ’dus byas ma yin pa || ’ga’ yang gang na’ang yod ma yin** || zhes bya ba gsungs te | ’ga’ yang zhes bya ba ni brten pa ste | nang ngam phyi’i bdag nyid do zhes bya ba’i don to || gang na’ang zhes bya ba ni rten[9] te | yul (D176a4) lam dus sam grub[10] pa’i mthar ro ||

gzhan yang |

gal te mya ngan ’das dngos na ||
ji ltar myang ’das de brten min ||
dngos po brten nas ma yin pa ||

[1] ’gyur] DC; gyur PNG [2] zhe] DC; zhes PNG [3] sred] DCPG; srad N [4] de] DC; om. PNG [5] |] DC; om. PNG [6] bsal] DC; gsal PNG [7] |] DC; om. PNG [8] po] DCPG; pe N [9] rten] DC; brten PNG [10] grub] DC; ma grub PNG

’ga’ yang yod pa ma yin no || MMK 25.6

gal te khyod kyi lugs kyis mya ngan las ’das pa dngos po yin na ni | de brten nas (D176a5) yin par ’gyur te | rang gi rgyu’i tshogs pa la brten nas yin no zhes bya ba’i don to || de ltar brten nas mya ngan las ’das pa ’dod pa yang ma yin te | ’o na ci zhe na |[1] de ni ma brten par ro || gal te mya ngan las ’das pa[2] dngos po yin na[3] |[4] ji ltar mya ngan las ’das pa de brten nas (D176a6) ma yin par ’gyur te | mi[5] brten pa yin par mi ’gyur ba nyid de | dngos po yin pa’i phyir rnam par shes pa la sogs pa (N199b) bzhin no || ldog pa bshad pa ni | **dngos po brten nas ma yin pa ||**[6] **(P199b) ’ga’ yang yod pa ma yin no** || zhes bya ba’o ||

’dir smras pa | ji skad bshad (D176a7) pa’i nyes par thal bar ’gyur ba’i phyir | mya ngan las ’das pa dngos po ma yin pa de[7] ni bden te | ’o na ci zhe na | nyon mongs pa dang skye ba log pa’i phyir |[8] mya ngan las ’das pa dngos po med pa kho na yin no || brjod pa | ’di yang (G247a) mi rigs te | gang gi phyir |

gal te (D176b1) mya ngan ’das dngos min ||
dngos med ji ltar rung bar ’gyur ||
gang la mya ngan ’das dngos min[9] ||
de la dngos med yod ma yin || MMK 25.7

gal te mya ngan las ’das pa dngos por[10] mi ’dod cing mya ngan las ’das pa dngos po’o snyam du mi ’dod na | de’i tshe mya ngan las ’das pa (D176b2) dngos po med par (C174a) ji ltar rung bar ’gyur te | dngos po med par yang rung bar mi ’gyur ba nyid do snyam du dgongs pa yin no || ci’i phyir zhe na | gang gi phyir | **gang la mya ngan ’das dngos min || de la dngos med yod ma yin** ||[11] zhes gsungs te | ’dir dngos po’i rang bzhin btang (D176b3) nas gzhan du gyur[12] pa la dngos po med pa zhes bsnyad na | bstan zin pa’i nyes pas phyogs gang la mya ngan las ’das pa dngos po ma yin pa’i phyogs de la mya ngan las ’das pa dngos po med pa yang ma yin te | dngos po’i rang bzhin du ma grub pa’i ngo bo la dngos po med pa’i ngo bo nyid (D176b4) mi ’thad pa’i phyir ro snyam du dgongs pa yin no ||

gal te mya ngan las ’das pa ni nyon mongs pa dang skye ba med pa yin no zhe na | de lta na ’o na nyon mongs pa dang skye ba’i mi rtag pa nyid mya ngan las ’das pa yin par ’gyur te | gang gi phyir nyon mongs pa dang skye ba med pa ni mi rtag pa (D176b5) nyid yin gyi gzhan ni[13] ma yin te | de’i phyir mi rtag pa nyid mya ngan las ’das pa yin par ’gyur na | de ni ’dod pa yang ma yin te | sgrim[14] pa med par thar par[15] thal bar ’gyur pa’i phyir ro || de’i phyir ’di ni (N200a) i rigs so ||

gzhan yang |

gal te mya ngan ’das dngos min ||
ji ltar (D176b6,G247b) myang ’das de brten min ||
gang zhig brten nas ma yin pa’i ||

[1]|] CPNG; D om. [2]mya ngan las ’das pa] DCPN; mya ngan ’ă las ’das pa G [3]na] DCPG; no N [4]|] DCNG; om. P [5]mi] DC; ma PNG [6]||] DCNG; om. P [7]de] DC; om. PNG [8]|] DCNG; || P [9]min] DC; med PNG [10]por] DC; po PNG [11]||] CG; | DPN [12]gyur] DCPN; ’gyur G [13]ni] DC; om. PNG [14]sgrim] PNG; sgrib DC [15]thar par] PNG; om. DC; mokṣa LVP

(P200a) dngos med yod pa ma yin no || MMK 25.8

de la mi rtag pa nyid dngos po med pa nyid yin zhing dngos po la brten nas ’dogs pa ma yin te | bong bu’i rwa la sogs pa rnams la mi rtag pa nyid ma dmigs[1] pa’i phyir ro || mtshan (D176b7) nyid la brten nas mtshan[2] gzhi ’jug la | mtshan gzhi la brten nas mtshan nyid ’jug pa de’i phyir mtshan nyid dang |[3] mtshan gzhi ’jug pa phan tshun ltos[4] pas mtshan gzhi’i dngos po la ma ltos[5] par mi rtag pa nyid yod par ga la ’gyur | de’i phyir dngos po med pa yang brten (D177a1) nas ’dogs pa yin no || de’i phyir gal te mya ngan las ’das pa dngos po med pa ’ga’ zhig yin na ni | ji ltar mya ngan las ’das pa de brten nas ma yin par ’gyur | de ni brten nas kho na yin te |[6] dngos po med pa yin pa’i phyir ’jig pa bzhin no || (D177a2) de nyid gsal bar bya (C174b) ba’i phyir | **gang zhig brten nas ma yin pa’i || dngos med yod pa ma yin no** || zhes bshad do ||

gal te ma brten[7] par dngos po med pa yod pa ma yin na | ’o na da ci la brten nas mo gsham gyi bu (D177a3) la sogs pa dag dngos po med par ’gyur zhe na | mo gsham gyi bu la sogs pa dngos po med pa yin no zhes de skad sus smras | ’di ltar |

gal te dngos po ma[8] grub na ||
dngos med ’grub par mi ’gyur ro ||
dngos po gzhan du gyur pa ni ||
dngos med yin par skye bo smra || MMK15.5

zhes sngar[9] bshad zin to || de’i phyir mo gsham gyi bu la sogs pa rnams (D177a4) dngos po med pa nyid ma yin no || yang gang du |

nam mkha’i ri bong rwa dag dang ||
mo gsham (G248a) gyi ni bu dag kyang ||
med bzhin tshig tu brjod pa ltar ||
dngos la rtog pa’ang de bzhin no || LA 10.453

zhes gsungs pa der yang | dngos (N200b) por rtog pa bkag pa tsam zhig yin gyi | dngos po (D177a5) med par rtog pa ni ma yin te | dngos po nyid ma grub pa’i phyir ro zhes shes par bya’o || mo gsham gyi bu zhes bya ba ’di ni sgra[10] tsam zhig tu zad kyi | don gang zhig dngos po ’am dngos (P200b) po med pa nyid du [11] ’gyur ba ’di’i don ni[12] ma dmigs so || de’i phyir dmigs pa med pa’i rang bzhin (D177a6) la dngos po dang dngos po med[13] par brtags[14] par ga la rigs | de’i phyir mo gsham gyi bu dngos po med pa ma yin no zhes shes par bya’o || de’i phyir | **gang zhig brten nas ma yin pa’i || dngos med yod pa ma yin no** ||[15] zhes bya ba ’di ni gnas so ||

’dir gal te mya ngan las (D177a7) ’das pa dngos po ma yin zhing dngos po med pa yang ma yin no[16] | ’o na mya ngan las ’das pa gang yin zhes zer na | brjod pa | ’dir bcom ldan ’das de bzhin gshegs pa

[1]dmigs] DPNG; dmegs C [2]mtshan] CPNG; mtshon D [3]|] DC; om. PNG [4]ltos] D; C ltas; bltos PNG [5]ltos] DC; bltos PNG [6]|] DC; om. PNG [7]brten] DPNG; brtan C [8]ma] DCPG; mi N [9]sngar] DPNG; sgrar C [10]sgra] CPN; skra D; śabda LVP [11]DC; | add. PNG [12]ni] PNG; om. DC [13]med] DCNG; mad P [14]brtags] DC; brtag PNG [15]||] DCPG; | N [16]no] DC; na PNG

rnams kyis ||

> ’ong ba dang ni ’gro ba’i dngos ||
> brten nam[1] rgyur byas gang yin pa ||
> de ni brten min rgyur (D177b1) byas min ||
> mya ngan ’das pa yin par bstan || MMK 25.9

de la ’ong ba dang ’gro ba’i dngos po ni ’ong ba dang ’gro ba’i dngos po ste | skye ba dang ’chi ba gcig nas gcig tu brgyud pa zhes bya ba’i tha tshig go || ’ong ba dang ’gro[2] ba’i dngos po de yang res ’ga’ rgyu dang rkyen gyi tshogs pa la brten nas (D177b2) yod do [3] zhes bya bar ’dogs te ring po dang (C175a) thung ngu bzhin no || res ’ga’ ni rgyur byas nas ’dogs te mar me’i ’od bzhin no || gal te ’dir rgyur byas nas ’dogs sam | brten nas skye’o[4] zhes rnam (G248b) par ’jog kyang rung ste | rnam pa thams cad du skye ba dang ’chi ba’i rgyun de[5] ma brten (D177b3) pa’am rgyur byas pa ma yin par mi ’jug pa gang yin pa de mya ngan las ’das pa yin par rnam par gzhag go || mi ’jug pa tsam[6] ni dngos po ’am dngos po med pa yin no zhes bya bar brtag par yang mi nus te | de ltar na mya ngan las ’das pa ni (N201a) dngos po dang dngos po med pa yang ma yin no ||

(D177b4) yang na ’du byed ’khor ba yin no zhes bya ba gang dag gi phyogs yin pa de[7] dag gi ltar na rten cing brten nas skye ba dang ’jig pa gang yin pa de brten pa ma yin par mi ’jug pa la mya ngan las ’das pa zhes bya bar brjod pa ’am | gang dag gi ltar na gang zag ’khor ba yin pa de dag gi rtag[8] pa (D177b5) dang mi rtag pa nyid du brjod du (P201a) med pa[9] de’i ’ong ba dang ’gro ba’i dngos po[10] nye bar len pa de dang de la brten nas gang yin pa de ni rgyur byas nas ’jug pa yin la | rgyur byas shing rgyur byas nas ’jug pa de nyid da ltar rgyur byas pa ma yin par mi ’jug pa ni mya ngan las ’das (D177b6) pa zhes bya bar bsnyad do || ’du byed rnams dang gang zag gi mi ’jug pa tsam[11] ni dngos po ’am dngos po med pa yin no zhes bya bar brtag par nus pa yang ma yin no || de’i phyir yang mya ngan las ’das pa [12] dngos po dang dngos po med par[13] mi rigs so zhes bya ba’o ||

gzhan (D177b7) yang |

> ’byung ba dang ni ’jig pa dag ||
> spang bar ston pas bka’ stsal to ||
> de phyir mya ngan ’das pa ni ||
> dngos min dngos med min par rigs || MMK 25.10

de la mdo las dge slong dag gang dag ’byung ba’am ’jig pas srid pa las nges par ’byung ba tshol ba (G249a) de ni de dag gi[14] yongs (D178a1) su mi shes pa chen po yin no zhes gsungs so || ’byung ba’i sred pa dang ’jig pa’i sred pa de ni gnyi ga yang yongs su spang bar bya ba yin na | mya ngan las ’das pa ni de ltar bcom ldan ’das kyis spang bar bya ba[15] ma gsungs te | ’o na ci zhe na | spang bar (D178a2) bya ba ma yin par ro || de’i phyir gal te mya ngan (C175b) las ’das pa dngos po’i rang bzhin can nam | dngos

[1]nam] PNG; tam DC [2]’gro] DCNG; ’go P [3]DC; || add. PNG [4]skye’o] D; skya’o C; skye bo PNG [5]de] CPNG;da D [6]tsam] CPNG; cam D [7]de] DCNG; om. P [8]rtag] DC; brtag PNG [9]brjod du med pa] DCPN; brjod pa G [10]dngos po] PNG; dngos po med par DC; ājavaṃjavībhāvaḥ LVP [11]tsam] CPNG; cam D [12]DC; | add. PNG [13]med par] DC; med pa yin par PNG [14]gi] DC; gis PNG [15]ba] DC; bar PNG

po med pa'i rang bzhin du gyur na ni | de yang spang (N201b) bar bya ba kho nar 'gyur na | spang bar bya ba yang ma yin te | de'i phyir mya ngan las 'das pa dngos po ma yin zhing dngos po med (D178a3) pa yang ma yin par mi rigs so ||

gang dag gi ltar na nyon mongs pa dang skye ba gnyis de la med pas | mya ngan las 'das pa dngos po med pa'i rang bzhin yin la | rang nyid dngos po'i ngo bo yin pas dngos po'i rang bzhin yin no zhes gnyis ka'i rang bzhin yin pa de dag gi | (D178a4) gnyi ga'i rang bzhin can gyi mya ngan las 'das pa yang mi 'thad do zhes bstan pa'i phyir gsungs pa |

gal te mya ngan 'das pa ni ||
dngos dang dngos med gnyis yin na ||
dngos dang dngos po med pa dag ||
thar par 'gyur na de mi rigs || MMK 25.11

gal te mya ngan las (P201b) 'das pa dngos po (D178a5) dang dngos po med pa[1] gnyi ga'i rang bzhin du gyur na ni || de'i tshe dngos po dang dngos po med pa[2] thar par[3] 'gyur ro || de'i phyir 'du byed rnams kyi bdag nyid 'thob pa dang | de dang bral ba gang yin pa de nyid thar par[4] 'gyur na | 'du byed dag ni thar ba zhes bya bar rigs pa yang ma yin (D178a6) no[5] || de nyid kyi phyir |[6] **de** (G249b) **mi rigs** so zhes bshad do ||

gzhan yang |

gal te mya ngan 'das[7] pa ni ||
dngos dang dngos med gnyis yin na[8] ||
mya ngan 'das pa ma brten min ||
de gnyis brten nas yin phyir ro || MMK 25.12

gal te mya ngan las 'das pa dngos po dang dngos po med (D178a7) pa'i rang bzhin yin na ni | de'i tshe rgyu dang rkyen gyi tshogs pa la brten cing ltos[9] nas yin gyi | ma brten par ni ma yin no || ci'i phyir zhe na | gang gi phyir | **de gnyis brten nas yin phyir ro** [10] ste | dngos po la brten nas dngos po med pa yin zhing | dngos po med pa la brten nas (D178b1) dngos po yod[11] pa'i phyir | dngos po dang dngos po med pa de gnyi ga brten nas[12] yin gyi ma brten par ni[13] ma yin no || mya ngan las 'das pa dngos po dang dngos po med pa'i rang bzhin yin pa'i phyir (N202a) de ltar 'gyur ba zhig na | de ni de ltar yang ma yin te | de'i phyir 'di[14] ni mi rigs so ||

(D178b2) gzhan yang |

ji ltar mya ngan 'das pa ni ||
dngos dang dngos med gnyis yin te ||
mya ngan 'das pa 'dus ma byas ||
dngos dang dngos (C176a) med 'dus byas yin || MMK 25.13

[1]pa] DC; pa'i PNG [2]pa] PNG; par DC [3]thar par] D; thar bar CPG; thal bar N [4]thar par] D; thar bar CPG; thal bar N [5]no] DCPG; na N [6]|] DC; om. PNG [7]ngan 'das] DC; ngan las 'das PNG [8]na] DC; pa PNG [9]ltos] DC; bltos PNG [10]DC; || add. PNG [11]yod] DC; yin PNG [12]nas] DCNG; na P [13]ni] DC; om. PNG [14]'di] DCPN; 'de G

dngos po ni rang gi rgyu dang rkyen gyi tshogs[1] pa las byung ba'i phyir 'dus byas yin la | dngos po med pa yang dngos po (D178b3) la brten nas 'byung ba'i phyir dang | skye ba'i rkyen gyis rga shi zhes 'byung ba'i phyir 'dus byas yin no || de'i phyir gal te mya ngan las 'das pa dngos po dang dngos po med pa'i rang bzhin yin na ni || de'i tshe de 'dus ma byas ma[2] yin gyi | 'dus byas nyid du 'gyur na || 'dus byas su ni 'dod pa yang ma yin no || (D178b4) de'i phyir mya (G250a) ngan las 'das pa dngos po dang dngos po med par mi rigs so ||

ci ste yang mya ngan las 'das pa ni dngos po dang dngos po med pa'i rang bzhin ma yin te | 'o na ci zhe na | mya ngan las 'das pa la dngos po dang dngos po med pa de dag yod pa yin[3] no snyam na | de yang mi rigs (D178b5) so || gang las she na |[4] gang gi phyir ||

ji ltar mya ngan 'das pa la ||
dngos dang dngos med gnyis yod de || MMK 25.14ab

dngos[5] dang dngos po med pa phan tshun 'gal ba dag kyang mya ngan las 'das pa gcig la yod pa ma yin te | de'i phyir |[6] **ji ltar mya ngan 'das pa la || dngos dang dngos** (D178b6) **med gnyis yod de** || yod pa ma yin pa nyid do snyam du dgongs pa yin no || ji lta bur zhe na |

de gnyis gcig la yod min te ||
snang ba dang ni mun pa bzhin || MMK 25.14cd

ji ltar khyim gcig tu dus[7] gcig gi tshe |[8] phan tshun 'gal bas | snang ba dang mun pa dag yod pa ma yin pa de bzhin du |[9] (D178b7) de gnyis kyang mya ngan las 'das pa la yod pa ma yin no ||

da[10] ni mya ngan las 'das pa dngos po ma yin zhing dngos po med pa yang ma yin pa[11] yang ji ltar mi rigs pa (N202b) de ltar bstan pa'i phyir |

dngos min dngos po med min pa ||
mya ngan 'das par gang ston pa ||
dngos po med dang dngos (D179a1) po dag ||
grub na de ni 'grub par 'gyur || MMK 25.15

zhes gsungs te | gal te dngos po zhes bya ba 'ga'[12] zhig yod na ni | de'i tshe de bkag pa'i sgo nas mya ngan las 'das pa dngos po ma yin pa zhes bya ba'i rtog pa 'dir 'gyur la | gal te dngos po med pa 'ga' (D179a2,G250b) zhig yod na ni | de'i tshe de bkag pas mya ngan las 'das pa dngos po med pa ma yin par 'gyur ba (C176b) zhig na | gang gi tshe dngos po dang dngos po med pa dag nyid yod pa ma yin pa de'i tshe de dag bkag pa yang yod pa ma yin no || de'i phyir mya ngan las 'das pa dngos po ma yin zhing | dngos (D179a3) po med pa yang ma yin no snyam du rtog pa gang yin pa de yang mi 'thad pas 'di ni rigs[13] pa ma yin no ||

gzhan[14] yang |

[1]tshogs] DPNG; chogs C [2]ma] PNG; om. DC; na LVP [3]yin] PNG; ma yin DC [4]|] DCNG; om. P [5]dngos] DC; dngos po PN; dngos bo G [6]de'i phyir |] DCPN; om. G [7]dus] DCNG; dum P [8]|] DC; om. PNG [9]|] DPNG; om. C [10]da] DCPN; de G; idānīṃ LVP [11]yang ma yin pa] DCNG; om. P [12]'ga'] PNG; 'ba' DC [13]rigs] DC; rig PNG [14]gzhan] DCNG; zhan P

gal te mya ngan ’das pa ni ||
dngos min dngos po med (P202b) min na ||
dngos min dngos po med min zhes ||
gang zhig gis ni de mngon byed || MMK 25.16

gal te mya ngan las ’das pa (D179a4) dngos po ma yin zhing dngos po med pa yang ma yin pa’i rang bzhin du yod do zhes rtog na | da ni gang zhig gis rnam pa de lta bur gyur pa mya ngan las ’das pa gnyi ga’i ngo bo ma yin pa de yod do zhes bya bar mngon par byed de | ’dzin[1] pa’am gsal bar byed | ci mya ngan las ’das pa (D179a5) de la rnam pa de lta bu’i rtogs[2] pa po ’ga’[3] zhig yod dam ’on te med | gal te yod na ni de ltar na mya ngan las ’das par yang bdag yod par ’gyur na | ’dod pa ni ma yin te | nye bar len pa med par bdag yod pa nyid ma yin pa’i phyir ro || ci ste med na ni de’i tshe[4] rnam pa de lta bu’i mya ngan las (D179a6) ’das pa de yod par gang gis gcod par byed | gal te ’khor ba na gnas pas yongs su gcod par byed do zhe na | gal te[5] ’khor ba na gnas pas yongs su gcod par (G251a) byed na [6] de ci rnam (N203a) par shes pas gcod par byed dam | ’on te ye shes kyis yin grang na | gal te rnam par shes pas yin par rtog na | de ni (D179a7) mi rigs so || ci’i phyir zhe na | ’di ltar rnam par shes pa ’di ni mtshan ma la dmigs pa yin no[7] | mya ngan las ’das pa la ni mtshan ma cung zad kyang yod pa ma yin te | de’i phyir re zhig[8] de ni rnam par shes pas dmigs par byed pa ma yin no || ye shes kyis kyang gcod[9] par byed pa (D179b1) ma yin te | ye shes kyis ni stong pa nyid la dmigs par ’gyur dgos la de yang ma skyes pa’i rang bzhin nyid yin pas | ji ltar yod pa ma yin pa’i rang bzhin des mya ngan las ’das pa dngos po ma yin zhing | dngos po med pa ma yin pa zhes bya bar ’dzin par byed de[10] | ye shes (D179b2) ni spros[11] pa thams cad las ’das pa’i rang bzhin yin pa’i phyir ro || de’i phyir mya ngan las ’das (C177a) pa ni gang gis kyang dngos po ma (P203a) yin zhing | dngos po med pa ma yin no zhes bya bar mngon par mi byed la | mngon par ma byas shing gsal bar ma byas la | ma bzung ba de ni de ltar (D179b3) yod do zhes bya bar mi rigs so ||

ji ltar mya ngan las ’das pa la rtog pa bzhi po ’di[12] dag rnam pa thams cad du mi srid pa de bzhin du | mya ngan las ’das pa thugs su chud pa po de bzhin gshegs pa la yang rtog pa ’di dag srid pa ma yin no[13] zhes bstan pa’i phyir |

bcom ldan mya ngan ’das (D179b4) gyur nas ||
yod par mi mngon (G251b) de bzhin du ||
med do zhe ’am gnyi ga ’am ||
gnyis min zhes kyang mi mngon no || MMK 25.17

zhes gsungs te | ’di ltar ||[14]

gang gis ’dzin stug bzung gyur pa ||
de ni mya ngan ’das pa la ||

[1] ’dzin] DCNG; ’dzan P [2] rtogs] DC; rtog PNG [3] ’ga’] DCNG;P ’gab [4] tshe] DCPG; che N [5] gal te] PNG; om. DC; yadi LVP [6] DC; | add. PNG [7] no] DC; na PNG [8] re zhig] NG; ri zhig DC; ra zhig P; tāvad LVP [9] gcod] PNG; sbyod D; spyod C; jñāyate LVP [10] de] PNG; om. DC [11] spros] DCNG; spos P [12] ’di] DC; de PNG [13] no] PNG; om. DC [14] ||] DC; om. PNG

de bzhin gshegs pa yod ce ’am ||
med ces rnam rtog (D179b5) rtog par[1] byed || MMK 22.13

ces gong du bshad zin to || de ltar na re zhig (N203b) de bzhin gshegs pa mya ngan las ’das phan chad yod pa’am med do zhes bya bar mi mngon no || ’di gnyis med pas gnyi ga’o[2] zhes bya bar yang mi mngon no || gnyi ga med pa nyid kyis na gnyi ga ma yin pa zhes bya bar yang mi (D179b6) mngon zhing mi ’dzin pa yin no ||

bcom ldan ’das mya ngan las ’das nas |[3] rnam pa bzhir mi mngon pa ’ba’ zhig tu ma zad kyi | gzhan yang |

bcom ldan bzhugs par gyur na yang ||
yod par[4] mi mngon de bzhin du ||
med do zhe ’am gnyi[5] ga dang ||
gnyis min zhes kyang mi (D179b7) mngon no || MMK 25.18

ji ltar mi mngon pa de ltar ni de bzhin gshegs pa brtag par bstan zin pa nyid do || de nyid kyi phyir |

’khor ba mya ngan ’das pa las ||[6]
khyad par cung zad yod ma yin ||
mya ngan ’das pa’ang ’khor ba las ||
khyad par cung zad yod ma yin || MMK 25.19

gang gi phyir [7] (D180a1) bcom ldan ’das bzhugs[8] pa na yang yod do zhes bya ba la sogs pa mi mngon la | mya ngan las ’das pa na yang[9] yod do zhes bya ba la sogs par mi mngon pa de nyid kyi phyir ’khor ba dang mya ngan las ’das (P203b) pa gnyis la phan tshun khyad par ’ga’ yang yod pa ma yin te | (D180a2) rnam par dpyad na rang bzhin mtshungs pa’i phyir ro || gang yang bcom ldan ’das (G252a) kyis ’di skad du | **dge**[10] **(C177b) slong dag skye ba dang rga shi’i ’khor ba ni thog ma dang tha ma med do** zhes gsungs pa de yang ’di nyid kyi phyir ’thad pa yin to | ’khor ba dang mya ngan las ’das pa gnyis[11] la khyad par (D180a3) med pa’i phyir ro || ’di ltar |

myang ’das mtha’ dag[12] gang yin pa ||
de ni ’khor ba’i mtha’ yin te ||
de gnyis khyad par cung zad ni ||
shin tu phra ba’ang[13] yod ma yin || MMK 25.20

mya ngan las ’das pa dang ’khor ba la[14] khyad par med pa’i phyir | sngon dang phyi ma’i mthar rtog pa yod (D180a4) pa ma yin pa ’ba’ zhig tu ma zad kyi |

---

[1]par] DCPN; par par G [2]ga’o] DC; ga’i PNG [3]|] DC; om. PNG [4]par] DCPN; par par G [5]gnyi] DCPN; gnyis G [6]||] DCG; | PN [7]DPNG; | add. C [8]bzhugs] PNG; zhugs DC [9]yang] DCNG; yange P [10]dge] DCPG; dgi N [11]gnyis] DPNG; gnyi ga C [12]myang ’das mtha’ da] DC; mya ngan ’das mtha’ PNG [13]ba’ang] DCNG; ba ’ang P [14]la] DC; om. PNG

gang ’das phan chad mtha’ sogs dang ||
rtag la sogs par[1] lta ba dag ||
mya ngan ’das (N204a) dang phyi mtha’ dang ||
sngon[2] gyi mtha’ la brten[3] pa yin ||[4] MMK 25.21

de dag kyang de nyid kyi phyir mi ’thad pa yin te | ’khor ba dang mya ngan las ’das pa de[5] (D180a5) gnyis ka yang rang bzhin gyis zhi ba nyid du ro gcig pa’i phyir ro || de la **’das phan chad** ces bya ba’i nye[6] bar mtshon pa ’dis ni lta ba bzhi[7] bzung ngo || ’di lta ste | de bzhin gshegs pa grongs phan chad pa[8] yod pa dang | de bzhin gshegs[9] pa grongs phan chad[10] med pa dang | de (D180a6) bzhin gshegs pa grongs phan chad yod kyang yod la med kyang med pa dang | de bzhin gshegs pa grongs[11] phan chad yod pa yang ma yin med pa yang ma yin no[12] zhes bya ba ste | lta ba bzhi po ’di dag ni mya ngan las ’das pa la mchog tu ’dzin par zhugs so[13] ||

mtha’ la sogs (D180a7) pa yang lta ba bzhi’o || ’di lta ste | ’jig rten mtha’ (G252b) dang ldan no || ’jig rten mtha’ dang mi ldan no ||[14] ’jig rten mtha’ dang ldan pa yang yin la mtha’ dang mi ldan pa yang yin no || mtha’ dang ldan pa yang ma yin la mtha’ dang mi ldan pa yang ma yin no zhes bya ba ste | lta (D180b1) ba bzhi po ’di dag ni phyi ma’i mtha’ la brten (P204a) te ’jug pa yin no || de la bdag dang ’jig rten la ma[15] ’ongs pa’i skye ba ma mthong bas ’jig rten mtha’ dang ldan no zhes de ltar na[16] rtog pa ni[17] | phyi ma’i mtha’ la brten nas ’jug par ’gyur ro || de bzhin du ma ’ongs pa’i skye ba mthong bas (D180b2) ’jig rten mtha’ dang mi ldan no zhes ’jug cing | mthong ba dang ma mthong bas ni gnyi gar rtogs par ’gyur la | gnyi ga bkag pas ni mtha’ dang ldan pa yang ma yin mtha’ dang mi ldan pa yang ma yin no zhes bya bar (C178a) rtogs[18] par ’gyur ro ||

’jig rten rtag go || ’jig (D180b3) rten mi rtag go || ’jig rten rtag kyang rtag la[19] mi rtag kyang mi rtag go || rtag pa yang ma yin mi rtag pa (N204b) yang ma yin no zhes bya ba lta ba bzhi po ’di dag ni sngon gyi mtha’ la brten nas ’byung ba yin no || de la bdag dang ’jig rten la[20] ’das par skyes[21] pa mthong bas ’jig rten rtag (D180b4) go snyam du rtogs par ’gyur la | ma mthong bas ni mi rtag go snyam du rtogs par ’gyur ro || mthong ba dang ma mthong bas ni rtag kyang rtag la mi rtag kyang mi rtag go snyam du rtogs par ’gyur la | mthong ba yang ma yin ma mthong ba[22] yang ma yin pas ni[23] rtag pa yang ma yin mi (D180b5) rtag pa yang ma yin no snyam du rtogs par ’gyur ro ||

(G253a) lta ba ’di dag ji ltar rung bar ’gyur zhe na | gal te dngos po gang zhig la rang bzhin ’ga’ zhig yod na ni | de la dngos po dang dngos po med par[24] brtags pas lta ba ’di dag yod par ’gyur ba zhig na | gang gi tshe ’khor ba (D180b6) dang mya ngan las ’das pa gnyis la khyad par med par bstan pa de’i tshe |

dngos po thams cad stong pa la ||
mtha’ yod ci zhig mtha’ med ci ||

[1]par] DC; pa PNG [2]sngon] DCNG; mngon P [3]brten] DCNG; brtan P [4]||] DC; pa PG; | pa N [5]de] DC; om. PNG [6]nye] DCNG; nya P [7]bzhi] PNG; bzhin DC [8]pa] DC; om. PNG [9]gshegs] DCNG; geshegs P [10]chad] DPNG; mad C [11]grongs] DCPG; grangs N [12]no] DCPN; no | G [13]so] DC; pa’o PNG [14]||] DCNG; | P [15]ma] DC; om. PNG [16]na] DC; om. PNG [17]na] DPNG; ni C [18]rtogs] DC; rtog PNG [19]la] DCPN; om. G [20]la] PNG; las DC [21]skyes] DC; skye PNG [22]ba] DCNG; bar P [23]ni] DC; om. PNG [24]par] DC; pa PNG

mtha’ dang mtha’ med[1] ci zhig yin ||
mtha’ dang mtha’ med min pa ci || MMK 25.22
de nyid ci zhig gzhan ci yin ||
rtag pa ci zhig mi rtag ci ||
rtag dang mi rtag gnyi ga ci ||
(D180b7) gnyi ga min pa’ang ci zhig yin || MMK 25.23

lung[2] du ma bstan (P204b) pa’i dngos po bcu bzhi po ’di dag kyang dngos po’i rang gi ngo bo med na mi rigs pa nyid do || gang zhig dngos po’i rang gi ngo bo sgro btags te | de dang bral ba dang ma bral ba las lta ba ’di dag bskyed nas | mngon par zhen pa de’i mngon (D181a1) par zhen pa ’dis mya ngan las ’das pa’i grong khyer du ’gro ba’i lam ’gog cing | ’khor ba’i sdug bsngal dag la sbyor bar byed pa yin no zhes shes par bya’o ||

’dir smras pa | gal te de ltar khyod[3] kyis mya ngan las ’das pa yang bkag na | de ltar yin na | bcom (D181a2) ldan ’das sems can gyi phung po spyod pa mtha’ yas pa’i rjes su ’jug pa | ’gro ba’i bsam pa’i rang bzhin phyin ci ma log par thugs su chud (N205a) pa | thugs rje chen po’i[4] gzhan (C178b) dbang du gyur pas | ’jig rten gyi[5] mya ngan las ’das pa thob[6] par mdzad pa’i slad du | spyod pa’i (D181a3) gnyen por rjes su mthun pa’i (G253b) chos bstan pa gang yin pa de don med par ’gyur ro || brjod par bya ste | gal te chos zhes bya ba ’ga’ zhig gam | chos de’i nyan pa po’i sems can ’ga’ zhig gam | sangs rgyas bcom ldan ’das zhes bya ba ston pa po ’ga’ zhig yod na ni de’i tshe (D181a4) ’di de ltar ’gyur na | gang gi tshe |

dmigs pa thams cad nyer zhi zhing ||
spros[7] pa nyer zhi zhi ba ste ||
sangs rgyas kyis ni gang du yang ||
su la’ang chos ’ga’ ma bstan to || [8] MMK 25.24

ma gsungs pa de’i tshe kho bo cag la ji skad smras pa’i nyes par[9] thal bar ga la ’gyur | ’dir spros pa (D181a5) ste mtshan ma rnams gang nye bar zhi ba ste | mi ’jug pa gang yin pa de mya ngan las ’das pa yin la | nye bar zhi ba de nyid ni [10] zhi ba ste rang bzhin gyis nye bar zhi ba’i phyir ro || yang na tshig mi ’jug[11] pas spros pa[12] nyer zhi yin la | sems mi ’jug pas zhi ba’o || yang na nyon (D181a6) mongs pa rnams mi ’byung bas spros pa nyer zhi yin la [13] skye ba mi ’byung pas zhi ba’o || yang na nyon mongs pa spangs (P205a) pas spros pa nyer zhi yin la | bag chags ma lus par spangs pas zhi ba’o || yang na shes bya ma dmigs pas spros pa nyer zhi yin la | shes pa ma dmigs pas zhi (D181a7) ba’o || gang gi tshe de ltar sangs rgyas bcom ldan ’das rnams nam mkha’ la ngang pa’i[14] rgyal po dag rang gi gshog pa brdabs pa’i rlung la gnas pa’am | nam mkha’ ci yang ma yin pa nyid kyi phyir rlung nam mkha’ la gnas pa ltar | mya ngan las ’das pa spros pa thams cad (D181b1) nye par zhi zhing | zhi ba’i (G254a) ngo bo la mi gnas pa’i tshul gyis gnas pa | de’i tshe mtshan ma thams cad nye bar ma dmigs (N205b) pa’i phyir | gang du yang rung ste lha yul lam mi yul dag tu | lha’am mi su la yang kun nas nyon mongs pa’am

[1] med] DCPG; mad N [2] lung] CPNG; ’ung D [3] khyod] DC; khyed PNG [4] po’i] DCPN; po G [5] gyi] DC; gyis PNG [6] thob] DC; ’thob PNG [7] spros] CPNG; smros D; prapañca LVP [8] DC; ste | add. PNG [9] par] DC; pa PNG [10] PNG; nye bar add. DC [11] ’jug] DCNG; ’dug P [12] spros pa] DCPN; om. G [13] DC; | add. PNG [14] ngang pa’i] P; dang pa’i DCNG

rnam par byang[1] ba'i chos 'ga' yang ma bstan (D181b2) to zhes bya bar shes par bya'o ||

ji skad du | 'phags pa de bzhin gshegs pa'i[2] gsang ba'i mdo las |

zhi ba'i blo gros gang gi nub mo de bzhin gshegs pa bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par sangs rgyas pa dang | (C179a) gang gi nub mo[3] len pa (D181b3) mi mnga' bar yongs su mya ngan las 'das[4] par 'gyur ba de'i bar du | de bzhin gshegs pas tha na yi ge[5] 'bru gcig kyang ma gsungs so || rab tu ma gsungs so ||[6] gsung bar mi 'gyur ro ||[7] TG

zhes gsungs so || de bzhin du |[8]

thams cad tshig med yi ge med ||
gdod nas zhi zhing dri med stong ||
(D181b4) chos rnams de ltar sus shes pa ||
de ni gzhon nu sangs rgyas brjod || TG

ces gsungs so || gal te de ltar **sangs rgyas kyis gang du yang su la yang chos 'ga' yang[9] ma bstan** na | 'o na ji ltar gsung rab kyi tha snyad shin tu sna tshogs pa de dag mngon par 'gyur zhe na | brjod (D181b5) par bya ste | bcom ldan 'das 'dis[10] kho bo cag la chos 'di dag bstan to zhes bya ba 'di ni | lus can ma rig pa'i gnyid dang ldan zhing rmi lam rmi bzhin pa rnams (P205b) kyi rang gi rnam par rtog pa las byung ba yin no || ji skad du | bcom ldan 'das kyis |

de bzhin gshegs pa zag (D181b6,G254b) pa med pa yin[11] ||
dge ba'i chos kyi gzugs brnyan lta bu yin ||
de bzhin nyid dang de bzhin gshegs pa med ||
'jig rten thams cad kyi[12] ni gzugs brnyan mthong ||[13] JĀA II.10.2

zhes gsungs pa lta bu'o || de bzhin du 'di ni de bzhin gshegs pa'i gsang ba bstan pa'i le'u las rgya cher (D181b7) bstan pa yin te | de'i phyir mya ngan las 'das pa'i slad du chos bstan pa med pas chos bstan pa yod pa'i phyir | mya ngan las 'das pa yod pa nyid (N206a) du ga la 'gyur || de'i phyir mya ngan las 'das pa yang med do zhes bya ba grub po ||

bcom ldan 'das kyis[14] kyang |

mya ngan 'das (D182a1) med myang 'das su ||
'jig[15] rten mgon gyis bstan pa ste ||
nam mkha' mdud pa bor ba ni ||
nam mkha' nyid kyis bkrol ba yin || ACS

zhes gsungs pa yin no || de bzhin du |

[1]byang] DC; bya PNG [2]pa'i] DCNG; pa'a P [3]mo] DPNG; yo C [4]'das] DC; 'da' PNG [5]ge] DC; ga PNG [6]rab tu ma gsungs so ||] PNG; om. DC [7]||] em.; om. DCPNG [8]|] DCNG; om. P [9]yang] PNG; om. DC [10]'dis] DC; 'di PNG [11]yin] DC; yi PNG [12]kyi] DC; kyis PNG [13]||] DCG; | PN [14]kyis] DCNG; gyis P [15]'jig] DCPN; 'dzig G

bcom ldan ’das gang dag chos ’ga’ zhig skye ba’am[1] ’gag par ’tshal ba [2] de dag la (D182a2) ni sangs rgyas ’byung ba ma lags so || bcom ldan ’das gang dag ’khor ba dngos por ’tshal ba de dag ni | ’khor ba las ’da’ ba ma lags so || de ci’i slad du zhe na | bcom ldan ’das mya ngan las ’das pa zhes bgyi ba ni | gang (C179b) mtshan ma thams cad rab tu zhi ba | rnam par (D182a3) rtog pa thams cad ’gags[3] pa lags na |[4] bcom ldan ’das skyes bu blun po legs par gsungs pa’i chos ’dul ba la rab tu byung nas | mu stegs kyi lta bar lhung ba de dag ni | ’di lta ste | til las til mar dang | ’o ma las mar gsar ltar mya ngan las ’das pa dngos po (G255a) las (D182a4) tshol bar bgyid do || bcom ldan ’das gang dag chos thams cad shin tu mya ngan las ’das pa la | mya ngan las ’das pa ’tshol[5] ba mngon pa’i nga rgyal can de dag ni | mu stegs can yin no zhes kho bo gleng ste | bcom ldan ’das rnal ’byor spyod pa (P206a) yang dag par zhugs pa ni | chos gang (D182a5) yang skye ba’am ’gag par mi bgyid la | chos gang yang ’thob pa dang | mngon par rtogs[6] par mi ’tshal lo ||[7] VCBP

zhes rgya cher gsungs so ||

slob[8] dpon zla ba grags pa’i zhal snga nas sbyar ba’i tshig gsal ba las | mya ngan las ’das pa brtag pa zhes bya ba rab tu byed pa nyi shu rtsa[9] lnga (D182a6) pa’i ’grel ba’o ||

[1]ba’am] DC; ba ’am PN; ba ’um G [2]DC; | add. PNG [3]’gags] DCPG; ’ga N [4]|] DCNG; om. P [5]’tshol] DC; tshol PNG [6]rtogs] DC; rtog PNG [7]||] em.; om. DCPNG [8]slob] DCNG; slo P [9]rtsa] DCPN; om. G

第 8 章

Sanskrit Diplomatic Edition

8.1 Editorial Policy

In this chapter, the diplomatic edition of Potala manuscript will be given mainly due to its supposed familiarity with the archetype(s) of *Prasannapadā*. Compared with other manuscripts, ms. P is much more archaic and contains many better readings which correspond well to the Tibetan translation.

Due to the different purpose of the diplomatic edition with the critical one, some editorial policies are changed as follows:

1. The folio and line numbers of manuscripts are shown in the left margin.
2. *b* and *v*, being indistinguishable, are read according to expectation.
3. Syllables and *avagraha*s are recorded as authentically as possible.
4. Insertions are shown with < > sign. ˆ means the inserted words are added above. ˇ means the inserted words are added below
5. Erasures are also recorded.

8.2 Editorial Signs

·	illegible part of an *akṣara* due to physical damage
··	illegible *akṣara* due to physical damage
( )	uncertain reading
< >	inserted *akṣara*(s) in the Ms
ˆ	sign of insertion added above the line
ˇ	sign of insertion added below the line
{{ }}	contain *akṣara*(s) deleted by means of erasure
×	empty space in the manuscript, equivalent to the size of approximately one akṣara

’	*avagraha*
*	*virāma*[1]
|	*ekadaṇḍa*
||	*dvidaṇḍa*
¦	line-filling sign usually used at the start or end of a column and a line
°	line-filling sign usually used to indicate the very start of a chapter or a *śloka* of MMK
~	tilde used in the manuscript to fill a section of a line that does not allow for writing

8.3 The Diplomatic Edition of Ms.P of *Prasannapadā* Chap.25

P74b

P74b1 || ○ || atrāha | yadi śūnyam idaṃ sarvvam udayo nāsti na vyayaḥ | prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvvāṇam iṣyate || iha hi bhagavatā uṣitabrahmacaryāṇān tathāgataśāsanapratipannānān dhamm·nudha(r)mma

P74b2 pratipattiyuktānāṃ pudgalānāṃ dvividhan nirvvāṇam upavaṇṇitaṃ sopadhiśeṣan nirupadhiśeṣaṃ ca | tatra niravaśeṣasyāvidyārāgādikasya kleśagaṇasya prahāṇāt sopadhiśeṣan nirvvāṇam iṣyate || tatropadhīyate 'sminn ātmasneha ity upadhiḥ | upadhiśabdenātmapraptinimittāḥ pañcopādānaskandhā ucyante | śiṣyata iti śeṣaḥ | upadhir eva śeṣa upadhiśeṣaḥ | saha upadhiśeṣeṇa varttata iti sopa

P74b3 dhiśeṣaṃ | kiṃ tan nirvvāṇaṃ | tac ca skandhamātrakam eva kevalaṃ satkāyadṛṣṭyādikleśataskararahitam avaśiṣyate | nihatāśeṣacaura ¦ gaṇagrāmamātrāvasthānasādharmmeṇa tat sopadhiśeṣaṃ nirvvāṇaṃ | yatra tu nirvvāṇe skandhamātrakam api nāsti tan nirupadhiśeṣan nirvvāṇaṃ nirggata upadhiśeṣo 'sminn iti kṛtvā | nihatāśeṣacauragaṇasya grāmamātrasyāpi vināśasādharmmeṇa | tad eva cādhikṛtyocya

P74b4 te | abhedi kāyo nirodhi saññā vedaṇā yaccha rahiṃsu sabbā copaśamo saṃskārāṇām viññāṇam athegamed iti | tathā 'saṃlīnena kāyena vedanām adhivāsayan* | pradyotasyeva nirvvāṇaṃ vimokṣas tasya cetasa iti | tad evaṃ nirupadhiśeṣan nirvvāṇaṃ skandhānān nirodhāl labhyate | etac ca dvividha nirvvāṇaṃ kathaṃ yujyate | yadi kleśānāṃ skandhānāñ ca nirodho bhavati | yadā tu sarvvam idaṃ śūnyan naiva kiṃcid utpadyate nāpi

P74b5 kiṃcin nirudhyate | tadā kutaḥ kleśāḥ kuto vā skandhā yeṣān nirodhān nirvvāṇaṃ syād iti | tasmād vidyata eva bhāvānāṃ svabhāva iti× | atrocyate | nanv evam api sasvabhāvabhāvābhyupagame | yady aśūnyam idaṃ sarvvam udayo nāsti na vyayaḥ | prahāṇād vā nirodhād vā kasya nirvvāṇam i ¦ ṣyate || svabhāvena hi vyavasthitānāṃ kleśānāṃ skandhāˆ<nā>ñ ca svabhāvasyānapāyitvāt* | kuto nirvṛtiḥ | yatas tannivṛttyā nirvvāṇaṃ syā

P74b6 d iti | tasmāt svabhāvabhāvavādināṃ naiva nirvvāṇam upapadyate | na ca śūnyatāvādinaḥ kleśanivṛttilakṣaṇaṃ vā nirvvāṇam icchati | yata× ¦ s teṣāṃ doṣaḥ syād iti | ato 'nupālambha evāyaṃ śūnyatāvādināṃ | yadi khalu śūnyatāvādinaḥ | kleśānāṃ skandhānāṃ vā nivṛttilakṣaṇan nirvvāṇaṃ necchanti | kiṃlakṣaṇaṃ tarhīcchanti | ucyate aprahīṇam asaṃprāptam anucchinnam aśāśvātaṃ | aniruddham anutpannam eta

P74b7 n nirvvāṇam ucyate | yad dhi naiva prahīyate rāgādivat* | nāpi prāpyate | śrāmaṇyaphalavat* | nāpy ucchidyate skandhādivat* yac cāpi na nityam aśūnyavat* | tat svabhāvato 'niddham anutpannaṃ ca sarvvaprapañcopaśamalakṣaṇan nirvvāṇam uktaṃ | tat kutas tasminn itthamvidhe niṣprapañce

kleśakalpanā yeṣāṃ kleśānāṃ prahāṇāt tan nirvvāṇam bhavet* | kuto vā skandhakalpanā tatra yeṣāṃ skandhāṃ nirodhāt tad bhavet* |

P74b8 ~ yāvad dhy etāḥ kalpanāḥ pravarttante tāvan nāsti nirvvāṇādhigamaḥ | sarvvaprapañcakṣayād eva tadadhigamāt* | atha syād yady api nirvvāṇe na santi kleśāḥ | nā cāpi skandhās tathāpi nirvvāṇād arvvāg vidyante | tatas teṣāṃ parikṣayān nirvvāṇam bhaviṣyatīti | ucyate | tyajyatām ayaṃ grāho yasmān na nirvvāṇād arvvāk* svabhāvato vidyamānānāṃ

P74b9 ~ punar abhāvaḥ śakyate kartuṃ | tasmān nirvvāṇābhilāṣiṇā tyājyaiṣā kalpanā | bhakṣyati hi | nirvvāṇasya yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca | na tayor antaraṅ kiñcit susūkṣmam api vidyata iti | tad eva nirvvāṇe na kasyacit prahāṇan nāpi kasyacin nirodha iti vijñeyaṃ | tataś ca niravaśeṣaka

P75a

P75a1 lpanākṣayarūpam eva nirvvāṇaṃ | uktaṃ ca bhagavatā | nirvvitti dharmāṇa na asti dharmā ye neha nāsti na te jātu asti | astīti nāstīti ca kalpanāvatām evaṃ carantāna na duḥkha śāmyatīti | asyā gāthāyā ayam arthaḥ | nirvṛtau nirupadhiśeṣe nirvvāṇadhātau dharmmāṇāṃ kleśakarmmajanmalakṣaṇānāṃ skandhānāṃ vā sarvvathāstaṃgamād astitvan nāsti | etac ca sarvvavādinām abhimataṃ | ye tarhi dharmmā iha nirvṛtau na santi | pradī

P75a2 podayād andhakāropalabdharajjusarpabhayādivan na te jātu asti na te dharmmāḥ | kleśakarmmajanmalakṣaṇāḥ kasmiṃścit kāle saṃsārāvasthāyām api tattvato vidyante | na hi rajjvām andhakārāvasthāyāṃ svarūpatas sarpo 'sti | sadbhūtasarpavad andhakāre py āloke pi kāyacakṣurbhyāṃ | agrahaṇāt* | kathan tarhi saṃsāra iti ced ucyate | ātmātmīyāsadviparyāsagrahastānām bālapṛthagjanānām asatsvarūpā a

P75a3 pi bhāvāḥ satyataḥ pratibhāsante taimirikāṇām ivāsatkeśamaśakādaya ity āha | astīti nāstīti ca kalpanāvatām evaṃ carantāna na duḥkha śāmyatīti | astīti bhāvasadbhāvakalpanāvatāṃ | vaiśeṣikakaṇādakāpilakādīnāṃ vaibhāṣikaparyantānāṃ nāstīti kalpanāvatāṃ nāstikānām apāyagatiniṣṭhānāṃ tadanyeṣāṃ cātītānāgatasaṃsthānā'vijñaptiviprayukta-saṃskāranāstivādināṃ tadanyāsti

P75a4 vādināṃ paratantraparinispannasvabhāvayor astivādinām evam astināstivādinām evaṃ carantāna na duḥkhasaṃsāraḥ śāmyatīti | tathā | yatha saṃki{{ṃ}}tena viṣasaṃjñata abhyupaiti no cāpi koṣṭhagatu so viṣu pātyate ca | evam eva bālu pagato aṅgamahya eṣo saṃjñāya jāyi mriyate ca sadā abhūto iti | tad evan na kasyacin nirvvāṇe prahāṇaṃ nāpi kasyacin nirodha iti vijñeyaṃ | tataś ca sarvvakalpanākṣa

P75a5 yarūpam eva nirvvāṇaṃ | yathoktam āryaratnāvalyāṃ | na cābhāvo pi nirvvāṇaṃ kuta evāsya {{bhāvāsya{{|}} bhāvatā | bhāvābhāvaparāmarṣakṣayo nirvvāṇam ucyat{{e}}a {{|}} iti ya tu sarvvakalpanopaśamarūpan nirvvāṇam apratipadyamānā bhāvābhāvatadubhayarūpaṃ nirvvāṇaṃ parikalpayanti | tān* pratyucyate | bhāvas tāvan na nirvvāṇaṃ jarāmaraṇalakṣaṇaṃ | prasajyate 'sti bhāvo hi na jarāmaraṇam vinā || tatraike bhāvato

P75a6 nirvvāṇam abhiniviṣṭhā | evam ācakṣate | iha kleśakarmmajanmasantānapravṛttiniyatarodhabhūto jalapravāharodhabhūtasetusthānīyo nirodhātmakaḥ | padārtho nirvvāṇaṃ na cāvidyamānasvabhāvo

dharmma evaṃ kāryakārī dṛśyate | nanu ca yo 'syā nandīrāgasahagatāyās tṛṣṇāyāḥ | kṣayo virāgo nirodho nirvvāṇam ity uktaṃ na ca kṣayamātraṃ | bhāvo bhavitum arhati | tathā pradyotasyeva nirvvāṇaṃ

P75a7 vimokṣas tasya cetasa ity uktaṃ | na ca pradyotasya nivṛttir bhāva ity upapadyate | ucyate | naitad evam vijñeyaṃ | tṛṣṇāyāḥ | kṣayas tṛṣṇākṣaya iti | kiṃ tarhi tṛṣṇāyāḥ kṣayo 'smin nirvvāṇākhye dharmme sati bhavati | sa tṛṣṇākṣaya iti vaktavyaḥ | pradīpaś ca dṛṣṭāntamātraṃ | tatrāpi yasmin siti | cetaso vimokṣo bhavatīti veditavyam ity evaṃ bhāve nirvvāṇe vyava ∼

P75a8 sthāpyate | ācāryo nirūpayati | bhāvas tāvan na nirvvāṇam iti | kiṃ kāraṇaṃ yasmāt* jarāmaraṇalakṣaṃ prasajyate | bhāvasya jarāmaraṇalakṣaṇāvyabhicāritvāt* | tataś ca nirvvāṇam eva tan na syāt* | jarāmaraṇalakṣaṇatvād vijñānādivad ity abhiprāyaḥ | tām eva ca jarāmaraṇa ∼

P75a9 lakṣaṇāvyabhicāritāṃ spaṣṭayann āha | asti bhāvā ti na jarāmaraṇaṃ vineti | yo hi jarāmaraṇarahitaḥ sa bhāva eva na bhavati | khapuṣpavaj jamaraṇarahitatvāt* | kiṃ cānyat* | bhāvaś ca yadi nirvvāṇan nirvvāṇaṃ saṃskṛtam bhavet* | ∼

P75b

P75b1 ∼ nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ | kvacana kaścana || yadi nirvvāṇaṃ bhāvaḥ syāt tadā tan nirvvāṇaṃ | saṃskṛtaṃ bhaved vijñānādivad bhāvāt* | yas tv asaṃskṛto nāsau bhāvaḥ | tad yathā kharaviṣāṇādivad iti | vyatirek{{e}}am upadarśayann āha | nāsaṃskṛto vidyate hi bhāvaḥ kvacanety adhi ∼

P75b2 karaṇe deśa kāle siddhānte vā kaścanety ādhey{{e}}a ādhyātmiko bāhyo v{{ā}}ety arthaḥ | kiṃ cānyat* | bhāvaś ca yadi nirvvāṇam anupādāya tat kathaṃ | nirvvāṇaṃ nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyate || yadi bhavanmatena nirvvāṇaṃ bhāvaḥ syāt tad upādāya bhavet* | svakāraṇasāmagrīm āśritya bhaved ity arthaḥ | na caivam upādāya nirvvāṇam iṣyate | kiṃ tarhy anupādāya tad yadi bhāvo nirvvāṇam anupādāya tat kathaṃ nirvvāṇaṃ syān naivānu

P75b3 pādāya syāt* bhāvatvād vijñānādivat* | vyatirekakāraṇam āha | nānupādāya kaścid bhāvo hi vidyata iti | atrāha | satyaṃ bhāvo na nirvvāṇaṃ | yathoditadoṣaprasaṃgāt* | kiṃ tahy abhāva eva nirvvāṇaṃ | kleśajanmanivṛtimātratvavad iti | ucyate | etad apy ayuktaṃ yasmāt* | bhāvo yadi na nirvvāṇam abhāvaḥ | kiṃ bhaviṣyati | nirvvāṇaṃ yatra bhāvo na nābhāvas tatra vidyate || yadi bhāvo nirvvāṇaṃ neṣyate | yadi nirvvā

P75b4 ṇaṃ bhāva iti neṣyate tadā kiṃ bhāvo bhaviṣyati nirvvāṇaṃ | abhāvo pi na bhaviṣyatīty abhiprāyaḥ | kiṃ kāraṇaṃ yasmān nirvvāṇaṃ yatra bhāvo na abhāvas tatra vidyate | iha hi bhāvaḥ svabhāvaparityāgād anyathā bhavann abhāva iti vyapadiśyate | yatra ˇ<ca> pakṣe nirvvāṇaṃ bhāvo na bhavati vihitadoṣatvāt* | tatra pakṣe 'bhāvo pi nirvvāṇaṃ na bhavati | bhāvasvarūpeṇāsiddharūpasyābhāv{{ā}}arūpat{{o}}ānupa

P75b5 patter ity abhiprāyaḥ | kleśajanmanor abhāvo nirvvāṇam iti ced evaṃ tarhi kleśajanmanor anityatā nirvvāṇam iti syāt* | anityataiva hi kleśajanmanor abhāvo nānyad ity ato 'nityataiva nirvvāṇaṃ syāt* | na caitad iṣṭaṃ | ayatnenaiva mokṣaprasaṃgād ity ayuktam evaitat* | kiṃ cānyat* | yady abhāvaś ca nirvvāṇam anupādāya tat kathaṃ | nirvvāṇaṃ na hy abhāvo sti yo nupādāya vidyate || tatrābhāvo

P75b6 'nityatā bhāvaṃ copādāya prajñapyate | kharaviṣāṇādīnām anityatānupalambhāt* | lakṣaṇam āśritya lakṣya{{ṃ}}m āśritya ca lakṣaṇaṃ | ataḥ parasparāpekṣikāyāṃ lakṣyalakṣaṇavṛttau kuto lakṣyaṃ bhāvam anapekṣyānityatā bhaviṣyati | tasmād abhāvo py upādāya prajñapyate | tato yady abhāvaś ca nirvvāṇaṃ tat katham anupādāya nirvvāṇaṃ bhaved upādāyaiva tad bhavet* | abhāvatvād vināśavat*

P75b7 etad eva spaṣṭayann āya | na hy abhāvo sti yo nupādāya vidyata iti | yadi tarhy abhāvo nupādāya nā{{sti}} kim idānī{{ṃ}}m upādāya vandhyāputrādayo 'bhāvā bhaviṣyanti | kenaitad uktaṃ vandhyāputrādayo 'bhāvā iti | uktaṃ hi pūrvvam bhāvasya ced aprasiddhir abhāvo naiva sidhyati | bhāvasya hy anyathābhāvam abhāvaṃ bruvate janā iti | tasmān na vandhyāputrādīnām abhāvatvaṃ | yatrāpy ucyate | ākāśaṃ

P75b8 śaśaśṛṅgaṃˆ<ñ ca>vandhyāyāḥ putra eva ca | asantaś cābhilapyante tathā bhāve kalpaneti | atrāpi bhāvakalpanāpratiṣedhamātraṃ nābhāvakalpanā bhāvatvāsiddher eveti jñeyaṃ ∼

P76a

P76a1 ∼ vandhyāputra iti śabdamātram evaitan nāsyārtha upalabhyate | yasyārthasya bhāvatvaṃ va(stu)bhāvatvaṃ syād iti | kuto nupalabhyamānasvabhāvasya bhāvābhāvakalpanā yokṣyate | tasmān na vandhyāputro 'bhāva iti vijñeyaṃ | tataś ca sthitam etan na hy abhāvo sti yo 'nupādāya vidyata iti | atrāha | yadi bhāvo nirvvāṇan na bhavaty{{i}} abhāvo pi kiṃ tarhi nirvvāṇam ity ucyate ∼

P76a2 iha hi bhagavadbhiḥ | tathāgataiḥ ˇ<ya> ājavaṃjavībhāva upādāya pratītya vā | so 'pratītyānupādāya nirvvāṇam upadiśyate || tatrājavaṃjavībhāva āgamanagamanabhāvo janmamaraṇaparamparety arthaḥ | sa cāyam ājavaṃjavībhāvaḥ kadācit tu pratyayasāmagrīm āśrityāstīti prajñapyate | dīrghahrasvavata | kadācid utpadyata iti prajñapyate pradīpaprabhāvavat* | bījāṃkuravat* | sarvvathā yady ayam upādā

P76a3 ya prajñapyate | yā vividhā pratītya jāyata iti | vyavasthāpyate 'sya janmamaraṇaparaṃparāprabandhasyāpratītya vā 'nupādāya vā 'pravṛttis tan nirvvāṇam iti vyavasthāpyate | na cāpravṛttimātraṃ bhāvo 'bhāvo veti parikalpayituṃ pāryata iti | evaṃ na bhāvo nābhāvo nirvvāṇaṃ atha vā yeṣāṃ saṃskārāḥ saṃsarantīti pakṣas teṣāṃ pratītyāpratītya ya utpādaś ca vināśaś ca so 'pratītyāpravarttamāno ni

P76a4 rvvāṇam iti kathyate yeṣāṃ tu pudgalaḥ saṃsarati teṣāṃ tasya nityānityatvenāvācyasya tat tad upādānam āśritya ya ājavaṃjavībhāvaḥ sa up{{o}}ādāya pravarttate | sa evopādāya pravarttamānaḥ | sann idānīm anupādāyāpravarttamāno nirvvāṇam iti vyapadiśyate | na ca saṃskārāṇāṃ pudgalasya vā 'pravṛttimātraṃ bhāvo 'bhāvo veti śakyaṃ parikalpayitum ity ato pi na bhāvo nirvvāṇam iti yujyate | kiṃ

P76a5 cānyat* | prahāṇaṃ cābravīc chāstā bhavasya vibhavasya ca | tasmān na bhāvo nābhāvo nirvvāṇam iti yujyate || tatra sūtra uktam | ye kecid bhikṣavo bhavena bhavasya niḥsaraṇaṃ paryeṣante | vibhavena vā 'parijñānaṃ tat teṣām iti | ubhayaṃ hy etat parityājyaṃ | bhavatṛṣṇā vibhavatṛṣṇā ca | na caitan nirvvāṇaṃ prahātavyam uktaṃ bhagavatā kiṃ tarhy aprahātavyaṃ | tad yadi nirvvāṇaṃ bhāvarūpaṃ

vā | tad api prahātavyaṃ bhavaty eva

P76a6 | na ca prahātavyaṃ | tasmān na bhāvo nābhāvo nirvvāṇam iti yujyate | yeṣām api kleśajanmanos tatra bhāvād abhāvarūpaṃ nirvvāṇaṃ svayañ ca bhāvatvād bhāvarūpam ity ubhayarūpaṃ teṣām ubhayam api nirvvāṇaṃ nopapadyata iti pratipādayann āha || bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvvāṇam ubhayaṃ yadi | bhaved abhāvo bhāvaś ca mokṣas tac ca na yujyate || yadi bhāvābhāvobhayarūpaṃ nirvvāṇaṃ syāt tadā bhāvaś ca mokṣa i

P76a7 ti syāt* | tataś ca yaḥ saṃskārāṇām ātmalābhas tasya ca vigamaḥ | sa eva mokṣaḥ syān na ca saṃskāra eva mokṣa iti yujyate ata evāha | tac ca yujyata iti | ki cānyat* | bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvvāṇam ubhayaṃ yadi | nānupādāya nirvvāṇam upādāyobhayaṃ hi tat* || yadi bhāvābhāvarūpaṃ nirvvāṇaṃ syāt tadā hetupratyayasāmagrīm upādāyāśritya bhaven nānupādāya | kiṃ kāraṇaṃ yasmāt* | upā

P76a8 dāyobhayaṃ hi tat* | bhāvam upādāyābhāvo 'bhāvaṃ copādāya bhāva iti kṛtvā | ubhayam etad bhāvaṃ cābhāvañ copādāyaivaṃ bhavati nānupādāya | evaṃ nirvvāṇaṃ bhaved bhāvābhāvarūpatvān na caitad evam iti na yuktam etat* | kiṃ cānyat{{*}} | bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvvāṇam ubhayaṃ kathaṃ asaṃskṛtaṃ hi nirvvāṇaṃ nirvvāṇaṃ bhāvābhāvau ca saṃskṛtau || bhāvo hi svahetupratyayasāmagrīsaṃbhūtatvāt* saṃskṛtaḥ | abhāvo pi bhā

P76a9 ∼ bhāvaṃ pratītya sambhūtatvāj jātipratyayaṃ jarāmaṇam iti vacanāc ca saṃskṛtas tad yadi bhāvasvabhāvaṃ nirvvāṇaṃ syāt tadā nāsaṃskṛtam eva tat* syāt* | na ca saṃskṛtam iṣyate | tasmān na bhāvābhāvarūpaṃ nirvvāṇaṃ yujyate | athāpi syāt* | naiva hi nirvvāṇaṃ bhāvābhāvasva{{bhā}}rūpaṃ | kiṃ tarhi nirvvāṇe bhāvābhāvāv iti | evam api na yuktaṃ | kuto yasmāt* | bhaved abhāvo

P76b

P76b1 bhāvaś ca nirvvāṇe ubhayaṃ kathaṃ | tayor abhāvo hy ekatra prakāśatamasor iva || yathā hy ālokāndhakārayor{{o}} ekadā ekatra veśmani parasparaviruddhayor asambhavaḥ | evaṃ bhāvābhāvayor api parasparaviruddhayor ekatra nirvvāṇe nāsti sambandha ity ato bhaved abhāvo bhāvaś ca nirvvāṇe uyayaṃ kathaṃ | naiva bhaved ity abhiprāyaḥ | idānīṃ yathā naiva bhāvo naivābhāvo nirvvāṇaṃ yujya<te> tathā pratipādayann āha | naivābh{{o}}ā

P76b2 vo naiva bhāvo nirvvāṇam iti yāñjanā | (a)bhave caiva bhāve ca sā s{{i}}addhe sati sidhyati || yadi hi bhāvo nāma kaścita syāt syāt tadā tatpratiṣedhena naiva bhāvo nirvvāṇam ity eṣā kalpanā | yadi ca kaścid abhāvaḥ syāt tadā tatpratiṣedhena naivābhāvo nirvvāṇaṃ syāt* | yadā ca bhāvābhāvāv eva na stas tadā tatpratiṣedho pi nāstīti tasmān naivābhāvo naiva bhāvo nirvvāṇam iti yā kalpanā sāpi nopapa

P76b3 dyate eveti na yuktam etat* | kiṃ cānyat* | naivābhāvo naiva bhāvo nirvvāṇaṃ yadi vidyate | naivābhāvo naiva bhāva iti kena tad ajyate || yad etan nirvvāṇaṃ yadi naivābhāvaṃ naiva bhāvarūpam astīti parikalpyate | kenedīnīṃ tad itthaṃvidhan nobhayarūpaṃ nirvvāṇam astīty ajyate | gṛhyate | prakāśyate vā kiṃ tava nirvvāṇe kaścid evaṃvidhaḥ pratipattā 'sti atha nāsti | yady asty evaṃ sati nirvvāṇe pi tavā

P76b4 tmā syān na ceṣṭan nirūpādānasyātmano 'stitvābhāvāt* | atha nāsti tadā kena tad itthamvidhan nirvvā-

ṇam astīti paricchidyate | saṃsārāvasthitaḥ paricchinattīti ced yadi saṃsārāvasthitaḥ paricchinatti | sa kiṃ vijñānena paricchinatti | uta jñānena | yadi vijñāneneti parikalpyate | tan na yujyate | kiṃ kāraṇaṃ yasmān nimittālambanaṃ vijñānaṃ na ca nirvvāṇe kiṃcin nimittam asti | tasmān na nat tāvad vijñānenā

P76b5 laṃbyate | jñānanāpi na jñāyate | kiṃ kāraṇaṃ | yasmāt* jñānena hi śūnyatālambanena bhavitavyaṃ | tac cānutpādarūpam eveti | kathaṃ tenāvidyamānasvarūpeṇa naivābhāvo naiva bhāvo nirvvāṇam iti gṛhyate | sarvvaprapañcātītarūpatvāt* jñānasyeti | tasmān na kenacin nirvvāṇan naivābhāvo naiva bhāva iti vyajyate | anajyamānam aprakāśyamānam agṛhyamāṇaṃ tad evam astīti na yujyate | sa

P76b6 rvvathā yathā nirvvāṇe etāś catasraḥ kalpanā na sambhavanti | evaṃ nirvvāṇādhigantary api tathāgate etāḥ kalpanā na sambhavatīti pratipādayann āha | paran nirodhād bhagavān bhavatīty eva nājyate | na bhavaty ubhayam ceti nobhayaṃ veti nājyate || uktaṃ hi pūrvvaṃ ghanagrā ¦ ho gṛhītas tu yenāstīti tathāgataḥ | nāstīti vā vikalpaṃ sa nirvṛtasya vikalp{{e}}ayed iti | evaṃ tāvat paraṃ nirodhād bhavati

P76b7 tathāgato na bhavati ceti nājyate | etat* dvayasyābhāvād ubhayam ity api nājyate | ubhayasyābhāvād eva | nobhayam iti nājyate | na ca gṛhyate | na ca kevalaṃ paraṃ nirodhāc caturbhiḥ prakārair bhagavān nājyate | api ca | tiṣṭhamāno pi bhagavān* bhavatīty eva nājyate | na bhavaty ubhayaṃ veti nobhayaṃ veti nājyate || yathā ca nājyate tathā tathāgataparīkṣāyāṃ pratipāditam ata eva |

P76b8 na saṃsārasya nirvvāṇāt* kiṃcid asti viśeṣaṇaṃ | na nirvvāṇasya saṃsārāt kiṃcid asti viśeṣaṇaṃ || yasmāt tiṣṭhann api bhagavān bhavatīty evamādinā nājyate | parinirvṛto pi nājyate | bhavatīty evamādinā | ata eva saṃsāranirvvāṇayoḥ | parasparato nāsti kaścid viśeṣo vicāryamāṇayos tulyarūpatvāt* | yac cāpīdam uktaṃ bhagavatā | anavarāgro bhikṣavo jātijarāmaṇasaṃ

P76b9 ∼ sāra iti | tad apy ata eva nopapannaṃ | saṃsāranirvvāṇayo viśeṣasyābhāvāt tathā hi nirvvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca | na tayor antaraṃ kiṃcit susūkṣmam api vidyate || na kevalaṃ saṃsārasya nirvvāṇenāviśiṣṭatvāt* pūrvvāparakoṭikalpanā na sambhavati ∼

P77a

P77a1 yā apy etāḥ | paraṃ nirodhād antādyāḥ śāśvatādyāś ca dṛṣṭayaḥ | nirvvāṇam aparāntaṃ ca pūrvāntañ ca samāśritāḥ || tā apy eta eva nopapadyante | saṃsāranirvvāṇayor ubhayor api prakṛtiśāntatvenaikarasatvāt* | tatra paraṃ nirodhād ity anenopalakṣaṇena catasro dṛṣṭayaḥ parigṛhyante | tad yathā bhavati | tathāgataḥ | paraṃ maraṇāt* | na bhavati tathāgataḥ | param maraṇāt* | bhavati ca na bhavati ca

P77a2 tathāgataḥ | paraṃ maraṇāt* | naiva bhavati na na bhavati tathāgataḥ | paraṃ maraṇād iti | etāś catasro dṛṣṭayo nirvvāṇaprarāmarśena pravṛttāḥ | antādyā api catasro dṛṣṭayas tad yathā 'ntavān* loko 'nanta loko 'ntavāṃś cānantavāṃś c{{o}}a naivāntavān nānantavān* loka iti | etāś catasro dṛṣṭayo 'parāntaṃ samāśritya pravṛttāḥ | tatrātmano lokasya cānāgatam utpādam apaśyann antavān*

P77a3 loka ity evaṃ kalpayann aparāntam ālambya pravarttate | evam anāgatam utpādam paśyann anantavān loka iti pravarttate | paśyẏāś cāpaśyẏāś cobhayathā pratipadyate | dvayapratiṣedhenaivāntavān nān{{t}}antavān iti pratipadyate | śāśvato loko 'śāśvato lokaḥ śāśvataś cāśāśvataś ca naiva śāśvato

nāśāśvato loka ity etāś catasro dṛṣṭayaḥ pūrvvāntaṃ samāśritya pravarttante | tatrā ¦

P77a4 tm{{ā}}ano lokasya cātītam utpādam ap{{y}}aśyan śāśvato loka iti prapadyate | paśyann aśāśvata iti pratipadyate | paśyy̆ ¦ ś cāpaśyy̆śś ca śāśvataś cāśāśvataś ceti pratipadyate | naiva paśyan nāpaśyan naiva śāśvato nāśaśvataś ceti pratipadyate | pūrvvāntam āśritya tāś caitā dṛṣṭayaḥ kathaṃ yujyante | yadi kasyacit padārthasya kaścit svabhāvo bhavet tasya bhāvābhāvakalpanāt syur e

P77a5 tā dṛṣṭayaḥ | yadā tu saṃsāranirvvāṇayor aviśeṣaḥ pratipāditas tadā | śūnyeṣu sarvvadharmmeṣu kim antaṃ kim anantavat* | kim antavac cānantañ ca nānantaṃ nāntavac ca kiṃ || kin tad eva kim anyat ki śāśvataṃ kim aśāśvataṃ | aśāśvataṃ śāśvataṃ ca kiṃ vā nobhayam apy atha | || caturdaśāpy etāny avyākṛtavastūni | asati bhāvasvarūpe naiva yujyante | yas tu bhāvasvarūpam adhyāropya tadvigamāvi

P77a6 gamata e{{va}}tā dṛṣṭīr utpādyābhiniviśat{{o}}e | tasyāyam abhiniveśo nirvvāṇagāminaṃ panthānaṃ ruṇaddhi | sāṃsārikeṣu ca duḥkheṣu niyojayatīti vijñeyaṃ | nanu ca ya eṣa bhagavatā 'nantacaritasatvarāśyanuvarttakena viditāviparītasakalajagadāśayasvabhāvena mahākaruṇāparatantreṇa pr{{e}}iyaikaputrakapremānugatāśeṣatribhuvaja-nena caritapratipakṣānurūpo dha

P77a7 rmo deśito lokasya nirvvāṇādhigamārthaṃ | sa evaṃ sati vyarthaka eva jāyate | ucyate | yadi kaścid dharmo nāma svarūpataḥ syāt* kecic ca satvās tasya dharmmasya śrotāraḥ syuḥ kaścid vā deśayitā buddho bhagavān nāma bhāvasvabhāvataḥ syāt tadā syād etad evaṃ yadā tu | sarvvopalambhopaśamaḥ prapaṃcopaśamaḥ śivaḥ | na kvacit k{{ā}}asyacit kaścid dharmo buddhena deśitaḥ || tadā kuto

P77a8 'smākaṃ yathoktadoṣaprasaṃgaḥ | iha sarvveṣāṃ prapañcānāṃ nimittānāṃ ya upaśamo 'pravṛttis tan nirvvāṇaṃ sa eva copaśamaḥ | prakṛtyaivopaśāntatvāc chivaḥ | vācām apravṛtter vvā prapañcopaśamaḥ | cittasyāpravṛtteḥ | śivaḥ | kleśānām apravṛtter vvā prapañcopaśamo janmāpravṛttyā vā | śivaḥ kleśaprahāṇena vā | prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena

P77b

P77b1 ∼ vā | prapañcopaśamo niravaśeṣavāsanāprahāṇena vā śivo jñeyānupalabdhyā vā prapañcopaśamaḥ | jñānānupalabdhyā śivaḥ | yadā caivaṃ buddhā bhagavantaḥ sarvvaprapañcopaśamaśāntarūpe nirvvāṇe śivo 'sthānayogena sthitā nabhasīva haṃsarājāno 'sthitāḥ | svapuṇyajñānasambhārapakṣapātavāte | vātaś ca ∼

P77b2 gagane gaganaṃ cākiṃcanatvāt tadā sarvvanimittānupalambhān na kvacid deveṣu vā manuṣyeṣu vā na kasyacid devasya vā manuṣyasya vā na kaścid dharmmaḥ sāṃkleśiko vā vaiyavadāniko vā deśita iti vijñeyaṃ | yathoktam āryatathāgataguhyasūtre | yāṃ ca rātriṃ śāntamate tathāgato 'nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambuddho yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvvāsyati | atrāntare tathāgatena ekam apy akṣaraṃ

P77b3 nodāhṛtaṃ nāpi vyāharati | nāpi vyāhariṣyati | atha ca yathādhimuktāḥ sarvvasatvā nānādhātvāśayās tāṃ tāṃ vividhāṃ tathāgatavācaṃ niścarantīṃ saṃjānanti | teṣām eva pṛthak pṛthag bhavati | ayaṃ bhagavān asmadbhyo 'mun dharmmaṃ deśayati | vayan tathāgatasya dharmmadeśanāṃ śṛṇumaḥ | tatra tathāgato na kalpayati | na vikalpayati | sarvvakalpavikalpajālavāsanāprapañcavigato hi

śāntam{{e}}ate tathāga

P77b4 ta iti vistaraḥ | tathā 'vāco 'nakṣarāḥ sarvve śūnyāḥ śāntādinirmalāḥ ya eva jānatī dharmmān* kumārā buddha socyat{{e}}a iti yadi tarhy evaṃ na kvacit kasyacid dharmmo buddhena deśitaḥ | tatra katham ime 'tivicitrāḥ pravacanavyavahārāḥ prajñāyante | ucyate | avidyānidrānugatānāṃ dehināṃ svapnāyamānām iva svavikalpābhyudaya eṣaḥ | ayaṃ bhagavān sakalatribhuvanasurāsuranarā 'tha iman dharmmam a

P77b5 smādbhyo deśayatīti | yathoktaṃ bhagavatā | tathāgato hi pratibimbabhūtaḥ kuśalasya dharmmasya anāsravasya | naivātra tathatā na tathāgato 'sti bimbañ ca saṃdṛśyati sarvvaloka iti | etac ca tathāgatavāguhyaparivartta vistareṇa vyākhyātaṃ | tataś ca nirvvāṇārthan dharmmadeśanāyā ābhāvāt kuto dharmmadeśanānāṃ sadbhāvena nirvvāṇasyāstitvaṃ bhaviṣyati | tasmān nirvvāṇam api nāstīti siddhaṃ |

P77b6 uktañ ca bhagavatā | anirvvāṇaṃ hi nirvvāṇaṃ lokanāthena deśitaṃ | ākāśena kṛto granthir ākānaiva mocita iti | tathā na teṣāṃ bhagavan* buddhotpādo ye kasyacid dharmmasya utpādaṃ vā nirodhaṃ vā icchanti | na teṣā bhagavan* saṃsārasamatikramo ye nirvvāṇaṃ bhāvataḥ paryeṣante | tat kasya heto nirvvāṇam iti bhagavan* yaḥ praśamaḥ sarvvanimittānām uparati sarvve'ñjitasañcitānāṃ tad ime bha<ga>van* mohapurūṣāḥ svā

P77b7 khyāte dharmmavinaye pravrajya tīrthikadṛṣṭau nipatitā nirvvāṇaṃ bhāvataḥ paryeṣante | tad yathā tilebhyas tailaṃ kṣīrāt sarpiḥ | atyantaparinirvṛteṣu bhagavan* sarvvadharmmeṣu ye nirvvāṇaṃ mārgganti tān aham ābhimānikāṃs tīrthikān iti vadāmi | na bhavan* yogācāraḥ samyakpratipannaḥ kasyacid dharmmasyotpādaṃ vā nirodham vā karoti | nāpi kasyacid dharmmasya prāptim icchati nābhisamaya iti vistaraḥ | ārcāryacandrakīrtti

P77b8 pādoparacitāyāṃ prasannapadāyāṃ madhyakavṛttau nirvvāṇaparīkṣā nāma pañcaviṃśatitamaṃ prakaraṇaṃ ||

第 9 章

Table of Scripts

9.1 Introduction

In the study of stemma and the critical edition, it has been shown that ms. O, ms. P, and ms. R are the best witnesses of *Prasannapadā*, which contain unique but uncorrupted readings not witnessed by any other manuscripts.

In this chapter, I shall provide the tables of scripts of these three manuscripts. All of the photos of *akṣara*s are sharpened and brightened by *Photoshop* software.

9.2 Oxford Manuscript

Vowels

(102b1) a (103a1) ā (103a3) i
(104a2) u (104b7) e

ka

(104b7) ka (105a2) kā 2(105a4) kā
3(102b7) kā (105b1) ki (106b5) kī
(103a4) ku 2(103b7) ku (104b4) kṛ
(102a5) ke (105b2) ko 2(103b2) ko
(106a6) kta (106a7) ktā (106b4) kra
(102a5) kle (106a5) kva (102a2) kṣa
(106b6) kṣā (103b7) kṣi (106b5) kṣī
(103a1) kṣu (103b5) kṣe (103a7) kṣo
(102b5) kṣma (103b7) kṣya (103b7) kṣyā
(103b7) kṣyāṃ

kha

(102b6) kha (106a1) khe (103a6) khye

ga

(104a4) ga (106b5) gā (106a6) gu
(105a2) gṛ (106a5) ge (103a5) go
(103a1) gra (105a6) grā (103b3) grī

gha

(105a6) gha

ṅa

(103a3) ṅki (106a3) ṅga (103b4) ṅgā

ca

(103b7) ca (104a4) cā (104a4) ci
2(102b5) ci (105a3) ce (106a4) co
(103b3) cai (102a6) cau (102a7) cca
(105a4) ccā (102b2) ccha (102b3) cchi
(102b1) cya

ja

(106a2) ja (106a2) jā (104b5) jjā
(102b7) jju
(102b7) jjvā (103a2) jña (103a3) jñā
(103a3) jñi (103a3) jñe (104b2) jya
(103a4) jye

ña

(106b6) ñca (106a3) ñcā (105a4) ñci
2(102b5) ñci (102b3) ñce (106a3) ñco
2(102a4) ñco (105a1) ñja (106b4) ñji
(106b6) ñśa

ṭa

(102b5) ṭi

ṇa

(102a4) ṇa (102a4) ṇā (102a5) ṇā

(102b5) ṇe 2(103a3) ṇe (105a4) ṇai
(106a5) ṇya

ta

(102a4) ta (102b2) tā (102b5) ti
2(102b5) ti (102b6) tī 2(103b5) tī
(102b7) tu (103a5) tṛ (103a7) te
2(103a3) te (103b2) to 2(105b6) to
(103b6) tai (104b5) tau (103b3) tka
(103a1) tke (105a4) tta (105b4) ttā
(106a4) tti 2(103b4) tti (105a3) ttī
(106a4) tte (106b6) ttau (106a4) ttyā
(103a3) tnā (103b6) tne (104a5) tpa
(104a6) tpā (106b2) tpū (105a1) tpra
(104b3) tma (105a3) tmā (103b2) tmi
(103a1) tmī (103a1) tya (103b5) tyā
(103a4) tyu (105b5) tye (105a5) tyai
(106a2) tra (102a3) trā (106b2) tri
(106a6) tre (102a4) tro (106b3) tva
(102a6) tvā (105b3) tve (106b5) tsa
(102b5) tsu (105b7) tsyu (103a1) tsva

tha

(104a1) tha (104a2) thā (106b3) the
(105a2) themṃ (103a3) tho

da

(102b4) da (103a3) dā (103a7) di
2(103a2) di (103b7) dī (106a1) du

(103a5)	dṛ	(106a3)	de	2(103b6)	de
(106b6)	do	(104a7)	dga	(106a5)	dde
(103b6)	ddha	(106a5)	ddhā	(104a2)	ddhi
2(106a1)	ddhi	(104a3)	ddhe	(106a3)	ddho
(104a2)	ddhya	(102b4)	ddhye	(102b4)	dbha
(106b3)	dbhā	(104a4)	dbhi	(102b7)	dbhū
(103a3)	dya	(105b4)	dyā	(106a1)	dye
(103a6)	dyo	(105b5)	dva	(106a3)	dvā
(106a1)	dvi				

dha

(102a5)	dha	(102a3)	dhā	(102b4)	dhi
(102a4)	dhī	(102b3)	dhe	2(105a1)	dhe
(105a1)	dho	(103a5)	dhau	(106b6)	dhya
(106a1)	dhyā				

na

(102b1)	na	(102b3)	nā	2(103a1)	nā
(102b3)	ni	2(102b2)	ni	(104a1)	nī
(104a3)	nu	(105a3)	ne	(105a2)	no
(105a5)	nai	(105b3)	nta	(105b4)	ntā
(106b4)	nti	2(102b2)	nti	(105a5)	ntī
(105b3)	nte	(106a2)	ntrai	(106a1)	nthā
(106b3)	nthi	(103a5)	ndī	(106b5)	ndra
(102a5)	ndha	(102a7)	ndhā	(104a2)	ndhyā
(102b3)	nna	(102a3)	nnā	(106a4)	nni
2(102b5)	nni	(104b6)	nnai	(102b6)	nma
(102b7)	nmā	(103a2)	nya	(103a2)	nye
(102b1)	nve	(105b3)	nsā		

pa

(102a4)	pa	(103a1)	pā	(103a1)	pi
2(102b5)	pi	(103b2)	pu	(104a2)	pū
(103a1)	pṛ	(103b6)	pe	2(10ba1)	pe
(102b6)	po	(103a3)	pai	(103a2)	pti
(102b3)	pya	(102b7)	pyā	(104a1)	pyu
(106a1)	pye	(106a2)	pra	(102b3)	prā
(106a2)	pri	(106a2)	pre		

ba

(103a1)	bā	(104a5)	bī	(106a3)	bu
(104a3)	bda	(102a3)	bde	(102b7)	bdha
(106a5)	bdhyā	(102a3)	bra	(104a2)	bru

bha

(102b6)	bha	(103a2)	bhā	2(104a2)	bhā
(103a5)	bhi	2(103b1)	bhi	(106a2)	bhu
(103a3)	bhū	(102a6)	bhe	(106b5)	bhya
(102b1)	bhyu				

ma

(102b1)	ma	(102b4)	mā	2(104a7)	mā
(103a1)	mi	2(106a1)	mi	(103a4)	mu
(104a3)	me	(104b3)	mo	2(10b6a4)	mo
(104a4)	mpa	(105a4)	mba	(105b5)	mbya
(106b3)	mbha	(103b3)	mbhā	(106a3)	mbho
(102b6)	mya	(103a3)	mri	(102b2)	mvā

ya

(102a3)	ya	(102b4)	yā	2(103a5)	yā
(106a3)	yi	(102a4)	yu	(102a6)	ye
(104a1)	yo	(104a1)	yai		

ra

(102a5)	ra	(103a4)	rā	(103a4)	ri
2(103a1)	ri	(106a2)	rī	(106a2)	ru
(106a3)	rū	(104a4)	re	(103a5)	ro
(105a7)	rai	(106b5)	rgna	(106b4)	rjya
(102a4)	rṇṇi	(102a5)	rtta	(106b5)	rtti
(102b5)	rtu	(102b6)	rtha	(106b4)	rthi
(106a1)	rdda	(102b7)	rpa	(106b5)	rpi
(102b7)	rpo	(105a7)	rbha	(103a6)	rbhā
(105a7)	rbhi	(103a1)	rbhyā	(103a5)	rma
(102b6)	rmā	(103a6)	rme	2(105b7)	rme
(106a2)	rmo	2(106a2)	rmo	(103a5)	rmma
(103a2)	rya	(103a1)	ryā	(104b1)	rye
(103a7)	ryo	(102b1)	rva	2(104a5)	rva
(102b2)	rvā	(105b2)	rvi	(106a3)	rve
(106a3)	rvo	(106b4)	rvva	(105b6)	rvvā
(106b4)	rvve	(103a4)	rṣa	(105b4)	rṣe
(103a6)	rha	(104a4)	rhi	(104a1)	rhya

la

(105b3)	la	(102a4)	lā	(103a3)	lu
(102b7)	le	(105b4)	lo	(105b5)	lpa
(106b2)	lpā	(103a2)	lpi	(105a3)	lpya
(105b1)	lya	(103a3)	lyāṃ	(102a7)	lla

va

(102b1)	va	(102b1)	vā	2(103a5)	vā
(102b5)	vi	2(103a2)	vi	(104a4)	vī
(105b4)	vṛ	(105b7)	ve	2(104a3)	ve
(106a4)	vo	2(103b4)	vo	(103a2)	vai
(104b5)	vau	(103a7)	vya	(106a1)	vyā
(105a5)	vyu	(104b1)	vye		

śa

(104b2)	śa	(105b3)	śā	2(105b6)	śā
(106a2)	śi	(102a3)	śū	(104a2)	śṛ
(105b1)	śe	(106a1)	śo	(106b3)	śca
(104a2)	ścā	(105a1)	ści	(105b6)	śce
(105b5)	śco	(105b6)	ścai	(104b7)	śma
(105a5)	śya	(102b3)	śrā	(103b3)	śri
(106a3)	śro	(105b5)	śva		

ṣa

(105b7)	ṣa	(106b4)	ṣā	(102b5)	ṣi
2(103a2)	ṣi	(106b5)	ṣu	(102a5)	ṣe
2(104a2)	ṣe	2(102a6)	ṣo	(105b4)	ṣṭa
(106a1)	ṣṭā	(106b4)	ṣṭau	(105b1)	ṣṭha
(103a2)	ṣṭhā	(103a5)	ṣṇā	(103b2)	ṣpa
(102b3)	ṣpra	(102b4)	ṣya	(103b7)	ṣyā
(106a5)	ṣye				

sa

(102a3)	sa	(102a5)	sā	(103b6)	si
(106a5)	sī	(106b2)	su	(106a6)	sū

(103a5)	se	(103a7)	so	2(104b6)	so
(103b2)	sau	(102a5)	ska	(103a2)	skā
(103b2)	skṛ	(103b4)	sta	(106a7)	stā
(102a3)	sti	2(102b6)	sti	(102b6)	stī
(105a6)	stu	(106a1)	stū	(103a5)	stṛ
(102b2)	ste	(103b2)	stva	(106a5)	sthā
(106a5)	sthi	(102a4)	sne	(103b1)	spa
(106b2)	sma	(106b3)	smā	(102a6)	smi
(102b7)	smiṃ	(103a4)	sya	(103b3)	syā
(105b7)	syu	(105a5)	sye	(106b5)	syo
(103a6)	syai	(105a5)	sra	(105b6)	sro
(106a1)	sva	(106b4)	svā		

ha

(106b5)	ha	(102a3)	hā	(102a3)	hi
2(103b1)	hi	(102b3)	hī	(106a6)	hṛ
(106b4)	he	(105a6)	ho	(102a3)	hma
(103b7)	hya	(104b6)	hyaa	(104b6)	hye
(103b2)	hyo				

Visarga

(102a3) ḥ 2(102a4) ḥ

Anusvāra

(102a3)	ṃ	e.g.	(102a3)	daṃ
2(103b5)	ṃ	e.g.	(103b5)	kiṃ
4(105b7)	ṃ	e.g.	(105b7)	kiṃ
3(105a2)	ṃ	e.g.	(105a2)	dhaṃ

Avagraha

(102a6) ’ 2(102a6) ’

Virāma

(102b3) * e.g. (102a6) t*

9.3 Potala Manuscript

Vowels

(74b1)	a	(75a2)	ā	(75a3)	i
(75a7)	u	(75a9)	e		

ka

(74b2)	ka	(74b4)	kā	(75b7)	ki
(77b7)	kī	(74b5)	ku	(76a8)	kṛ
(76b3)	ke	(77a2)	ko	(77a8)	kta
(77b3)	ktā	(74b9)	kya	(77b6)	kra
(74b3)	kle	(75b1)	kva	(74b6)	kṣa
(76b7)	kṣā	(75b6)	kṣi	(77b7)	kṣī
(75a2)	kṣu	(75b4)	kṣe	(75a7)	kṣo
(74b9)	kṣma	(76a1)	kṣya	(75b6)	kṣyā

kha

(75a1)	kha	(77a6)	khe	(77b7)	khyā
(75a7)	khye				

ga

(76a5)	ga	(77a6)	gā	(77b2)	gu
(76b3)	gṛ	(77b1)	ge	(75a6)	go
(77b3)	gbha	(75a2)	gra	(74b8)	grā
(75b2)	grī	(76b8)	gro	(74b8)	gvi

gha

(76b6)	gha

ṅa

(74b9) ṅki (75a4) ṅga

ca

(74b1) ca (74b3) cā (74b4) ci
(74b4) ce (76a8) co (76a8) cai
(74b3) cau (74b3) cca (74b4) ccā
(74b6) ccha (76a5) cchā (76b4) cchi
(74b2) cya

ja

(75a1) ja (75a2) jā (75a9) jja
(76a9) jjā (75a2) jju (75a2) jjvā
(75a3) jña (75a8) jñā (75b8) jñe
(76a4) jya (74b9) jyai

ña

(76a6) ñca (77a8) ñcā (74b9) ñci
(74b7) ñce (74b7) ñco (76b2) ñja
(77b6) ñji (74b4) ññā

ṭa

(76b9) ṭi

ṇa

(74b2) ṇa (74b1) ṇā (77b3) ṇu
(74b3) ṇe 2(76b1) ṇe (74b7) ṇya

ta

(74b2)	ta	(74b3)	tā	(74b3)	ti
(75a1)	tī	(75a2)	tu	(75a7)	tṛ
(75a8)	te	2(77b3)	te	(75b1)	to
2(75b1)	to	(75b5)	tai	(76a8)	tau
(75b2)	tka	(74b3)	tkā	(77a5)	tki
(77b5)	tku	(75a3)	tke	(74b7)	tta
(76b4)	ttā	(76b8)	tti	(76b4)	ttī
(76a2)	ttu	(76a5)	tte	(77b8)	ttau
(74b5)	ttyā	(75a2)	ttva	(76b4)	ttha
(75a5)	tnā	(75b5)	tne	(75b2)	tnai
(74b4)	tpa	(77a3)	tpā	(75a6)	tma
(76b4)	tmā	(75b2)	tmi	(75a2)	tmī
(75a3)	tya	(75a3)	tyā	(75a5)	tyu
(75a7)	tye	(74b3)	tyo	(77a8)	tyai
(74b2)	tra	(74b1)	trā	(77b2)	tri
(77b2)	tre	(74b2)	tro	(75a5)	trai
(75a1)	tva	(75a8)	tvā	(76a4)	tve
(77b7)	tsa	(74b9)	tsu	(74b2)	tso
(76b2)	tsyā	(77a4)	tsyu	(74b6)	tsva

tha

(74b8)	tha	(74b8)	thā	(77b6)	the
(75a5)	tho	(76a4)	thya		

da

(76a5)	da	(76a6)	dā	(76a7)	di
(75a1)	dī	(75a2)	du	(75a6)	dṛ
(74b4)	de	(74b6)	do	(74b2)	dga

(77b2)	dde	(74b6)	ddha	(75b2)	ddhā
(74b7)	ddhi	(75b8)	ddhe	(77b2)	ddho
(74b8)	ddhye	(74b7)	dbha	(75a3)	dbhā
(76a2)	dbhi	(75a2)	dbhū	(77b5)	dbhyo
(74b4)	dya	(77a1)	dyā	(74b4)	dyo
(77b4)	drā	(76b7)	dva	(74b5)	dvā
(75a2)	dvi				

dha

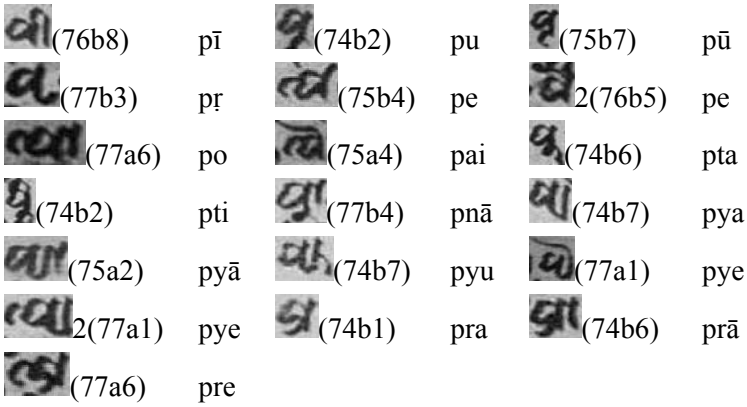
(74b2)	dha	(74b4)	dhā	(74b8)	dhi
(74b2)	dhī	(74b7)	dhe	(75a6)	dho
(74b5)	dhya	(75b2)	dhyā		

na

(74b1)	na	(74b1)	nā	(74b1)	ni
(76a4)	nī	(74b6)	nu	(75a1)	ne
2(76b5)	ne	(75a5)	no	(75a7)	nai
(74b9)	nta	(75a1)	ntā	(75a1)	nti
(76a3)	ntī	(74b8)	nte	(75a4)	ntra
(77a6)	ntre	(77a6)	nthā	(77b6)	nthi
(75a6)	ndī	(77b7)	ndra	(74b3)	ndha
(74b4)	ndhā	(76a1)	ndhyā	(74b6)	nna
(74b8)	nnā	(74b2)	nni	(76b3)	nno
(74b4)	nnai	(76b8)	nbha	(75a1)	nma
(77a8)	nmā	(74b1)	nya	(75a3)	nyā
(77a5)	nye	(74b5)	nve	(77b4)	nsa

pa

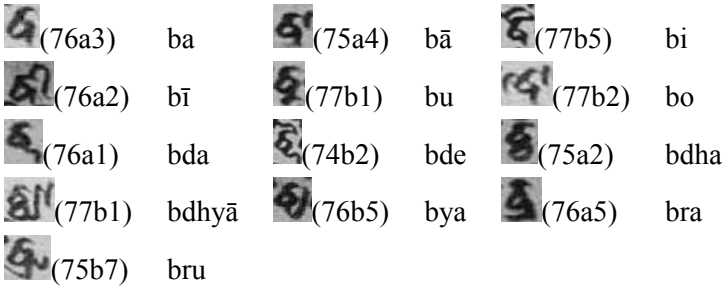
(74b2)	pa	(74b2)	pā	(74b3)	pi


(76b8) pī (74b2) pu (75b7) pū
(77b3) pṛ (75b4) pe 2(76b5) pe
(77a6) po (75a4) pai (74b6) pta
(74b2) pti (77b4) pnā (74b7) pya
(75a2) pyā (74b7) pyu (77a1) pye
2(77a1) pye (74b1) pra (74b6) prā
(77a6) pre

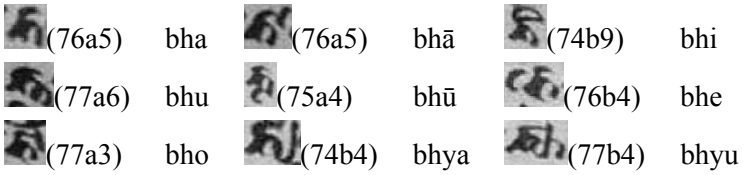
pha

(74b7) pha

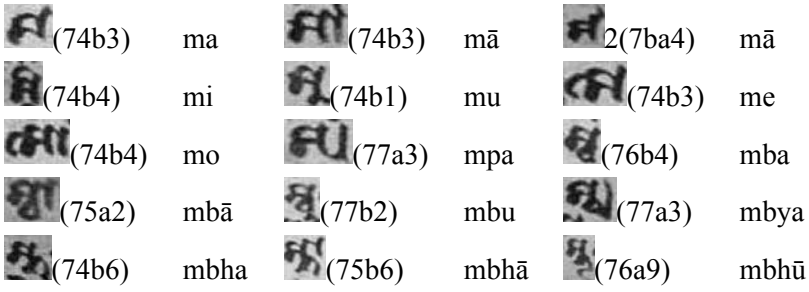
ba


(76a3) ba (75a4) bā (77b5) bi
(76a2) bī (77b1) bu (77b2) bo
(76a1) bda (74b2) bde (75a2) bdha
(77b1) bdhyā (76b5) bya (76a5) bra
(75b7) bru

bha


(76a5) bha (76a5) bhā (74b9) bhi
(77a6) bhu (75a4) bhū (76b4) bhe
(77a3) bho (74b4) bhya (77b4) bhyu

ma


(74b3) ma (74b3) mā 2(7ba4) mā
(74b4) mi (74b1) mu (74b3) me
(74b4) mo (77a3) mpa (76b4) mba
(75a2) mbā (77b2) mbu (77a3) mbya
(74b6) mbha (75b6) mbhā (76a9) mbhū

(77a7) mbho (75a1) mya (75a4) mri
(77b7) mvā (74b4) mvi (76b6) mve

ya

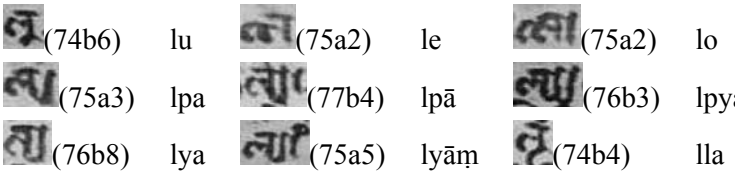
(75a4) ya (74b8) yā (74b5) yi
(75a3) yu (76a3) ye (76a7) yo
(76a8) yai

ra

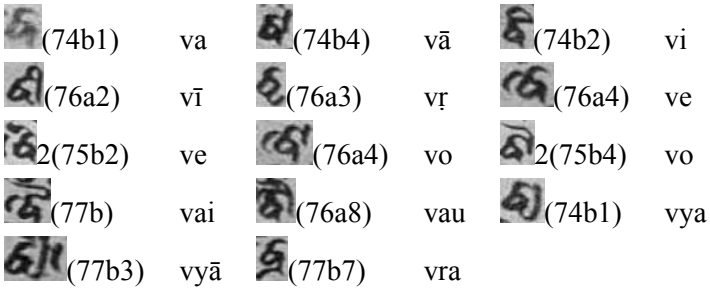
(74b3) ra (74b4) rā (74b8) ri
(75a6) rī (76b1) ru (76b3) rū
(77b2) re (74b1) ro (76b7) rai
(74b3) rgga (76a2) rgha (74b2) rṇṇi
(74b9) rtu (76a3) rtta (77b7) rtti
(75a1) rtha (77b7) rthi (77a5) rda
(75a2) rpa (77b7) rpi (75a2) rpo
(76b7) rbha (75a7) rbhā (76b7) rbhi
(77b4) rma (75a1) rmā (77a7) rmo
(74b3) rmye (75a2) rmma (75a1) rmmā
(77a5) rmme (77b4) rmmo (75a5) rya
(74b1) ryā (76a5) rye 2(77b6) rye
(75a8) ryo (74b5) rvva (74b9) rvvā
(75a1) rvvi (77a8) rvve (77a7) rvvo
(75b1) rśa (77a2) rśe (75a5) rṣa
(75a6) rha (75a7) rhi (74b6) rhī
(75b2) rhya (77b4) rhye

la

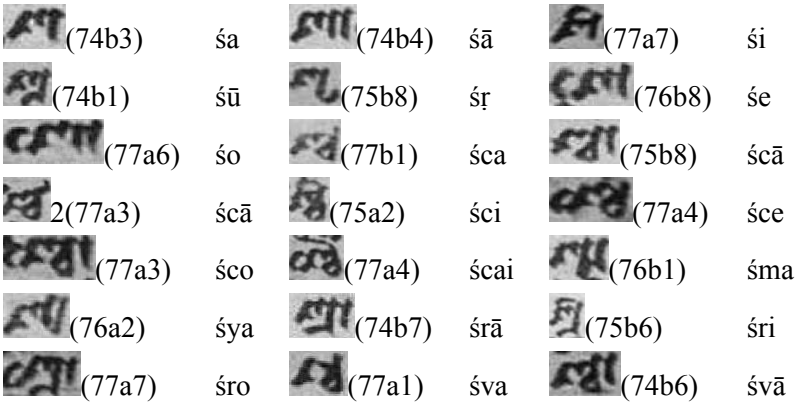
(76a4) la (76a7) lā (74b4) lī


(74b6) lu (75a2) le (75a2) lo
(75a3) lpa (77b4) lpā (76b3) lpya
(76b8) lya (75a5) lyāṃ (74b4) lla

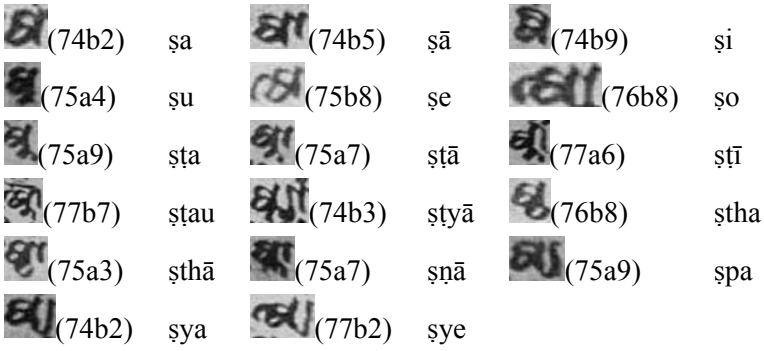
va


(74b1) va (74b4) vā (74b2) vi
(76a2) vī (76a3) vṛ (76a4) ve
2(75b2) ve (76a4) vo 2(75b4) vo
(77b) vai (76a8) vau (74b1) vya
(77b3) vyā (77b7) vra

śa


(74b3) śa (74b4) śā (77a7) śi
(74b1) śū (75b8) śṛ (76b8) śe
(77a6) śo (77b1) śca (75b8) ścā
2(77a3) ścā (75a2) ści (77a4) śce
(77a3) śco (77a4) ścai (76b1) śma
(76a2) śya (74b7) śrā (75b6) śri
(77a7) śro (77a1) śva (74b6) śvā

ṣa


(74b2) ṣa (74b5) ṣā (74b9) ṣi
(75a4) ṣu (75b8) ṣe (76b8) ṣo
(75a9) ṣṭa (75a7) ṣṭā (77a6) ṣṭī
(77b7) ṣṭau (74b3) ṣṭyā (76b8) ṣtha
(75a3) ṣthā (75a7) ṣṇā (75a9) ṣpa
(74b2) ṣya (77b2) ṣye

sa

(74b2)	sa	(74b3)	sā	(75b2)	si
(77b1)	sī	(77b4)	su	(74b9)	sū
(75a6)	se	(75a7)	so	(75b1)	sau
(74b2)	ska	(75a3)	skā	(75a9)	skṛ
(74b4)	sta	(75a2)	stā	(75a3)	sti
(76a2)	stī	(76b6)	stu	(77a5)	stū
(75a7)	stṛ	(74b6)	ste	(77b7)	stai
(76b3)	stye	(75b1)	stva	(76a3)	sthā
(76b4)	sthi	(74b2)	sne	(75a9)	spa
(77b3)	sma	(77b5)	smā	(75a7)	smi
(75a8)	sya	(75a8)	syā	(77a4)	syu
(74b3)	sye	(77b7)	syo	(76b6)	sra
(77a1)	sro	(74b5)	sva	(77b6)	svā
(75a2)	ssa				

ha

(74b1)	ha	(74b2)	hā	(74b3)	hi
(74b6)	hī	(77b3)	hṛ	(77b6)	he
(74b8)	ho	(74b1)	hma	(75b3)	hya
(76b1)	hyā	(76b1)	hye	(75b2)	hyo

Visarga

(74b1)	ḥ	(74b6)	ḥ	(74b2)	ḥ
(77a7)	ḥ				

Anusvāra

(74b1)	ṃ	e.g.	(74b1)	daṃ
(74b9)	ṃ	e.g.	(74b9)	rtuṃ
(75b2)	ṃ	e.g.	(75b2)	thaṃ

Avagraha

(74b2) ’

Virāma

(74b7) * e.g. (74b7) t*

Numberals

4 5 6
7

9.4 Rome Manuscript

Vowels

(96b9)	a	(97b6)	ā	(96b10)	i
(96b12)	u	(97a3)	e		

ka

(96b10)	ka	(97a2)	kā	(96b13)	ki
(101b9)	kī	(97a4)	ku	2(97a4)	ku
(97a1)	kṛ	(98b9)	ke	(97b1)	ko
(97b12)	kta	(97b2)	ktaṃ	(96b10)	ktā
(101b8)	kpra	(97a13)	kya	(99a7)	kyaṃ
(98b7)	kyāṃ	(101b6)	kra	(96b11)	kle
(98a8)	kva	(97a3)	kṣa	2(97a7)	kṣa
(97a12)	kṣe	(98b7)	kṣaṃ	(101a2)	ksā
(98b7)	kṣi	(101b7)	kṣī	(97b6)	kṣu
(98b3)	kṣe	(98a5)	kṣo	(97b1)	kṣma
(97b1)	kṣya	(98b7)	kṣyā	(101a10)	ksaṃ

kha

(97a8)	kha	(100b13)	khe	(101b7)	khyā
(98a4)	khye				

ga

(96b10)	ga	(96b11)	gā	(101a9)	gu
(100a1)	gṛ	(101a7)	ge	(98a3)	go
(101b3)	ggu	(97b6)	gra	(97a2)	grā
(98a11)	grī	(100a13)	gro	(97a12)	gvi

gha

(100a8) gha

ṅa

(101a5) ṅga (97b11) ṅgaṃ

ca

(96b10) ca (97a12) cā (97a4) ci
(97a3) ce (98b6) co (98a11) cai
(96b13) cau (97a2) cca (100a5) ccā
(97a7) ccha (99a8) cchā (97a9) cchi
(97b12) cya

ja

(97b3) ja (97b2) jā (101b6) ji
(97b4) ju (97b9) jai (98a8) jja
(96b12) jña (97a2) jñā (97b11) jñe
(97b13) jya (97a13) jyai (97b5) jvo

ña

(97a12) ñca (99b13) ñcā (100a11) ñci
(97a10) ñce (96b12) ñco (99b10) ñja

ṭa

(97b1) ṭi

ṇa

(96b10)	ṇa	(96b9)	ṇā	(101a12)	ṇu
(97a1)	ṇe	(97a9)	ṇya		

ta

(96b10)	ta	(96b13)	tā	(96b10)	ti
(97a13)	tī	(97a1)	tu	(98a4)	tṛ
(96b10)	te	(96b10)	to	(98b5)	tai
(97b3)	tau	(101b1)	tka	(96b13)	tkā
(99b12)	tki	(101b4)	tku	(99b11)	tta
2(101a8)	tta	(100a1)	ttā	(97b2)	tti
(100a3)	ttī	(98b4)	tte	(98b7)	ttau
(100a1)	tthaṃ	(100b13)	tthā	(101b5)	tthi
(97a2)	tthai	(97b12)	tnā	(98b5)	tne
(97a4)	tpa	(99a5)	tpā	(99b11)	tpra
(96b11)	tma	(97b6)	tmā	(98a10)	tmi
(97b6)	tmī	(98a11)	tya	(97a2)	tyā
(97b13)	tyu	(99b4)	tye	(96b11)	tra
(96b9)	trā	(101a2)	tri	(99a7)	tre
(96b11)	tro	(98a1)	trai	(97b5)	tva
(97a1)	tvā	(99a6)	tve	(98b11)	tvaṃ
(101b7)	tsa	(97b1)	tsu	(97a1)	tso
(97a7)	tsva	(99b5)	tsyā		

tha

(97a12)	tha	(96b10)	thā	(101b5)	the
(97a4)	thaṃ	(97b12)	tho	(99a6)	thya

da

(96b9)	da	(96b12)	dā	(96b9)	di

(97b8)	dī	(97b3)	du	(96b13)	dṛ
(98a10)	de	(97a7)	do	(96b10)	dga
(101a8)	dde	(98b4)	ddha	(98a10)	ddhā
(98b10)	ddhi	2(100b13)	ddhi	(98b12)	ddhe
(101a3)	ddho	(101b4)	ddhaṃ	(97a11)	ddhye
(98b8)	dbha	(97b8)	dbhā	(99a9)	dbhi
(99a1)	dbhī	(97b6)	dbhū	(97a4)	dya
(96b11)	dyā	(98a10)	dye	(97a3)	dyo
(101b1)	drā	(100b7)	dva	(96b10)	dvā
(96b10)	dvi				

dha

(96b10)	dha	(96b9)	dhā	(96b11)	dhi
(99b11)	dhe	(97a4)	dho	(97a4)	dhya
(98a10)	dhyā				

na

(96b9)	na	(96b9)	nā	(96b9)	ni
(98a2)	nī	(97a8)	nu	(98a10)	ne
(97b13)	no	(97a7)	nai	(97b1)	nta
(97b3)	ntā	(97a8)	nti	(99a5)	ntī
(96b12)	nte	(101a2)	ntre	(100b13)	nthā
(101b5)	nthi	(101b9)	ndra	(97a1)	ndha
(99a4)	ndhu	(98b10)	ndhyā	(97b9)	nna
(96b10)	nnā	(97a6)	nni	(99b6)	nnai
(98b4)	nma	(101b7)	nmo	(9918)	nya
(101a13)	nyā	(97b8)	nye	(97a5)	nve
(98a5)	nsa	(97a2)	nsu		

pa

(96b10)	pa	(96b12)	pā	(97a1)	pi
(100a13)	pī	(96b10)	pu	(100a8)	pū
(97b6)	pṛ	(98b7)	pe	(97b4)	po
(97b10)	pai	(97a9)	pta	(96b12)	pti
(101b1)	pnā	(97a9)	pya	(97b6)	pyā
(98b8)	pyu	(100b12)	pye	(96b9)	pra
(97a9)	prā	(101a2)	pri	(99a5)	prī
(101a2)	pre				

pha

(97a9) pha

ba

(99a4)	ba	(97b6)	bā	(101b2)	bi
(101a3)	bu	(101a10)	bo	(98b12)	bda
(96b12)	bde	(97b4)	bdha	(101a7)	bdhyā
(100a4)	bya	(96b10)	bra	(98b10)	bru

bha

(96b10)	bha	(97a5)	bhā	(97b4)	bhi
(99a1)	bhī	(101a2)	bhu	(97b6)	bhū
(99a12)	bhe	(101a4)	bho	(98b12)	bhya
(101a12)	bhyāṃ	(97a5)	bhyu		

ma

(96b13)	ma	(96b13)	mā	(96b12)	mi
(101b1)	mī	(101a11)	mu	(97a5)	me

(97a2)	mo	(100a3)	mba	(98b13)	mbha
(98b7)	mbhā	(97b3)	mya	(99a4)	myā
(97b11)	mri	(97a2)	mva		

ya

(96b9)	ya	(96b9)	yā	(97a6)	yi
(99b12)	yī	(96b10)	yu	(97a3)	ye
(96b11)	yo	(98b8)	yai		

ra

(97b5)	ra	(97a9)	rā	(97a12)	ri
(97b1)	rī	(96b11)	ru	(97b2)	rū
(98a9)	re	(96b9)	ro	(100a10)	rai
(97a1)	rga	(99a3)	rgha	(96b10)	rṇi
(96b10)	rṇṇi	(96b13)	rtta	(101b9)	rtti
(97a13)	rttu	(101b3)	rtte	(97a2)	rtha
(101b7)	rthi	(100b12)	rda	(97b6)	rpa
(97b5)	rpā	(101b7)	rpi	(97b4)	rppa
(100a9)	rbhi	(97b6)	rbhyā	(97b3)	rma
(96b10)	rmā	(100b11)	rme	(101a2)	rmo
(96b10)	rmma	(97a2)	rmme	(98a2)	rya
(96b10)	ryā	(97b8)	ryya	(96b9)	rva
(96b10)	rvā	(101a5)	rve	(101a4)	rvo
(98a9)	rśa	(97b12)	rṣa	(100b4)	rṣe
(98a3)	rha	(97b4)	rhi	(97a8)	rhī
(98a12)	rhya				

la

(97a7)	la	(96b10)	lā	(97a3)	lī

(97b11)	lu	(97a3)	le	(97b6)	lo
(97a11)	lpa	(101b2)	lpā	(97b9)	lpi
(100a12)	lya	(97b12)	lyāṃ	(97a3)	lla
(101b3)	llo				

va

(96b10)	va	(97a2)	vā	(96b10)	vi
(99a1)	vī	(97a2)	ve	(97b12)	vo
(97b8)	vai	(99a4)	vau	(97a5)	vya
(98a1)	vyā	(101b7)	vra		

śa

(96b11)	śa	(96b10)	śā	(96b12)	śi
(96b9)	śū	(101a12)	śṛ	(96b11)	śe
(100b13)	śo	(98a8)	śca	(98b11)	ścā
(98a11)	ści	(100b9)	śce	(100b7)	śco
(100b10)	ścai	(99b8)	śma	(98a2)	śya
(101b3)	śra	(97a9)	śrā	(98a11)	śri
(100b3)	śro	(100b2)	śva	(100b12)	śvā

ṣa

(96b11)	ṣa	(97a13)	ṣā	(96b10)	ṣi
(98b11)	ṣu	(97b10)	ṣū	(98b11)	ṣe
2(96b13)	ṣe	(97a1)	ṣo	(100b1)	ṣṭa
(98a1)	ṣṭā	(100b13)	ṣṭī	(96b13)	ṣṭyā
(97b10)	ṣṭha	(98a2)	ṣṇā	(98a8)	ṣpa
(97a10)	ṣpra	(96b10)	ṣya	(101a8)	ṣye

sa

(96b10)	sa	(97a1)	sā	(98a10)	si
(101a7)	sī	(101b2)	su	(99a8)	sū
(98b12)	se	(96b11)	so	(98a9)	sau
(96b13)	ska	(97b9)	skā	(98a8)	skṛ
(99b12)	sta	(97b6)	stā	(97a1)	sti
(97b2)	stī	(100a8)	stu	(100b12)	stū
(98a2)	stṛ	(99a5)	ste	(101b7)	stai
(98a9)	stva	(97a1)	sthā	(97a6)	sthi
(96b11)	sne	(98a7)	spa	(101a12)	sma
(97a5)	smā	(96b11)	smi	(97b9)	sya
(96b11)	syā	(100b10)	syu	(97a3)	sye
(100a6)	sra	(97a5)	sva	(101b7)	svā

ha

(96b9)	ha	(96b9)	hā	(96b10)	hi
(97a8)	hī	(101a10)	hṛ	(99b1)	he
(97a2)	ho	(96b10)	hma	(100a1)	hya
(98a10)	hyā	(99a3)	hra		

Visarga

(96b9) ḥ (96b12) ḥ (97b5) ḥ
(97b5) ḥ

Anusvāra

(96b9) ṃ 2(96b11) ṃ

Avagraha

(97a1) ’ 2(99a4) ’

Virāma

(97a12) * e.g. (97a12) t*

Numerals

	1		2		3
	4		5		6
	7		7		8
	8		9		0

第 10 章

『プラサナパダー』第二十五章「涅槃の考察」和訳

10.1　凡例

本稿はおもに二つの補助記号を用いている。

［　］　原文にない、あるいは省略された内容を補足する記号

（　）　代名詞の指示対象、特定の訳語のサンスクリット語を提示する記号

10.2 和訳

ここで、［反論者は］言った。

> もし、このすべてが空であり、生起もなく、消滅もないなら、何を断ち、あるいは［何を］滅することによって、涅槃であると認められるのか？ （『中論』25.1）

実に、この世の中で、梵行に住し[*1]、如来の教えを理解し、法にかなったあり方で実践すること[*2]を備えた人々にとって、二種類の涅槃、［即ち］、有余依（拠り所という残余を持つ涅槃）と無余依（拠り所という残余を離れた涅槃）[*3]がある、と世尊によって説明された。

[*1] uṣitabrahmacarya の用例について、次の二つを挙げる。

1. 「あるバラモンが罪の法を取り除き、不誠実を離れ、濁を離れ、堅固な自我を持ち、また Veda の究極を尽くし、梵行に住するならば、彼は適当な時間に婆羅門の論議を話すだろう。」(yo brāhmaṇo vāhitapāpadharmo niṣkautilyo niṣkaṣāyaḥ sthitātmā | vedāntagaś coṣitabrahmacaryaḥ kālenāsau brahmavādaṃ vadeta || *Udānavarga* 33.13)。Bernhard (1965: 464) を参照。

2. 「［如来は］戒と忍と苦行を備えた者であり、世間を尽くした者であり、梵行に住する者である。」(śīlena kṣāntyā tapasā upeto lokāntako uṣitabrahmacaryo || *Mahāvastu*)。Senart (1897: 441) を参照。

[*2] dharma-anudharma-pratipatti という複合詞は漢訳で一般的に「法随法行」と訳される。早島 (1976) によると、dharma-anudharma-pratipatti という複合語は「本来格限定複合語に理解されるべきものであり、後代に、教義上の解釈の必要から、本来の格限定複合語の理解を逸脱することなく並列複合語の解釈が生み出されたものと思われる。〔中略〕大乗仏典においては、明確に表現されているにせよいないにせよ、聞・思・修の三慧、具体的には「聴聞正法 — 如理作意 — 法随法行」の菩薩行を背景として語られることが多い。いうまでもなく「法随法行」は「修」に該当する」と説明される。『プラサナパダー』の文脈からみても、uṣitabrahmacarya と tathāgataśāsanapratipanna はそれぞれ律儀と聞・思を指すが、それに対して、dharmānudharmapratipatti は三慧の「修」を指す。本論文では、dharmānudharmapratipatti を格限定複合語として「法にかなったあり方で実践すること」と訳す。

一方、チャンドラキールティ以前の世親の『中辺分別論注』(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*) は dharma-anudharma-pratipatti を並列複合語として、法行 (dharmacarita) と随法行 (anudharmapratipatti) に分ける。法行には大乗経典の書写 (lekhanā)、供養 (pūjanā)、施他 (dāna)、諦聴 (śravaṇa)、自披讀 (vācana)、受持 (udgraha)、正開演 (prakāśanātha)、諷誦 (svādhyāya)、思 (cintanā)、修 (bhāvanā) という十種類がある。随法行には無散乱（avikṣiptā）と無顛倒転変（aviparyāsapraṇatā）との二種類がある (Nagao, 1964: 63-64)。anudharmapratipatti について、安慧の復注 (Yamaguchi, 1934: 214) は「瞑想されるべき所知である法に従い、随入した止観を本体とした理解は随法行である。そのうち、止の修行を本体とするのは、無散乱である。観の修行を本体とするのは、無顛倒転変である。」(*dhyātavyajñeyadharmānugatā anupraviṣṭaśamatha*vipaśyanābhāvanātmikā pratipattir anudharmapratipattiḥ. tatra śamathabhāvanātmikā 'vikṣiptā. vipaśyanābhāvanātmikā 'viparyāsapariṇatā.) と述べている。したがって、anudharmapratipatti は止観の修行を指す。また、安慧は anudharmapratipatti のうちの dharma を止観の対象（jñeya）として理解している。

[*3] sopadhiśeṣanirvāṇa と nir/anupadhiśeṣanirvāṇa はいわゆる仏教梵語であり、パーリ語ではそれぞれ sopādisesanibbāna と anupādisesanibbāna に対応する。Hwang (2006: 16) によれば、パーリ語の upādi は upādāna の同義語であり、upa-ā-√dā 動詞語根の派生語である。また、upādāna という語は、“objective”と“subjective”の二つの意味を持っている。そのうち、“objective”の意味は“fuel, supply, provision, that material substratum by means of which an active process is kept alive or going” である。“subjective”の意味は、“drawing upon, grasping, holding on grip, attachment, in the sense that a fire clings to fuel in order to keep burning” である。

それに対して、仏教梵語に見られた upadhi は別の動詞語根 *upa-√dhā* の派生語である。Norman (1993: 161) によると、upadhi は同時に「集められたもの」と「愛、執着」という二つの意味を持っている。

また、原始仏教における upadhi, upādi, upādāna の意味について、さらに、Lovejoy (1898: 126-136)、バッタチャルヤ (1985: 22-37)、服部 (1998: 75-81)、Norman (1993: 211-225) を参照。

その［二種類の］中で、無明と貪欲を初めとし、余すことのない一群の煩悩を断つことによって、有余依涅槃があると認められている。その［有余依という語の］中で、アートマンへの愛着がこれに依拠する（upadīyate）ので、［これが］「拠り所」（upadhi）である。「拠り所」（upadhi）という語によって、アートマンを仮設する根拠である五取蘊が述べられる。［拠り所が］残されているので、残余（śeṣa）である。「拠り所」そのものが「残余」であり、拠り所という残余（upadhiśeṣa）である。拠り所という残余とともに存在するので、「拠り所という残余を持つもの」（sopadhiśeṣa）である。どうしてそれは涅槃であるのか[*4]？なぜなら（ca）、単に有身見等の煩悩という強盗を離れた蘊のみが残されている。余すことのない一群の強盗が殺されたところの村だけの持続 (avasthāna)[*5]のように、それが有余依涅槃である。

一方、ある涅槃に蘊のみさえも存在していないなら、それが無余依涅槃である。この［無余依涅槃］において、拠り所という残余が既に消えたというわけで、余すことのない一群の強盗が殺されたところの村のみさえも消滅したように、［無余依涅槃である］。そして、ほかならぬそれ（無余依涅槃）に関して述べられる。

> ある者に (yattha) 体が破壊され、想が滅し、すべての受が離れ、また諸々の行に静まりがあり、識が消失になった。[*6] (*Udāna* 8.9)

という。同様に、

> 落ち込まない体によって、諸々の痛苦 (vedanā) を我慢しているなら、灯明の滅のように彼の心は解脱する。[*7]（『大般涅槃経』44.11）

[*4] チベット語訳によれば、「それはなにかと問うなら、涅槃である」(de ci yin zhe na | mya ngan las ’das pa’o ||) と訳されるべきである。

[*5] 持続 (avasthāna) ついて、Stcherbatsky は“a state”、本多と丹治は「状態」、奥住は「存在し続けていること」と訳す。avasthāna は直後の無余依涅槃の説明に見られる vināśa と正反対である。そのため、本論文では、avasthāna を「持続」と訳す。

[*6] de La Vallée Poussin (1903-13: 520) の注記とSaito (2013: 17-25) によると、この偈は UP 8.9 に由来する。
UP 8.9(PTS 43, p.93): abhedi kāyo, nirodhi saññā, vedanā pi ’tidahaṃsu sabbā, vūpasamiṃsu saṅkhārā, viññāṇam attham āgamā.
UAK 8.9(PTS 143, p.433): abhedi kāyo nirodhi saññā vedanā sītibhaviṃsu sabbā vūpasamiṃsu saṅkhārā viññāṇaṃ attham āgamā.
本論では、この偈を abhedi kāyo nirodhi saññā vedaṇā yattha rahiṃsu | savvā copaśamo saṃskārāṇāṃ viññānam atthe gamed || と読んでいる。abhedi: √bhid の aor. 3rd, sg; rahiṃsu: √rah の aor, 3rd, pl; atthe: asta の Acc.; gamed: √gam の opt. 3rd, sg, Prakrit において、aor. として使われている（BHSG §32.85）

[*7] 韻律 śloka。de Jong (1978) によると、この偈は『大般涅槃経』(MP)44.11 である。cf. asaṃlīnena cittena vedanā adhivāsayan | pradyotasyeva nirvāṇaṃ vimokṣas tasya cetasaḥ || MP 44.11(Waldschmidt, 1951b: T.3,400)= AŚ 100.6(Vaidya, 1958: 261)
cf. Asallīnena cittena vedanaṃ ajjhavāsayi: Pajjotasseva nibbānaṃ vimokkho cetaso ahū. パーリ MP(PTS 2, p.157)= ThG 906(PTS 40, p.83)
『大般涅槃経』の漢訳は五本ある。そのうち、西晋白法祖訳とされる『仏般泥洹経』、後秦仏陀耶舎共竺仏念訳『遊行経』（A.D.399-416）、失訳『般泥洹経』には、この偈頌の当該文が見当たらない。「恬然絶思慮、亦復無諸受、如燈盡光滅、如来滅亦然。」　東晋法顕訳『大般涅槃経』巻三 (T7.1.205a16)；「汝心莫沈没、亦勿懐憂悩、仏証真木叉、譬如灯焔滅。」　義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻三十八 (T1451.24.400a12-13)
また、『大般涅槃経』・*Theragāthā*・*Avadānaśataka* に見られる cittena は、『プラサナパダー』諸写本・チ

という。そして、以上のように、無余依涅槃は諸蘊の滅することによって得られる。

「それでは、この二種類の涅槃は如何にして合理であるか？もし諸煩悩および諸蘊に滅することがあるなら、［この二種類の涅槃は合理である］。しかしながら、このすべてが空であり、いかなるものも生起せず、いかなるものも消滅しない時、その時、それら［の煩悩と蘊］の滅することによって、涅槃があるであろうところの、煩悩はどうしてあるのか、あるいは諸蘊はどうしてあるのか。したがって、諸存在物に本質 (svabhāva) があるはずである。」と［実在論者は言った］。

これに対して、［龍樹は］答えた。いや。そのように本質を備えた存在物を認めても、

> もし、このすべてが空ではなく、生起もなく、消滅もないなら、何を断ち、あるいは［何を］滅することによって、涅槃であると認められるのか？[*8] （『中論』25.2）

なぜなら、それら［の煩悩と蘊］の停止によって涅槃があるように本質をもって設定された諸煩悩および諸蘊にとって、本質が消えないものであるから、停止はどうしてあるのか？それゆえ、本質論者にとって、涅槃は全く不合理である。一方、彼ら（空性論者）にとってこれが過失になるように、諸空性論者は涅槃が蘊の停止を特徴とし、あるいは、煩悩の停止を特徴とするものであると認めるわけではない。したがって、空性論者にとって、これ（25.1）は決して非難ではないのである。

［反論者］それでは（khalu）、もし、空性論者が諸煩悩あるいは諸蘊の停止を特徴とする涅槃を認めないなら、その場合、［涅槃は］何を特徴とするものであると認めるのか？［龍樹は］答えた。

> 断たれず、得られず[*9]、中断されず、常住ではなく、消滅せず、生起しないこういうものは涅槃であると言われる。 （『中論』25.3）

すなわち、貪欲等のように決して断たれず、沙門果のように得られもせず、蘊等のよう

ベット語訳・*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*(YṢV, D no.3864, 5a5)・バーヴィヴェーカの *Prajñāpradīpa*(D no.3853, 259b6) には kāyena(lus kyis) になる。

*8 『プラサナパダー』、*Prajñāpradīpa*、『無畏論』によれば、25.1 偈は実在論者の意見であり、25.2 は龍樹からの批判である。『青目註』に見られる「問曰」・「答曰」という問答形式も、25.1 偈は実在論者の意見、25.2 は龍樹の批判であると示唆している。しかし、『青目註』25.2 の注釈には「是故有無二門、則非至涅槃」という文がある。文脈から見れば、「無」は 25.1、「有」は 25.2 を指すと理解すべきである。つまり、前者は空見に対する批判であり、後者は有見に対する批判である。この理解によると、この二偈はともに龍樹の批判であろう。吉蔵の『中観論疏』もこの理解に従っている。しかし、この理解は「問曰」・「答曰」という問答形式と一致していない。また、『無畏論』においては、この文に相当するのは「この道理によって、涅槃は不合理であると理解すべきである。」(rim pa ’dis mya ngan las ’das pa mi ’thad par khong du chud par bya’o)(安井, 2015: 208) である。そのため、「是故有無二門、則非至涅槃」という文は訳者鳩摩羅什の理解を示しているだろう。

*9 鳩摩羅什は「無得亦無至」と訳す。これについて、『青目注』は「無得者、於行於果無所得。無至者、無処可至。」（T1564.30.34c28-29）と解釈する。文脈からすれば、この文は正反対の二項目の説示であるはずである。「無得」と「無至」はともに asamprāpta の訳語であろう。「無得」と「於行於果無所得」の解釈は『プラサナパダー』にも見られる。しかし、「無至者」と「無処可至」の解釈は『青目注』にしか見られない。羅什自身の解釈がこの訳文に混入した可能性は否定できない。羅什の訳場の実態について、船山 (2013: 56-57) を参照。

に中断されもせず、また、不空なもののように常住でもないもの、それは本質上消滅せず、また生起せず、あらゆる戯論の静まりを特徴とする涅槃であると言われる。それでは、それらの煩悩を断つことによってその涅槃がありえるように、戯論を離れたこの種のそ［の涅槃］において、煩悩の想定はどうしてあるのか？あるいは、それらの蘊の滅することによってそ［の涅槃］がありえるように、その場合、蘊の想定はどうしてあるのか？なぜなら、これらの想定が働く限りに、涅槃の証得はない。あらゆる戯論が尽きることによってのみ、そ［の涅槃］の証得があるから。

「たとえ涅槃において煩悩も蘊も存在しなくても、そうであっても、［煩悩と蘊は］涅槃より前に存在する。それゆえ、それら［の煩悩と蘊］の尽きることによって、涅槃があるだろう」というように［反論する］ならば、［中観派は］答える —— この理解は排除されるべきである。涅槃より前に本質上存在しているものにとって、さらに非存在にされることはできない。したがって、涅槃を望んでいる者によって、この想定は排除されるべきである。なぜなら、［龍樹は以下の内容を］後で述べるだろう。

> 涅槃の究極と輪廻の究極、それらの両者にはいかなる微細な隔たりもない。　（『中論』25.20）

と。それで (tat)、以上のように、涅槃においていかなるものを断つこともなく、いかなるものを滅することもない、と知られるべきである。そして、それゆえ、涅槃は、余すことのない想定が尽きるという姿を持つものにほかならないのである。また、世尊によって言われた。

> 寂滅において諸法の存在はない。ここにおいて、存在しない諸法、それらは決して存在しない。存在する、存在しないという想定を持ち、このように行動している者にとっての苦は静まらない。*10　（『三昧王経』9.26）

---

*10 韻律 Indravaṃśā。『三昧王経』9.26 からの引用である。チャンドラキールティの『四百論注』この偈頌を引用する (D185a)。

Cüppers (1990: 41) とVaidya (1961: 48) の校訂本において、この偈頌は“nirvṛti(or nirvṛtti) dharmāṇa na asti dharmā yeneti nāsti na te jātu asti | astīti nāstīti ca kalpanāvatāṃ evaṃ carantāna na duḥkha śāmyati ||”である。また、『三昧王経』のチベット語訳は“mya ngan ’das pa’i chos la chos me de || gang phyir ’di med nam yang yod mi ’gyur || rtog can dag gi yod dang med ces bya || de ltar spyod pa sdug bsngal zhi mi ’gyur ||”である。Cüppers (1990: 98) はこの偈頌を次のように訳す。

“Characterised by being extinguished [long since], the dharmas do not exist,
And since they do not [now] exist, they never were existent;
For those who thingk “there is and “there is not,
And who act accordingly, there is no cessation of suffering.”

『三昧王経』におけるこの偈頌の意味について、丹治 (1981: 98-103) は次のように説く。

「法が法を止めることはないし、この世に存在しないものが生ずることもない。「ある」とか「ない」とかと分別して、それにしたがって行動するものには苦が寂静することはない。」

『プラサナパダー』では、チャンドラキールティは独自の理解を示している。“dharmā ye neha nāsti”の一句には二つの否定詞 na がある。これについて、チャンドラキールティは“ye tarhi dharmā iha nirvṛtau na santi”と解釈する。すなわち、ye は dharmā を指す男性・複数・主格である。iha は nirvṛti を指すのである。この解釈とチベット語訳には、否定詞 na(med) が一つしかない。一方、Cuppers と Vaidya の校訂本には具格 (instrumental) の yena が見られる。しかし、yena の読みはチャンドラキールティの解釈と相応しくない。本

と。この偈頌の意味は以下の通りである。「寂滅」、つまり無余依涅槃界において、「諸法」すなわち煩悩と業と出生とを特徴とするものにとって、あるいは諸蘊にとって、あらゆる点で消滅するから、「存在性」はない。また、これはどの論者からも認められたものである。そうであるなら、「ここ」、すなわち寂滅において、何らかの諸法が存在しないならば、灯りの生起によって闇において認識された縄を蛇とする恐怖等［が消滅すること］と同様に、「それらは決して存在しない」。煩悩と業と出生等を特徴とするそれらの諸法はいかなる時間、つまり輪廻の状態においても、真実として存在しない。なぜなら、闇の状態において、本体上、蛇は縄に存在しない。［縄は］実在の蛇のように闇においても、灯りにおいても、体および目に把捉されることがないからである。

そうであるなら、如何にして輪廻があるかと［反論者が］問うならば、答える。「我・我所という真実でない転倒の悪魔によって憑かれた凡夫・異生たちにとって、存在物が実在する本体を持たなくても、真実として顕現する。眼病者たちにとって実在していない髪の毛と蚊等［が顕現するのこと］の如し」と。［次のように］言う。

> 存在すると、存在しないという想定を持ち、このように行動している者たちにとっての苦は静まらない。(『三昧王経』9.26cd)

と。(1) 存在するという、存在物の実在性 (sadbhāva) に関する想定を持っている者たち、すなわちミーマーンサー派やヴァイシェーシカ派やサーンキャ派等*11を初めとし、毘婆沙師に至るまでの［諸実在論者］、(2) また、存在しないという想定を持っており、悪趣に陥る非実在論者 (nāstika)、(3) また、彼らと別な者たち、すなわち過去・未来・形［色］・無表［色］・［心］不相応行が存在しないと論じ、それ以外のものが存在すると論じる［経量部］、(4) 分別されたあり方が存在しないと論じ、相互に依存する［あり方］・完成されたあり方が存在すると論じる［瑜伽行派］たちにとってである。このように存在あるいは非存在を論じ、このように行動している者たちにとっての苦、すなわち輪廻は静まらない。と［いうほどの意味］である。同様に、

> 例えば、疑念を持つ人によって毒と思われたものを食べる。お腹に入ったこのものは毒ではない。しかし、［その人は］倒れた。まさに同様に、我と我所を認めているこの愚者は、正しくない想をもって常に生じて死ぬ。*12 (『宝徳蔵般若波羅蜜経』22.6)

と。それゆえ、以上のように、涅槃においていかなるものを断つこともなく、いかなるものを滅することもないと知られるべきである。そして、それゆえ、涅槃はあらゆる想定が尽きるというかたちを持つものにほかならない。例えば、聖『ラトナーヴァリー (*Ratnāvalī*)』において、

論文では、チャンドラキールティの解釈に従い、この偈頌を上述のように翻訳する。

*11 『プラサナパダー』第 22 章は Kaṇabhakṣākṣapādadigambarajaimininaiyāyika(de La Vallée Poussin, 1903-13: 441) を外道の代表として挙げている。

*12 韻律 Vasantatilakā。Yuyama (1973, 1976) と Yuyama (1978) を参照。

> また、涅槃は非存在でもない。これは一体どうして存在物であるか？存在物と非存在に対する執着の尽きることが涅槃と呼ばれる。*13 （『宝行王正論』1.42）

と。一方、涅槃があらゆる想定の静まりというかたちを持つものであると理解せずに、涅槃が存在物や非存在やその両者や両者でないというかたちを持つものであると想定する人々、彼らを［龍樹は以下のように］論駁する。

> まず、涅槃は存在物ではない。老死を特徴とするものであるという過失が付随する。なぜなら、老死を離れた存在物はない。　（『中論』25.4）

それに対して、涅槃を存在物として執着している人々は次のように説明する。「この世の中で、水の流れの堤 (rodha) である土手 (setu) のように、煩悩・業・出生という連続の生起の確実な止まり (rodha) になり、滅を本体とするもの (padārtha)、それが涅槃である。なぜなら (ca)、存在しない本質を持つ法はこのように結果を作るものとして見られない。」

［中観派による反論］いや、しかし、

> 喜びに対する貪欲を伴ったこの渇愛の尽きること、貪欲を離れること、滅すること、［それは］涅槃である。*14

と言われた。また、尽きることそのものだけでは存在物としてありえない。同様に、

> 彼の心の解脱はあたかも灯明の滅の如し。（『大般涅槃経』44.11cd）

と言われた。そして、灯明の消滅が存在物であることは不合理である。

［反論者は］言う。「こ［の涅槃］は次のように理解されるべきではない。［涅槃が］渇愛の尽きること（tṛṣṇāyāḥ kṣaya）、つまり、渇愛の尽き（tṛṣṇākṣaya）である、と。そうでなくて（kiṃ tarhi）、これ、すなわち涅槃という法が存在している時、渇愛の尽きることがある。それは渇愛の尽きであると言われるべきである。また、灯明は喩例に過ぎない。そ［の『大般涅槃経』44.11cd］においても、あるものが存在する時、心の解脱があるならば、［それは涅槃である］と知られるべきである。」と。

以上のように、涅槃が存在物として設定される時、師匠［龍樹］は説明する。「まず、涅槃は存在物ではない。」と。理由は何か？なぜなら、存在物は老死という特徴から逸脱しないものであるから、［涅槃が］「老死という特徴を持つものであるという過失が付随する」。そして、それゆえ、「［主張］それは涅槃ではないだろう。［証因］老死という特徴を持つものであるから。［喩例］識等と同様である。」と言わんとする。

---

*13 韻律 śloka。

*14 この引用の出典は確定できない。これについて、梶山 (1980a: 64) は次のように述べている。「同定できないが、例えば SN(注：*Saṃyuttanikāya*) Vol. V, p.421: idaṃ …dukkhasamudayam ariyasaccaṃ, yāyaṃ taṇhā ponobhavikā nandirāgasahagatā tatra tatrābhinandini …(6). idaṃ …dukkhanirodham ariyasaccaṃ, yo tassā yeva taṇhāya asesavirāganirodho cāgo paṭinissago mutti anālayo (7); SN 6.1.1 etc. tanhakkhayo virāgo nirodho nibbānam; CPS(注：*Catuṣpariṣatsūtra*) 14.9: asyā eva tṛṣṇāyāḥ …nandirāgasahagatāyās …kṣayo …virāgo nirodho …等参照。
nandī-rāga(nandi-rāga) はパーリでは並列複合語と解されるが (PTSD, s.v.)、チベット語訳は常に dgaḥ baḥi ḥdod chags と格限定複合語にとっている (cf. BHSD. S.v. nandī)」

また、［存在物が］老死という特徴から逸脱しないものであることを示すために、［龍樹は］「なぜなら、老死を離れた存在物はない」と述べた。なぜなら、［遍充関係］何らかのものが老死を離れたものであるならば、それは存在物ではない。［証因］老死を離れたものであるから。［喩例］空中の花の如し。

また、さらに、

> また、もし、涅槃は存在物であるならば、涅槃は有為［法］になるだろう。なぜなら、有為でないいかなる存在物も、どこにおいても存在しない。 （『中論』25.5）

［遍充関係］もし、涅槃は存在物であるならば、その場合、そういう涅槃は有為［法］になるだろう。［証因］存在物であるから。［喩例］識等の如し。一方、［師匠龍樹は］「あるものが有為ではないならば、それは存在物ではない。例えば、ロバの角等の如し。」という否定的遍充関係を示すために、「なぜなら、有為でない存在物は、どこにおいても存在しない。」と述べた。［どこにおいても］というのは、拠り所、場所、時間、あるいは教義体系においてである。「いかなるものも」というのは、内的あるいは外的な依拠するものという意味である。

また、さらに、

> また、もし涅槃は存在物であるならば、その涅槃は如何にして［原因に］依拠せずにありえるのか？なぜなら、いかなる存在物も［原因に］依拠せずに存在するわけではない。（『中論』25.6）

もし、君の見解によって、涅槃は存在物であるならば、それは［原因に］依拠してありえる。自らの原因総体に依存してありえるという意味である。しかし、このように［原因に］依拠して涅槃が［ありえる］ことは認められない。そうではなくて、［原因に］依拠せずに［涅槃があると認められる］。それで、もし涅槃は存在物であるならば、そういう涅槃は如何にして依拠せずに［あり得ることに］なるだろうか？［主張］［涅槃が原因に］依拠せずに決してありえないだろう。［証因］存在物であるから。［喩例］識等の如し。否定的遍充関係の理由を、「なぜなら、いかなる存在物も［原因に］依拠せずに存在するわけではない。」と、［龍樹は］述べたのである。

これに対して［反論者は］言った。「既に説かれたような過失が付随するので、涅槃は確かに (satyaṃ) 存在物ではない。それでは、涅槃は非存在にほかならない。煩悩と出生との停止そのものであるから。」と。答える。これも不合理である。なぜなら、

> もし、涅槃は存在物ではないならば、如何にして［涅槃は］非存在になるであろうか？ある［主張］において涅槃が存在物でないならば、そ［の主張］において非存在は存在しない。 （『中論』25.7）

もし、涅槃は存在物として認められないならば、つまり、もし、涅槃は存在物であると認められないならば、その場合、涅槃は如何にして非存在になるであろうか？非存在にもならないだろうと言わんとする。理由は何か？なぜなら、「ある［主張］において涅槃

が存在物でないなら、そ［の主張］において非存在は存在しない」。なぜなら、この世の中で、自性を捨てた後に、別様になっているものが非存在と言われる*15のである。そして、ある主張において、［涅槃が］既に知られた過失を持つものであるから、涅槃は存在物でないならば、その主張において、涅槃は非存在にもならない。存在物の本体によって成立しないかたちを持つものが、非存在のかたちを持つものである、ということは不合理であるからと言わんとする。

涅槃が煩悩と出生との非存在であるというならば、その場合、涅槃は煩悩と出生との無常性であるといえるだろう。なぜなら、煩悩と出生との非存在は無常性にほかならず、別のものではない。したがって、涅槃は無常性にほかならないであろう。しかし、これは認められない。まさに努力なしに解脱［がある］という過失が付随するので、これは全く不合理である。

また、さらに、

> また、もし、涅槃は非存在であるならば、その涅槃は如何にして依拠せずに［存在する］か？なぜなら、［存在物に］依拠せずに存在するような非存在は存在しない。（『中論』25.8）

その［偈の］中で、非存在は無常性であり、また存在物に依拠して仮設される。［存在物でない］ロバの角等の無常性は認識されないから。特徴に依拠して特徴づけられたものが仮設されており、また、特徴づけられたものに依拠して特徴［が仮設される］。したがって、特徴と特徴づけられたものとの働くこと（pravṛtti）が相互に依拠する時、無常性はどうして特徴づけられたものとしての存在物に依拠せずに存在するだろうか？それゆえ、非存在も［存在物］に依拠して仮設される。従って、もし、涅槃は非存在であるならば、その涅槃は如何にして［存在物に］依拠せずに存在するだろうか？［主張］そ［の涅槃］は［存在物に］依拠してのみ存在するだろう。［証因］非存在であるから。［喩例］消滅の如し。ほかならぬこれを示すために、［龍樹］は「なぜなら、［存在物に］依拠せずに存在するような非存在は存在しない」と述べた。

［反論者］もしその場合、非存在は［存在物に］依拠せずに存在しないならば、いま、石女の息子等は何に依拠して非存在になろうか？［答える。］「誰によって石女の息子等が非存在と呼ばれるのか」と。なぜなら、以前に、

> もし、存在物は成立しないならば、非存在は決して成立しない。なぜなら、人々は存在物の別様状態を非存在と語るのである。（『中論』15.5）

と既に述べられた。それゆえに、石女の息子等は非存在ではない。

> 虚空と兎の角と石女の息子は、存在していないが、語られている。存在物に対する

*15「非存在」(abhāva) の定義について、bhāvasya ced aprasiddhir abhāvo naiva sidhyati | bhāvasya hy anyathābhāvam abhāvaṃ bruvate janāḥ || MMK 15.5(叶少勇, 2011b: 238) を参照。

想定は同様である。*16 （『楞伽経』10.453）

と言われる場合にも、非存在に関する想定は存在物に関する想定の否定一般ではない。存在物であることは成立しないから、と知られるべきである。「石女の息子」ということは、言葉のみにすぎない。何らかの［語］の［指示］対象が存在物や非存在であるはずであるが、そ［の言葉］の［指示］対象は認識されない、というわけで、認識されていない本質を持つものに関して、存在物や非存在の想定は何故合理であるだろうか？それゆえ、石女の息子が非存在ではない、と知られるべきである。そして、したがって、「なぜなら、［存在物に］依拠せずに存在するような非存在は存在しない」ということは成立する。

ここに対して、［反論者は］「もし涅槃は存在物でも、非存在でもないならば、その場合、涅槃は何であるか？」と言った。答える。実に、世の中で、諸世尊如来によって、

依拠して、あるいは依存する来去すること*17は依拠せずに、依存しない［時、］涅槃であると教えられる。 （『中論』25.9）

そ［の偈］の中で、「来去すること」というのは、来たり去ったりすること、つまり生死の連続という意味である。また、この来去することは、ある場合、長短の如く、因縁総体に依拠して存在すると仮設されており、ある場合、灯の光の如く、種の芽の如く、生じると仮設される。あらゆる点で、もしこれが依拠して仮設されるならば、あるいは、もし依存して生じると設定されるならば、あらゆる点で、この生死の連続という相続にとって、依拠せず、あるいは依存せずに働かないこと (apravṛtti) は、涅槃であると設定される。そして、働かないこと (apravṛtti) のみが存在物や非存在であると分別することはできない。このように、涅槃は存在物でもなく、非存在でもない。

あるいはまた、諸々の行が輪廻するという主張を持つ［説一切有部師］、彼らにとって、［諸々の因縁に］依拠して依拠して何らかの生起と消滅があるならば、それは、依拠せずに働かない時、涅槃であると語られる。一方、プドガラが輪廻すると［いう主張を持つ犢子部師］、彼らにとって、常住なものや無常なものとして言えないそ［のプドガラ］に属したそれぞれの取［蘊］に依拠してある来去すること、それが［取蘊に］依存して働いている。［取蘊に］依存して依存して働いているその同じ［来去すること］は、いまや依存せずに働いていない時、涅槃であると説明される。しかし、諸々の行、あるいはプドガラにとっての、単に働かないことは存在物、あるいは非存在であると想定されることができない、というわけで、これゆえにも、「涅槃が存在物でもなく、非存在でもないということは合理である」。

---

*16 韻律 śloka。『楞伽経』第 10 章 Sagāthaka の 453 偈である。『楞伽経』第 10 章がそれ以前の九章に現れた偈頌の集成であるので、この偈頌の原箇所は『楞伽経』第 2 章 166 偈である。ただ、『楞伽経』2.166 の c-pāda の hy は 10.453 においては ca になる。

*17 ājavaṃjavībhāva について、『プラサナパダー』第 11 章は次のように説明する。
“yadi hy ātmā na syāt kasya pāñcagatike saṃsāra ājavaṃjavībhāvena janmamaraṇaparaṃparayā saṃsaraṇaṃ syāt |” PsP Chap.11(de La Vallée Poussin, 1903-13: 218) 【訳】「なぜなら、もしアートマンが存在しないならば、五道の輪廻において、誰が来去すること、つまり生死の連続によって輪廻するだろうか？」
これは『プラサナパダー』第 25 章の説明と一致している。

また、さらに、

> また、師匠は生起と消滅との断つことを語った。それゆえ、涅槃は存在物でもなく、非存在でもないということは合理である。　（『中論』25.10）

それについて、経典の中で、

> 比丘たちよ！誰であれ、生起によって、あるいは消滅によって、生起からの出離を求めるならば、彼らに遍知はない。*18

と言われた。なぜなら、この両者、つまり生起への渇愛と消滅への渇愛は、捨てられるべきものである。しかし、この涅槃が断たれるべきものであると世尊によって述べられなかった。そうでなくて、断たれるべきでないものである。すると、もし涅槃は存在物のかたちを持ち、あるいは非存在の形を持つならば、そういう［涅槃］も断たれるべきものになるはずである。しかし、［涅槃は］断たれるべきものではない。「それゆえ、涅槃が存在物でもなく、非存在でもないということは合理である」。

さらに、何らかの人々にとって、そ［の涅槃］において煩悩と出生がないので、涅槃が非存在の形を持つものであり、且つ［涅槃の］自分自身が存在物の形を持つものであるので、存在物の形を持つものである、というように、［涅槃は］両者の形を持つものであるならば、彼らにとって両者の形を持つ涅槃も不合理である、と示すために、［龍樹は］述べた。

> もし、涅槃は非存在と存在物との両者であるならば、解脱は非存在且つ存在物になるだろう。しかし、それは不合理である。（『中論』25.11）

もし、涅槃は存在物と非存在との両者の形を持つならば、その場合、解脱は存在物であり且つ非存在であるというようになろう。そして、それゆえ、あるものが諸々の行の生起（ātmalābha）であり、且つその［生起］の消滅であるならば、その同じものは解脱であろう。しかし、解脱が行そのものであることは不合理である。まさにこれゆえ、「しかし、それは不合理である」と述べた。

また、さらに、

> もし、涅槃は存在物と非存在との両者であるならば、涅槃は依存しないわけではない。なぜなら、そ［ういう涅槃］は両者に依存するのである。（『中論』25.12）

もし、涅槃は存在物と非存在との形を持つならば、その場合、［涅槃は］因縁総体に依存して、依拠して存在するだろう。［涅槃は因縁総体に］依存せずに［存在する］わけで

---

*18 この引用文の出所は確定できないが、次の Mahāvastu の文と似ている。ye hi keci bhavena bhavasya niḥśaraṇam āhuḥ sarve te bhavā aniḥśaraṇā ti vademi. MV2(Senart, 1890: 418)。de La Vallée Poussin (1903-13: 530) の脚注によれば、この経文は *Udāna* 3.10 と最も近く、bhāva と vibhavadiṭṭhi に関する内容は *Itivuttaka* §49、Aṅg. n. I. 88、Majjh. I. 65 にも見られる。*Udāna* 3.10 の当該文は次のようである。ye hi keci samaṇā vā brāhmaṇā vā bhavena bhavassa vippamokkham āhaṃsu, sabb' ete avippamuttā bhavasmā 'ti vadāmi. ye vā pana keci samaṇā vā brāhmaṇā vā vibhavena bhavassa nissaraṇam āhaṃsu, sabb' ete anissaṭā bhavasmā 'ti vadāmi. (PTS 43, p.33)

はない。理由は何か？なぜなら、「それは両者に依存するのである」。非存在が存在物に依存し、また存在物が非存在に依存する、というわけで、この両者は存在物と非存在に依存してこそ存在するのであり、依存せずに［存在する］わけではないのである。存在物と非存在との形を持つものであるから、涅槃はこのように［存在物と非存在に依存することに］なるだろう。しかし、こ［の涅槃］がこのようではないので、これは不合理である。

また、さらに、

> 涅槃は如何にして存在物と非存在との両者であろうか？なぜなら、涅槃は無為［法］であるが、しかし、存在物と非存在は有為［法］である。(『中論』25.13)

なぜなら、存在物は自らの因縁総体から生じるので、有為［法］である。非存在も存在物に依拠して生じるので、また「老死が出生という縁を持つものである」という言い方があるので、有為［法］である。すると、もし、涅槃が存在物且つ非存在を本質とするならば、その場合、そ［ういう涅槃］は無為ではない、すなわち有為にほかならないだろう。しかし、［涅槃は］有為であると認められない。それゆえ、涅槃が存在物と非存在の形を持つものとして不合理である。

次［の反論］があるだろう。「涅槃は実に存在物と非存在を本体とするものではなく、そうでなくて、涅槃において存在物と非存在がある。」と。［チャンドラキールティは答える。］このようであっても、不合理である。何故か？なぜなら、

> 涅槃において如何にして存在物と非存在との両者があろうか？なぜなら、光と闇の如く、同一のところにその両者が存在しない。(『中論』25.14)

実に、あたかも、互いに矛盾している光と闇が同時に同一の拠り所にありえないように、同様に、互いに矛盾している存在物と非存在にとっても、同一の涅槃にありえない、というわけで、従って、「涅槃において如何にして存在物と非存在との両者があろうか?」「決して存在しないだろう」と言わんとする。

いまや、涅槃は決して存在物でもなく決して非存在でもないことはどうのように合理であるかを示すために、［龍樹は］述べた。

> 涅槃は決して非存在でもなく、決して存在物でもないという表現（añjanā）は、非存在と存在物が成立する時、成立する。(『中論』25.15)

なぜなら、もし存在物という何らかのものが存在するならば、その場合、それを否定することによって、涅槃は決して存在物ではないというこの想定がある。また、もし何らかの非存在があるならば、その場合、それを否定することによって、涅槃は決して非存在ではないだろう。しかし、存在物と非存在との両者はない時、その場合、それらの否定もない、というわけで、「涅槃は決して非存在でもなく、決して存在物でもない」という想定も妥当であるはずはないので、これは不合理である。

また、さらに、

> もし、非存在でもなく存在物でもないような涅槃があるならば、「非存在でもなく存在物でもない」という［ような涅槃］は、誰によって表現されるのか？*19 （『中論』25.16）

何であれ、もし決して非存在ではなく、存在物の形を持つものでもない涅槃が存在すると想定されるならば、この場合、「このような両者の形を持たない涅槃が存在する」というように、誰によって表現され、認識され、あるいは表されるのか？君にとって、涅槃において、このような何らかの認識主体が存在するのか？あるいは、存在しないのか？もし［涅槃においてこういう認識主体は］存在するならば、この場合、君にとって涅槃においてもアートマンが存在するだろう。しかし、［涅槃においてアートマンがあると］認められない。取［蘊］を離れたアートマンは存在しないからである。もし［涅槃においてアートマンは］存在しないならば、その場合、誰によってこの種類の涅槃があると弁明されるのか？もし、輪廻にとどまる者が弁明すると［反論者は］いうならば、［答える。］もし輪廻にとどまる者が弁明するなら、彼は識によって弁明するのか、智によって［弁明するのか］？もし識によって［弁明する］と想定されるなら、それは不合理である。原因はなにか？なぜなら、識は相を対象とするものであるが、しかし涅槃にはいかなる相もない。それゆえ、まず、そ［の涅槃］が識によって認識されない。智によっても知られない。理由はなにか？なぜなら、実に智は空性を対象とするものになるはずであり、且つ、そ［の智］が不生という性質を持つものにほかならない。というわけで、存在しない本体を持つ［智］によって、涅槃が非存在でもなく、存在物でもないというように、如何にして認識されるのか？智はあらゆる戯論を越えた性質を持つものであるからである。それゆえに、誰によっても、涅槃は非存在でもなく存在物でもないというように表現されないのである。表現されておらず、表されておらず、認識されていないその［涅槃］がこのように存在することは不合理である。

あらゆる点で、涅槃に対するこれらの四つの想定がありえないように、如来、つまり涅槃の証得者に対しても、これらの想定が決してありえないと示すために、［龍樹は］述べた。

> 滅の後で世尊が存在するとは表現されない。存在しないとも、両者とも、両者でないとも表現されない。(『中論』25.17)

なぜなら、さきに、

> しかし、ある人によって堅固な執着が捉えられるならば、彼は［如来が］「存在する」、あるいは「存在しない」というように、すでに滅した［如来］に関する分別を分別するだろう。*20 （『中論』22.13）

---

*19 『青目注』において、25.15 と 16 二偈の順番は逆である。

*20 この偈頌は次のようである。

ghanagrāho gṛhītas tu yenāstīti tathāgataḥ |
nāstīti vā vikalpaṃ sa nirvṛtasya vikalpayet ||

とすでに述べられた。以上のように、まず、滅の後で如来が存在するとも、存在しないとも表現されない。［如来が存在すると、如来が存在しないという］二つがないから、［如来が存在し且つ存在しないという］両者であるとも表現されない。まさに［如来が存在し且つ存在しないという］両者がないから、両者でないとも表現されない、すなわち把握されない。

また、滅の後でのみ四種類によって世尊が表現されないのではなく、また、さらに、

> 現に住していても世尊が存在するとは表現されない。存在しないとも、両者であるとも、両者でないとも表現されない。(『中論』25.18)

また、どのように表現されないのかということは、［『中論』第二十二章］「如来の考察」においてすでに説明された。まさに、それゆえ、

> 輪廻には涅槃とのいかなる区別もない。涅槃には輪廻とのいかなる区別もない。(『中論』25.19)

なぜなら、現に住していても世尊が存在する云々[*21]によって表現されない。既に完全に滅したとしても、［如来が］存在する云々によって表現されない。まさに、それゆえ、輪廻と涅槃との両者には、互いにいかなる区別もない。考察されている両者が等しい形を持つものであるから。また、世尊によって次のことも言われた。

> 実に、比丘たちよ、生老死の輪廻は無始無終[*22]である。[*23]

と。まさにそれゆえ、それも合理である。輪廻と涅槃に区別がないから。つまり、

> 涅槃の辺際と輪廻の辺際、それらの両者にはいかなる微細な隔たりもない。(『中論』25.20)

写本の異読について、本論文の校訂本を参照。

*21 「云々」(evamādinā) というのは「現に住していても如来が存在する」、「如来が存在しない」、「如来が存在し且つ存在しない」、「如来が存在するのではなく、存在しないのではない」という四句分別を指す。

*22 anavarāgra（無始無終）のチベット語訳は thog ma dang tha ma med であり、漢訳語は一般的に「従無始来」である。anavarāgra はパーリ語の anamatagga のサンスクリット化された単語である。anamatagga のもとの意味は「知られない開始を持つもの」(whose beginning is un-known) である。しかし、サンスクリット化された anavarāgra は an-avara-agra という複合語になってしまう。チベット語訳はまさにこのような理解を持っているが、漢訳は逆にパーリ語と同様にこの単語のサンスクリット化以前の意味を保っている。anavarāgra の用例は『中論』11.1 pūrvā prajñāyate koṭir nety uvāca mahāmuniḥ | saṃsāro ’navarāgro hi nāsyādir nāpi pañcimam || 叶少勇 (2011b: 184) に見られる。この偈頌の中で、anavarāgra は明白に「輪廻に始まりもなく、終わりもない」と意味する。この語の意味について、Takasaki (1966: 232) を参照。

*23 知っている限りに、この引用文は *Divyāvadāna* XV(Cowell and Neil, 1886: 197) と最も近い。
“anavarāgro bhikshavaḥ saṃsāro ’vidyānivaraṇānāṃ sattvānāṃ tṛishnāsaṃyojanānāṃ tṛishṇārgalabaddhānāṃ dīrgham adhvānaṃ saṃdhāvatāṃ saṃsaratāṃ pūrvā koṭiḥ na prajñāyate duḥkhasya”【訳】比丘たちよ、輪廻は始まりを持たない。無明という妨げを持ち、渇愛と結びついており、渇愛というボルトに縛られており、長い時間で走っており、輪廻している衆生にとって、苦の前際は知られない。
また、Takasaki (1966: 232) によると、パーリ聖典には、anamatagga と saṃsāra を説く経典（SN II, p. 179, 193; III 141, 151, etc.）がある。

また、輪廻が涅槃と区別されないから、前後の辺際に関する想定がありえないだけでなく、これらも、つまり、

> 滅の後で［如来が存在する等と］、［空間的な］限界等と、常住等に関する見解は、涅槃と後際と前際に依拠するのである。(『中論』25.21)

それらも、まさにそれゆえ、不合理である。輪廻と涅槃との両者が共に本質上静まっているので、一味をもつものであるから。そ［の偈の］中で、「滅の後で」というこの表現によって、四見解が含まれる。つまり、(1)「死んだ後で如来が存在する」と、(2)「死んだ後で如来が存在しない」と、(3)「死んだ後で如来が存在し且つ存在しない」と、(4)「死んだ後で如来が存在するのでもなく、存在しないのでもない」と。これらの四見解は涅槃に対する執着によって生じるのである。

辺際等に関しても、四つの見解がある。つまり、(1)「世界が有限である」と、(2)「世界が無限である」と、(3)「［世界が］有限であり且つ無限である」と、(4)「世界が有限でもなく無限でもない」と。これらの四見解は後際に依拠して生じるのである。そのうち、アートマン及び世界の未来の生起を見ていない者は「世界が有限である」というように分別しながら、後際に依拠して［この見解を］生じるのである。同様に、未来の生起を見ている者は、「世界が無限である」というような［見解を］生じるのである。見ており且つ見ていない者は二通りに理解する。［世界が有限であり且つ無限であるという］両者の否定によって、「［世界が］有限でもなく無限でもない」と理解する。

(1)「世界が常住である」と、(2)「世界が無常である」と、(3)「［世界が］常住且つ無常である」と、(4)「世界が常住でもなく無常でもない」というこれらの四見解は前際に依拠して生じるのである。そのうち、アートマン及び世界の過去の生起を見ていない者は、「世界が常住である」と理解する。見ている者は「［世界が］無常である」と理解する。見ており且つ見ていない者は「［世界が］常住であり且つ無常である」と理解する。見ているのでもなく見ていないのでもない者は、「［世界が］常住でもなく無常でもない」と理解する。前際に依拠して［生じる］のである。

それでは、これらの見解は如何にして妥当であるのか？もし、何らかのものにある自性があるなら、そのものに関する存在物や非存在の想定にもとづいて、これらの見解があるだろう。しかし、輪廻と涅槃の両者の区別がないと教えられる時、その場合、

> あらゆる法が空である時、何が有限であるか、何が無限であるか、何が有限であり且つ無限であるか、何が有限でもなく無限でもないか？
> 何が同一であるか、何が別異であるか、何が常住であるか、何が無常であるか、何が無常且つ常住であるか、あるいは、何が両者でもないのか？(『中論』25.22-23)

これらの十四は共に無記の事柄である。存在物の本体 (svarūpa) が存在しない時、［これらの十四の見解は］決して妥当ではない。しかし、ある者が存在物の本体を増益し、それを離れたり離れなっかたりすることによって、これらの見解を起こし、執着するなら、彼にとって、この執着は、涅槃の城に向かう道を塞ぎ、また、輪廻に関わる苦に向かわせる、

と知られるべきである。

これについて［反論者は］言った。「もし、このように君［中観派］によって涅槃さえも否定されるなら、それでは、無辺の行を通じて衆生の集まりを利益し、あらゆる衆生の意楽の正しい本質を知り、大悲に依拠し、一人息子への愛情をもって余すことのない三界の生き物を愛する世尊によって、世人の涅槃を証得させるために、［衆生の］行為に対する対治に相応しい教法が教えられた。こうであるなら、そ［の教法］は無意味になるのではないか。」と。答える。もし、法といわれる何らかのものが自性というかたちをもつものとして存在し、また、ある衆生たちがその法の聴聞者であり、あるいはある仏世尊という指導者が存在物の自性をもつ者としておられるなら、その場合、こ［の批判］はこのようであろう。しかしながら、

> ［涅槃は］あらゆる認識の寂静であり、戯論の寂静であり、吉祥*24である。どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって説かれなかった。(『中論』25.24)

その場合、どうして我々にとって上述の過失が付随するのか？この［偈頌の］中で、あらゆる戯論、つまり相が寂静すること、つまり無活動が涅槃である。また、その同じ静まりは、本質上寂静するので、吉祥である。あるいは、語の無活動によって、戯論の寂静である。心の無活動によって、吉祥である。あるいは、諸々の煩悩の無活動によって、戯論の寂静である。出生の無活動によって、吉祥である。あるいは、煩悩を断つことによって、戯論の寂静である。余すことのない習気を断つことによって、吉祥である。あるいは、所知の非知覚によって、戯論の寂静である。能知の非知覚によって、吉祥である。また、あたかも空において白鳥の王が自らの福徳と知恵との資糧の翼によって飛ぶための風に乗り、また空がいかなるものでもないので、風が空に［乗る］ように、諸々の仏世尊はあらゆる戯論が静まった形を持ち、吉祥なる涅槃において、住所と結合せずに住するのである*25。その場合、あらゆる相の非知覚によって、「どこにおいても」、つまり、神々において、あるいは人間において、「いかなる者のためにも」、つまり神のためにも、あるいは人間のためにも、「いかなる法も」、つまり雑染と関わるものも、浄化と関わるものも、教えられなかったと知られるべきである。

『聖如来秘密経』において、言われた。

> また、ある夜、寂智（śāntamati）よ、如来は無上の正等覚を現等覚した。また、ある夜、［如来は諸蘊を］取らずに完全に涅槃するだろう。この間に、如来によって、一つの音節さえも、発されなかった。［一つの音節さえも現に］発していない。［一

*24 ここでは、sarvopalambhopaśama と prapañcopaśama と śiva の三つは涅槃の異名として挙げられている。原始仏教経典 (SN IV: 362-373) の中で、nippapañca と siva はすでに涅槃の異名として数えられる。涅槃の異名について、吉元 (1984: 125-183) を参照。

*25 「無住所涅槃」の説明である。『入中論』12.40-42 および自註では、チャンドラキールティは仏が大悲のゆえに、涅槃に住しないという無住所涅槃説を唱える。本論文第 2 章を参照。

つの音節さえも］発しようとしない*26。さて、しかし、［衆生自身の］信解したことに応じて、いろいろちがった素質と願いを持つ*27すべての衆生は、それぞれの多様な如来の言葉が生じていると想像している。彼らにとって、以下のような別々の［考えが］ある。「この世尊は我々にこの法を教える」。「また、我々は如来の法の説示を聞く」。その場合、如来は想定せず、分別しない。なぜなら、寂智よ、如来があらゆる想定と分別の網と習気と戯論を離れたのである。*28　（『如来秘密経』）

と広説する。同様に、

すべて［の法］が言葉を持たず、音節を持たず、空であり、静まったものであり、最初から汚れを離れたものである。このように諸法を知る者は、童子、仏と呼ばれる。*29　（『如来秘密経』）

と。［反論者］それでは、もし、このように、「どこにおいても、いかなる者のためにも、いかなる法も仏によって教えられなかった」とするなら、その場合、如何にしてこれらの極めて多様な説法ための言語表現（pravacanavyavahāra）が仮設されるのか？答える。夢に入っている者の如く、無明という眠りに従っている生き物にとって、「全三界の神と悪魔と人間を守るこの世尊がこの法をわれわれに説く」という自らの分別の生起がある。世尊によって以下が述べられる。

実に、如来は無漏なる善法の映像のようである。これにおいて、真如もなく、如来もいない。しかし、すべての世界において、影が見られる。*30　（『智光明荘厳経』

---

*26 チベット語訳校訂本に見られるように、Peking・sNar thang・Golden 三版本はサンスクリット本と同様に、三時の順序に従って、“ma gsungs so”、“rab tu ma gsungs so”、“gsung bar mi ’gyur ro”という三項目を説くが、sDe dge と Cone 二版本は二番目の「rab tu ma gsungs so」を欠いている。『如来秘密経』の宋法護訳、チベット語訳（sDe dge と Peking 二版本）、および『楞伽経』の引用は皆二番目の“rab tu ma gsungs so”を欠如している。

*27 “nānādhātvāśaya”の用例は『法華経』(Kern and Nanjio, 1912: 41) に見られる。
“ye nānābhinirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanārambaṇaniruktyupāyakauśalyair nānādhimuktānāṃ sattvānāṃ **nānādhātvāśayānām** āśayaṃ viditvā dharmaṃ deśitavantaḥ | te ’pi sarve śāriputra buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśitavanto …”
松濤他 (1988: 52-53) はこの単語を「いろいろちがった素質と心の願いをもった」と訳す。

*28 「其夜如来逮無上正真道、成最正覚、至無余界泥洹之界滅度日夜、於其中間、施一文字、以能頒宣、一一分別、無数億載。講演布散、無限義理。所以者何、如来常定、如来至真無出入息、無所思念、亦無所行、無復思想、悉無所行。雖口所宣、無想無行、如来所行、無応不応、無言無説、不想有人。世尊所説一切、超越三昧正受、皆以文字、而分別説、頒宣文字、而自倚著、一切衆生如是周旋往来。如来爲我講説經法、是則名曰如来在彼、亦無想念。」　西晋竺法護訳『大宝積経』巻十「密迹金剛力士会」(T310.11.55c6-16); 「所謂如来於晝夜中、成証阿耨多羅三藐三菩提果。於晝夜中、入大涅槃。然其中間、如来未嘗宣説一字、亦無詮表。何以故。以仏如来常在三摩呬多故、如来亦無出息入息、若尋若伺。以無尋伺故、所出語言、離諸邪妄。而仏世尊無尋無伺、無所分別、無廣分別、無説無示、復無詮表。然諸衆生亦聞如来有所宣説、而是如来畢竟在定、於一切種、及一切時、亦以文字而能詮表、復無所表。若有衆生因以文字、生信重者、而彼衆生自謂如来爲我説法。然仏如来心常安住、無分別、捨。」　宋法護訳『仏説如来不思議秘密大乗経』巻七「如来身密不思議品」(T312.11.719b21-c3)

*29 「是議無文字、而反宣文字、人中尊所作、班宣我當持。」　西晋竺法護訳『大宝積経・密迹金剛力士会』巻14(T310.11.79a23); 「諸法本来無文字、無中假以文字説、聖尊悲愍故敷宣、我當受持而流演。」　宋法護訳『仏説如来不思議秘密大乗経・総持功德讚説譬喩無尽品』巻 20(T312.11.750b29-c1)

*30 JĀA II 10.2(木村他 (2004b: 54); 木村他 (2004a: 37)); 「無漏善法中、無如及如来、依彼善法力、現世如鏡像。」

II.10.2）

と。また、これは「如来語秘密章」において詳しく説明されている。そして、それゆえ、涅槃のために説法することがないので、どうして説法があることによって涅槃があることになるだろうか？したがって、涅槃さえも存在しないということが成立する。また、世尊によって述べられる。

> 実に、涅槃は涅槃ではないと世間の主によって教えられた。虚空によって作られた結び目はその同じ虚空によって解かれるのである。*31 （『不退転法輪経』）

と。同様に、

> 世尊よ、ある法に生起や消滅があると認めている人々、彼らにとって、仏は生起しない。世尊よ、涅槃を存在物として求めている人々、彼らにとって、輪廻を超えることはない。それは何故か？世尊よ、涅槃というのは、あらゆる相の静まりであり、すべての動念と妄動の静まりである。そして、世尊よ、これらの愚人は、よく説かれた法と律において出家して、外道の見解に落ち込み、涅槃を存在物として求める。例えば、胡麻から胡麻油、ミルクからバター［を求める］ようである。世尊よ、完全に停止したすべての法に対して、涅槃を求めている者を増上慢な外道と私は呼ぶ。世尊よ、正しく実践した瑜伽行者は、いかなる法の生起も消滅も作らず、いかなる法の獲得や現観も求めない。*32 （『思益梵天所問経』）

と広説する。

元魏曇摩流支訳『如来莊嚴智慧光明入一切仏境界經』巻一 (T357.12.242b18-19); n.e. 梁僧伽婆羅訳『度一切諸仏境界智厳経』;「如来所成如影像、一切善法皆無漏、一切皆遍仏眞如、三種影像世間現。」 宋法護訳『仏説大乗入諸仏境界智光明莊厳経』巻二 (T359.12.257a7)

*31 「世尊所演説、假號名泥洹、喩之若虚空、度於無所有。」 西晋竺法護譯『佛説阿惟越致遮經』巻二「釋果想品」(T266.9.213c14-15);「涅槃非涅槃、救度於世間、猶如空中結、以空而自解。」 安公涼土異經『不退轉法輪經』巻三「重釋二乘相品」(T267.9.240b27-28); 「自在導世師、不可説而説、於空中作結、即空而解之。」 劉宋智嚴譯『佛説廣博嚴淨不退轉輪經』巻三 (T268.9.270c13-14)

注意すべきなのは、『プラサンナパダー』においては、この偈頌が仏の所説と見なされる。しかし、経典の中では、これが仏の説法ではなく、阿難の所説である。また、『プラサンナパダー』に先行するバーヴィヴェーカの『般若灯論』もこの偈頌を引用する (D no.3853, 248b)。

*32 「世尊、假使欲令法起生者、則於其人、佛不興出。彼不超度生死之難也。天中天、求見泥洹故。唯天中天、所謂泥洹蠲除一切衆想之念、亦不汲汲於諸通慧爲殊異也。若所釋是等比丘、即爲自欺也。天中天、於正法律而行出家、墮外邪見、而以志覩泥洹之處。譬如麻油、酪酥、醍醐。然即滅盡諸法、世尊永悉滅度。其永滅度、吾則謂之爲甚慢矣。唯天中天、其修行者則無所修、逮平等者、終不造立所起之法。及與滅盡、亦無有求、欲得法者亦無平等。」 西晉竺法護譯『持心梵天所問經』巻一「分別法言品」(T585.15.4c2-13)；「世尊、若有於法生見、則於其人、仏不出世。世尊、若有決定見涅槃者、是人不度生死。所以者何。涅槃名爲除滅諸相、遠離一切動念戲論。世尊、是諸比丘、於仏正法出家、而今墮於外道邪見、見涅槃決定相。譬如從麻出油、從酪出酥。世尊、若人於諸法滅相中、求涅槃者、我説是輩皆爲増上慢人。世尊、正行道者、於法不作生、不作滅、無得、無果。」 姚秦鳩摩羅什訳『思益梵天所問経・分別品』巻一 (T586.15.36c25-37a4);「世尊、若有於法而起生見、起滅見者、世尊、彼人不過生死、則於其人、仏不出世。世尊、若有決定見涅槃者、彼人亦不度生死、亦不得涅槃。何以故。世尊言、涅槃者名爲除滅諸相、遠離一切動、一切我想、一切發、一切戲故。世尊、是諸比丘、已於如来正法出家、而今墮在外道邪見、於涅槃樂中求決定相。譬如從麻出油、從酪出酥。世尊、若人於諸法寂滅相中、求涅槃者、我説是輩爲増上慢邪見外道。世尊、正行道者、於寂滅法、不作生相、不作滅相、無得、無果。」 元魏菩提流支訳『勝思惟梵天所問経』巻一 (T587.15.66c11-21)

師匠月称足下に著された『中論注明句論』の第二十五章「涅槃の考察」である。

参考文献

Ackrill, J. K. (2002) *Aristotle's Categories and de Interpretatione*, Oxford: Clarendon Press, reprinted edition.

Bahm, Archie J. (1957) "Does Seven-Fold Predication Equal Four-Cornered Negation Reversed?" *Philosophy East and West*, Vol. 7, No. 3-4, pp. 127-130.

Bendall, Cecil (1903) "Subhāṣita-saṃgraha (Part I)," *Le Muséon*, Vol. IV, pp. 375-402.

Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga Band I*, Sanskrittexte aus den Turfanfunden X, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Burtt, E. A. (1955) "What Can Western Philosophy Learn from India?" *Philosophy East and West*, Vol. 5, No. 3, pp. 195-210.

Bendall, M. A. Cecil (1883) *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge*, Cambridge: Cambridge University Press.

Cowell, Edward B. and Robert Alexander Neil (1886) *The Divyāvadāna: a Collection of Early Buddhist Legends*, Cambridge: Cambridge University Press.

Cutler, Joshua W. C. and Guy Newland (2002) *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment by Tsong-kha-pa Volume Three*, New York Colorado: Snow Lion Publications.

Cüppers, C. (1990) *The IXth Chapter of the Samādhirājasūtra: A Text-critical Contribution to the Study of Mahāyāna Sūtras*: F. Steiner.

Dreyfus, Georges B. J. and Sara L. McClintock (2003) *The Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction: What Difference Does a Difference Make?*, Boston: Wisdom Publications.

Dutt, Nalinaksha and Shiv Nath Sharma (1941) *Gilgit Manuscripts Vol. II*, Calcutta: The Calcutta Oriental Press.

Eckel, Malcolm David (2008) *Bhāviveka and His Buddhist Opponents: Chapters 4 and 5 of the verses on the Heart of the Middle Way (Madhyamakahṛdayakārikāḥ) with the commentary entitled The Flame of Reason (Tarkajvāla)*, Harvard Oriental Series, Cambridge London: Harvard University Press.

Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dicionary II*, New Haven: Yale University Press.

Ejima, Yasunori (1989) *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu Chapter 1: Dhātunirdeśa*, Bibliotheca Indologica et Buddhologica 1, Tokyo: The Sankibo Press.

Feer, M. Léon (1991) *The Saṃyutta-nikāya of the Sutta-piṭaka Part I. Sagātha-vagga*, Oxford: Pali Text Society.

Fehér, Judit (1984) *Buddhapālita's Mūlamadhyamakavṛtti: Arrival and Spread of Prāsaṅgika-Mādhyamika Literature in Tibet*, Budapest: Akadémiai Kiadó, pp.211-240.

Garfield, Jay L. (2006) *Ocean of Reasoning: A Great Commentary on Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā*, New York: Oxford University Press.

Gokhale, V. V. (1955) "Der Sanskrit-Text von Nāgārjuna's Pratītyasamutpādahṛdayakārikā," in *Studia Indologica: Festschrift für Willibald Kirfel zur Vollendung seines 70 Lebensjahres*, Bonn: Selbstverlag, pp. 101-106.

——— (1978) "Encore: The Pratītyasamutpādahṛdaya of Nāgārjuna," in Dadphale, M. G. ed. *Principal V. S. Apte Commemoration Volume*, Poona: Deccan Education Society, pp. 62-68.

Gombrich, Richard Francis (2006) *How Buddhism began: the conditioned genesis of the early teachings*, Routledge critical studies in Buddhism: Routledge, 2nd edition.

Goshima, Kiyotaka (1981) *The Tibetan Text of the Brahmaparipṛcchā(Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā) Volume I(Tib. bam po daṅ po)*: Private Edition.

——— (2010) "Nāgājuna's Views of Dependent Origination and the Buddha," *Journal of indian and Buddhist Studies*, Vol. 58, No. 3, pp. 1203-1211.

Hahn, Michael (1982) *Nāgārjuna's Ratnāvalī Vol.1 The basic texts*, Bonn: Indica et Tibetica Verlag.

Huntington, Clair W. (1986) "The Akutobhayā and Early Indian Madhyamaka Vol. I," Ph.D. dissertation, The University of Michigan.

Hwang, Soonil (2006) *Metaphor and Literalism in Buddhism: The Doctrinal History of Nirvana*, Vol. 59, London; New York: Routledge.

Johnston, E. H. and D. Litt (1950) *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna: Bihar Research Society.

de Jong, J. W. (1977) *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, Madras: The Adyar Library and Research Centre.

——— (1978) "Textcritical Notes on the Prasannapadā," *Indo-Iranian Journal*, Vol. 20, pp. 25-59.

Kataoka, Kei (2011) *Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing Part 1: A Critical Edition of Mīmāṃsā-Ślokavārttika ad 1.1.2(Codanāsūtra)*, Vol. 814 of Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Kern, H. and Bunyiu Nanjio (1912) *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica, St.-Pétersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.

Kondo, Ryuko (1936) *Daśabhūmīśvaro Nāma Mahāyānasūtraṃ*, Tokyo: The Daijyo Bukkyo Kenyo-kai.

Kragh, Ulrich Timme (2006) *Early Buddhist Theories of Action and Result*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

Krishnamacharya, Embar (1926) *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla Vol. II*, Baroda: Central Library.

de La Vallée Poussin, Louis (1903-13) *Mūlamadhyamakakārikās(Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie impériale des Sciences.

——— (1912) *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Lalou, Marcelle (1953) "Les Textes Bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan," *Journal Asiatique*, Vol. 241, pp. 313-353.

Étienne Lamotte (1976) *The Teaching of Vimalakīrti: Vimalakīrtinirdeśa*, Vol. 32 of Sacred books of the Buddhists, London: Pali Text Society : Distributed by Routledge and Kegan Paul.

Lang, Karen (1990) "Spa-tshab Nyi-ma-grags and the Introduction of Prāsaṅgika Madhyamaka into Tibet," in Epstein, L. and R. F. Sherburne eds. *Reflections on Tibetan Culture: Essays in Memory of Turrell V. Wylie*, Lewiston Queenston Lampeter: The Edwin Mellen Press, pp. 127-141.

Li, Xuezhu (2015) "Madhyamakāvatāra-kārikā Chapter 6," *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 43, No. 1, pp. 1-30.

Lindtner, Christian (1979) "Candrakīrti's Pañcaskandhaprakaraṇa," *Acta orientalia*, Vol. 40, pp. 87-95.

——— (1982) *Nagarjuniana: studies in the writings and philosophy of Nāgārjuna*, Indiske studier, Copenhagen: Akademisk forlag.

Lovejoy, Arthur Oncken (1898) "The Buddhistic technical terms upādāna and upādisesa," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 19, pp. 126-136.

Lévi, Sylvain (1907) *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra : exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra Tome I: Texte*, Paris: Champion.

Maas, Philipp A. (2008) "A Phylogenetic Approach to the Transmission of the Tibetan Kanjur — The Akṣayamatinirdeśa Revisited," in *Bauddhasāhityastabakāvalī: Essays and Studies on Buddhist Sanskrit Literature: dedicated to Claus Vogel by colleagues, students, and friends*, Marburg: Indica et Tibetica Verlag, pp. 229-243.

MacDonald, Anne (2015a) *In Clear Words: The Prasannapadā, Chapter One Vol.I: Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Text*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

——— (2015b) "Pragmatic Translating: The Case of Pa tshab Nyi ma grags," in Allister, Patrick Mc, Cristina Scherrer-Schaub, and Helmut Krasser eds. *Cultural Flows across the Western Himalaya*, Vienna: Austrian Academy of Sciences, pp. 249-278.

Macé, Caroline and Philippe V. Baret (2006) "Why Phylogenetic Methods Work: The Theory of Evolution and Textual Criticism," in *The Evolution of Texts: Confronting Stemmatological and Genetical Methods*, Rome: Istituti Editoriali e Poligrafici Internazionali, pp. 89-108.

Matsunami, Seiren (1965) *A catalogue of the Sanskrit manuscripts in the Tokyo University Library*,

Tokyo: Suzuki Research Foundation.

May, Jacques (1959) *Candrakīrti Prasannapadā Madhyamakavṛtti*, Paris: Adrien-Maisonneuve.

Mitra, Rājendralāla (1888) *Ashṭasāhasrikā, a Collection of Discourses on the Metaphysics of the Mahāyāna School of the Buddhists*, Bibliotheca Indica, Calcutta: Baptist Mission Press.

Nagao, Gadjin M. (1964) *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣya*, Tokyo: Suzuki Research Foundation.

Nei, Masatoshi and Sudhir Kumar (2000) *Molecular evolution and phylogenetics*: Oxford University Press.

Norman, Kenneth R. (1993) "Mistaken Ideas about Nibbāna," *Buddhist Forum*, Vol. 3, pp. 211-225.

Obermiller, Eugéne (1992) *Prajñā Pāramitā-Ratna-Guṇa-Saṃcaya-Gāthā : Sanskrit and Tibetan text*, Bibliotheca Indo-Buddhica, Delhi: Sri Satguru Publications.

Oldenberg, Hermann and Richard Pischel (1966) *Thera- and Therī-gāthā*, London: Luzac & Company, LTD, 2nd edition.

Pradhan, P. (1967) *Abhidharmakośa-bhāṣyam*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute.

Raju, P. T. (1954) "The Principle of Four-Cornered Negation in Indian Philosophy," *Review of Metaphysics*, Vol. 7, No. 4, pp. 694 - 713.

Robinson, Richard H. (1957) "Some Logical Aspects of Nāgārjuna's System," *Philosophy East and West*, Vol. 6, No. 4, pp. 291-308.

Russell, Bertrand (1905) "On Denoting," *Mind*, Vol. 14, No. 56, pp. 479-493.

Saito, Akira (1984) "A Study of the Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti," Ph.D. dissertation, The Australian National University.

——— (2013) "A Shape in the Mist: On the Text of Two Undetermined Sūtra Citations in the Prasannapadā," *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, Vol. 20, pp. 17-25.

Schmithausen, Lambert (1969) *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścayasaṃgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ*, Vol. 8 of Veröffentlichungen, Wien: Hermann Böhlàu.

——— (1991) "Yogācārabhūmi: Sopadhikā and Nirupadhikā Bhūmiḥ," in Duan, Qing and Wenzhong Qian eds. *Papers in honour of Prof. Dr. Ji Xianlin on the occasion of his 80th birthday Vol.II*, 南昌: 江西人民出版社, pp. 687-710.

Émile Senart (1882) *Le Mahâvastu: texte sanscrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire 1*, Paris: Imprimé par autorisation du garde des sceaux à l'Imprimerie nationale.

——— (1890) *Le Mahâvastu: texte sanscrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire 2*, Paris: Imprimé par autorisation du garde des sceaux à l'Imprimerie nationale.

——— (1897) *Le Mahâvastu; texte sanscrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire 3*, Paris: Imprimé par autorisation du garde des sceaux à l'Imprimerie nationale.

Seyfort Ruegg, David (1977) "The uses of the four positions of the Catuṣkoṭi and the problem of the description of reality in Mahāyāna Buddhism," *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 5, No. 1-2, pp.

1-71.

——— (1981) *The Literature of Madhaymaka School of Philosophy in India*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

——— (1995) "On the Thesis and Assertion in the Madhyamaka/Dbu ma," in Steinkellner, Ernst and Helmut Tauscher eds. *Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, pp. 205-242.

——— (2000) *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

——— (2006) "The Svātantrika-Prāsaṇgika distinction in the history of Madhyamaka thought," *Indo-Iranian Journal*, Vol. 49, No. 3/4, pp. 319-346.

Shastri, Swami Dwarikadas (1968) *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla Vol. 2*, Bauddha Bharati Series, Varanasi: Bauddha Bharati.

Shukla, Karunesh (1973) *Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga Part I*, Tibetan Sanskrit Works Series, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute.

Shāstri, Hara Prasāda (1917) *A descriptive catalogue of Sanskrit manuscripts in the government collection under the care of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Spencer, Matthew, Elizabeth A. Davidson, Adrian C. Barbrook, and Christopher J. Howe (2004) "Phylogenetics of artificial manuscripts," *Journal of Theoretical Biology*, Vol. 227, No. 4, pp. 503-511.

Sprung, Mervyn, T. R. V. Murti, and U. S. Vyas (1979) *Lucid exposition of the middle way : the essential chapters from the Prasannapadā of Candrakīrti*, Boulder: Prajñā Press.

Staal, J. F. (1962) "Negation and the Law of Contradiction in Indian Thought: A Comparative Study," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*, Vol. 25, No. 1/3, pp. 52-71.

Steinthal, Paul (1885) *Udāna*, Pali Text Society no.43, London: The Pali Text Society.

Suzuki, Daisetz Teitaro (1999) *Studies in the Laṅkāvatāra sūtra : one of the most important texts of Mahayana Buddhism, in which almost all its principal tenets are presented, including the teaching of Zen*, Vol. 41 of Buddhist traditions: Motilal Banarsidass Publishers.

Tachikawa, Musashi (1971) "A sixth-century manual of Indian logic," *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 1, No. 2, pp. 111-145.

Tailanga, Gangadhara Sastri (1896) *The Nyāyasutras : with Vātsyāyaṇa's bhāshya and extracts from the Nyāyavārttika and the Tātparyaṭīkā*, Benares: E. J. Lazarus & Co.

Takasaki, Jikido (1966) *A Study on the Ratnagotravibhāga(Uttaratantra)*, Serie Orientale Roma, Roma: Instituto italiano per il medio ed estremo oriente.

Tauscher, Helmut (1995) *Die Lehre von den zwei Wirklichkeiten in Tsoṅ Kha Pas Madhyamaka-Werken*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde ;, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

Tillemans, T. J. F. (1989) "Formal and semantic aspects of Tibetan Buddhist debate logic," *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 17, No. 3, pp. 265-297.

Tillemans, Tom J. F. (1990) *Materials for the study of Āryadeva, Dharmapāla, and Candrakīrti Vol.I*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

Vaidya, P. L. (1958) *Avadāna-Śataka*, Bauddha-Saṃskr̥ta-granthāvalī, Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

——— (1960) *Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna with the commentary: Prasannapadā by Candrakīrti*, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

——— (1961) *Samādhirājasūtra*, Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

Vetter, Tilmann (1992) "On the Authenticity of Ratnāvalī," *Asiatische Studien*, Vol. 46, pp. 492-506.

Waldschmidt, Ernst (1950) *Das Mahāparinirvāṇasūtra : Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli : nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins T.1*, Berlin: Akademie-Verlag.

——— (1951a) *Das Mahāparinirvāṇasūtra : Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli : nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins T.2*, Berlin: Akademie-Verlag.

——— (1951b) *Das Mahāparinirvāṇasūtra : Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli : nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins T.3*, Berlin: Akademie-Verlag.

Westerhoff, Jan (2006) "Nāgārjuna's Catuṣkoṭi," *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 34, pp. 367-395.

——— (2009) *Nāgārjuna's Madhyamaka: A Philosophical Introduction*, New York: Oxford University Press.

Winternitz, Moriz and Arthur Berriedale Keith (1905) *Catalogue of Sanskrit manuscripts in the Bodleian Library*, Oxford: The Clarendon Press.

Wogihara, Unrai (1932) *Abhisamayālaṃkār'ālokā Prajñāpāramitāvyākhyā: commentary on aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā Part I*, Tokyo: The Toyo Bunko.

Woodward, F. L. (1926) *Paramattha-Dīpanī Udānaṭṭhakathā(Udāna Commentary) of Dhammapālācariya*, Pali Text Society Text Series No.143, London: The Pali Text Society.

Yamaguchi, Susumu (1934) *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, Nagoya: Librairie Hajinkaku.

Yonezawa, Yoshiyasu (1999) "*Lakṣaṇaṭīkā A Sanskrit Manuscript of an Anonymous Commentary on the Prasannapadā," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 47, No. 2, pp. 1024-1022.

——— (2004) "*Lakṣaṇaṭīkā Sanskrit Notes on the Prasannapadā(1)," *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies*, No. 27, pp. 115-154.

——— (2005) "*Lakṣaṇaṭīkā Sanskrit Notes on the Prasannapadā(2)," *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies*, No. 28, pp. 159-179.

——— (2010) "*Lakṣaṇaṭīkā Sanskrit notes on the Prasannapadā (6)," *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies*, No. 33, pp. 125-154.

Yuyama, Akira (1973) "Remarks on the metre of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇasaṃcaya-gāthā," in Ratnam, Perala ed. *Studies in Indo-Asian Art and Culture Vol. 2: Commemoration volume on the 70. birthday of Acharya Raghu Vira*, New Delhi: International Academy of Indian Culture, pp. 243-253.

——— (1976) *Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā : Sanskrit recension A*, Cambridge; New York: Cambridge University Press.

——— (1978) "Prajñā-Pāramitā-Ratna-Guṇa-Saṃcaya-Gathā (Rgs) quoted by Candrakīrti in his Prasannapadā (Pras) (II)," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 27, No. 1, pp. 486-483.

荒牧典俊 (1974) 『十地経』，大乗仏典，中央公論社.

伊久間洋光 (2010) 「『智光明荘厳経』をめぐって: 『宝性論』「自然不休息仏業品」及び『性起経』との関係を中心に」，『印度學佛教學研究』，第 59 巻，第 1 号，395-391 頁.

——— (2013) 「『如来秘密経』の梵文写本について」，『印度學佛教學研究』，第 61 巻，第 2 号，888-884 頁.

——— (2016) 「一字不説：『如来秘密経』の神変を中心に」，『密教学研究』，第 48 号，1-14 頁.

池田道浩 (2000) 「Candrakīrti の所知障解釈」，『印度學佛教學研究』，第 49 巻，第 1 号，395-392 頁.

——— (2003) 「声聞独覚の法無我理解を可能にする論理」，『日本西蔵学会々報』，第 49 巻，27-35 頁.

石田勝世 (2011) 「統計解析の生物学的手法によるテキストの系統樹作成: 蔵訳『般若心経』を中心に」，『印度學佛教學研究』，第 60 巻，第 1 号，414-411 頁.

稲葉正就 (1966) 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出（上)」，『佛教学セミナー』，第 4 号，15-33 頁.

宇井伯寿 (1921) 「三論解題」，『国訳大蔵経　論部 5』，国民文庫刊行会.

——— (1929) 『印度哲学研究　第五』，岩波書店，東京.

瓜生津隆真・中沢中 (2012) 『全訳チャンドラキールティ入中論』，起心書房，浦安.

——— (1965) 「中観仏教におけるボサツ道の展開」，『鈴木学術財団研究年報』，第 1 号，63-77 頁.

江島惠教 (1990) 「Bhāvaviveka/Bhavya/Bhāviveka」，『印度學佛教學研究』，第 38 巻，第 2 号，846-838 頁.

逢坂雄美・山崎守一 (1999) 「梵文『法華経』の統計解析」，『人文科学とコンピュータシンポジウム』，105 - 106 頁.

王俊淇 (2017a) 「『如来秘密経』における一字不説論」，『印度學佛教學研究』，第 65 巻，第 2 号，840-837 頁.

——— (2017b) 「吉蔵の『中論』科段について」，『インド哲学仏教学研究 = Studies in Indian philosophy and Buddhism』，第 25 巻，97-109 頁.

奥住毅 (1988) 『中論注釈書の研究チャンドラキールティ『プラサンナパター』和訳』，大蔵出版株式会社，東京.

—— (2014) 『増補改訂　中論註釈書の研究：チャンドラキールティ『プラサンナパダー』和訳』，山喜房佛書林.

奥山裕 (2014) 『全訳　ツォンカパ　中論注『正理の海』』，起心書房，千葉県.

越智淳仁 (1985) 「『楞伽経』の Dharmatā-buddha と Niṣyanda-buddha」，『密教文化』，第 1985 巻，第 150 号，148-137 頁.

梶山雄一 (1980a) 「「知恵のともしび」第二十五章 (前段の試訳)」，『密教学』，第 16,17 号，40-68 頁.

—— (1980b) 「中観派の十二支縁起解釈」，『仏教思想史３』，法蔵館，京都，89-146 頁.

桂紹隆・五島清隆 (2016) 『龍樹『根本中頌』を読む』，春秋社，東京.

—— (1977) 「因明正理門論研究 [一]」，『広島大学文学部紀要』，106-126 頁.

—— (2013) 「『中論頌』の構造」，『印度學佛教學研究』，第 61 巻，第 2 号，902-894 頁.

加藤純章 (1989) 『経量部の研究』，春秋社，東京.

金沢豊 (2007) 「『入中論』における『十地経』の引用」，『印度學佛教學研究』，第 55 巻，第 2 号，941-938,1279 頁.

川越英真 (2005) 『dKar chag ’Phang thang ma』，東北インド・チベット研究会，仙台.

岸根敏幸 (1993) 「saṃvṛtisatya と vyavahārasatya：Candrakīrti の所説を中心として」，『印度學佛教學研究』，第 42 巻，第 1 号，460-456 頁.

—— (1996) 「チャンドラキールティにおける論証」，『印度學佛教學研究』，第 45 巻，第 1 号，350-347 頁.

—— (2000) 「ナーガールジュナとチャンドラキールティ: 大乗と空思想の接点をめぐって」，『印度學佛教學研究』，第 49 巻，第 1 号，289-292 頁.

—— (2001a) 「『プラサンナパダー』第 24 章:「聖なる真理の考究」校訂テキスト (1)」，『福岡大學人文論叢』，第 33 巻，第 2 号，1003-1024 頁.

—— (2001b) 『チャンドラキールティの中観思想』，大東出版社，東京.

—— (2001c) 「チャンドラキールティの二真理説：世俗真理を中心に」，『福岡大学人文論叢』，第 32 巻，第 4 号，2311-2345 頁.

—— (2002) 「『プラサンナパダー』第 24 章:「聖なる真理の考究」校訂テキスト (3)」，『福岡大學人文論叢』，第 34 巻，第 1 号，197-232 頁.

木村高尉・大塚伸夫・木村秀明・高橋尚夫 (2004a) 「梵文校訂『智光明荘嚴經』: Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtra Sanskrit Text」，『小野塚幾澄博士古希記念論文集：空海の思想と文化（下）』，ノンブル社，東京，1(596)-89(508) 頁.

—— ・高橋尚夫・木村秀明・大塚伸夫 (2004b) 『梵藏漢対照『智光明荘嚴經』』，第三巻，梵藏漢対照『維摩經』　『智光明荘嚴經』，大正大学出版会.

五島清隆 (2008) 「龍樹の縁起説 (1) とくに相互依存の観点から」，『南都仏教』，第 92 号，1-26 頁.

—— (2009) 「龍樹の縁起説 (2) とくに十二支縁起との関連から」，『南都仏教』，第 93 号，

1-37 頁.
—— (2011a)「龍樹の縁起説 (3) :『中論頌』第 26 章「十二支の考察」について (1)」,『仏教学部論集』, 第 95 巻, 53-72 頁.
—— (2011b)「龍樹の縁起説 (3) :『中論頌』第 26 章「十二支の考察」について (2)」,『佛教大学仏教学会紀要』, 第 16 巻, 35-62 頁.
—— (2016)「再考『根本中頌』における「十二支縁起」」,『仏教大学仏教学会紀要』, 第 21 号, 1-39 頁.
斎藤明 (2003)「『無畏論』の著者と成立をめぐる諸問題」,『印度學佛教學研究』, 第 51 巻, 第 2 号, 869-863 頁.
桜部建 (1969)『倶舎論の研究』, 法藏館, 京都.
清水光幸 (1987)「原始仏教の四句分別とジャイナ教の七句分別の論理的解明」,『印度學佛教學研究』, 第 35 巻, 第 2 号, 961-959 頁.
菅沼晃 (1970)「入楞伽経における dharmanaya について」,『印度學佛教學研究』, 第 18 巻, 第 2 号, 568-573 頁.
—— (1972)「入楞伽経の不立文字論」,『東洋大学紀要文学部篇』, 第 25 号, 33-65 頁.
—— (1977)「入楞伽経三万六千一切法集品訳註 1」,『東洋学論叢』, 第 2 号, 91-193 頁.
—— (1981)「入楞伽経無常性品・現観品・如来常無常品・変化品訳注」,『東洋学論叢』, 第 6 号, 1-134 頁.
大正大学綜合佛教研究所梵語佛典研究会 (2004)『『維摩經』　『智光明莊嚴經』解説』, 第一巻, 梵藏漢対照『維摩經』　『智光明莊嚴經』, 大正大学出版会.
高橋尚夫・前田崇・松濤泰雄・米澤嘉康・古宇田亮修・瀧瀧英寛英寛・長島潤道・吉澤秀知・西野翠 (2006)『梵文維摩經: ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』, 大正大学出版会, 東京.
高崎直道 (1968)「『智光明荘厳経』覚え書」,『駒澤大學佛教學部研究紀要』, 第 26 巻, 54-78 頁.
—— (2009)『大乗起信論・楞伽経』, 第八巻, 高崎, 直道著作集, 春秋社.
—— (2009a)『大乗仏教思想論 II』, 高崎, 直道著作集第三巻, 春秋社, 東京.
—— (2009b)『大乗起信論・楞伽経』, 第第 8 巻巻, 高崎, 直道著作集, 春秋社.
高橋晃一 (2005)『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開』, Bibliotheca Indologica et Buddhologica, 山喜房佛書林, 東京.
湯用彤 (1991)『漢魏兩晉南北朝佛教史』, 上海書店, 上海.
丹治昭義 (1981)「月称の涅槃観の一考察」,『印度學佛教學研究』, 第 30 巻, 第 1 号, 98-103 頁.
—— (1982)「無畏と青目注」,『印度學佛教學研究』, 第 31 巻, 第 1 号, 83-88 頁.
—— (1988)『沈黙と教説：中観思想研究 I』, 関西大学東西学術研究所, 吹田市.
—— (2002)「一音説法」,『南都仏教』, 第 81 号, 19-44 頁.
塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文 (1990)『梵語仏典の研究 III 論書篇』, 平樂寺書店, 京都.
寺本婉雅 (1974a)『梵漢独対校・西蔵文和訳中論無畏疏』, 国書刊行会, 東京.

――・平松友嗣 (1974b) 『藏漢和三訳対校　異部宗輪論』，国書刊行会，東京.
常盤義伸 (1994) 『「ランカーに入る」: 梵文入楞伽経の全訳と研究』，第二巻，研究報告，花園大学国際禅学研究所.
中村元 (1954)「空觀の記號論理學的解明」,『印度學佛教學研究』，第 3 巻，第 1 号，223-231 頁.
長尾雅人 (1978) 『中観と唯識』，岩波書店，東京.
長島潤道 (2007) 「後期中観派における帰謬派の系譜：Atiśa の理解にもとづいて」，『梵文学研究論集：松濤誠達先生古稀記念』，ラトナ・コーポレーション株式会社大祥書籍，東京，377-402 頁.
南條文雄 (1923) 『梵文入楞伽経』，大谷大学，京都.
――・泉芳璟 (1927) 『邦訳梵文入楞伽経』，第二巻，南條文雄著作選集，南條先生古稀記念祝賀会，京都.
新作慶明 (2015) 「『プラサンナパダー』第 18 章「我（アートマン）の考察」の研究」，博士論文，東京大学.
―― (2014) 「Prajñāpradīpa/-ṭīkā における戯論 (prapañca) : 第 22 章第 11 偈注釈の用例について」，『印度學佛教學研究』，第 62 巻，第 3 号，1225-1229 頁.
八力広喜 (1971) 「竜樹の縁起観：「中論」に説かれる十二支縁起」，『印度學佛教學研究』，第 19 巻，第 2 号，843-847 頁.
服部弘瑞 (1998) 「原始仏教に於ける依 (upadhi) の語義に就いて」，『パーリ学仏教文化学』，第 12 号，75-81 頁.
浜野哲敬 (1987)「『如来秘密経』の仏陀観」,『印度學佛教學研究』，第 36 巻，第 1 号，42-46 頁.
早島理 (1976) 「法随法行 (dharma-anudharma-pratipatti) その語義と意義」，『南都仏教』，第 36 号，1-24 頁.
バッタチャルヤ，K. (1985) 「パーリ仏教正典における upadhi, upādi, upādāna」，『佛教文化研究所紀要』，第 24 巻，22-37 頁.
馬場紀寿 (2015) 「上座部大寺派のパーリ語主義」，『パーリ学仏教文化学 = Journal of Pali and buddhist studies』，第 29 号，33-53 頁.
平井俊栄 (1976) 『中国般若思想史研究: 吉蔵と三論学派』，春秋社，東京.
平川彰 (2011) 『インド仏教史　下』，春秋社，東京，第新版版.
平野隆 (1954) 「無畏註と佛護註との異同について」，『印度學佛教學研究』，第 3 巻，第 1 号，236-238 頁.
藤田宏達 (1984) 『〈倶舎論〉所引の阿含経一覧』，北海道大学文学部印度哲学研究室.
船山徹 (2013) 『仏典はどう漢訳されたのか：スートラが経典になるとき』，岩波書店，東京.
法尊 (2012) 『菩提道次第広論』，民族出版社，北京.
阿理生 (1986)「無住処涅槃について」,『印度學佛教學研究』，第 34 巻，第 2 号，851-858 頁.
本庄良文 (1984) 『倶舎論所依阿含全表』，京都.

本多恵 (1988) 『チャンドラキールティ中論註和訳』，国書刊行会，東京.
松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義 (1988) 『法華経 I』，大乗仏典，中央公論社，東京，第新訂版.
松本史朗 (1997) 『チベット仏教哲学』，大蔵出版社，東京.
三谷真澄 (2001) 「『般若灯論』中の『無畏』: ルイゲンツェンの翻訳手続きに関する一試論」，『日本西蔵学会々報』，第 46 号，17-30 頁.
御牧克己 (1982) 「チベッドにおける宗義文獻（学説綱要書）の問題」，『東洋學術研究』，第 21 巻，第 2 号，179-192 頁.
宮崎泉 (2005) 「アティシャの論理学に対する立場」，『哲学研究』，第 580 号，15-37 頁.
師茂樹 (2002) 「N グラムモデルとクラスター分析を用いた漢文古典テキストの比較研究：『般若心経』の異訳の比較を例に」，『京都大学大型計算機センター第 69 回研究セミナー「東洋学へのコンピュータ利用」予稿集』.
叶少勇 (2011a) 『《中論頌》与《仏護釈》：基於新発現梵文写本的文献学研究』，梵文貝葉経与仏教文献系列叢書，中西書局，上海.
―― (2011b) 『中論頌：梵藏漢合校·導読·訳注』，中西書局，上海.
安井広済 (1976) 『梵文和訳入楞伽経』，法蔵館，京都.
安井光洋 (2015) 「初期『中論』注釈書の研究」，博士論文，大正大学.
山口益 (1941) 『佛教における有と無の対論』，山喜房佛書林，東京.
山野智恵 (2001) 「『大宝積経』「密迹金剛力士会」の一考察」，『智山学報』，第 50 巻，41-57 頁.
吉水清孝 (2015) 『クラーリラによる「宗教としての仏教」批判：法源論の見地から』，第 25 巻，RINDAS ワーキングペーパーシリーズ，龍谷大学現代インド研究センター，京都，1-72 頁.
吉水千鶴子 (2010) 「チャンドラキールティの論理学」，『印度學佛教學研究』，第 59 巻，第 1 号，411-406 頁.
吉元信行 (1984) 「滅諦・涅槃の異名」，『大谷大学研究年報』，第 37 号，125-183 頁.
李学竹 (2009) 「月稱關於二乘人通達法無我的論證：以梵文本《入中論》第一章為考察中心」，Steinkellner, Ernst, Qing Duan, and Helmut Krasser eds. 『Sanskrit Manuscripts in China: Proceedings of a panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies』, China Tibetology Publishing House，Beijing，183-193 頁.
―― ・叶少勇 (2014) 『六十如理頌：梵藏漢合校・導読・訳注』，梵藏漢佛典叢書，中西書局，上海.
渡辺章悟 (2009) 『金剛般若経の研究』，山喜房佛書林，東京.
白館戒雲 (1991) 「ブッダパーリタと「無畏註」の年代」，『佛教学セミナー』，第 54 号，38-53 頁.